

男主とエリナをイチャイチャさせる小説

リルシュ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

GEシリーズに登場する【エリナ・デアーフオーゲルヴァイデ】さんを、GERBの男主とイチャつかせる小説です。

内容的にGE関連のネタバレあり！ なのでご注意ください

※GERの公式設定はこちらの小説では取り入れません※
ネタが思いつき次第の投稿となりますので、不定期更新になります

男主設定

【↓】がついているものは時系列で変更される項目

性格

明るくて冗談も言う。ノリもいい。だが、仕事などは真面目に取り組む

基本お人好しで、エリナに対しては特に気を配っている

年齢

17↓18

一人称

俺

誕生日

9/12

メイン神機

【バスターブレード】【ブラスト↓ショットガン】【タワーシールド】

サブ神機

刀身 【ヴァリアントサイズ】 【チャージスピア】

銃身 【アサルト↓ブラスト】

装甲 【なし（タワーのみ）】

細かい容姿設定はあえてしないので、是非みなさんのアバターを想像してみてください

名前は使う予定がないので削除しましたw

ぜひみなさんのアバターの（ry

目次

一緒にミツシヨンへ	1
出発	6
遭遇	11
交戦	16
結果	24
エリナの嫉妬	30
始動	38
検証	43
二人でお出かけ	51
休暇	58
雑貨店	66
手作り料理	76
開始	82
調理	90
食事	95
風邪引きエリナ	101
発症	108
治療	
恋バナ	
男性ver	
女性ver	
恋人ver	
アナザーワールド	
来訪者	

ハロウィン	266
相合傘	261
ベッドの日	254
七夕+	247
馴れ初め	222
140文字制限SS まとめ2	216
キスの日	212
140文字制限SS まとめ1	206
添い寝	202
花吹雪	199
短編集	
平和	193
入浴	186
温泉へ	180
休暇旅行	
エリナの誕生日	166
先輩の誕生日	157
誕生日	
後編	148
中編	142
前編	137
夏祭り	
最初の目的	130
擬似親子	123
神機と血の力	115

ポツ〇ーの日



275

プレゼント



279

バレンタイン



294

料理教室



305

お前を愛しすぎて言葉だけじゃ伝えきれない



312

一緒にミツシヨンへ 出発

…このごろ先輩は忙しいみたい

前は私の訓練も兼ねて結構一緒にミツシヨンとか行ってたのに、最近はほとんど同行していないし

それどころか、アナグラ内で出会える機会すら減ってきている

二人で同時に休暇がとれた日とか、外部居住区とかにお出かけしてたのになあ…

ううん！もうはつきり言っちゃうけど、デートよあれは！そう！
デート！

…こ、こほん！とにかくそういうことができる時間も作れないのだ
「はあく…」

お陰で私の一日は、今日も深い溜息から始まるのだった

久しぶりに先輩と二人つきりでゆつくり過ごしたいなあ…

「やあーエリナー！」

エントランスまでやってきた私にうるさく挨拶するのは、一応同じ
極東支部第一部隊所属のエミール

「…おはよ」

「ん!?どうしたんだ！元気がないようだが…具合が悪いのか!？」

「はあ…うるさいなあ…」

コウタ隊長から仲良く出来るようにと言われてはいるけども、どうにも私はコイツと仲良く出来る気がしない

「よーっす！お前ら早いん…って、またケンカしてるのか？」

「あつ、隊長。おはようございます」

ぎゃーぎゃー私に何か問いかけてるエミールをひたすら無視していたら、エレベーターから降りてきたコウタ隊長が眉間にシワを寄せながら挨拶してきた

「コウタ隊長！エリナの様子がおかしいのだが、体調が優れないのではないだろうか！」

「だからっ！違うって言うてるでしょ！」

「まあまあ……」

私達のやりとりを見て苦笑いしながらため息を吐くコウタ隊長を見ていると、すぐケンカしちゃうのはやっぱりちよつと悪い気もしちゃう

「とりあえず元気はあるみたいだし……あつ……エリナさ……あれだろ？最近ブラッドの隊長と会ってないもんなく」

「へっ!？」

一応はエミールの意見に耳を傾けたらしいコウタ隊長が、真面目に心配した顔をしていたのはほんの一瞬

すぐに何か思いついたように声をあげて、ニタニタといやーな表情になる

「ちっ、ちがいます！ど、どうして先輩に会えないだけで私の体調が悪くなるっていうんですか!？」

カアーつと自分の頬が熱で赤く染まるのがわかって、言葉の上だけでもごまかそうと早口で頭に浮かんだ言葉を言ってしまった

「だっってお前……アイツのこと好きなんだろ？なあ、エミール？」

「うむ。僕から見ても、エリナが我が友に対し恋心を抱いているのは間違いないと思うぞ！」

「なっ……えっ……!？」

そ、そこまでバレてる!?!うそっ!?!どうして!?

先輩と二人でいる時以外は、普通に友達感覚ぐらいで接してたはずなんだけど……

「エリナさあ、ちよつと前にお前とブラッドの隊長が同時休暇のとき一緒に外出してたことなんて、極東支部のほとんど全員が知ってるんだぜ？」

「うそ……じゃーみんな私が先輩のこと好きなの知って……っ!」

思わず口をついて出てしまった言葉が墓穴を掘ってしまっていることに気づき、慌てて黙るがもう遅い

「それにあいつと一緒にメシ食ったり話したりしてる時の自分の顔…見たことある？」

「えっ…えっ…／＼／＼」

「僕が見たところ、任務中の表情や言動にも変化があったぞ！」

「っく!!!／＼／＼」

頭の理解が追いついてない

恥ずかしさだけが先行して私の体を駆け巡り火照らせる

じゃーなに!?

私が先輩に対する想いは隠せてるって思ってただけで、実はすでに周知の事実だったってこと!?

「っく!!!てゆうかーなんでコウタ隊長もエミールもそんなに私のこと観察してるんですか！正直気持ち悪いんですけど！」

もう恥ずかしくて恥ずかしくて、とにかく何か喋ってないと具合は悪くないけどほんとに倒れちゃいそうだった

「いやエリナ…特別観察してたわけじゃないし、あれは誰でも気づくって…『せんぱい♡』って、お前が満面の笑み浮かべながらラウンジでアイツの隣座った時、俺は確信したね」

「ひ、人前でそんな声で!?!先輩のこと呼んでました私?!」

「うん呼んでた呼んでた。漫画とか小説なら、確実に語尾にハートが付くぐらいの声で呼んでた…ん?てか、人前でってことは…」

あっ…!

「ににに任務!そう!隊長!任務です!きょうの任務!ミッション!なんですか!?!」

だめだだめだ!このままじゃどんどん深みにハマっちゃう…!

「エリナよ!僕は君の恋を応援するぞ!栄えある極東支部第一部隊の仲間として!そして君の兄として!我が友と君の恋路を全力で支援しようじゃないか!」

「ばっ、ばっ!声が大きいのよ!」

周囲にいた人がこちらに視線を送ってくるのを感じて、もう私はいてもたつてもいられなくなってしまう顔を俯かせる

がちやん

ふと、エレベーターの開閉音が聞こえた

今度はそつちに視線が動くのを感じ、私も俯いていた顔を上げてエレベーターの方を見る

…!!…!!…!!

「ん？ようーエリナ！久しぶりだなー！」

なんと先輩がいた

どうやら今日の私はとことんついてないらしい

直前でこんな会話をしてなかったら、きっと跳び上がるほど喜んで…って、そういう行動が気持ちが悪レちゃう原因なのかな…／／

と、とにかく悪すぎるタイミングで先輩が目の前に現れちゃったわけ…

「コウタもエミールも！元気か？」

「おうーあつたりまえだろー！」

「ふっ…いつまでも君の足を引っ張るわけにはいかないからな！いつの日か、君たちブラッドと肩を並べて対等に戦えるよう、日々精進に励んでいるよ」

「あつはっは！そっか！楽しみにしてるぜエミール」

「うむ。是非楽しみにしてたまえ！」

普通に会話を始めちゃった男3人を前に、私はありえないぐらい高鳴る心臓を抑えつけるので精一杯だった

もしうつかりエミールが口を滑らせて、私の気持ちを先輩がいるこの場で暴露させちゃったら？

…考えるだけで頭がクラクラしてきた

「…？エリナ？どうしたんだよ？具合悪いのか？」

「ひっ…！」

突然先輩の顔が目の前に来て、思わず一步後ずさる

「お、おいおい。落ち着けて。俺だよ俺」

「う、うん…」

いつもならなんともないはずなのに…普通に話せるのに…

視界の隅っこでニヤニヤしてるコウタ隊長が恨めしい…っ！

「おっと…そうだ。ブラッドの隊長さん。お前、今からミツシヨンとか行けるか？」

「ん？俺か？行けるぜ！今日は珍しくヒマでなく。やることないかと思つてここまで来たんだよ」

コウタ隊長が先輩に持ちかけた相談内容を聞いて、胸が踊つたのは確かだ…けど…

はあく……すぐく緊張しちゃうなあ…

「よーし！なら決定だな！俺ヒバリちゃんから任務受注してくるよ！」

「りよーかい！いやー！ブラッドのメンバー以外とミツシヨンすんのなんて久しぶりだからなあ。ワクワクしてきたぜ！」

につと笑顔でこちらを見る先輩に、不覚にもドキツとしてしまった「エリナよ！僕達の成長ぶりを見せる時が来たようだぞ！」

「そ、そうね…」

意気揚々と神機保管庫へ向かう先輩の後ろ姿を見ながら、私はさつきとは違う意味で大きなため息を吐くのだった

遭遇

「よっしーじゃー今日のミッション再確認！討伐対象はコンゴウ4体だ！」

目的地である【鉄塔の森】に到着

出撃する前に、コウタ隊長が任務内容についての確認をしながら私達を振り返る

「りようーかいだ！コウタたいちよー！」

「おいおい。お前までその呼び方はやめろつて…前も言つたろ？」

先輩が敬礼までしていたずらっぽく言うと、コウタ隊長はきまり悪そうに頭をかく

「いやー。今だけでも極東支部第一部隊の一員つて気分でいようと
思つてさ」

…先輩が…同じ部隊…

ホントにそうならすんごく嬉しいけど、無理だよね…

「そうか！僕は君ならいつでも歓迎するよー！」

「おおー。そう言われると、ちよつと真面目に考えちまうなく…なんて」

「えっ？」

先輩の思わぬ言葉に、期待を隠せず声を上げてしまった
冗談に決まってるのになあ…

「ん？なんだよエリナ。俺が一緒の部隊だったらいやか？」

「そ、そんなわけないよ！…そ、その…嬉しいよ…／／／
あつ…！」

わ、私何言っちゃってんの!?

「え…そ、そうか…なんかその…お前に直球でそんな風に言われると
少し照れくさいな…」

先輩も心なしか染めた頬をポリポリかいて、照れ隠しをしているよ
うに見えた

…そんな仕草されたら私…期待しちゃうよ…

「あー…コホン！ハイハイ！今はミッション中ですよお二人さんく。」

ついでに通信もすではいつてますよ〜」

「はあ!?!いつの間に!?!」

見事にハモる私と先輩の声

『ふふ…ふたりとも、ほんとに仲がいいんですね』

オペレーターを担当してくれているヒバリさんがクスクスと笑うのが聞こえて、私は今日何回目かも分からない羞恥心に晒されるのだった

「仲がいいことは結構だけど、任務に支障をきたすのは勘弁してくれよなあ〜」

「この二人なら大丈夫さ!僕が保証する!」

そして追撃するかのようにならかう気まんまんでセリフ棒読みのコウタ隊長と、いつもながら無駄にオーバーリアクションで何を根拠に保証しているのかわからないエミール

「わ、悪かったって…仕事はちゃんとするさ」

先輩が苦笑いを浮かべながら神機を構え直すのを見て、私も今は集中すべきところだと気持ちを切り替えて神機…オスカーを持ち直した

「よし…じゃー作戦を伝えるぞ。今のエリナやエミールならコンゴウ1体ぐらいタイマンでも余裕で潰せるとは思うんだが、問題はあいつらの聴力だ」

コウタ隊長が作戦を言い始めると、さつきまでとはまるで別人みたいに引き締まった表情の先輩が話に聞き入る

…ちよつと顔が近い…つて!今は集中でしょ!

エリナ!集中するのよ!

「さすがに4体集まって乱戦状態になれば俺やコイツでも怪我は免れねえだろうしな…そこでだ。幸い奴らは今バラけた地点で孤立してる…それにザイゴートやコクーンメイデンみたいなうざったい雑魚の反応もなし!全員で同時に別々のコンゴウに攻撃を仕掛けて、1対1の状況を作り各個撃破って作戦でいこうと思う」

「…ま、銃形態ガンフォームしか使えないコウタでも、コンゴウ1体ぐらいなら余裕で倒せるだろうし、俺はその作戦に異議はないぞ」

先輩は一瞬で作戦を理解して…というより、始めっからこういう作戦になることを理解していたみたい

「バカにすんなっての！俺はこう見えてお前らよりゴツドゥーターとしてのキャリアを積んでんだぜ？さっさと片付けてお前の手伝いに行つてやるよ！」

先輩の胸を小突くコウタ隊長

まあ、実際彼は旧型の遠距離式神機使いだけど、私やエミールなんかよりもずっと強いし大型種複数と1人で乱闘しても勝ち残ったことがあると聞いている

「あはは！わりいわりい」

「つたく…じゃー、エミールもエリナもそれでいいか？」

「もちろん僕も異論なしだ」

「私も賛成です」

コンゴウの討伐なんてもう数えきれないくらいやってる

油断しなきや大丈夫

深呼吸して神機を握る手にグツと力を込める

…今日も頼んだよ。オスカー

「それじゃー…突撃〜!!」

鼓舞するかのようなコウタ隊長の声と共に、私達はそれぞれの場所へと散っていく

『コウタさん…声が大きいですよ。コンゴウに気づかれちゃいますので、お静かにお願いします』

「ご、ごめんなさい…」

ヒバリさんに叱られるコウタ隊長はなんというか、らしいのだが締まらなかった

『こちらコウタ！標的を発見した！待機する！』

『僕も見つけたぞ！闇の眷属め…せいぜい最後の晩餐を楽しんでいるといい』

『俺も見つけたぜー…あとはエリナか』

どうやら私以外の3人はみんな標的を視野に入れたみたい

…送られてきた位置情報だと確かこの辺に…あつ！

「エリナー！目的のアラガミをはつけ…え？」

『エリナー？どうした？』

私が途中で言葉を詰まらせたのが気になったのだろう

先輩が真っ先に心配そうな声で呼びかけてくれた

…それは嬉しいけど、私の目の前の状況はあまり良くなかった

「…こいつ…普通のコンゴウじゃありません…これは…っ！」

姿形はコンゴウそのものだが、一瞬こちらに振り返ったその顔は割れていた

…ハガンコンゴウだ…！

『エリナーさんの近くにいるコンゴウから異常なオラクル反応を検知！
そんな…先程まで通常のコンゴウと何も変わらない反応だったのに…これは…！』

「ハ、ハガンコンゴウです！」

…情けなくも噛んでしまった

ハガンコンゴウは見た目こそ通常種のコンゴウと大差ないが、その戦闘力には大きな差があり特に雷撃を使った広範囲の攻撃は脅威…
って、データベースで読んだ気がする

コンゴウの面が割れることで独自に進化したとかいう説があるって話だったけどまさか…！

『なんだって!?…くっそ…標的が移動を開始してる…！このままじゃ、合流されちゃうぞ！』

『おのれ…正体を隠すとは卑怯な真似を！』

コウタ隊長が本気で焦った声をだした

…それもそうだ

私はまだハガンコンゴウと1対1でやりあった経験なんてないし、正直勝てる自信がない

けど…

「…私は大丈夫です。作戦を続行します…！」
やるしかない…ここは私が…っ！

『ちっ…すぐ片付けて応援に行つてやる。それまで無茶するなよエリナ!』

「はいっ!先輩!」

ありがとう…先輩の声を聞くだけで勇気がでます!

「…オスカー。私に力を貸して…!」

チャージ体勢になりながら、私は自分の神機に呼びかけ標的に狙いを定めた

『くそっ…作戦を開始する!総員攻撃を仕掛けろ!』

交戦…開始!

交戦

私が先制攻撃として放ったチャージグライドは直撃する瞬間、音で察したハガンコンゴウに躲された

アラガミの体を掠る感覚はあったものの、この程度では当然大したダメージにならない

「くっ……い」

一旦下がる！

以前の自分なら引くことを考えずに猪突猛進していたが、今の私は違う！

先輩と幾度もの訓練を重ねて成長してるんだから！

ハガンコンゴウがドラミングに似た行為をしながら、体から放電する兆しが見えた

来るっ！

ここは無理に躲そうとしないですぐに装甲形態に切り替えて、相手の攻撃に備える！

ハガンコンゴウの広範囲に広がる雷撃を受け止めると、ガンツ！という鈍い音と共に、神機を握る手に痺れが走った

攻撃が……重いっ！

踏ん張る足がずると後退させられる

……なんとか耐え切った？

衝撃が止んだ感覚がして、神機の影から顔を覗かせると攻撃後の硬直でスキだらけのハガンコンゴウが目視できた

チャンス……！

すかさず近接形態……すなわちチャージスピアに切り替える

……いや、切り替えようと思った

「あ、あれ!？」

ど、どうしよう！

うまく切り替わらないっ！

「エリナは不器用だなあ〜」

「なっ…！不器用なんかじゃないです！」

「ほほう〜。じゃーほれ、俺が言うタイミングにあわせて、銃と槍を切り替えてみ？」

「え？」

「はい。槍、銃、槍、銃、銃…」

「ちよ、まって！早すぎだよ先輩！そんなの先輩でもできないでしょ！？」

「いやー、実はこないだ【遺された神機パーツ】で器用のスキル見つけてさ〜。ほれ、この通り」

ガシヤンガシヤンガシヤン

「あっ！ずるい！器用のスキルが宿ってる神機パーツ見つけたら、私にプレゼントしてくれるって前に言ってくれてたじゃないですかあ〜！」

「ははっ！どのぐらいの効果があるのか試してみたくなっちゃってさ〜！すまん！次は絶対プレゼントするからさ〜！」

「…もう…絶対だよ？」

「おう！約束の抱擁でもするか？」

「っ／／。そ、それを言うなら約束の指切りです！」

…少し前に先輩と交わした会話を思い出す

そう…私は神機の形態切り替えがすごく苦手だった…

でも…！こんなところでまごつくわけには

「っ…！」

まずい…！

ハガンコンゴウが体を丸め始めた！

突進がくる…！

肝心の私の神機は装甲形態と近接形態の中間ぐらい…

どっち…!?どっちにする…!?

「…迷ってるヒマはない…！」

さっきの攻撃ですら手に痺れが残る威力の衝撃だったことを考えると、私の力と装甲：バツクラーじやコイツの突進は耐えきれない
最悪姿勢を崩されたところに追撃を貰って一巻の終わり…つてことさえ考えられる

なら…

「オスカー…いくよ！」

近接形態で迎え撃つ方がいい！

防御も大事だけど、上手くいけば相手を怯ませて時間を稼ぐこともできる…防ぐだけが防戦じやないんだから！

無理するなという先輩の言葉を思い出したけど、これは無理じやない…私が真剣に考えた結果の最善策…！

…でも、私はまだまだ甘かった

ハガンコンゴウが突進の際には体に雷を纏うことをすっかり忘れていたのだ…

それに気づいたのはすでにチャージスピアを構えてしまった後だった

ぞわつとした嫌な感覚が背中を駆け上がり、冷や汗が額に浮かぶ

「…っ！」

グサツ！

…スピアの方は私の狙い通りアラガミの体を構成するオラクル細胞を深々と刺し貫いていた

けど…

「きやああああ!!！」

ハガンコンゴウの纏った雷は私の体に直撃する

強烈な痛みが全身を襲い、目の前がチカチカした

『エリナさん！バイタルが危険です！回復してください！』

…ヒバリさんから通信が入ってくるのが微かに聞こえる…

…私、何やってんだろ…これじや…無茶してるのとなにも変わらない…っ！

「…えっ？」

朦朧とする意識の中、刺し貫いたアラガミの体が動くのが神機を通

して伝わってきた

…うそっ!?!コイツ…まだ生きてる!?

慌てて神機を引き抜こうとするも、しっかりと刺さってしまったていて簡単には抜けそうにない

焦る私にハガンコンゴウが腕を振り上げるのが見える

…嫌だ…死にたくないよ…

助けて…

「助けてっ…先輩…!」

ガッ!

「…あっ」

私が情けない声を出した瞬間、目の前に巨大なバスターブレードが現れた

ハガンコンゴウの豪腕による攻撃を防いでくれたのに、びくともしないその神機の持ち主は…

「…せ、先輩…!」

「よ、俺を呼ぶ声が聞こえたからな。助けに来たぜ」

いつにもまして頼もしく見える先輩の顔を見て、私はもう嬉しさとか安心感とかいろいろごちやまぜになっちゃって…

目の前が潤んできた

「タイミング…良すぎです…かつこ良すぎますよ先輩…」

「ははっ…それだけ言えるなら、とりあえずは無事…だなっ!」

先輩が神機を振りぬきハガンコンゴウの顔面を強打すると、あれだけ深々と突き刺さっていたチャージスピアもあっけなく抜けてアラガミが吹っ飛んでいく

『アラガミ、結合崩壊を確認!あと一步です!』

ヒバリさんからの通信が入る

…すごい、今の一撃で結合崩壊させたっていうの?

「さすが…先輩ですな…」

「安心するのはまだ早いぜ?とりあえずこれ、受け取っておけ」

銃形態に切り替えた先輩が、きつと自分の持ち場のコンゴウを捕食して手に入れたのであろうアラガミバレットを私に受け渡す

結果

その後、間もなくエミールがアラガミを片付けたという報告がはいり、任務は終了したのでった

ちなみにコウタ隊長はすでに自分の分を片付けて、こっちの応援に向かっている途中だったみたい

もちろん、先輩は言うまでもなく担当していたコンゴウを討伐していた

「ふうく…なんとかなつたなあく」

「うん…ありがとね…先輩が助けに来てくれなかったら、危なかったよ」

帰投準備時間の間に、私達は倒したアラガミのコアを取り出して一息つく

『危なかったよ』じゃありません！」

「え？」

突然大声を出す先輩に驚いて、パチパチと瞬きしてしまった

「まったく俺がどれだけ心配したか…ヒバリからお前のバイタルが危ないって通信入った時は、寿命が縮まる思いだったぜ」

「ご、ごめんなさい…」

先輩そこまで心配してくれたんだ…

冗談抜きで命が危なかったわけだし、決して喜んでいい事ではないというのは分かっているけども…

それでも、私は顔がニヤけるのを抑えられなかった

「つーかエリナ、ホントに怪我残ってないか？大丈夫か？」

「う、うん…大丈夫だよ」

つかつかと歩み寄ってきた先輩が、私の肩や頭をポンポンと触って傷がないか確かめてくれている

「もう…恥ずかしいからやめて…ってひゃあ!!!」

子供扱いされてるみたいでなんだかいろんな意味で悔しくて、ちよつと体をよじっていたら…

…せ、先輩の手が…私の太ももに触れた…っ！

「どうしたんだ？ここ怪我してんのか？」

ちよ…先輩？！

「そ、そうじゃなくてそこひやう!!」

手のひらが私の肌を撫でる感触に、ゾクゾクつとしたなんとも言えない感覚が背中をかけ登っていく

「内出血でもしてんのか？でも見た感じ…」

「ち、ちがいまあんっ／＼／」

な、なんで普通に女の子の太もも撫でまわしてんのこの人はっ…！

…もしかして私…女性として見られてない…とか？

「わ、私だって女の子なんですよ!?」

気を使ってくれていている彼の手を払いのけるのも忍びなくて、私は納得してもらおうと精一杯いつもどおりの声を装って説得したのだが

「おっと。そうだな。じゃー…」

ふにっ

「…は？」

あろうことか…

先輩の手が…手が…

わ、私の…む、胸にっ…!!!

「ん…う…平気そうだな……てかエリナ、お前意外と胸あ「ばかあゝ!!!」

バシンツッ!

「ぶっー!」

思わず手が出て彼の頬をひっぱたいてしまったけど、今は私悪くない!

いくら先輩とはいえ…その…許可無く胸を触ってくるなんて…／

／

デリカシーなさすぎ!

「おーい!お前ら無事か…って、なんでコイツ倒れてんの?」

それから少しして合流してきたコウタ隊長が、私の平手を食らって大の字に倒れている先輩を指さす

「…知りませんっ!」

「友よ！どうしたというのだ！死ぬな！君はここで死ぬような人間じゃないだろう！目を覚ませ！友よおおおおお！！」

腕を組んでそっぽを向く私の後ろで、いつの間にか集合していたエミールが大声を張り上げていた

「ごめんエリナー！この通り！」

アナグラに帰還後。夕焼けが差し込むラウンジのソファで、隣に座っている先輩が必死に頭を下げ謝る

「…もう怒ってないですよ」

女の子扱いされてない可能性が危惧されて、私は小さくため息を吐いた

…今日だけで何回ため息ついてんだろ私…

「いや！我ながらどうかしてたよ！いきなり胸触るなんて非常識にも程があった！」

「ちよ…先輩！聞こえちゃいますから！周り人いますから！」

「おっと…すまん」

…そういえば、出撃する前にエミールが周りの人に聞こえるぐらい大声で、私の恋を応援するのかなんとか言ってたっけ？

そして極東支部のほぼ全員が私が先輩の事好きなの感づいてるみたいなおとも…

少なくとも一緒に外出してたことはバレてるっぽいし…でもそれぐらい友達の関係でもするよね？

あ…でもコウタ隊長が確か私の言動でバレバレみたいな事言ってた気が…

「…ねえ、先輩」

「ん？」

…聞いちやおうかな

先輩の恋愛事情

現状では希望は薄そうだけどね

きつと彼の目に自分は【後輩】としか映ってないんだろうなあ

良くて妹つてところかも

…ははっ…なんか泣けてきた

「今、好きな女の子とかさ…いるの?」

半ば諦めていたからかもしれない

自分でもびっくりするぐらい冷静に、落ち着いて聞けた

「…え?」

予想外の質問だったのだろう

先輩がポカンとした表情を浮かべる

「だから…好きな子…いるの?」

じっと瞳を見つめる真剣な私の眼差しから、冗談とかの類ではないことを察したのかもしれない

先輩も仕事中外では滅多に見せない真面目な顔つきになった

「…俺がさ、さっきエリナの胸触っちゃったのはさ」

「つて…先輩!」

なんでその顔でさっきの話題繰り返すんですか!?

「これでも真面目な話をしようとしてんだ。聞いてくれないか?」

「えっ…う、うん…わかった…」

そう言われちゃったら…黙るしかないけど…

胸の話題を出されると、さっきの大声の影響でこっちを見ながらひそひそ話している人達の視線がまた気になり始めてしまう

「…俺さ、任務終了後も言ったけど、エリナがピンチって聞いてホント心配したんだよ」

…うん

「だからさ、改まってお前の無事な姿見て…マジでどこにも怪我してないのか?後遺症とかないのか?って考えちゃって…」

大げさすぎ…って言葉が喉まで出たけど、ぐっと押さえ込む

「そしたら…その…エリナの『女の子だから』ってセリフで胸でも怪我してんのか?って勘違いして…手が勝手に動いちゃったというかなんというか…」

「えっ…?」

先輩が照れくさそうに頬を染めながらも視線を外さず言ってくれ

る言葉に、私は都合のいい解釈をし始めて思わず反応してしまっただからさ…俺、お前のことになると周りが見えなくなっちまうというか…それだけエリナに夢中というか…」

「…せ、先輩…?」

え…これって…

「…ああ〜!!ダメだな!俺こういうまわりくどいの向いてねえわ!はつきり言っちゃまうよ」

心臓が痛いくらいに鼓動をうち、全身に緊張感が走る

先輩が次に言おうとしていることを察して…

「俺が好きなのは…エリナ…お前だよ」

ホント…に?!

うそじゃないよね!?

「先輩…一応聞くけどさ…それ、友達として…とか、妹として…とかじゃないよね?」

自分で聞いておいて、その答えに自信が持たなくて思わず聞き返してしまった

「おいおいどんだけベタな展開に持ち込む気だよ。てゆうか、エリナから聞いてきたんじゃないか。『好きな女の子とかいるの?』ってな」

そ、そうだけどさ…

「なんだ?自信持てないってか?じゃーもう一回はつきり言ってやろう。俺はエリナが女性として好きだ。愛してる。I LOVE YOU!だ」

「むっ…なんかそういうふうに言われると冗談っぽく聞こえます!」
素直になれないのが私の欠点だとは自覚してるけど、やっぱり簡単に納得はできないよ…

「え〜…じゃーどうすりゃ信じてくれんだよ?」

「そ、それは…」

…これ言っちゃったら後戻りできないけど……
いいよね？

私、先輩の言葉を信じるからね！

「…えつと…じゃー、キス…してください…」

「……………」

場が静まり返った

…あれ？私、そんなに変なこと言った？

…だ、だつてさ！好き同士の男女ならキスぐらいするでしょ！？

「…エリナ…ここでしろつていうのか？」

…あ

慌てて周囲を見渡せば、私と先輩の会話の雰囲気から興味を持った
のであろう人達がチラホラこつちを見ていた

その中には知り合いもいて…

ムツミちゃんの前の席に、コウタ隊長にハルオミ隊長…それにギル
バートさんとカノンさんまでいた

「…／／…あの…じゃー…あとで…私の部屋に…」

「い、いきなり部屋に来てとは…それは誘つてると解釈してもいいん
だなー！」

「ち、ちがいます！先輩のエツチ！」

それだけ言つて、私は逃げるように先ほど視界に入ったカノンさん
が座っていた席の隣を陣取る

「お疲れ様です。エリナちゃん」

まるですべてを知っているかのように優しい声をかけてくれるカ
ノンさんの横で、私は机に突つ伏すのだった

その様子を見て、入れ替わるようにハルオミ隊長が先輩の元へと歩
み寄つて行く

「いや、ブラッドの隊長さんも隅に置けないねえ」

「…ハルさんなにかもお見通しつて感じですね」

…あまり大きな声じゃなかったけど、先ほど私達がいた場所からこ
こまで十分会話が聞こえてきた

つまり、あの恥ずかしい会話も筒抜けだった可能性があるわけで…

っく!!もうしばらく顔をあげられそうにないなあ…

「そりやくもう。極東支部所属の職員達は、いつお前さんらがくつつかのかとやきもきしてたもんだぜ」

「はい!?じゃー俺がエリナをそういう対象として見てたってみんな知ってたんですか?」

「確信はなかったけどさ、友達にしては仲良すぎだし、先輩後輩の仲っていうのともちよつと違う感じはしてたからなく」

「うっわ…まじか…てゆうか俺、まだエリナに返事もらってない気が」
「隊長さんよ。それは贅沢つてもんだぜ。返事なんて貰わんでもエリナちゃんの気持ち…わかるだろ?」

「いやでも俺としてはちゃんど確信を得たいというか…よし!」

!!!

黙って耳を傾けてたけど、先輩がこつちに歩み寄るのが聞こえて再び緊張感がこみ上げてくる

「なあエリナ。さっきの返事、してほしいんだ。ここじゃー嫌なら俺の部屋か…さっきの件もあるし、お前の部屋に行こう」

先輩の声色からして真剣に言ってくれているんだということが分かって、私も覚悟を決めて顔を上げた

「…うん。分かった」

席から立ち上がり、先輩の隣に立つ

「隊長。戻ってきたらブラッド全員でお祝いしてやるよ」

先輩の近くに座っていたギルバートさんが彼の肩を小突く

「私もお菓子を作って待ってますね!」

そして私の両肩に手を置くカノンさん

「隊長さん。明日のことも考えてほどほどになく」

意味深な言葉を先輩にかけるハルオミ隊長

「エリナ。明日休暇届け出しておいた方がいいか?」

「余計なお世話です!」

最後までニヤニヤ笑いのコウタ隊長

みんなに見送られて、私達はラウンジを後にしたのだった

…私の先輩に対する返事？
そんなのもちろん決まってる

「先輩…私も大好きですよ」

END

エリナの嫉妬 始動

「♪」

私と先輩が想いを伝え合うきつかけになったミッションへ行つた日から、少なからずの月日が流れていた

その日の朝も、私は上機嫌で鼻歌を歌いながら自室で仕事の準備をする

先輩と両想いだったって事実が判明してからは、いつもこんな感じで気分の良い朝を迎えていた

「…あれ？今日私休暇じゃん」

ターミナルで仕事の確認をしようと情報を見ていたら、今日は休暇日だったことが判明する

浮かれててすっかり忘れてた

「…えへへ…私っいたらいつまで浮ついてるんだろ…すっかりしなきや…ふふ」

そんな独り言をニヤケ顔で言ってしまうぐらいには、まだまだ私の高揚感は冷めていないのだった

「せくんばい！いますか〜？」

先輩の部屋の前まで来た

自分が休暇でも、彼もそうだとは限らない

昨日のうちに聞いておけばよかったなあー

「ん〜？エリナか？いるけど今…」

「おじやましまーすー！」

扉越しに先輩のくぐもった声が聞こえて私はもうじつとしてられなくて、扉を勢い良く開ける

ロックはされてなかったなので、そのままダイブして抱きついちやおうとか思ってたんだけど…

「お、おい！勝手に入ってくるなって…」

下着姿の先輩を前に、私は両手を広げた体勢で石になったかの如く固まってしまった

「あつ…つ／＼／／」

「今着替えてる途中って言うおうとしたのに…」

自分の考えなしの行動と目の前の彼の姿に恥ずかしくなっちゃって…

私はそのまま右にあるベッドにダイブして体をうずめた

「って…この部屋から出るって選択肢はないのかよ？」

「ないです！てゆうか、先輩部屋のロックかかってませんでしたよ？不用心すぎです！」

「はつきり言うな…って、は？ロック…そういえば」

先輩が部屋の入口に歩んでいき、扉を確かめる

「あつ…そういうや昨日エリナに押し倒されたまま寝ちまったから、ロックし忘れてたよ」

「あつ！あれはつ…／＼／／」

勢いで顔を上げた私の視界に、いまだ下着姿の彼が映って慌てて視線をそらした

そうだ…昨日の夜、先輩の部屋におじゃまして二人でお話してたんだっけ…

途中でもう眠いって言う彼を、私がイタズラのつもりでベッドに押し倒しちやって

…実はちよつと期待してたんだけど、先輩そのまま寝ちやつたからホントに疲れてたんだと思って私も自分の部屋に帰ったんだった

「まさかエリナがあんな大胆な子だったとは…俺はこれから色んな意味で不安だぜ」

「なつ！せ、先輩だつて無断で胸触ってきたくせに！」

「まだ覚えてたのか」

「あれは忘れませんよ！一生！」

朝っぱらからガヤガヤと賑やかに騒ぐ私達

隣室は今留守のユノさん用の部屋つてことになってるからいいけ

ど、誰かいたらすぐく迷惑だろうな…今度から意識して気を付けなきやね

コンコン

突然扉をノックする音が聞こえた

…え？もしかして別階層の人までうるさいのが聞こえて文句言いに来た…とか？

「ん？なんだなんだ。今日は朝からやけに来客が多い日だな」

「隊長。いますか？私です」

「その声は…シエルか？」

「はい。そうです」

シエルさん？

もしかして仕事の話かな？

とりあえずうるさくて文句言いに来たってわけじゃないみたい

「先輩もしかして今日仕事？」

「ん？いやー仕事っていうか…シエルのバレット検証に付き合う約束してたんだよ」

「あつ…そう…なんだ…」

露骨に寂しそうな顔をする私を見て、先輩がニヤつとする

「ははくん…エリナあく…お前、嫉妬してるなあ？」

「っ!!!…し、嫉妬なんてしてないです！だって…せ、先輩の一番は私…でしょ？」

凶星を指されて強がっちゃったけど、やっぱりちよつと不安にもなっちゃった事を聞いてみた

「…その上目使いは反則すぎる…」

すると何故か口元を手で抑えた先輩が、orzみたいな格好で部屋の床に膝をつく

あれ…もしかして先輩照れてる？

そう思うとちよつとだけ誇らしくなって、現金な私の表情はすぐに喜びを取り戻すのだった

「…あの…隊長？」

「あつ…ズマンジエル。イマイグ」

扉越しで待たされっぱなしのシエルさんの元へと、いつの間にか鼻にティツシュを詰め込んでいた先輩が向かう…って

「先輩その前に着替え！」

「おつと…見たい？」

「み、見ません！」

早く着替えなよもう…

「あつ。エリナさん。おはようございます」

「お、おはようございます…シエルさん」

部屋に入ってきたシエルさんが私の存在に気がついて、とても良い姿勢でお辞儀までしてくれた

相変わらず綺麗な人だなんて、女の私から見てもそう思う

それに…

「…？どうかしましたか？」

「い、いえ！なんでも！」

お、大きい…

何が、とは悔しくてあんまり口にしたくない

「気にすんなエリナ。お前はまだ成長くくほおああ！」

余計なことを言いながら私の肩に手を置く先輩の腹に、容赦なく肘鉄を叩き込んでやった

「…あの…もしかして、私…お邪魔でしょうか？」

「あつ…、ごめんなさい！先輩に用事あるんですよね！どうぞ！私のことは気にしないでお話を！」

目の前でオロオロし始めてしまったシエルさんにあわてて謝罪

例のミツシヨンの日の後日。ギルバートさんの宣言どおりブラツド全員を巻き込んだ祝福をしていたので、私達の関係は知られているけど、シエルさんが先に約束していたんだから、いくら恋人でもここはワガママ言っちゃいけない

私だっつてもうそこまで子供じゃないんだから！

「分かりました。ありがとう」

「いえいえ！こんな変態な先輩でも役に立つなら！」

「おいコラ！聞き捨てならないぞ！」

腹を抑えてうずくまっていた先輩がよろよろと立ち上がりながら文句を言う

「先ほどから気になっていたので…君はなぜ鼻にティッシュをためこんでるんですか？」

「変態だからです」

「おいい〜！エリナさん!!」

「なるほど…」

真面目な顔をして納得しているかのようなシエルさんに思わずクスツと笑ってしまった

「エ〜リイ〜ナア〜…今夜は覚悟しておくんだなあ…」

「は〜い。先輩！」

どうせ先輩のことだ。冗談に決まってる

…この時の私はホントにそう思ってたんだけどね

「まったく…それじゃーシエル。いつもの訓練場でいいのか？それとも実戦で確かめるのか？」

「今日は軌道を確認したいだけなので、訓練場で十分です」

「りようーかい。んじゃー行こうか」

…さてっと

私は何しようかな〜

「…あの、この後お時間ありましたらエリナさん。良ければ一緒に来ませんか？」

「え？」

シエルさんから予想外のお誘いの言葉をもらって思わず声をあげる

「おう。そうだそうだ。シエルはバレットエディットと銃器のプロミ
たいなもんだからなあ〜。お前もショットガンの扱い教わってみろ
よ」

確かに…

私も銃の扱いは得意って方じゃない

むしろ苦手で、その話題でナナさんと意気投合したことすらある

「あの…いいんですか？」

「もちろん。そのほうが君も嬉しいですよね？」

「え？…あゝ…ま、まあ…そうだな」

先輩が照れくさそうにそっぽを向く

シエルさん、もしかして私に気を使つて？

優しい人だなあ

私も見習いたい…

「じゃー…お言葉に甘えて」

「決まりですね。では、私は先に行ってますので準備ができ次第ふたりとも訓練場まで来てください」

それだけ言うと、シエルさんは私に一礼して部屋を去っていった

「…シエルさんとは私…あんまり接点なかったけどさ…いい人だね」

「そうだなあゝ。優しいもんなあゝ。なあゝエリナゝ？」

むっ…

まるで私はやさしくないって言われてるみたい

「私だって…先輩には優しくしているつもりです」

「…二人っきりの時だけじゃなくて、皆の前でも優しくしてくれよー」

「っく！そんなことよりシエルさんを待たせてるんだから、早く行こうよ先輩ー」

「はいはい照れちゃって…可愛いなくエリナは」

「…バカッ」

頭を優しく撫でてくれてる先輩の手が心地良いなんて、今の私には正直に言えなかった

検証

「あつ、ふたりとも来ましたね」

神機を取り出してきた後、（ついでに先輩の鼻からティッシュも取り除いて）バレットの性能を試すことが出来る射撃訓練場まで来た私達に、一足先に来ていたシエルさんが声をかける

私達以外にも、銃形態を扱うことが出来る神機使いの人達がチラホラ見えた

：けっこうみんな練習しに来てるんだなあ

「実は先ほど気がついたことなのですが、私達3人が揃うと現状神機使いが扱える銃形態のすべてを練習することが出来るんです」

シエルさんが早速瞳をキラキラさせて語り始めた

噂には聞いてたけど、彼女の銃器やバレットエディットに対する情熱は半端じゃないらしい

：…こんなに楽しそうに話してるのを見ると、なるほど。

とても納得できる話だ

「シエルはスナイパー。エリナはショットガン。俺はブラストと、あんまり使わないけどアサルト…おー、ホントだ」

「だから…私が作ったバレットもいろいろ試せると思いました」

シエルさんが後ろ手に持っていたトランクを重そうに私達の前に引っ張りだす

：…つて？え？

「…あのーシエルさん？まさかとは思いますが、それ全部貴方様のお作りしたバレットで？」

どう見ても『一週間ぐらい旅行できます！』ってサイズのトランクに、先輩ですら予想外だったのか

変な言葉遣いでシエルさんに尋ねていた

「はいーいつもは君のブラストと私のスナイパーの分だけでしたが…今日は折角エリナさんも来てくれることですし、ショットガン用のも…と思つて」

新しいおもちゃを貰った子供みたいに無邪気な笑顔を見せながら、

トランクを開けるシエルさん

「その後君がアサルトも少しだけ使っていたのを思い出して…どうせならと思つて全部持つてきてしまいました」

「…どうりでいつもの倍近くあるわけだ…」

「いつもでさえこの半分はあるんですか!?!…ホ、ホントにすごい量です…」

トランクの中にギツチリと詰まっているバレットの数々…

それらを見渡しながら、私と先輩は苦笑いを浮かべた

「…でもシエルさんって普段スナイパーを使っているんですよね？なのにどうして他の銃身用のバレットも作っているんですか？」

「あー…それな、いつもはスナイパー使っているけど、一応シエルはひとり銃器は全部扱えるんだぜ？ただスナイパーが一番自分にあつてるらしくてな」

へえ…そうなんだ

そういえばここに来る前に、先輩がショットガンの扱い方を彼女から教わるのいいと言つてたっけ？

…それにしても、シエルさんについて詳しいなあ先輩…

そりゃー同じブラッドの隊員なんだし、仲間の戦闘傾向ぐらい知つてておかしくないけど…

ちよつと彼女が羨ましい

もちろん。私の得意な戦い方とかだつて先輩に知ってもらえてるとは思うけどさ

「それに、私達ブラッドは4人でみんな違う銃器を使っていますからね。私がスナイパー。ギルはアサルト。ナナはショットガン。そして君がブラスト」

「そうだったそうだった。それで俺達の銃身にあうバレットをわざわざシエルが皆の分までエディットしてくれてさ」

「そう…だったんですか」

じゃー今先輩が使つてるバレットも…シエルさんが作ったやつなのかな…？

…むう…

「でもナナは銃をほとんど使ってくれないので…だから今日は、彼女と同じショットガン使いのエリナさんと一緒にバレット検証することが出来るのが、とても楽しみなんですよ?」

「へ?あ、はい!期待に応えられるように頑張ります!」

つと!

いけないいけない!

今日は私は付き添いみたいなものなんだから!

ボツ!として迷惑はかけないようにしないとね

その後、気が遠くなるほどの量のバレット検証が始まったのだが:

「うおおおおお!!なんじゃこりやあ!!」

先輩が最初に使ったのは、敵を誘導する弾を打ち出し命中した箇所は何度もレーザーを放出する球を発生させる…みたいなバレットだった

「これなら標的に一度命中しただけで、持続的な大きいダメージ効率が…と思っただけですが」

「確かにスゲーぞこれは…しかもオラクルリザーブを使わない量のOPで放てるとは…流石だな」

シエルさんの作ったバレットはどれも独自の工夫が施しており、傍から見てもすごいのがよく分かる

…先輩にあれだけ評価されてるのを見て悔しくないって言えば嘘になっちゃうけど、配布された初期バレットをエディットが面倒でそのまま使ってる私と、ひとつひとつのバレットに個性をもたせた丁寧なエディットをしているシエルさんとは、バレットエディットに関する力量が雲泥の差なのは、火を見るより明らかだよね…

実際私もいろいろと使わせてもらって、その有用さには舌を巻いていた

「…すごい。このバレット、敵の装甲を貫ける…?」

私がポツリと漏らした言葉に、シエルさんが笑顔で反応してくれた「それは変異モジュールの【徹甲化】を取り入れたブラッドバレットな

のですが…」

ブラッドバレット…

確か先輩とシエルさんが生み出す原因になって、整備班の人たちが仕上げたっていう…

「へ〜。エリナも徹甲扱えるぐらいには、ショットガン使ってたんだな」

「ば、バカにしないでよ！私だってこのぐらい銃を扱えます！」

先輩の予想外みたいな物言いに、また悔しくなっちゃって頬をふくらませる

「…でも、私もバレットエディット勉強した方がいいのかも…」

「あっ…エリナ、シエルの前でその発言はやめたほうが…」

「え？」

苦笑する先輩の顔を疑問に思ったのはほんの一瞬

私の言葉を聞いて、瞳の輝きを更に増したシエルさんを見てすべてを察した

「エリナさん！バレットエディットに興味を持ってもらえましたか!? では早速こちらを…」

「えっ?…あ、あの…?…」

なにやら教本のようなものをトランクの奥底から引つ張り出したシエルさんの姿を見て、先輩がご愁傷様と言わんばかりに手を合わせた

「こうなっちゃったらもう俺でも止められん。諦めて勉強会と洒落込もうか…」

そ、そんなあ〜…

助けてよ先輩!

この分厚い辞書みたいな、いかにも玄人向けですって感じの教本をいきなり提出してくるシエルさんのことだ

エディット初心者私なんか一瞬で頭がパンクしてしまうに違いない

「あ。ついからですから君もこれ、どうぞ。そろそろバレットエディットについて本格的に勉強を…」

「お、おう…」

さり気なく逃げようとしてた先輩を呼び止めて本のタワーを押し付けるシエルさんを見て、私はこれから始まってしまおうであろう勉強会を想像し、顔が青ざめるのを感じたのだった

「ふう。今日はとても充実した有意義な時間を過ごすことが出来ました。二人の協力に感謝します」

シエルさんの講義が終わるころには、すでに日が落ちている時間だった

ここからじゃ外の景色は確認出来ないけどね…

さつきまで周囲にいた他のゴッドイーターの人たちも、いつの間にかいなくなっているし

「そ、そうか…満足してもらえてなによりだ…」

「わ、私も…ありがとうございます」

「機会があれば、是非また3人でバレット検証しましょうね！」

眩しいくらいの笑顔でホントに楽しそうにそう言うシエルさんを前に、私達は嫌だとは言えずに首を縦に振るしかなかった

その後、お礼を言って去っていく彼女を見送りながら、訓練場に残された私達はホッと一息ついてその場に座り込む

「シエルさんってなんかその…すごい人だね」

「だろ？まあ、ブラッドの頼れる一員だったのは間違いないよ。実際銃器関連では俺も相当お世話になってるしな」

検証結果で気に入ったバレットを幾つかもらっていた先輩が、その一つを手に取り眺める

……………

「ねえ先輩。私もあなたの役にたってるのかな？」

「つつい聞いてしまったことに、私の真意を見透かしている先輩がニヤつく

「もちろんだ。エリナは俺のそばに居てくれるだけで満足だよ」

ド直球な物言いに恥ずかしくて照れちゃって…

私はすぐに返事をする事が出来ずに、頬を染めて俯いてしまった

でも、なんかこう…もつと具体的に言っただけか…

「…いるだけ…ですか？」

「好きな女の子が…エリナがずっとそばに居てくれるほど嬉しい事って、中々ないと思うけどなあ」

「…っ／＼／」

ああもう…

どうしてこの人はこんな恥ずかしいことを堂々といえるんだろう

「お前はどうか？俺がそばに居るだけじゃ不満か？」

「不満なんてこと全然ないです！ないですけど…でも…私…なんだか不安で…」

なんて言えばいいんだろう…

私には分からなかった

「…しかたねーな」

優しい笑顔で私の頭に手を置きながら、先輩が語り始める

「俺がエリナを好きになったのはな…お前の一生懸命な姿に惹かれたからだ」

その内容は私のことが好きになった理由についてだった

「最初はちよつと生意気な後輩って感じだったけど…何回も一緒にミッションへ行ってるうちに、お前がいかに本気で必死に頑張ってるゴツドイーターになるうとしてるのが伝わってきた」

…そういうえば、最初私はブラッドの皆を敵対視してるみたいな感じがあった

極東支部を今まで守り抜いてきたのは自分達だから…って

「そしたら…なんというか、ずっとお前のそばで支えてやりたいって思うようになって…ははっ。なんか恥ずかしいなこういう話するの…」

照れを誤魔化すように笑う先輩を私はじつと見つめる

「…だから、エリナは俺のそばに居てくれるだけで満足なんだよ…強いて言うなら、元気で！笑顔で！っていう条件も付けたいけどな」

…そっか

そうだよ

私だってそうだもん

「ごめんね先輩…私ちよつと嫉妬しちゃっててさ…」

「うん。分かってた」

「っ…／＼。は、はっきり言わないでよ…」

…周りに今誰も居ないし、ちよつと甘えちやおうかな…

そつと先輩の体に寄り添う

「…私もさ、最初はブラッドって温室育ちのエリートって感じがして嫌だったけど、先輩は…態度悪い私にもいっぱいいろんな事教えてくれたし…とつても強いことは最初の同行任務で分かっちゃったから」
私の頭を撫でてない方の彼の手をそつと握って、その顔を見上げた
「ソーマさんとの件でも手伝ってくれて…いつの間にか好きになっちゃってた…先輩と一緒にミッシェンとかお出かけ行くのが私の楽しみにすらなつてた」

だから…

「…確かに、一緒に隣にいられるだけで十分幸せなことなんだって…改めて実感したよ」

視線が絡み、お互いの吐息すら感じる距離で私達は見つめ合う

「エリナ…」

「先輩…」

…この雰囲気って

わ、私…目つぶったほうがいいかな…／＼

とゆうか、流石にこの体勢を長時間維持するのはかなり恥ずかしい

…

「…なあ、さつき俺が言った事覚えてるか？」

耳元に口を寄せてそつと囁く彼の言葉に、体の芯が火照るのを感じた

「えっ…さ、さつきって…んっ…い、いつ…ですか？」

途切れ途切れのかすれ声でそう返事するのが精一杯の自分に、小さく笑い声を上げる先輩

『今夜は覚悟しろ』

「!!」

ビクツと震える私の反応に、満足そうに頷くと…

なんと彼は私を…お、お姫様抱っこでやつで抱えて…!

「さくて、俺の部屋に行こうかエリナ♪」

「なっ…なっ…っく!!!／＼／＼」

もうどこから突っ込んでいいのか分からなくて、私はただただ先輩の腕の中で真っ赤になりながら、もごもごと口を動かすのが限界だった

後日。私達の様子をちやつかり遠くから見ていた清掃のおばさんによって、極東支部中に話が漏れてしまったことはまた別のお話

END

二人でお出かけ 休暇

「せ、先輩！明日は先輩仕事が休みだつてギルバートさんに聞いたんですけど！」

「おう。確かに、休暇日だな」

とある日

先輩と二人でのミッションから帰ってきた後、私達はラウンジで食事しながら会話をしていた

のんびりと気楽に食べ物や口を運びながら仕事の疲れを癒している彼と違って、私は今ちよつと緊張している

なぜなら…これから所謂デートというものに誘おうとしているからだ

「実は私も明日お休み貰つてて…あ、あの…もしよかったら…その…明日私と、外部居住区に出かけませんか？」

「ん。オツケーオツケー。俺もちよつとやること考えつかなくてヒマだったし、行こうか」

グーサインを作る先輩の笑顔を見て、とりあえずはホツと一息つく「それで？またコウタの家の隣にある例の雑貨屋にでも行きたいのか？」

「あ…うーんと、それもありますけど、他にもいろいろ…」

私としては、先輩と一緒に過ごせるならどこでもいいんだけどね「んじやー行き先とかの予定は、エリナに任せていいのかな？」

「は、はい！」

実は先輩を誘うことばかり考えていて行き先とか全然予定組んでないんだけど、それはこれから考えればなんとかなるでしょ…多分

「了解。それじゃー明日、楽しみにしてるぜ？朝起きたら、エントランスで待ってればいいか？」

「う、うん。お願いします」

…というのが昨日の出来事

「落ち着け…落ち着くのよエリナ…」

待ち合わせ場所のエントランスにて、私は言ってることは裏腹に落ち着きなく辺りをウロウロ歩き回っていた

昨夜は興奮しちやって寝付きが悪くって、ちゃんと起きられるか不安だったんだけど…

まだ先輩は来ていないようだった

「…もう少し身だしなみチェックしたほうがよかったかも…」

髪の毛を指に巻きつけながら、私はボソリと呟く

もちろん部屋を出る前に念には念を入れて決めてきたつもりだけど…

落ち着かないなあ

昨日のうちに、メールでカノンさん辺りに服装はいつものでいいかどうか相談しようと思ったんだけど…

流石にそんな内容のメール送っちゃったら、私が先輩のこと意識してるのバレちゃうもんね…

というわけで、結局普段着のまま来ちゃった

「…先輩の部屋…行っちゃおうかな…でもなあ」

「よっ！エリナ！待たせたな！」

「っ！」

突然背後から肩を叩かれて、飛び上がるほど驚いて振り向いた私に先輩が笑顔で挨拶してきた

「せ、先輩!? もう…びっくりしたあ…」

「お? わりいわりい。考え事か?」

「え? …えつと…まあ、そんな感じですよ」

今から先輩の部屋まで迎えに行こうかどうか考えていました

…なんて言えるわけもなく、私は曖昧に誤魔化す

「そっか。俺で良ければいつでも相談にのるぜ」

ポンツと先輩の手が私の頭に優しく乗せられた

…最近彼はよく私の頭を撫でる

嬉しくないわけじゃないけど…ちよつと子供扱いされてるみたいで複雑…

「ありがとう…でも、大丈夫」

私の一番の悩みの種に、相談するわけにはいかないもんね

「ん。分かった。じゃー早速行きますか」

「う、うん」

あまりしつこく聞いてこないのも、先輩のいいところだよなあ…

なんて思いながら外出許可をもらいに受付に行こうとした私に、彼がスツと手を差し出した

「…？先輩？」

「いや、どうせなら手でもつないで行くか？と思ってっつ！？」

彼の言葉に嬉しくて笑顔になりかけちゃったけど、多分そういう意味じゃないんだろうなと思いとどまる

「へ、平気です！子供扱いしないでよー！」

…外出した後ならともかく、受付行くのに手なんて繋いで行ったら絶対変な目で見られる！

私は別にそういう関係なんじゃないかと誤解されても、恥ずかしいだけで嫌じゃないけどさ…

困るのは先輩なんだから、もうちよつと考えて発言してよね！

「…あつー…子供扱いしたってわけじゃないんだが…難しいな…」

そのとき背後で小さくつぶやいていた彼の声に、この時の私は気がついていなかった

「ん…ここに来るのもひっそりぶりだなあ」

外部居住区の町並みを見渡しながら、先輩が大きく伸びをしながら私に話しかける

「そうなんですか？」

その横に並んで歩きなら、私は彼の顔を見上げた

…周りの人から見たら、私達ってどういう関係に見えるんだろ…

友達？兄妹？腕輪を見て仕事仲間って判断する人もいるかも…
でも、恋人だつて思われてたら…嬉しいな
なんてね

「うん。最近休暇は…ほら、お前ら第一部隊がハマってるっていう例の携帯ゲーム。あればつかりやってた」

「えっく…私も人のことあんまり言えないですけど、ゲームばかりやってると体に悪いよ」

「いや…こないだエリナにストーリーの進行度抜かされたからな…絶対俺が先にED見てやるんだ！そしてネタバレしてやる！」

「うわっ！先輩最低！」

他愛もない会話を楽しみながら、私達はお互い笑いあう

…こんな時間がずっと続けばいい…

そう思わずにはいられなかった

「…早くこんな風にいつでも笑い合える日常を取り戻せるといいな」

「え？」

私が今思っていたことそのままの意見を言う先輩に驚く

そして、とても真剣な彼の眼差しが遠くの方を見ていることに気が付き、私もその視線を追ってみる

…そこには螺旋の樹があった

先輩達ブラッドの元隊長…

ジュリウスさんが、今も休みなくあの中で孤独に戦っているという
「そう…だね…私もホントにそう思います」

「つと…悪い！暗くなっちゃったな。せっかくの休暇なんだし、楽しまないと」

すぐに笑顔を取り繕う先輩

けど、明らかに無理してる…

そんな彼の様子を見て、私はひとつ決意をした

「…っ」

…そつと

先輩の手を取る

「え？エリナ…？」

「…やっぱり手、繋ぎたくなりました」

やってしまったから改めて恥ずかしさがこみ上げてきて、ぷいっとそっぽを向いてしまった

「…ありがとう」

私の手を握り返す先輩の手に力が入る

…今度の笑顔は間違いなく本物だった

雑貨店

「いらっしやいませ〜」

私達がまず最初に来た場所は、コウタ隊長の家の隣にある例の雑貨店だった

店内に入る際に、流石に恥ずかしかつたので繋いでいた手を離す
…その時先輩が残念そうにしていたように見えたのは、きっと私の勘違いだろう

「エリナってホントここ、お気に入りなんだな」

「はい！だってカワイイ物いっぱいあると思わない？雰囲気もカワイイしー！」

「カワイイ…ねえ」

店内に置かれた品物をぐるりと見渡す先輩の目は、お世辞にも興味津々といえる感じではなかった

「前に来た時もあったけどさ、確かにエリナには似合うもの多いだろうけど、俺にはどうかかな…」

「え…それは…あはは。買い物買い物つと…」

「おい。笑って誤魔化すな」

後ろからなんだかんだ言いながらもついて来てくれる彼の気配を感じながら、私は陳列されている商品を吟味しつつ前進する

「…お？なあエリナ。俺ちよつと向こうの方見てきていいか？」

あれ？先輩でも何か興味を引かれるようなものがあつたのだろうか？

だとしたらちよつと嬉しいかも

「分かりました。じゃーあとで集合しましょう」

「了解！」

彼が私から離れて別の場所に行く

その様子を見ていた店員のお姉さんが、こっそりこちらに歩み寄ってきた

「エリナちゃん。今日も彼氏と買い物にきたの？」

「っ!?!か、彼氏!?!」

この店によく来る私はお店の人と会話する機会も多々有り、すでにこのお姉さんに名前を覚えられていた

…って、今はそんなこと重要じゃなくて！

「ちちち、違います！あの人は彼氏じゃなくて…あの…そのっ…／＼」

彼氏と彼女の関係でないことは事実なのだが、自分でそれを認めたくなくて、すぐにはつきりと拒否できない

「え？でもこの間も二人で来てたよね？エリナちゃんが男の人と二人だけでお店に来るなんて初めてのことだったから、よく覚えてるよ」

「あう…／＼／＼」

そういえば…

初めて来た時も、私とコウタ隊長とエミールの3人だったし、カノンさんと二人で来たことも何度かあったけど…

「……まだ…片思いなんです…」

恥ずかしかったけど、この人が信用できるっていうのは分かったから、先輩が去っていった方を確認しながら小さな声で正直に伝えた「へえ…そうだったんだ」

「先輩ったら、私の事子供扱いしかしてくれなくって…」

勢いづいてしまった私は、いつの間にか彼に対する愚痴を延々と喋ってしまっていて…

その間、お姉さんは嫌そうな顔ひとつしないで私の話を聞いてくれる

「…っ…ごめんなさい！私…」

「いいよエリナちゃん。あなたの話、私楽しみにしてるんだから」

「は、はい…ありがとうございます…」

私夢中になっちゃって…恥ずかしいなあもう…

「でもね、私から見たら、もうすでにお互いの想いが通じ合っているように見えるなあ」

「え!?そ、そうですか?」

「ふふ…自信、もてない?」

そりゃー…だって…

「店内に入ってから今までの長くない時間ですら、私にはエリナちゃん
と彼付き合ってるように見えたんだよ」

「…／／／」

やっぱりそういう風に見える人もいるんだ…

…素直に嬉しい

「エリナちゃんて、きつと自分で考えてる以上に彼に大事にされてい
るんだと思うな…もちろん女性としてって意味でね♪」

「そ、そうかな…えへへ…」

持ち上げられて気分がよくなってきちやった私に、いたずらっぽく
ニヤリとお姉さんが笑う

「でも、あなたがモタモタしてたら、私が彼をとっちやうかも」

「え!?だ、ダメ!それだけは絶対に!」

思わず大きな声を出してしまい、あわてて口を塞ぐがもう遅い

こちらに急接近する足音と共に先輩の声が聞こえてきた

「おい!エリナ!?どうした!?無事か!」

「はい、エリナちゃんこれ」

「え?」

先輩がこちらに来る前に、何か小さな物を手に握らされる

「お姉さんのオススメ。是非買ってね!」

ちやつかり商品を勧めてきた抜かりないお姉さんは、ウインクしな
がらそのまま店の奥に歩いて行ってしまった

「エリナ!」

ちょうど視界から彼女が見えなくなった頃、入れ替わるように先輩
が私の目の前に現れる

「あ、先輩…」

「どうしたんだよ大声出して…心配したぞ」

私になんの危害も加わってない事を確認して、安心したらしい彼が
ため息をついた

…その間に、私はさきほど手渡された物を確認してみる

それは携帯ゲーム機などにつけることができる、画面拭きの機能を
備えたストラップだった

しかもペアルックで2つ…

このデザインは…カピバラ？

極東支部にちょうどいるし、かわいい…流石あのお姉さんがオススメするだけあって私はすぐに気に入った

そういえばあの人私達のはまってるゲームやってたっけ？

カルビが成長しすぎて大変だって話を前にしたのも、覚えててくれたのかな

「お？それ、買うのか？」

先輩が私の手に持っていたものに気づく

「はい！ペアルックですよ！先輩！」

両手で一個ずつ持って、彼に見せつけた

…なんでだろ

今私…堂々としていられる

「ほう！これカルビみたいだな……ていうかカピバラか！」

「うん！私達にぴったりだよね！」

「お、おう…」

彼も私の勢いに少し押されて、照れくさそうに頭を掻いた

「私は先輩とおそろい。嬉しいですよ」

「え…？そ、そうか…まあ、俺も嬉しいけど」

…あれ？

これってもしかしてホントに脈ありそうじゃない？

さつきから照れまくってる先輩を見て、私にもちよつとだけ緊張感が戻ってきてしまった

「あ、あの…先輩は何を…？」

彼がさつきから後ろ手に持っていたものが気になって聞いてみる

「あ、ああ…実は…」

…あれ？

先輩の後ろから、さつきのお姉さんがニヤニヤしながらこつちを見ていた

あの位置からだと持っているもの見えそうだけど…

「もうこれ…買っちゃってるんだけど…エリナに似合うと思ってさ」

私に…プレゼント!?

え…え!なんだろ!

すごい楽しみ!

「ちよつとばかし高かったし、身に付けるにはもしかしたらまだ早かったかもしれない…」

高い?

時期尚早?

身に付ける?

…!!!

ま、まさか!?

い、いやいくらなんでもそんなことは…

てゆうかこの店さういうものまで売ってるの!?

「これ…受け取ってくれないか?」

ドキドキと心臓が落ち着きなく鼓動を奏でる中、私は先輩からのプレゼントを想像して頭が真っ白になりつつあった

きつと目の前には小さくて小綺麗な箱が…

……

……

…

え?

私の目の前にあつた物

それは眩しいくらい純白な…

女性物の下着だった

しかもご丁寧に上下セット

……

「いやーやつぱりエリナには白だとおもぶっ!!!」

とりあえず華麗なアツパーカットを一発お見舞いしてやった

「お買い上げ、ありがとうございますございましたあく！」

いつの間にかレジの係になっていた例のお姉さんに、ニヤニヤ笑いながら見送られて私達は店を後にする

念のため下着のサイズを確かめたんだけど、何故か上も下も私にピッタリのサイズだった

…ホントになんてだ…

「先輩。最低です」

「ごめんなさい！」

さっきのゲームの話のときは重みがまるで違う『最低』という言葉葉を聞いて土下座する勢いで謝る彼に、私は大きなため息をついた

「もう…ちよつとでも期待した私がバカでした！」

「え？期待？」

「なんでもない！」

そっぽを向いてツーンとする

なんで堂々と女物の下着買ってくるのよ先輩は…

しかもあの店で最初に興味を持ったのがそれですか！

ほんとに最低です!!!

…って、あれ？

もしかして…！

「ねえ先輩…私のブラッドアーツ確認しに行った時のミッション覚えてる？」

「も、もちろんだ」

未だ不機嫌そうな声を出す私に（あたりまえだけどね！）先輩が背筋を正して返事した

「あのとき先輩…『白…だった？』って意味分かんないこと言ったよね？…まさかとは思うけどあれって「ははっ！俺と違ってエリナはホントいい買い物したな！」

おもむろに先ほど買ったカピバラのストラップを取り出し眺めは

じめる先輩

「誤魔化さないでよ!!」

やっぱり!

見たんですね私の下着!

もう!

先輩任務中に何見てんのよ!

「この変態!」

「いや!あれは偶然だ!たまたまだ!見えてしまったものは仕方ない!」

「ひ、開き直るなあ!!」

ポカポカと先輩の胸板を叩き始める私に、彼の乾いた笑い声が聞こえてきた

…でも、恥ずかしくはあるけど全然嫌な気持ちにならない私も、結構重症なのかもしれない

…もしかしたら先輩に新しいものを買ったほうがいいと思われるぐらい、似合ってたなかったのかも…

「私の下着、変でした…?」

叩くのをやめて俯いた私の質問に、先輩の笑い声も途絶える

「は?い、いや…別に…もうあんまり覚えてないし…」

「……見たい?」

…

…あれ?

…あれあれ?

ちよつとまって私

今……なんて言った?

「…え、エリナ?正気か?」

「…あ…あああああ!!!」

ボンつという爆発音が聞こえるんじゃないかと言うぐらい顔が一気に赤くなるのを感じて

「カピバラってかわいいですよね!これ自分でもいい買い物しちゃったなって思います!」

先ほどの先輩と全く同じぐまかし方に、彼も苦笑して頷いてくれた
「そ、そうだな…アナグラに帰ったら早速つけますか！」

「は、はい！」

お互い色んな意味で照れ笑いしながら、私達はアナグラへの道を歩
み始める

「…つて、あれ？そういえばエリナ、他にも行くところあるんじゃない？」
「あつ…えつと…実は…全然考えてなくて…あはは」

結局あの日はなんにも考えつかなくて、早起きできるようにってそ
ればっかり考えて寝ちゃって…

「そうなのか？じゃーさ！これはやく付けたいし、久しぶりに協力プ
レイで例のゲームやらないか？」

「あつ！いいですね！賛成！」

まだお昼には早いつて時間だし、食事は極東支部の料理に優るもの
はなかなかないだろうしね

「ふふふ…俺が度重なる休暇で鍛えあげたテクニク…エリナにたっ
ぷり見せてやるぜ」

「…なんか先輩が言うといやらしく聞こえるなあ…」

「なんで!？」

結局荷物はストラップと女性用の下着という謎の組み合わせだけ
だったが、私は大満足で休暇の一日を過ごすことができたのだった

…余談だが、先輩が買ってくれた下着は彼と二人っきりの時だけ大
事に着させてもらっている

もちろん。彼には内緒だけどね♪

END

手作り料理

開始

「ねえー隊長」

ジュリウスの農業魂に火が付き、いつの間にか聖域でのカレーパーティーまで発展した、あのお祭り騒ぎに近い出来事から数日経ったある日

ラウンジのビリヤード台を挟んでキグルミと無言の会話をしていた俺に、ナナが声をかけてきた

「…なるほど。お前はそういうのがタイプか…」

「……!!!」

…ああ！無言でもわかる！

お前のソウルがビシビシ伝わってくるぜ！

「ちよつと隊長聞いてるー!?!」

バシッ！

「うわあ！な、ナナ！なんだ！どうした!?!」

び、びっくりした！

いきなり背中を叩かないで欲しい

あと地味に痛い

「さつきから呼んでる！」

「あ…ああ、そうだったのか、すまん。今コイツとの無言の会話に夢中でな」

俺が手を上げて合図をすると、キグルミはすべてを理解したかのように頷いてラウンジから退出していった

「そんなに仲良くしていると、エリナちゃんが嫉妬しちゃうよー?」

「へ?なんでだよ?アイツ男だろ?」

「え?女の子でしょ?」

「いやいや、だってこないだエミールが調子乗って戦闘不能になった時、アイツ【友情】のスキルでバーストしてたぜ?」

今まで性別すら分からなかったから、大発見じゃん! ってエミール

がぶつ倒れているのにも関わらず興奮したのを覚えている

「うっそだあー！だつて私と一緒にミッション行った時は、シエルちゃんが倒れちゃった時に【友情】でバーストしてたよ？」

…は？

つまり…どういうことだ？

「……………」

あれ？

なんだろ

なんかすごい恐くなってきた

明日から俺どうアイツと接すればいいんだ

「でさ、隊長」

な、流したあー！

ナナさんここでまさかの話題引き戻し！

「うん。なんだ？」

でもなんか触れちゃいけないような話題っていうか、ぶっちゃけコ
ワインで俺も彼女に話をあわせる

「明日ラウンジで男子禁制のイベントやるんだ！」

「…はい？」

話がさっぱり見えない

なんだ？

カレーパーティーの次は盛大な女子会でもやるっていうのか？

「隊長。エリナちゃんの手料理って食べたことある？」

「ああ、一回だけ…いや、あれは料理じゃなくてお菓子か？バレンタインの時に。ついでにその日はエリナ本人もおいしく「じゃーさ！食べてみたいよね！エリナちゃんの手料理！」

余計な事を言おうとした俺の言葉にすかさず割り込んで、なぜだか無駄にいい笑顔でそういうナナ

…ここは素直に従ったほうが良さそうだ

「う、うん…食べたいなーエリナの手料理。ついでにエリナ本人m「隊長」

バキッ！

…あれ？なんか変な音したんですけど？

ナナさん。あなたが手を置いてるビリヤード台がどうなってるのかすんごく気になるんですけど???

なんてのんきな事を考えながら彼女の表情を見ると、なんかもうドレッドパイクとかオウガテイルぐらいなら見ただけで活動停止しちゃいそうな素敵な笑顔だった

…なるほど、これが本当の【圧殺】か

「すみませんなんでもないですはい」

とりあえず謝らないと本気で命の危機を感じたので、謝罪しておく「今の質問で大体察してもらえたとは思いますが、明日はここ入っちゃダメだからね！それだけ！」

…なるほど、つまり明日ここでエリナが料理を作るってことか？

でも俺だけじゃなくて、男子全員禁制っていうのはどういうことだ？

女子だけはOKの理由もいまいちわからん

「エリナちゃんだけじゃなくて、女の子みんなで料理の勉強会みたいなものやるんだよ〜」

ああ！なるほど！納得

「…あれ？でもさ、確か明日仕事…」

「隊長強いから、4人分ぐらいのミッションなんでもないよね？」

…最近耳が悪くなったのかな

なんかとんでもない言葉が聞こえた気がするんですけど???

「ほら、あれも今のところ隊長だけが使えるし…なんだっけ？【ブレッツドライブス】？」

「それじゃー食べ物だろうが！なんで炭水化物大量摂取できそうな名前になっただ！【ブラッドレイジ】だろ！」

思わず突っ込んでしまったが、真に突っ込むべきはそこじゃないはずだろ俺

「とりあえず、フランちゃんとヒバリさん。それからウララちゃんにもミッションの出撃者のことは連絡してあるから、大丈夫！」

何が大丈夫なんだ何が

大丈夫なのはあんたら女性陣だけだろうが

テルオミの名前が今のところで拳がっていないことで、すでにかわいそうな予想が付く

「それに、復活してやる気まんまんのロミオ先輩なんかソロで余裕とか言つて、アリサさんがやるはずだった仕事全部受け持ってくれたんだよ」

え？

アリサさんの仕事？

：それつて単にミツシオンだけじゃないだろ絶対

あの人毎日クレイドルの仕事で寝る間も惜しんで働き詰めのはずなんだが：

ロミオ先輩分かつてんのかそれ：

「：あつ、そろそろ私達明日の予定最終調整の時間だ！じゃーね隊長！確かに伝えたからね〜！」

陽気に手を振る彼女の後ろ姿をポカンと口を開けて見ながら、俺は（キグルミつてどうなるんだろ？ナナは女の子だと思つてたみたいけど、さっきの会話で：）

と現実逃避した考えに思いを馳せていた

〜翌日ラウンジ〜

「ではーただいまより！『ムツミちゃんとカノンちゃんの男子禁制お料理教室』！はじめまーす！」

その日ラウンジを貸しきつて行われるイベント名を、ナナさんが声高らかに宣言した

ちなみにこのせいで極東支部男性陣は、ほぼ全員が仕事に駆り出されている

もちろん先輩も例外ではないので、私はやっぱり彼を手伝いに行こうとしたのだが：

「平気平気！隊長エリナちゃんの手料理食べられるって聞いて、喜んでたよ！」

…それは嬉しいけど、大丈夫かな先輩

「彼は君の手料理を楽しみに仕事に励んでいるんだ…期待に応えよう。エリナ」

ポンツと私の肩に手を置いてそういうリヴィさん

…まあ、今の先輩なら余程のことがないかぎり負けはないと思うけどさ

それでもやっぱり心配なものは心配なんだよね

「エリナさんにそれほど想われているなんて、うちの隊長は幸せものですね」

シエルさんが微笑みながら言う言葉に、ちよつとだけ照れる

「そ、そうかな…／＼／＼」

こういうのはいつになっても慣れないものだ

「それじゃー昨日の段階で決まってること！改めて発表していくねー！」

端末を取り出し、昨日のうちにまとめた最終調整結果をナナさんが読み上げていく

「作りたい料理！【カレー】が1位！」

ちよつと待った！

【カレー】ってこないだ食べたばかりでしょ！

てゆうか昨日の時点で【カレー】って案でてた!?

「いや〜。集計調べてみたら、【カレー】って意見が8割でさー」

8割!?

うそだ！

「実はみんな集計の時強がっちゃってたみたいで。実際の票は簡単な料理ばかりだったよ〜」

そういう彼女の言葉に嫌な予感がして、脇から端末をのぞかせてもらう

…【カレー】という文字の次には、【焼き肉】【BBQ】とか書いてあった

…それはもう…料理とかそういうのじゃないと思うんですが…

てゆうか【アクアパツア】や【エスカベージュ】とか言ってた人

はやっぱり冗談だったんだ

私にはどういいう料理なのかさっぱり分からなくて、ちよつと不安だったんだけど

「じゃーき。エリナちゃんほどの料理に投票したの？」

「え…「シチュー」…ですけど…」

「……………」

え？

なんで!?

なんで静まり返るの!?

変じゃないでしょ？

少なくとも【焼き肉】と比べたらちゃんとした料理だよ!?

…あれ？でもなんとなく【カレー】に似てる？

いやいや！そんなことはないはず…!

「普通…だね」

「普通ですね」

「いたって普通だな」

「ふ、普通の何が悪いんですか!」

ブラッド女性陣の反応に憤慨

「あ！でも【シチュー】って案は2つあるよ」

ふ、ふたつ…だけ？

「それ、きつと私ですね」

そこで手を挙げたのは、なんとアリサさんだった

「カレーもいいと思っただんですけど、何度も練習しましたからたまには違う料理もと」

で、ですよね!

シチューいいですよね!

失礼だけど、アリサさんのことが初めて料理関連で頼もしく見える
「あ…あの、じゃーお二人は…」

2度目の【カレー】をなんとか防ぎたい私は、このイベントのタイトルに名前を連ねている熟練の料理者の意見を問う

「私は【コンタディーナ】とか作ってみたいな!」

…ムツミちゃん？

コン…なんだって？

なにその料理???

「なるほどー、ムツミちゃんおしやれですね。ちなみに私は「ナヴァラン」とか、かわいいかなって思いました…」

「あー…それもいいかもカノンさん！」

…だめだ

この二人はもう根本的などころからレベルが違う

私にはどちらの料理も想像することすらできない

「あ…あれ料理名だったんだ。イタズラ投票かと思って消しちゃったよー」

「ええ〜!?!」

もう最初からグダグダ…

大丈夫なのかなこのイベント

先輩も心配だなあ…

…その頃エイジスでは

「つらすぎるんだけど!!!」

新生ブラッドの隊長が、イエン・ツイー。マルドゥーク。スパルタカスといった感応種の群れと、一人でパーティーを楽しんでいるのだった

調理

「そもそも、料理の材料とか大丈夫なんですか？」

まだ何も調理していないのにすでに予想外のことばかり起きていて、私もまず最初の段階から心配になってくる

「あ、それはタブン大丈夫だよ！大抵の料理なら作れるぐらい食料に余裕はもたせてあるんだ」

さきほど謎の料理名を挙げていたムツミちゃんが言うなら…

そこは信用しても大丈夫かな

「えっと…じゃーカレー…ってことになるんですか？やっぱり？」

票的には一番入ってたのはそれなんだし…

「…そのことなんだけど…ホント直前で申し訳ないんだけどさ。別に皆が同じ料理作る必要ないよね？」

「え？でも料理教室って名目ですし、皆一緒のもの作ったほうが効率よくないですか？」

教える側も、そんなにいろいろな料理を見るのは大変だろうし

「なら、いくつかのグループに別れるというのはどうですか？」

そこでシエルさんが出してきた案とは、作る料理をいくつか決めその中で先生役、生徒役というのを分けるといったものだった

「あ！それいいね！流石シエルちゃん！」

確かに案としてはいいけど、カレーに人が集中しそうじゃない…？

「あ、じゃー私、エリナちゃんにシチューの作り方教わろうかな」

え!?

ア、アリスさん!?

私教える側なんですか!?

「そうですね。エリナさんは確か、バレンタインの時すごいお菓子を作っていましたから。教える側の方が適していると思います」

あ、あれは…

先輩に喜んでもらおうと必死だったから、いっぱい勉強してなんとか作ることができただけで…

「…ですので…あの、私もシチューの作り方。教わってもいいでしょ

うか?」

「じゃー私も私も!」

「みんながそう言うなら、私も参加させてもらおうかな」

「え?ええ!」

あれよあれよというまにブラッドの女性陣+アリサさんが、私とシチューを作る流れになっていた

…私も教わる側が良かったのに…そして先輩に…はあ…

その後、グループに別れることが改めて決まり、急遽用意した複数
の大型机のうちの一つに、私達は集合していた

「…えつと…じゃーまず、材料の確認からしたいと思います」

結局シチューのグループは先ほど述べたメンバーで決定

…まあ決まってしまったことは仕方ない

私だって、料理の基本ぐらいはマスターしているつもりだ

「シチューって言うといろんな種類があるけど…今日はオーソドックスにクリームシチューにしようかなって」

「わーい!クリームシチュー!」

ノリのいいナナさんがパチパチと拍手してくれたが、逆に恥ずかしい

…こういうふうの人に何かを教える立場って初めての経験だからなあ…

先輩とかコウタ隊長の苦労がわかるかも…

とりあえず鶏肉、ジャガイモ。人参。玉ねぎと基本的な材料を並べていく

ちなみにほとんどの食材が聖域で自給自足出来るものだったので、
食材が不足するなんてことにはならなかった

…鶏肉はどうなのか、シエルさんの反応がコワイので誰にも聞けずに黙っていたけど

「エリナちゃん!そのエプロンかわいいね!」

「え?そ、そうですか?」

人数分の食材を取り出し出したあと、ナナさんがこれまたおもむろに笑顔に向けてそう言ってきた

料理をするのに欠かせないので全員エプロンを着用していたのだが、自前のものを持ってない人は支給されたもの。持っている人は自前のものを使っていた

ピンク主体の生地に、裾のフリルに可愛らしい小さな白い花模様が描かれているエプロン

…実はこれ、先輩からの贈り物なんだよね

「エリナ！これプレゼント！女の子には必需品だぜ？」

「必需品？…先輩まさかまた下着とかじゃないよね？」

「それも考えたんだけど、今回は違うぞ！」

「考えないでください！」

「いいからいいから。ほら！エプロン！」

「へ…？あ、かわいい…」

「だろ？どうやらこれを裸でつける【裸エプロン】なるものが、今のムーヴメントだってハルさんが…」

「は!?!わ、私はそんな格好しないからね!?!」

「えっ？うそ…だろ…？」

「なんでそんな大真面目な顔でシヨック受けてんのよ！」

……

まあ、くれた理由には大いに問題があるかもしれないけど、嬉しいことには間違いないし…

「あく…その顔、さてはうちの隊長にもらったなあ〜」

あっ…／／／

「エリナちゃんってうちの隊長のことになるとすんごい嬉しそうな顔するから、すぐに分かるんだよねえ〜」

そ、そういえば前にも似たようなことを言われたっけ…／／／

「つゝ／＼と、とにかく！これで人数分の食材はそろいました！」

真つ赤になって声を張り上げる私をにこやかに見守る女性陣

「ふふ。照れなくてもいいんだぞ」

「そうですね。微笑ましいです」

「…私も久しぶりに彼と会いたいな…」

あ、そういえばアリサさんは第一部隊の前任隊長のことが…

って！ダメダメ！

今は恋バナする時間じゃないんだから！

ぶるぶると頭を横に振って、料理へと思考を集中させる

「もう！調理にとりかかりますよ！」

「はーいーごめんなさーいー！」

…正直私はここまで想像していなかった

鶏肉を切る段階で、すでに問題が発生するなんて

「…あの、リヴィさん？鶏肉はもうちよつと小さく切らないと…」

「…だめだ…私にはできない」

「え？え？どういうことですか？」

よく見ると、彼女が包丁を持つ手は妙に震えていた

…まさか刃物がこわい？

そんなバカな

戦場で、ドデカイヴァリアントサイズをブンブン振り回している彼

女のことだ

ないないそれはない

「私は知っているんだ…この鶏肉が、聖域で育てられていた鶏だということを…」

あ…やつぱりそうだったんだ…なんとなくそんな気はしてたんだけど

少し離れた所で作業しているシエルさんに、今の会話が聞こえていないかと気になってチラつと様子を伺うが、今のところ平気みただった

「私達が手塩にかけて育ててきたこの鳥達…すでに命をなくしている
とはいえ…私自らその肉を切り刻まないといけないとは…」

…あの…なんかすんごい罪悪感湧いてきたんですけど？

てゆうかなんで瞳に涙ためてるんですか!?

ウルウルしちやつてるんですかりヴィさん!?

「…くっ…料理とは、厳しい道程なのだ…」

「…え…ええ〜…」

まさに牛歩の歩みとも言えるべく超ロースPEEDで、鶏肉を適切な
サイズに切る作業にもどるリヴィさん

だめだこれは

血の力【慈愛】が発動しちやつてる

私の力じゃ太刀打ち出来ない

とりあえず別の人の作業を見るために、私はそつとその場を離れる
のだった

「…えつと、ナナさんまでなんで泣いてるんですか？」

「た、玉ねぎが…目に染みるよお…」

どうやらこちらは料理でありがちな玉ねぎの…なんだっけ？りゆ
うかある？とか何とか言う成分で涙を流していたらしい

…なんで私はこんなにもほつとしているんだろうか

「な、なんか良い対策方法ないのエリナちゃん〜」

泣き腫らして充血した目をしよぼつかせながら、ナナさんがバタバ
タと手を振る…つて包丁危ない！

危ないですナナさん！

「えつと…事前に包丁と玉ねぎを冷やしておくといいとしか…」

「えー…じゃー、我慢するしかないのかなあ…」

がつくりと肩を落とす彼女を見て、前もって伝えておけばよかった
とちよつと後悔してしまった

「…ごめんなさい。最初から言っておけば…」

「ううん！いいよ！また何かあったらよろしくね〜」

涙を一筋ポロリと流しながら、笑顔でナナさんが包丁を持った手を振る

…なんかコワイです

「エリナさん。食材の切断作業。終了しました」

私がナナさんの元を離れると、シエルさんが報告をしてきたてゆうか切断作業って…まあ、そのとおりなんだけど

「あ…う、うん。じゃーその次は鶏肉を炒めるんですけど…」

「了解です」

手際よく鍋に油を熱し、適切なサイズの鶏肉を入れていくシエルさん

…あれ？この人もう何も心配いらなくない？

しかもハウトウーシチューとかいう本が机の上に見えるんだけど、いつの間に…

「えと、それで鶏肉が白くなってくる頃合いで、野菜を入れて…」

「わかりました…鶏肉が白く…ふふ、なぜだかあの子達を思い出しませぬ」

ビクッ!!!

シエルさんの何気ない一言で、私はその場で固まってしまった

あ…あの子…達って

「今頃元気にしているでしょうか…あ、そういえばそろそろ私がエサをあげる番でしたね」

さつきりヴィイさんの話を聞いた後だけに、心が痛む…っ！

あ、ヤバッ…ちよつと涙ぐんできちやった…

「…エリナさん？」

「っ！あーシ、シエルさんは問題なさそうですね！私！アリサさんの様子見てきますす！」

その場にいるのが耐えられなくて、私は逃げるようにアリサさんの元へと向かうのだった

「……………」

「……………」

…えつと…これは？

「…ホワイトソース…です」

エヘへと照れ笑いしながら、並みの男の人なら一瞬で骨抜きにしてしまいそうな素敵な笑顔を浮かべるアリサさん

…でも…

「ホ、ホワイト…ソース…ですか？」

…私の脳には色覚を通して、目の前のソースは【黒】だという情報が送り込まれてきている

…えと…なにをどうしたらこういうことに？

「タブン…胡椒を入れすぎちゃったのかな…」

こ、胡椒!?

「ホワイトソースの材料に胡椒なんてありませんよ!？」

「え？そ、そうだったんですか？」

てゆうかそれ以前に胡椒でここまで黒に染まるって…

お、恐ろしすぎる…!!

…でも、食材の切り方、炒め方は完璧に見えるし…

「…ま、まあホワイトソースくらいなら作り直せますから」

「は、はい！ごめんねエリナちゃん」

「いえいえー!」

誰にでも苦手なことの1つや2つあって当然なんですから！

容姿端麗才色兼備なアリサさんが、料理まで得意だったら完璧すぎちゃいます！

彼女のホワイトソース作りを手伝いながら、私はチラッと周囲を見渡してみた

リヴィさんは鶏肉を切る作業をたった今終えたところ

ナナさんは炒め作業の途中

シエルさんは具材を煮込む段階

…うん

見事にバラバラだね

：この時はすんごい大事な事を忘れていた

自分が作る分の作業に全く手をつけていないということをして…

食事

「か、完成しました!」

ホワイトソースの作り直しという大幅なタイムロスをやってしまつたアリサさんのシチューがなんとか作り上がった

よかつた…これでなんとか4人分…ん?

4人…分…?

…!!!

「わーい!じゃーこれで皆作れたよね?早速味見を…」

「…ちよつと待つて下さい。エリナさん…?」

ヤバイ…

私、自分の分作つてないじゃん!!!

「…材料は…まだあるのか?」

いち早く状況を察してくれたリヴィさんが食材を確認してくれている

「…ホワイトソースに必要なものが若干足りない…かも?」

ナナさんがポツリと呟いた言葉に、アリサさんの顔が青ざめた

慌ててムツミちゃんの前へと向かうが、やっぱり食材が足りない

具体的には牛乳が…

どうやらあるグループで壮大にアイスクリームを作つた際に、大量の牛乳を使つてしまつたらしい

…乳製品だし、長時間保存できる量は多くないみたいで…

「わ、私が余計なことしたから…ご、ごめんなさい!」

「だ、大丈夫です!…この余つた食材を使つて何か別のものを…」

…鶏肉、人参、玉ねぎ、ジャガイモ…

……カ r ……

いやだ!

それだけは回避したい!

「…これがあれば、極東で昔から伝えられている料理…【肉じゃが】が作れるかも…鶏肉 v e r は見たことないですけど」

責任を感じて必死に考えているアリサさんの意見に食いつ

く

「それだ！レシピとか、ありますか!？」

「え？は、はい！持ってきます!！」

「よし…大丈夫」

肉じゃが…作ったことなんてもちろんないけど…落ち着いて作ればいけるはず！

アリサさんがダツシユで取ってきてくれたレシピに目を通しながら、私は一度深呼吸をする

さきほど手元にはなかった必需品の食材も、なんとか調達できた時間はもうあまり残されてないので、調味料は【麵つゆ】で代理【しらたき】とか【インゲン】も入れるといいらしいので、とりあえずムツミちゃんに頼んで用意してもらった

「…あれ？なんかエントランスの方から音が聞こえない?」

女性陣のうちの一人がポツリと呟いた言葉が妙に大きく聞こえて、焦りで冷や汗を浮かべる

…うそ…まさかとは思うけど…

「誰か帰ってきたのかも…」

一応ラウンジの入り口には『無断で入室してきた男の人は、血を見るので気をつけてね☆』って書いた張り紙（カノンさんの戦場写真付き）が貼ってあるのでおそらく大丈夫だとは思うんだけど…

…いや…落ち着けエリナ…周りの音に惑わされるな…

集中して…集中…しゅうちゅ…

『いやー、流石に今回は骨が折れたぜ。なあ隊長さん』

『まったくですよリンドウさん。俺なんかエイジスで感応種複数体とソロですよっ…』

『おいおいそりやひどいなあ…よし。今日は俺が一杯おごろう』

この声は…

リンドウさんと…せ、先輩!?

うそでしょ!?

なんでよりによつて…

出入口から近い場所で作業していた私達のグループには、エントランスでの会話が扉一枚越しにほとんどはつきり聞こえてくる

『えー？でも俺まだ未成年ですよ？』

『おつと…そうだったっけか？んじゃーあれだ。牛乳とかでいいよな。背伸びるぞ』

『いや別に身長伸ばしたいわけじゃないんですが…エリナとのバランス考えるとこれぐらいがちょうどいいので』

『帰還早々ノロケか？それなら俺も負けてないぜ？』

『あつ、そういえばリンドウさん子供の方は…』

………

だ、だめだ！

あの二人の会話が気になつちやう！

てゆうか先輩が私のこと話題に…／／

あと牛乳はもうないんですごめんなさい！

「エリナさん！頑張ってください！」

「そうだよエリナちゃん！頑張つて隊長においしい手料理ごちそうしてあげようよ！」

…ハッ！

シエルさんとナナさんが動きが止まってしまった私に激励を送ってくれる

…そうだ。仕事帰りで疲れてる先輩に、手料理をごちそうしてあげるのが本来の目的だもんね！

頑張らないと…！

「私達も調理を手伝ったほうがいいのかもしれないが…それでは意味がないんだろう？」

「レシピを読むぐらいならいいですよね!?エリナちゃん！疑問に思うところがあつたら聞いてください！私が読み上げます」

一人で手作りすることに意味があるのをわかっているリヴィさんと、それでもやはり原因が自分だと思つて責任を感じているアリサさんが、最低限の手伝いをしようとしてくれていた

「みんな…ありがとう…うん。わたし、絶対美味しい手料理を先輩にごちそうしてみせる！」

く エントランスく

「ところでお前さんら、一体どこまでいったんだ？」

エントランスにあるソファにどっかりと腰をおろしながらリンドウさんが配給された缶ビールを一つ、爽快な音を立てて開封しゴクゴクと喉を鳴らす

一瞬ラウンジに入りそうになってしまったのだが、入り口に今朝の段階ではまだなかったはずの不吉な張り紙を発見

しかも笑顔でこちらにブラストを向けるカノンの写真付きだったので、流石のリンドウさんも入室は断念したらしく自室に保管しているビールをここまで持つて来ていた

「どこって…外部居住区ぐらいまでしか任務外だと行けないですからねー今のご時世。後は聖域ですかね？」

「…あー…いや、そういう意味じゃーないんだが…まあいいか」

…？

どうやらリンドウさんの期待していた答えではなかったらしく、苦笑いしながらビールを飲んで誤魔化してしまった

「とにかく、子持ちの親としてお前さんにアドバイス出来ることもあるかもしれない。困ったことがあったら是非聞いてくれ」

「あはは。流石にそれはちよつと気が早いですよ」

…とかなんとか言いながら、俺はエリナの子供だったら彼女に似てカワイイんだろうとか、考えてしまっていた

…自分で言うのもあれだが、ほんとに惚れ尽くしているというかなんてゆうか…

ガチャ

「おっ」

ラウンジの入り口から人の気配を感じて振り返ると、ムツミちゃんが笑顔で扉を開けていた

「リンドウさん！たいちよーさん！もう入ってもいいよー！」

おおー！

待つてましたあ！

エリナがたばこ：エリナの手料理が食べられるぞ！

「今日はみんないろんな料理作ってくれたから、好きなものを晩御飯として食べてもらおうかなって！」

なるほど！

それはいい案だ！

エリナが作ったものは、全部俺が頂いてやるけどな！

く再びラウンジく

「おおーウマそうな匂いだなあ。これ、先着順で食べていっていいんだよな？」

リンドウさんがラウンジに入って周囲を見渡す

「どうぞー！」

「そんじゃー隊長さん。またあとでな」

ヒラヒラと手を振って彼が奥の方に歩いて行くのを見送りながら、

俺はエリナの姿を探していた

「んー…お？いたいた」

ほとんど入り口に近い場所で、ブラッドの女性メンバー+アリスさんと共にいる最愛の彼女の姿を発見

「おーい！エリナー！」

「っ！あ…せ、先輩…／／／／」

俺が近寄っていくと、エリナの顔は徐々に赤みを帯びていき最終的に俯いてしまった

…うん。かわいい

しかもプレゼントしたエプロンを着てくれているとは…
感極まる！

「いやー腹減ったー！今日はこれだけが楽しみで仕事してたんだぜ？」

思わず抱きしめてしまいそうになるのを、ぐっと全身全霊の力をかけた理性で押しとどめ、頭を撫でるぐらいに押しとどめておく

「そ、そんなに期待されてると…ちよつと緊張しちゃうな…」

照れ笑いする彼女の表情を見ると、なんだかそれだけでただのライスでも10人前ぐらいいけちやいそうな気がしてきた

だから何も問題ない！

「…えと…これ、どうぞ」

エリナが取り出したお椀に盛られていたもの…

なんだろう？

「これは…？」

「【肉じゃが】っていう極東で昔から食べられている料理みたいなんだけど…」

なるほど！

肉じゃが…

食ったことないけど、エリナが作ったんだ

旨いに決まってる！

「それじゃー頂きますー！」

「えっ!?ちよ…ちよつとまって先輩」

恥ずかしいのか、彼女は慌ててオロオロし始めるが、もう遅い！

机の上に備えられていたハシを持ち、【肉じゃが】を口に入れる

…ここ、これは…

じゃがいもがふつくらと口の中で溶け、その上に人参の甘みがひろ

がり…旨い！もう一口！

今度は肉中心に…

「…もぐもぐ…」

…鶏特有のしつこくない脂身が料理の味を引き立てていて、玉ねぎとインゲンでリフレッシュ

自然にハシが進んでしまう

しらたきの歯ごたえも飽きを感じさせないでグツドだ！

…うん

とりあえず旨い！

これはうますぎるぞ！

マジでライスが欲しくなる旨さだ！

「エリナー…これスングーうまい！」

ゴクリと口の中にあつた分を飲み込んでから満面の笑みを浮かべるが、彼女は少し不貞腐れた表情を浮かべていた

…あれ？なんで？

「…もう…先輩慌てすぎ」

「いやー、だって腹ペコの状態でエリナーの手料理を目の前に出されたら、それはもう飛びつかないわけにはいかないだろう？」

「そう思ってくれるのは嬉しいけどさ…ちよつとやってみたいことがあつたのに…」

なに？

やってみたいこと？

「あれ？そうだったのか？スマンスマン。今からでも間に合うか？」

「…うん…けど、ちよつと恥ずかしいから…こつち来て」

俺の手を取って椅子のある場所まで向かうエリナー

…まあ、今回のイベント的にラウンジで完全に人目を避けられるところは無いんだけどな

「…あのさ。私達完全に眼中になかったね」

「仕方ないさ。うちの隊長はほんとにエリナーに夢中のようなだからな」

「そうですね〜…」

「よし…私もこれで…いつか…」

背後から聞こえたシエル達の会話に声ぐらいかけるべきだったかなと思つたが、やっぱりエリナーの手料理の魅力には敵わずあとで皆には挨拶することにするのだった

「…で、やりたいことってのはなんだ？」

椅子に腰を下ろしながら、肉じゃがを一旦机の上に置きエリナの方を振り向く

彼女も俺の隣に座ると、備えられていたハシを自分で持った

…もしかして味見？

でもそれは恥ずかしいことではないよな…

「…あ、あくん…」

………

ハシで料理をつまみながら、それをこちらに持ってきて喋るエリナの行動に目が点になる

…あくん？

…え？それってもしかして…

「………っ／＼／＼」

いつまでも行動を起こさない俺に恥ずかしさが頂点に達したのか、顔を真っ赤にしたまま彼女はとうとう自分の口に料理を運んでしまった

「…おいしい」

もぐもぐと口を動かしながら、若干不満の残る赤面でこちらの様子をチラチラと伺ってくるエリナ

…なんだこのカワイイ生き物は

「エリナ。もう一回やってくれ」

「えっ!?…う、うん…!」

真剣な表情でそう言えば、とたんに笑顔でもう一度肉じゃがをハシでつまむ

「はい!あくん」

「あーん…んむっ」

口に含んでいる物は自分で食べた時と変わらないのだが…
なぜだかその数倍はおいしく感じる

…あ

「…そーいや間接キス…」

「…あっ…／＼／＼」

俺の言葉にますます照れるエリナが、あたふたと視線を泳がせるのをニヤニヤ見守りながら自分のハシで料理を取った

「んじやー今度は俺の番だな♪エリナく、あくん…」

「あ…あう…／＼／＼…あーん…」

エサを待つひな鳥の様に小さく口を開けて、瞳まで閉じてしまった彼女にそつと料理を運んであげる

「…んっ…」

慌てて咀嚼して、そつぽを向く様までかわいらしくて…

「エリナ。お前かわいすぎ」

「なっ…い、いきなりそんなこと言うなんて…ふ、不意打ちすぎ…／

／

「すまん。つい本音が」

「っく!!」

イチヤイチヤと肉じゃが一つにものすごい時間をかけて食事をしていたら、いつの間にかほとんどの人が帰ってきていて…

「なあ、あそこだけなんかすんつつつつつごい熱いんだけど、なに？なにがあつたの？」

「…俺に聞くな」

コウタとソーマさんが近寄りたいたいとも言いたげな雰囲気はこちらを見ながらヒソヒソと話している声が聞こえ…

「おいロミオ。しつかりしろ」

「…ギル…ジュリウス…あとは…任せた…ぜ…」

「もう少しの辛抱だ。見ろ、美味しそうなカレーがある」

ブラッドの男性陣が満身創痍で（主にロミオ先輩が）ジュリウス先導でカレーの元へ向かうのも…

「ヒバリちゃん。俺達も何か熱いものを…」

「はいどうぞタツミさん♪アツアツのコーンポタージュです」

「え？ちよ、それは洒落にならなあつっ!!!」

タツミさんとヒバリが仲良く(?)している様子も見えた

やっぱりこれだけ人目がある場所では、少し控えたほうがいいかな？

と、流石の俺も思ってしまったが…

「…えへへ…」

満面の笑みで満足そうに料理を頬張るエリナを見てると…

うん、まあ無理だな

そう確信してしまうのだった

「あ、そっういやエリナ。俺、メインディッシュユが食べたいんだけどさ…」

END

風邪引きエリナ 発症

「(っ)ほっ(っ)ほっ…」

…その日は朝から体調が優れなかった

目覚めたはずなのに、スッキリせずぼんやりする

だるさを感じる体を無理やり上半身だけ起こしてみれば、途端にぐらつく視界

「…まいったなあ…風邪かも…(っ)ほっ！」

…今日は確か仕事が入ってたはずなんだけど…

痛む喉に顔をしかめながら咳込む

…昨日何か原因になるようなこと…あつたっけ？

…あ、そういえば夜中…

「エリナあく…もう帰っていいか？…ふあく…眠い…」

「も、もうちよつと！…もうちよつとだけ…お話しよ？」

「…ホントにお話だけか？襲ってくるなよ？」

「そ、そんな事しないよ！明日仕事あるんだし…」

「だったらなおさら早く寝たほうが…」

「…ダメ？」

「ダメじゃないけど…ただ体調崩したらあれだから、ホントにもうちよつとだけな？」

「うん！ありがと先輩♪」

……………

…うわあく

おもいつきりあるじゃん、原因

しかも私自身に…

…
こんなんじやー先輩にどんな顔して会えばいいのかわかんないよ
…
とりあえずコウタ隊長に風邪ひいちゃったことメールで伝えないと…

「…っ…頭も…痛いなあ」

なんとか起き上がってみると、予想してたより症状が悪かったみたいで立っているのがやっとの状態だった

「…メール…送信…っ」と

ターミナルの電子画面も、今の私にはチカチカと目に染みるように辛い

…これはラボラトリの病室に行ったほうがいいかも…

病室にいたヤエさんにやっぱり風邪だと診断されて、とりあえず薬をもらって戻ってきた

…彼女にはあの部屋で横になるように勧められたが、流石にただの風邪でそこまでお世話になるわけにもいかない

「…とりあえず、汗拭いて着替えて…あっ…薬飲む前に何か食べないと…」

コンコン!

「…!」

着ていた服を脱ぎ、寝間着に着替えようと汗を拭くためのタオルを手にとったところで自室の部屋をノックする音が聞こえた

…もしかして

『エリナ?…いるか?』

せ、先輩!

やっぱり!

来てくれたのはすごく嬉しいんだけど、今の私は下着姿なわけで…見えるはずはないとわかかっていても、思わずタオルで体を隠してしまった

『お前が風邪引いたってコウタに聞いてな…心配だから仕事行く前に見舞いに来たんだ』

「…っ／＼／＼」

とりあえずその辺に脱ぎ捨てちゃった服を、ソロリソロリと静かに拾い集めてたのだが…

どうやらこの行動は完全に仇になったらしい

うん。よく考えたら、ちゃんと今着替えてるってことを返事して伝えておけばよかったわけで…

『…エリナ？大丈夫なのか？…あれ？ロックがかかってない…まさか…！』

風邪で朦朧としていてロックをし忘れた部屋の扉を、私の身を案じる先輩が開けちゃうのは当然といえ…

バンツ！

「…え？」

「あつ…／＼／＼」

…そういえば立場は逆だったけど、けっこう前にまったく同じ場面を体験したような…

つて、そんな呑気なこと考えてる場合じゃない！

「ちよ、せ、先輩！そ、そんな…見ないでよ…／＼／＼」

風邪を患っていることも忘れて体を隠しながら後退すると、いろんな意味で熱を出している頭がクラクラした

「わ、悪いー！」

私の言葉で我に返った先輩が慌てて退室していく

『…着替え終わったら言ってくれ』

「…うん」

扉越しで声をかけてくる彼に、今度ははっきり返事をして改めて私は着替えを再開するのだった

…でも、そんなに慌てて出て行かなくても良かったのに…つて、ダメダメ！

何考えてるのよ私！

「先輩。着替え、終わったよ」

寝間着姿は何度も見られているので、いまさら恥ずかしくはない
：ホントは2人つきりになれるなら彼にいつの日か買ってもらった下着を着ようかとも思ったんだけど、流石に扉一枚挟んでいるとはいえ一瞬でも全裸になるのはちよつと恥ずかしい。

「…おう」

そつと部屋の扉を開いて中の様子を確認した先輩が、ベッドに座る私の姿を見て入室してきた

「あー…俺も悪かったし人のことは言えないけど、着替えるときは部屋のロックぐらいかけておこうぜ」

「う、うん…／＼／＼」

室内にある椅子に座り照れながらそう言う先輩の言葉に、改めて下着姿を見られちゃったという事実が私の頬を染めていく

「えつと…やっぱ昨日の夜更かしが原因じゃないのか？」

「たぶん…ごめん先輩。私がちやんと言うこと聞いてれば…」

「まあ、過ぎてしまったことは仕方ないさ。俺はお前が無事ならそれでいい」

真剣な表情でまっすぐこちらを見ながらそんなことを言う先輩に、胸が高鳴り始めちゃって…

ま、ますます熱が上がっちゃいそう…

「うん。今度から気をつけるよ」

「ああ。そうしてくれ…ところで薬とか、もらってるのか？」

あ

すっかり忘れてた

着替え終わったら何か食べて薬飲む予定だったんだ

「そうか。じゃー俺、お粥かなにか調達してくるよ」

「えっ…で、でも先輩仕事は…」

「平気平気。まだ出発するまで余裕はあるから」

それだけ言うと、私を安心させるように頭を軽く撫でて先輩は部屋を出て行ってしまった

「私、また迷惑かけてる…情けないなあ…はあ」

風邪の熱とはまた違う温もりが残る頭に手を置いて、私はそつと呟

いた

『エリナー、戻ってきたぞー』

「あ。はいーあいてま…ごほっ!」

しばらく横になりながらボツとしていたら戻ってきた先輩の声
が聞こえて、思わず叫んで上半身を起こしてしまい喉の痛みに咳が出
てしまう

「エリナ!」

慌てて入室してくる彼の姿を見て、安心させるべく咳を止めようと
するが全然効果がなくて

「ごほっ!せんぱ…ぐっ!」

「落ち着けて…な?」

持ってきてくれたお粥を机に置いてから、先輩が背中をさすつてく
れる

「…ご、ごめん…」

「謝るなよ、病人は無理しなくていいんだから」

落ち着きを取り戻した私の様子を確認すると、彼は改めてお粥を
持ってきてくれた

…卵粥かな?

いい匂いがする

「俺が作ろうとも思ったんだけど、慣れないこととしてまずいもの食べ
させるわけにもいかないからさ。ムツミちゃんに頼んだら作ってく
れたんだよ」

「なるほど…あとでお礼言わなきゃね」

よく見るとかつお節も入ってるみたいで、風邪にも効きそうだった
…流石ムツミちゃんだなあ

「結構熱いけど、自分で食えるか?」

「食べられないって言ったら…先輩が食べさせてくれるの?」

二人つきりだということと、風邪の熱にでも浮かされていたのかも
しれない

なんだかおもいつきり甘えたくなっちゃって、ついそんなことを言ってしまった

「おう。なんなら口移しでもいいぞ〜」

「…じゃー、お願い」

「…あ、あれ？流石に今のは冗談だったんだけど…」

あ…そうだったんだ

うん。やっぱり風邪のせいで頭がボーっとしてまともな判断ができてないのかな…

「……………／／／」

お互い妙に照れてしまって、気恥ずかしい空気になってしまった

「…あ…通信が…」

ピピピという電子音が聞こえて、先輩が携帯端末を取り出し画面を眺める

「わりの、そろそろ仕事行かないと」

「うん。分かった…行ってらっしゃい先輩」

「ああ、行ってくるよ。帰ってきたらまたお見舞い来るから」

お粥は自分で食べられるから平気だという旨を伝えると、先輩はゆっくり休んでおけとだけ言って任務に行ってしまった

「私も早く風邪治さないと…先輩に心配ばかりかけるわけにはいかないんだから…！」

…ムツミちゃんが作ってくれたおかゆは、咳で傷んだ喉にも優しく食べやすかった

治療

「んっ…／＼／＼せん…ぱい…あ」

先輩が仰向けに寝る私の首筋を舐める

背筋が甘い快樂でゾクツと震えた

「こら…病人は大人しくしてろって…」

髪を絡めとるように動く彼の指が心地よい

「でも…せんぱ…んっ…だ、ダメ…だよお…／＼／」

風邪の熱と先輩の体から伝わる熱で、頭がボツとしてくる

「エリナの風邪…俺が治してやるよ」

「こ、こんなことしてたら風邪治るどころか先輩にふうあ!？」

荒い息をつく私の口を、彼は勢いよく塞いできた

「じゃー俺に移して治してくれ」

「なっ…それは…あ…だ…めっ…!」

自分の言いたいことだけ言って、先輩は口付けを続け私に反論のスキを与えてくれない

…こ、こんなに密着されてキスされて…

私…我慢できなくなっちゃうよ…／＼／

風邪を引いてるから遠慮する…という理性が、どんどん溶かされていく

口内で絡め合う舌の音だけが静かに響く中、彼の手がそつと私の胸に添えられて…

…うう…もう…ダメっ…!

「どしたエリナ? 甘えたくなっちゃったか?」

「…っ…せ、先輩が悪いんだよ?…だから…責任…とってもらうんだから…／＼／」

もつともつと先輩を身近に感じていたくて…

上から覆いかぶさるように密着していた彼の首に両腕を回して抱き寄せた

「…後戻りは…できないぜ?」

私の服を脱がしていきながら先輩が低い声で囁くようにそう言う

のが聞こえて、期待と緊張感でゴクリと生唾を飲み込む

「…うん…いいよ」

先輩になら…私…

「…そっか、じゃー…いくぞ」

そしてとうとう彼が私の下着を…

「…はっ！」

そこで私の目は覚めた

「…え？なに…今の…まさか…夢!？」

う、うそでしょ!?

あんな夢見ちゃうなんて私何考えて…っ／／／
恥ずかしすぎて、思わず枕に顔を埋める

「…そもそも先輩がいつも中途半端にしかしてくれないのが悪いんじゃない!だからあんな夢見ちゃうんだから…そうよ!先輩が悪いのよ!」

拳句の果てに原因を先輩のせいにする私

…でも実際、私達結構長く付き合ってるけど、まだその…コトに及んでしまったことは実はない

もうちよつとで…というところでも先輩がやめちゃうんだよね…

…ヘタレなんだから

私は別に先輩ならいいのに…

もしかして未だに子供扱いされてるとか?

私にはまだ早いとか思われてたりして…

『エリナ。起きてるか?俺だ。仕事終わったから、また見舞いに来たぜ』

!!!

せ、先輩?

あわてて枕元に置いてある時計を見ると、もうとつくに日が沈んでる時間だった

「は、はい！今開けるね！」

今朝と比べて嘘のように楽になった体を起こし、部屋のロックをはずす

「おうーだいぶ元気そうになったなあ」

「あつ…う、うん…」

先輩の笑顔を見てたらさっきの夢を思い出しちゃって…

カツと頬が熱くなる

「…んー。でもまだちよつと顔が赤いかな？」

…それはタブン風邪のせいじゃないですけどね…

「あつ…」

熱を測ろうとしたのか

先輩の手が額に触れる

…汗かいちゃってたけど、ひんやりとしてとても気持ちよかつた

「…うん。もうちよい休めば完全に治りそうだな。じゃー俺、また風邪に効きそうなもの頼んでくるよ」

「あ…はい」

ポンポンといつものように頭をなでた後、先輩がクルリと出口の方に反転して…

何か思いついたように部屋を出る前にもう一声かけてきた

「そうだエリナ」

「？」

「今度さ、俺に料理教えてくれよ」

「え？」

唐突な提案にポカンと口を開く

「いや、こういうことになった時とかさ、やっぱり俺が作ってあげたいんだ」

「あつ…う、うん…わかった」

そっか…先輩そんなことまで考えてくれて…

「ありがと先輩…」

「エリナの手料理食べさせてもらったし、今度は俺の番ってな」

それだけ言うと、手をひらひらと振りながら彼は退室していった
先輩の手料理か…ふふ、楽しみだなあ

「今度はスープだぞー」

トレーに器用に載せて先輩が持ってきてくれたものは、生姜の香りがする風邪に効きそうなスープだった

ネギとかお豆腐とか、豚肉も入っている

具合が悪くても食べられそうかつ栄養がありそうなチョイスの具材だった

「おいしそー…ムツミちゃんにはホント感謝だね」

「ああ。俺からもお礼を言っておいたよ」

トレーごと私の近くにスープを置くと、先輩は椅子に座り何やら資料のようなものを取り出し始めた

「仕事の報告書、ここで書いてもいいか？」

「あ、うん。いいよ」

私が頷くと、彼は報告書のまとめ作業に入る

きつとあれを書くより優先して私のところまで来てくれたのだから
う

もちろんそれはとても嬉しいのだが…

…今度は、食べさせてあげる…とか、言わないんだ…
ちよつとさみしい

「…ねえ先輩。食べさせてくれるってさつき言ったじゃん？…今はダメなの？」

しばらく一人で黙々とスープを口に運んでいたが、つい聞いてしまった

「ん？だつてもうだいぶ元気そうだし、一人で食べるだろ？」

「…それは…むう…食べられるけどさあ…」

私が肉じゃが作った時はあくんどかしてくれたのに…

って、あれも発端は私か

「やれやれ。具合が悪いと人は甘えたくなくなるってのは本当みたいだ

な」

一旦報告書から視線を外しこちらを見る先輩に、私は頬をふくらませて不満を示す

「まあエリナの場合、二人っきりのときはどちらにせよスンゲー甘えてくるわけだけど」

「う、うるさい！…いいでしょ別に…先輩のこと、好きなんだから」
スープを飲んで照れをごまかしながらそっぽを向く私に、彼が小さく笑い声をあげた

「そうやって堂々と好きって言ってくれるのも、二人っきりのときだけだよな」

「…先輩もたまには言っつてよ」

「好きだぞエリナ」

「へっ!!?!…あ…う…!!ずるい!」

手玉に取られていると言うか、からかわれていると言うか…

悔しくて、でも嬉しくて…

私は笑いながら彼を睨みつける

「何がずるいのか、俺にはさっぱり♪」

「むく!!!いつか絶対あつと言わせてやるんだから…!!」

「へいへい。楽しみにしてるよ」

や、やつぱり悔しい!

「んじやー、薬も飲んだし、後は寝るだけだな」

先輩が私の食べ終えたスープの食器を再びトレーに乗せてそう言う

「その前に体拭かないと…汗かいちゃってるし」

寝てる間に汗をかくのは風邪をひいてる時は良いって言うけど、服がべたついて気持ち悪いしね

「えく。風邪引いてる時とか、俺だるくて寝たきりになるけどなあ」

「先輩と一緒にしないで!私は女の子なんですから!」

「おっとすまんすまん…じやー俺が拭いてやろうか?」

「なっ…！で、出てけ！変態！」

「あはは、冗談だつて。んじや、これ返してきたらもう一回くるから」
余裕の笑みつてやつだろうか？

ちよつと腹が立つ笑い方をしながら、彼は退室していった
今日はなんか先輩のペースに振り回されっぱなしだなあ…
…よし、ここで一つプランでも練つて…！

「んじや、おやすみエリナ」

本当にわざわざそれだけ言うために戻ってきてくれた先輩に、私は
先ほど考えた渾身の反撃案を実行に移すべく行動にでる

「…ねえ先輩…おやすみのキス…してよ」

「は？」

「…だから、おやすみのキス」

あつげにとられて固まる先輩に、改めて自分がどれだけ恥ずかしい
ことを言っているか自覚するが、ここで引く訳にはいかない！

「…つたく、しゃーねーなー」

きたー！

やれやれといった感じで薄ら笑いを浮かべながらベッドに寝る私
の元へ近づくと先輩を見ながら、内心シメシメと思つていた

そんな余裕を見せてられるのも今のうちだけなんだから！

「ほら、エリ「スキあり！」

顔を近づけてきた先輩の首に手を回し、ぐいっと抱き寄せる

「おっ！おい？！」

体勢が崩れているところに突然力が加われば、体格差が大きいとは
いえ逆らうのは難しいはず！

結果は狙ったとおり、彼は私のすぐそばに横たわることになった

「えへへ。せーんぱい♪」

「お、お前なあ…」

至近距離で見つめ合うと、先輩はわずかに頬を染めて視線を逸らす
「…だめだよ先輩。こっち見て」

「…はあ…風邪引いてるくせによくやるぜ」

ため息をついてもここから逃げる気はないのか、彼は特に抵抗してこない

「ねえ、私今日…先輩と一緒に寝たいな」

「…おいエリナ？」

流石にスルーするには意味深すぎる言葉だったのか

先輩の顔にわずかだか焦りが見えた

…ふふん…私を散々からかったこと、後悔させてあげる！

「いいでしょ？」

「お前そんな…せめて完治してからにしろよ」

う、うぐっ…正論

しかも真面目な顔で言われると、反抗しづらい

どうしよ…

「…えーつと…じゃ、じゃあ…ただ隣に居てくれるだけでいいからさ

…ダメ？」

「…ふう…わかったよ」

でもここまでできたらどうしても引きたくなくって、先輩に承認して

貰えそうなギリギリのラインに留める

「んじやー、これで俺に風邪が移ったらエリナが全力で看病してくれ

よな」

「うん！まっかせといてー！」

諦めて仰向けに寝る彼の腕に、ギュっとなら抱きついた

「…おい。隣にいるだけって言わなかったか？」

「えー？いるだけですよ？…あれ？もしかして、何か意識とかし

ちやってます？」

「…おやすみ」

「先輩?!そこは何か反論しようよ!」

結局その後、そそくさと寝てしまった先輩が、小さいいびきをかきはじめた

「…もっ…つままない」

彼の腕を握ったまま、私は一瞬先ほど見た夢を思い出す

…先輩があそこまでしてくれるのって、いったいどれだけ未来の話
なんだろ…

「…そんな簡単にできるわけないだろ…歯止め効かなくなりそうで怖
すぎるんだよ」

END

恋バナ

男性ver

ある日の夜。俺の部屋に数人の男が集まり談笑をしていた

具体的に言えばブラッド男性陣+コウタ、ソーマさん、リンドウさん、ハルさんだ

…さすがにこれだけいると部屋も狭く感じるな

「みんな…よく集まってくれた」

「ハルさん。ここ俺の部屋です。それこっちのセリフです」

突如男性陣をできるだけ集めて夜中に集合という謎の計画を立てたのは確かにこの人だけど、何故か集合場所は俺の部屋にされた理由は不明である

理由は不明である

「まあまあ細かいことは置いとこうじゃないの。なあ〜ギル」

「…なんで俺まで」

ギルはあまり乗り気ではないような表情を見せていた

…概ね、ハルさんに無理やり誘われたんだろう

「いやいや。俺はそれよりソーマまで来てくれたことに驚きだよ」

「…たまにはこういうのも悪くない」

「…お前ほんと変わったなあ〜」

まるで自分の部屋であるかの様に椅子に堂々と座つてくつろぐコウタと、壁に腕を組んで寄りかかるソーマさんの会話が聞こえた

「ところで、今日はなぜこんな夜中に集まったんですか？詳しい話は現地ですと聞いていますが？」

「俺もそれは気になるな〜」

ジュリウスとロミオ先輩が尋ねると、ハルさんはニンマリとしながら部屋の中にいる男性陣を見渡して一言

「ずばり！恋バナだ…」

「……………」

…恋バナ…だど？

「ほうほう〜…それを隊長やリンドウさんもいるこの場でやるってい

うんですか?」

ロミオ先輩が何故か無駄にやる気マックスの笑顔でハルさんの言葉に食いついた

「そういうことよお。おたくら二人なら、たくさんいい話…できるよな?」

「あく…ま、そういう話になるとは思ってたけどな俺は」

リンドウさんが冷蔵庫を開けながら興味なさそうに言う

…てゆうかあなたは何を探してるんですか?

いや、多分ビールなんでしようけどありませんからね?

あと人の部屋を勝手に捜索しないでください

某RPGゲームの主人公じゃあるまいし…

「お?ウマそうなチョコがあるぞ」

「うわあ!やめてくださいリンドウさん!それはエリナに…」

俺がエリナの名前を出した途端、一斉に部屋中の視線がこちらに集まった

「おつとつと。こいつはすまん。大事な恋人からの贈り物に手なんか出したら大変だ」

悪気はないんだろうけど彼の言葉に反応して、更に視線が痛く感じる

…くっ!なんで俺にばっかり…!

リンドウさんなんて結婚済みで子持ちなんですから、この人に集中させましょうよ話を!

…という心の叫びが届いてくれた仲間は残念ながらおらず…

「ねえブラッドの皆、俺、コイツを第一部隊に引き入れたいんだけどダメかな?…エリナのために!」

「…ふっ、これは検討せざるを得ないな。隊長」

「そうだぜそうだぜ!エリナちゃんのためにも!」

「ははっ。俺は別に構わないぜ?」

コウタがからかう気まんまんと言い出した言葉に、ブラッドの男性陣が次々に便乗していく

なんだこれは!?

こんなの恋バナじゃねえ！

ただのイジリじゃねーか！

「う、うるせー！俺の話はもういいだろ！てゆうか、俺とエリナの仲なんて周知の事実じゃねーか！俺達がいともイチャイチャしてるのなんかみんな知ってたんだろ!?他に…他にいないのか誰か…!」

「さりげなく自慢を混ぜてきたね…」

「これだからリア充は…ちくしょう爆発しちゃえ」

コウタとロミオ先輩がヒソヒソと何か言っているが知らん！

エリナが可愛すぎるのがいけないんだ！

俺は悪くねえ！

「…そういえばコウタ。お前、妹離れはもうできたのか?」

俺の悲惨な様子を見かねたのか、ソーマさんが助け舟を出してくれた

うおおおおお!!!

流石ですソーマさん！

どうやらこの場にいる俺の味方はあなただけのように!

「ノ、ノゾミは別枠だっつーの…ハッ!ソーマ…お前まさか俺の妹を…!」

「ちがう。変な勘違いをするな」

そーいやコウタには妹がいたっけ?

俺も彼の家にお呼ばれたことがあるから知ってるけど、お兄ちゃん大好きっ子って感じだったな

それにしても、変な返しをくらっても冷静でいられるソーマさんはやはり大人だ

「コウタさん…妹狙い…ですか?…さすがっすね!」

「だから違うって言ってたんだろ!?ノゾミは別なの!」

必死でロミオ先輩からの誤解を解こうとしているコウタの姿を見て、ああ、俺も数秒前はあんな感じだったんだなとしみじみ思った

「おーおーいい感じに盛り上がってきたなあ。ギル?」

「…いちいち俺に話を振るのやめてくださいよハルさん」

「それでごまかしてるつもりか?お前、リツカちゃんとはどのくら

い進展したんだよ」

お？

何やら興味をひかれる話題……！

未だにガミガミ言い合ってるコウタ達は放っておいて、とりあえずハルさん達の話に集中する

「別に……彼女とはそういう関係じゃないですよ。ただ神機のチューニングの件で馬があうだけで……」

ああ確かに……

昔俺も神機を見てもらったことがあったけど、ギルとリツカは結構一緒にいるのを見たな

「あんれえ〜？でもこのあいだリツカちゃんがお前と二人で買い物行って嬉しそうにしてたって聞いたぜ？」

「っ!?どこからそんな情報を……」

「へえ〜……ギル〜……俺とエリナの仲を散々からかっておいて、自分もちゃっかりしてるじゃねーか」

ここぞとばかりに反撃に出る俺を見て、しまったとでも言いたげに彼は悔しげな表情を浮かべた

「あれは……リツカさんが新しい道具がいるっていうから、そのついでに俺も買おうっていう流れになっただけで」

「そうかそうか。俺は嬉しいぞギル」

「話を聞いてください！」

珍しく慌てた様子を見せるギル

……ほつといてもハルさんがいじりまくりそうだし、とりあえず違う人の話を聞いてみようかな……

「……えつと、ソーマさんは気になる女性とかいないんですか？」

実はこの人のそういう事情はけっこう気になっていた

……さきほど助けてもらったのに、こちらから話を振るのはちよつと後ろめたかったが

「俺は……」

天井を見上げながら、彼は薄ら笑いを浮かべる

「今はいない」

「今は…？」

…そういえばソーマさんってたまに月をじっと見てることあるよな？

確か初めてこの人に会った時、ラケルがお相手に月まで逃げられた…とかなんとか言ってたような…？

あの時は意味わかんなかったけど、俺も極東に来てからアーク計画やエイジスの事件についてはひと通り勉強している

…その際女性の人型アラガミの協力で、終末捕食が月で行われたことも…

…そのアラガミの名前もコウタに聞いたな

確か…

「シオ…」

「なんだ。知っていたのか」

思わず言葉に出してしまい、慌てて口を閉じる

「別に遠慮する必要はない」

「え…で、でも」

「俺は今でも…アイツともう一度会えると信じている」

う、うわあ…カッコイイ…

なんだこの人めちやくちやカッコイイぞ

「…そうだ。さっきのは失言だったな。『今はいない』じゃない。『今もいる』だ」

「…俺、そのシオって子に会ったことないですけど、ソーマさんみたいな人にそれだけ想われてるなんてスンゲー幸せだと思います」

「ふん…エリナには負けるだろうよ」

「っ!?…いい、言いますね…」

あはは…

この人にはいろんな意味でまだまだ敵いそうにないな…

女性ver

ある日の夜。

何故かカノンさんがブラッドの女性陣＋アリサさんといういつかのシチューチームを率いて、私の部屋に訪れてきた

「こ、こんばんわく…」

「…?こんな夜中にどうしました?」

とりあえず部屋に入ってもらって、事情を聞いてみる

「え、え〜つと…たまには女の子だけでお話とかしませんか?」

「は、はあく…」

急にどうしたんだろ…?

何故か視線を合わせてくれようとしないうし、いつものカノンさんらしくない…

「はーい!エリナちゃんにいつもーん!」

「え!?!」

「うちの隊長の事はいつから好きになったの?」

「ぶっ!」

い、いきなり何を聞いてるんですかナナさん!?

「まあ待てナナ。まずは順を追って説明をしよう」

コホンと一つ咳払いしながらリヴィさんが解説してくれたことをまとめると、ざつとこんな感じ

・ ハルオミ隊長が男性陣を集めて恋バナをするという計画を立案し、今夜実行している

・ 第四部隊隊長命令だとか理不尽な事を言っ、女性陣の方でも同じような話をするようにカノンさんは彼に言われた

・ 今に至る

……

そっか…先輩今夜はハルさんとの先約があるから一緒にいれな
いって言ってたし…

これがその先約だったんだ…

「つまり全部ハルさんのせいなんです!ごめんなさい!」

カノンさんが私達に頭を下げる

どうりで彼女がソワソワしていたわけだ

「え〜。でも私はエリナちゃんやんと隊長の話気になるよ〜?」

「…なんだか『エリナちゃん達の話しかしないよ!』って言ってるように聞こえるんですけど、流石に気のせいですよね…?」

「私としてはアリサさんのお話も…」

「えっ!?わ、私…ですか?」

シエルさんの視線を感じて、アリサさんが慌て始めた

ほっ…

彼女には悪いけどちょっと安心

とりあえず立ち話も難なので、全員ソファの方案内して座ってもらった

「え、えっと…しばらく彼とは…直接会っていないので…」

アリサさんが言う彼とは、コウタ隊長の前に第一部隊の隊長を務めていた人物である

この中で直接会ったことがあるのは彼女本人とカノンさんだけ…かな?

もしかしたら私もちっちゃい時会ったことがあるかもしれないけど、正直あんまり覚えていない

「でも、メールとかのやりとりはしてるんですよ?」

「あ、はい。こないだも夕飯に何食べた〜とか、お風呂は何時にはいった〜とか…いろいろ話はできてますね♪」

…え?

「それから出先の写真が送られてきたり、仕事でも励ましのメールが来たりして…すごい元気を分けてもらってるんですよ!」

楽しげに語るアリサさんの話の内容は、ちょっと聞いてるこっちが恥ずかしくなるようなことばかりで…

『お前の側には俺がいつでもついてる』…なんて電話をくれた時なんかキョンとしちゃって…あ、そうだ。昨日はもし子供ができたら名前は何にするかって話を…」

「ス、ストップストップ!も、もうお腹いっぱい…」

ナナさんが両手を上げてギプアップサインを送ると、当のアリサさんはきよとんとして私達を見回す

「あれ？もういいんですか？これからが面白いところなんですけど…」

「…ア、アリサさんも、エリナちゃんに負けず劣らず…といった感じですよね…」

カノンさんが乾いた笑い声を上げながらこちらを見てきた

…って、え!?

私も周りからはこのレベルでイチヤイチャしてるって思われてるの!?

さ、流石にアリサさんの話はちよつと予想外だったんだけど…

「じゃーエリナちゃんは、普段彼とどういう話とかしてるんですか？」

自分がしゃべっているうちに勢いに乗ってきてしまったのか、アリサさんがにこやかに尋ねてきた

…で、でもそんなこと急に言われてもなあ…

「えーつと…いろんな事話しますけど…」

「ふむ…具体的には？」

「…今日のご飯は何食べたい？…とか…あつ、でも大抵先輩は『お前が食べたい』とかふざけたこと言うので、無視しちゃいますけどね」

「……………」

…あ、あれ？

場が静まり返るこの感覚…

私また変なコト言っちゃった!?

「…すまない。誰か、何か苦い食べ物を持っていないか？飲み物でもいい」

「…えつと、ガムならあるよ？辛いやつだけど…」

「頼む。私に分けてくれ」

「ナナ。私にもください」

「あの…もし余るようでしたら私にも…」

ブラッドの女性陣とカノンさんが顔を真っ赤にしながら揃ってガムを口にする中、アリサさんだけがこちらを羨ましそうに見てきて

「いいなく…私も久しぶりに一緒に食事したい…」

「そ、そうですか？でも先輩なんていざ食事って時になると、食べるのに夢中になっちゃってこつちから行動起こさないとちつとも相手してくれないですよ？」

「あゝ…それはこつちも同じかも…」

「で、自分だけ先に食べ終わって、仕方ないからこつちが今からゆつくり食べようって時に無駄に構ってくるんですよ…」

「そうそうー！そうなんですよね！」

アリサさんとお互いの交際相手の話で盛り上がる

うくん！やっぱりこういうこと話せる相手がいるといいなあゝ

その後もあーだこーだと会話を続ける私達の様子を見て、完全に蚊帳の外になっちゃった残りのメンバー同士がぼそぼそと話し合う

「…シエルちゃん。私、彼氏とか作れる自信なくなってきたかも…」

「…私も…です…」

「彼女たちの話している内容を、自分達が体験しているところ…想像するだけで…は、恥ずかしいな…」

「私だったら…照れ隠しで思わず引き金を引いてしまうかもしれない…」

「！！！！！！」

話に夢中になっちゃってたら、カノンさんが彼女が言うにはあまりにもシャレにならないことをつぶやくのが聞こえた

その威力は今の今まで熱中していた私とアリサさんですら、驚いて会話をやめてしまったぐらいである

「…え、えつと…リヴィちゃんはさ。ロミオ先輩とか…どうなの？」

部屋の空気が心なしか冷えてしまって、ナナさんがなんとか話を続けようと話題を振った

「私か？…ロミオとは確かに昔なじみだが、別にそういう感情は…」

「え〜？ホント？でも前に聞いた話だと、ロミオ先輩にすごい感謝してたみたいだし…」

「そ、それはっ…！そ、そういうナナこそどうなんだ？聞けば彼とはよく一緒に任務に行くそうじゃないか」

「だってロミオ先輩の動き面白いからさあ〜♪」

ナナさんはリヴィイさんとの会話を上手く成り立たせ、空気の回復を見事に成し遂げていた

：彼女のこういうムードメーカー的な立ち回りはホントにすごいと思う

ナナさんみたいに明るくて元気で前向きな女の子が好きなの人多そうだし

「あつーそうだ！昔なじみと言えば、シエルちゃん。ジュリウスとは何もないの？」

「ジュリウスは…守るべき人間としてしか見ていませんでしたから…」

「…でもその『守るべき人間』ってセリフ…けっこう意味深な感じにも捉えられますよね〜」

「っ!?か、からかわないでくださいエリナさん！」

私の話はさつきアリスさんとたくさんしちゃったから、今度は別の人の話題に入り込もうと思つてシエルさんに声をかけると、彼女は珍しく慌てた様子で頭をプルプルと振つた

「…皆さん私より若いのに、たくさん話題になるようなことがあつて羨ましいです…」

「あつ…え、え〜つと…カ、カノンさんだって、防衛班の人とかと何もありませんか？」

「…最近タツミさん達と会う機会すらなくて…」

「そ、そう…ですか…」

一人でしょんぼりと肩をすくめるカノンさんをアリスさんが励まそうとしていたが、どうやらあまりうまくいかなかつたようで…

ハルオミ隊長に無理やり企画の指揮をやらされた挙句、この有り様は流石に可哀想だ

「大丈夫ですよカノンさん！私だって、先輩と会うまではそういう経験なんて一切ありませんでしたから！カノンさんみたいな人なら、きっと誰かいい人が見つかります！」

「そ、そうでしょうか…?でも、ありがとございます。気持ちはとつ

でも嬉しいです！エリナちゃん！」

おおー…という小さな歓声が聞こえてくる中、カノンさんが私に笑顔でお礼を言ってくれた

よかった…とりあえず元気は取り戻してくれたみたい

「恋は女性を成長させる…と言いますが…なるほど」

「エリナちゃんおつとなー！」

「流石、恋愛の先輩は言うことが違うな…」

「エリナちゃん料理も上手ですし、私尊敬します！」

そ、そんなに褒められると、ちよつと照れくさいな…

「じゃー原点回帰ってことで！そんなエリナちゃんにもう一度最初のしつもんー！」

……え？

「うちの隊長の事はいつから好きになったの？」

あれ？

なんか皆の視線がすごいキラキラしてこっちに集中してる…

…これってまさか、私の話を聞くために最初から仕組まれてた…とかじゃないよね？

…違うよね!?

結局この後、私は先輩との恋愛事情を事細かに質問攻めにされて夜がふけていったのだった…

恋人ver

「おやすみなさいエリナちゃんー！また、お話しましょうね！」

「お、おやすみなさい…」

質問攻めが全く終わる気配がなかったので、あまり夜更かしして来た風邪でも引いたら先輩に怒られちゃうという話をしたら、アリサさん達は素直に引き下がってくれた

…全員意味深な笑顔を最後に浮かべていたけど

「はあ…疲れた…」

ベッドにぐったりと横たわりながら、先ほどまで話題に出していた彼の事を思い浮かべる

…もう…いっぱい話してたら会いたくなってきたじゃない

…

「先輩たちの方も、もう話終わってるよね」

時計を確認してみれば、既に他人の部屋に訪問するには非常識な時間になっていた

「けど、私達他人じゃないし！怒られたらそれはそれで、おやすみだけでも言っただけ帰ってこよ」

先輩の声を聞きたい気持ちと顔を見たい欲求を我慢できず、私はそっと起き上がって部屋を後にするのだった

「やっと終わったか…」

最後に満足気な表情で退室していったハルさんを見送って、俺はソファーに腰をおろした

…なんだかんだ言っただけ、俺とエリナの話が8割を占めた恋バナも幕を閉じたのだが…

流石に疲れたぞ…

「エリナのやつ。今頃もう寝ちまってんだろなあ」

そーいや今日も夜誘われてたな

ハルさんのが先だったからやむなく断ってしまったのだが…

「ねえ先輩！今日も…いい？」

「すまんエリナ。今日はちよつと無理なんだ」

仕事を彼女と無事に終えて二人でラウンジで話していた時に、『いつもの』を俺は頼まれた

…もちろん夜中におしやべりするという意味だ

それ以上の変な意味は無いはず…なのだが…まあ、最近は多分という言葉を付け足さざるをえない

エリナが本気を出したら…って、話がそれっちゃった

「えっ!? どうしてよ!?…も、もしかして、毎日しつこかった？」

「いやいやいや！俺だって毎日毎晩エリナとは二人で話したいし、それ以上のこともしたいけど…」

「なっ…／＼／＼…じゃ、じゃーなおさらなんでよ？」

「おっと。流石にこの程度では突っ込まなくなってきたか」

「う、うるさい！誤魔化すな！」

「まあそう怒るなって…ハルさんとの先約が入ってるんだよ」

「あっ…そ、そうなんだ…私の事嫌いになっちゃったのかと思ったじゃない…」

「バカヤロー。そんなことは絶対ありえねえって」

「…ホントに？」

「絶対に絶対に絶対にだ。お前が俺を嫌いになるのと同じぐらいありえない…と、思うぜ？」

「そっか…うん！じゃー絶対ありえないね♪」

「だろ？」

…うん

今改めて思い返すとスнгеー恥ずかしい会話してないか俺たち？

これ実際あの場にいるときはなんともなかったけどさ…

やっぱりエリナが側にいると、俺はまともな思考回路が閉ざされちゃうみたいだな

もちろん、悪い意味じゃなくて

「でも…私が今夜も誘うことぐらいわかってたでしょ？…わがまま言ってるのはわかかってるけどさ…夜中は予定あけてくれてると…う、嬉しいな…／＼／」

真つ赤な顔して上目遣いでそんな事言われたら、俺には彼女の要求を飲み込むという選択肢しかないわけで

「分かった！今度からは絶対エリナ最優先で予定組むよ！」

「う、うん！ありがと」

お礼を言っただけ嬉しそうな笑顔を見せるエリナと、その時の俺は人目のあるラウンジだということも忘れて至近距離で見つめ合っていたのだった

「…ダメだな。会いたくなってきた」

もういちどアイツの笑顔を見てから眠りにつきたいもんだ

「ははっ。俺もいよいよ病気レベルだぞこれは」

あつ

これが恋の病ってやつか

…なんつってな

「もう夜も遅いし、寝てたら仕方ないさ。起きてたらちよつと顔見ても帰ってくりゃいいんだ」

改めてエリナの部屋に訪問する決意を固めてから、俺が自室を出ようとしたその時

コンコン…

「あれ？誰か忘れ物でもしたのかな？」

控えめなノック音が聞こえて、俺は先程の恋バナメンツの誰かが戻ってきたのかと思ったのだが…

『せ、先輩…起きてる？』

!?

エ、エリナ!?

「お、おう！起きてるぜ！今行く！」

慌てて部屋の入り口を開けると、頭を掻きながら照れ笑いをしてい

る最愛の彼女の姿があつて

「えへへ…来ちやっただよ」

「エリナ。お前は俺を悶え死にさせるつもりか？」

そのかわいいい仕草とセリフを続けられたら冗談じゃなくそうなつてしまひそうだ

「えっ？」

「い、いや、なんでもない…それより、どうしたこんな深夜に？今日は先約があるって言ったのに」

とりあえず部屋の中に入ってもらうと、エリナはいつもどおり俺のベッドに腰掛けた

「そういやそこは、彼女が俺の部屋で一番お気に入りの特等席だつて言つてたっけ…」

「…えつと…ダメ…だつた？」

「いんや。もう用事終わったし、俺もエリナに会いに行こうと思つてたから別に構わないんだけどさ」

「あつ、そうだったんだ…嬉しいな…」

手を組んでモジモジしながらそう言つて微笑むエリナの隣に俺が座ると、彼女はコツンと肩に頭をあずけてきた

…うん、やつぱりコイツの隣は心地いいというか温かいというか…

「…先輩達、恋バナしてたんでしょ？」

「えっ!? な、なんで知つてんだ!？」

彼女の説明によると、どうやらカノンがハルさんの策略により女性陣側でも恋バナを展開していたようだ…

最初に彼女からハルさんの計画を聞いたらしいので、男性陣側でも今夜同じような話をしていふことは知つていたみたいだ

「先輩は、どんな話したの？」

「もちろんエリナとの話に決まつてんだろ？」

「だよー…私もね、先輩との話、たくさんしたよ！」

…やばい

可愛すぎるぞコイツめ…!

とりあえず深呼吸

そして落ち着け…落ち着くんだ…

静まれ俺の中の獣よ…!

「ここはベッドの上だとかそんな余計なことは考えるんじゃない!

「先輩?」

「あつ…な、なんでもないんだ…なんでも…」

「…もしかして、私の事『食べたい』とか思ってる?」

「はい!」

小さく笑いながらこちらの顔を覗きこんで、そつと胸に手を添えてくる彼女の質問に動揺し思わず声が裏返ってしまった

「先輩よく言うもんね…私の事食べたいって…今日皆に話しちゃった」
♪

ラウンジの時とは違い、潤いを帯びた色っぽい上目遣いでこちらに期待気な眼差しを送るエリナを見て、まだ理性を保っていられる自分を俺は褒め称えたい

「…きよ、今日はもう遅いから…ま、また今度な…」

「ぶつ…声震えてるよ?」

ああくっそ…

いつからエリナはこんなに大人になっちゃったんだ?

俺が言い負かされるなんて…

「…まいった。こうなんだ。だからこれ以上からかうのはやめてくれ…ほんとにそろそろ我慢できなくなってくる」

「はーい!また風邪引いたら迷惑かけちゃうもんね。ごめんなさい」
♪

謝りつつもいい笑顔で俺の頬を指先で突くと、彼女は添えていた手を離してくれた

「それじゃーもう満足しただろ?…いい子だからエリナは部屋に帰りなさい」

「む!まーたそんな子供みたいな扱いしてさ…満足してないのは先輩のソコでしょ?」

「こ、こら!女の子がそんなところ指さすんじゃない!」

ガバツ!

「きゃあー…あ」

いつまで経っても隣を離れない彼女を仕方なくお姫様抱っこで抱えて部屋の出口まで運んでいく

「これも久しぶり…だね」

「そうだな。お前は軽くて楽だから、これくらいやってほしかったらいつでもやってやるよ」

「…女の子に体重の話は厳禁ですよ」

「はいはい。悪いなお姫様」

「もう。またそうやって…」

もごもごと不満気に頬を膨らませながら何かつぶやくエリナを部屋の外に立たせると、キュっとな手を握られた

「…おやすみ、先輩」

「おう。おやすみ」

「……………」

「……………」

…なんだ？

なんでそんなじつと俺の顔を見つめて…

「にぶちんなんだから…ちよつと屈んで」

「…？あ、ああ…」

チュツ…

「っ!？」

「ふふっ…おやすみのキス！今度こそできたね！」

自身の意思というよりも、半ば強制的に手を引かれて屈ませられた俺の唇に、柔らかいものが押し付けられた感覚がして…

…うん。俺はいままでよく頑張ったと思うよ

だからそろそろ我慢の限界が来てもいいよな？

…とゆうかきた

もう無理

「エリナ…お前が悪いんだぞ」

「…え？」

ガバツと彼女の腕を取りもう一度部屋に引き入れそのままベッド

に押し倒した

「きゃあ！……せ、先輩ちよつと……／＼／＼」

「安心しろ。明日の仕事に響かない程度には早く終わらせてやる」

舌なめずりして迫る俺に流石に予想外だったのか、エリナは緊張の表情を浮かべている

しかし、そんな表情を浮かべながらも震える声で言い放った彼女の次の言葉に俺はもう完全に我を忘れてしまうのだった

「あ、あの……優しくしてほしい……な……／＼／＼」

END

アナザーワールド 来訪者

「…これはどういうことだ…?」

ある日の朝

不意に人の気配を感じて俺は普段よりもかなり早く目が覚めた

まて…落ち着こうか

まずは状況把握だ

俺は仰向けで自分のベッドに横たわっている

そして左腕に温かい人肌

うん。ここまではおかしくないんだ

昨夜押しかけてきたエリナが隣で寝てしまったところまでは覚え
ている

だからこっちの温もりは彼女のもので間違いない

可愛い寝息も聞こえるし

…だが、この右側の感触は何だ…?

明らかに人肌だが、俺はエリナ以外の人と一緒に寝たことなんて断
じてない

…正直かなりこわいのだが、これは確かめないとちょっとこわい

おそるおそる首を右に傾けると、サラサラとした髪のようなものが
首筋をなでた

こ、これで目を見開いた女の人の顔とかあつたら、コウタ達に極東
怪談話として話してやる!

…そういう冗談でも考えていなければ悲鳴を上げそうにまでなる

だがいつまでもノロノロしてたら余計こわさが増すだけだ…

俺は意を決して、一気に右側へと振り向いた

……………?

「エリ…ナ?」

右腕に抱きつきながらスヤスヤと眠っていたのは、どう見てもエリ
ナだった

…え？でもなんで右側に…

俺の勘違いかと思つて急いで左側も確認してみると…

「すう…すう…むにゃ…せんぱい…ふふっ…」

ニコニコと小さく口を開けたエリナが幸せそうに俺の理性をガリガリ削る寝言をつぶやいていたわけで…

「エリナが…ふ、二人!？」

ど、どうということだあああああ!?

あまりの動揺に体をはね起こしてしまい、両サイドで眠っていた二人がその衝撃で目を覚ましてしまった

「ふあ!?!せ、先輩!?!どうしたの?！」

まず最初に声をかけてきたのは、俺の記憶にあつた左側で寝ていた方のエリナ

「どう見ても俺のエリナ…だよな」

「えっ!?!っ…ちよ…／／／」

そつと頬に手を伸ばして触れると、カッと赤くなつてるそこから熱が伝わってきた

うん

この反応、表情、視線

間違いない

「それじゃー君はいつたい…?！」

振り返つてエリナ(?)を見る

容姿は…ホント、この俺から見ても彼女に瓜二つだが、表情はポカンとしていてなにやら状況が把握できていないようだった

まあ、それは俺も同じなんだけどな

「えつと…おはよう、お姉ちゃん。お兄ちゃん」

……………はい?

「エリナ。お前妹いたのか?！」

「えっ!?!いい、いないよ!…つてわっ!私かもう一人!?!」

あ、今気づいた

「???…どうしたのお姉ちゃん?！」

待て待て待て!

なんだこれは！

どういうことなんだ!?

さっぱりわからん！

誰か状況の説明を求めろ！

「私、昨日お兄ちゃんの部屋で寝た記憶がないんだけど、どういうことなんだろ…?」

『どういうことなんだろ』はこっちのセリフだ！

「…よし、とりあえず全員起きよう」

こんがらがった頭を整理するべくベッドから降りる

そのまま冷蔵庫から冷えた麦茶を取り出し一口

「えっと…あなたは誰…なの?」

その間にエリナがもう一人のそっくりさんに質問する

「?…誰って…エリナお姉ちゃんの妹だよ!」

シヨックを受けたような顔で自称エリナの妹が俺達を交互に見て

…

「…もしかして、私の事忘れちゃったの…?」

「いや…忘れるも何も、俺は最初から知らないんだが…」

エリナに視線を合わせて合図を送ってみるが、やはり彼女も身に覚えがないようで

「ひどい…冗談にしても笑えないよ!」

瞳をうるませた妹を名乗る少女が、涙を流して嗚咽しながらそれを拭き取る

うわ…見た目がホントにエリナそっくりな分、すごい胸が痛む

「わ、悪かったって!だから泣くな…っ!」

涙を拭いてる彼女の右腕を見た瞬間

俺はその場で固まってしまった

それはどうやらエリナの方も同じようで、ある一点を凝視している
そう、彼女の右腕に装着されている黒い腕輪に…

「…ブラッドの…第三世代神機使いの腕輪…!」

「へっ…?」

俺の言葉に例の少女がポカンとして

「…お兄ちゃん達だつてブラッドじゃない」
達!？」

「…あれ?お姉ちゃんなんで赤い腕輪つけてるの?」
まずい

本格的にわけがわからん

これは俺達だけでどうにか出来る問題じゃないぞ!

「エリナ。急いでサカキ支部長のところに行くぞ」

「あ、う、うん!」

「それから…えつと君名前は?」

「…アリナ。アリナ・デアールフォーゲルヴァイデだよ!…ひどいよ
お兄ちゃん」

また涙声になつてしまった彼女には申し訳ないが、今は覚えてるか
覚えてないかとかそういう問題じゃない

名前までエリナそっくりだとか、そもそもファミリーネームほんと
に一緒じゃねーかとかそんな事に突っ込んでるヒマもないのだ

「よし!じゃアリナ。君もいろいろ言いたいことがあるだろうけど、
とりあえず俺達と一緒に来てくれ」

「……………」

返事はしてなかったが、渋々といった感じで頷く彼女とエリナの
手をそれぞれ取つて、俺はサカキさんの元へと向かうのだった

「まずは決定的なことから言わせてもらおう」

早朝から申し訳なかったのだが、サカキさんは支部長室ではなく研
究室の方に来てくれた

そのままアリナのメデイカルチェックをしてもらったのだが

「彼女…アリナといったね?うん。間違いなくゴツドイーターだ。体
内から第三世代神機使いの偏食因子が確認されているからね。つま
り、その腕輪も本物ということになる」

「当たり前ですよ!私はもうずっと前からお姉ちゃん達と戦っていた
んですから!」

頬を膨らませたアリナが、小声でなんで今さらとかなんとかぶつぶつ俺の隣で文句を言ってるのが聞こえる

「ふむ…そしてもう一つ。彼女はDNAの構造から見ても完全にエリナちゃんの身内で間違いないんだ…おそらく、一卵性双生児の双子…だね?」

「……そうですよ」

双子!?

確かにものすごいそっくりだとは思っていたが…

俺はいままでアリナに会ったことすらなかったし、当のエリナですら知ってる様子もなかったのに

「サカキさんは知ってたんですか…?」

「いいや。私も知らなかったよ。それから申し訳ないけど、『アリナ・デアーフオーゲルヴァイデ』という神機使いのデータは一切見つかっていない…現状だけだね」

ものすごい速さで今もノルンのデータベースを確認してくれている彼がそういうのだ

じゃーやつぱり…

「そんな…どういふことなんですか!」

流石に俺たちの会話が冗談ではないことに勘づいてきたのか、アリナが顔を真っ青にしてサカキさんにつめよる

…そりゃ、身内や知り合いだと思ってた人から急に存在を忘れられたり、自分のデータが全部消えてるなんてことになったらショックどころではないだろう

「…これはあくまで仮説なんだけど…彼女は違う世界から来てしまったんじゃないかと思うんだ。原因はさっぱりわからないけどね」

「違う世界?…サカキ支部長本気ですか?漫画やアニメの世界じゃないんですよ?」

エリナが胡散臭そうな視線を向けても、サカキさんはニコリとした表情を崩さない

「以前この極東支部でソーマとアリサ。それからリンドウくんの3人のビーコン反応が任務中に突然消失してしまったことがあってね。

有力な3人もの神機使いが原因不明の行方不明になって当時の極東はそりやーもう大騒ぎだったんだ。リンドウくんは2回目だしね」

なにやら昔話を始めてしまったサカキさんだが、きつと今の状況に関係があるのだろうかと思つて余計な口出しはしないことにした

「でもそんな私達の心配をよそに、3人はしばらくしてから無事戻つてきてくれたんだ。」

データベースを検索する手を止めた彼が、ふうっと一度息をつく

「そしてここからが本題：彼らが行方不明になつて間の話を聞いたんだが、それがもうとても信じられないような話でね。生身のままたラガミを殴り飛ばしたりする人。明らかに魔法といえるレベルで炎や雷を出す人。神機以上に複雑な武器を扱う人：とにかくいろいろな人と知り合つたみたいだよ」

：確かに、一概には信じられない話だな

「そんな話を聞いて私は確信したんだ：今いるこの場所以外に様々な世界があるんじゃないかということを」

「：じやー私は、こことよく似た別の世界から何らかの要因で来てしまった：ということなんですか？」

幾分か落ち着きを取り戻したらしいアリナが尋ねると、サカキさんが首を縦に振つて肯定する

「まず間違いないと思うよ。さつきも言ったけどDNA構成からして、君の元いた世界にも我々と全く同じ人間がいる可能性が極めて高いからね：そっちのエリナちゃんやブラッドの一員だとか細かい違いはあるようだけれど」

「そう：ですか…」

がつくりと肩を落とす彼女を見て、なんだかものすごく気の毒になつてきた

自分がもし同じ立場でエリナに存在を忘れられでもしていたら：？

考えるのも嫌だな

「サカキさん。こちらに来れたつてことは、向こうに戻る可能性もあるつてことですよね？」

「もちろんだとも。方法を調べるのに若干時間がかかるだろうが、必ず成し遂げてみせるよ」

「よし！じゃー俺たちに来ることあったら、是非声かけてください！」

「任せてくれ。それに、この件は極東支部だけのヒミツにしたほうがいいからね。早急に各部隊長にメールで連絡を送ることにするよ」

メールを起動して再び目にも留まらぬ早さで手を動かすサカキさん

そんな彼と俺達を不安げに見つめるアリナに、元気づけてやろうと声をかける

「安心しろアリナ。必ず俺達が元の世界に帰してやるからな」

「…ありがと、やっぱりお兄ちゃんはこのちでも優しいね♪」

笑った顔までエリナにそっくりで、不覚にもちよつとドキドキしてしまった

…ふむ。それにしてもお兄ちゃんという響きも中々…声も瓜二つだし

ギユウウウウ!!!

「いだだだだだ!!!」

「先輩…?」

ああ!

もちろんエリナが一番だよん!

その冷たい笑顔も最高です!

だから脇腹をつねるのはやめていただけなんでしょうkいたたたた!!!

「アリナ…って呼び捨てでいいよね?私のことも、お姉ちゃんとして頼ってくれていいからね!」

「う、うん!…じゃー…こっちもお姉ちゃんでもいいよね?」

「もちろん!私、実は妹って欲しかったんだよね!」

ワイワイとガールズトークに花を咲かせながらも手は離してくれないエリナと少し元気が戻ってきたアリナを見て、俺はまた一騒動起こりそうだなと覚悟を決めるのだった

神機と血の力

「えと…改めまして、『アリナ・デアーフオーゲルヴァイデ』といいます。皆さんよろしくお願ひします」

その日、仕事に行く前に各部隊長には貸切状態のラウンジに集合してもらい、アリナの件をひと通り説明することになった

サカキさんのメールで簡単な事情は皆理解していたが、やはり目の前に登場するとなると全員驚きの表情を隠せないように

「ほえー。ほんとにエリナそっくりだね」

「姉妹ですから。コウタさん」

ソファアに全員腰掛けてから、まずコウタが声をあげる

「あれ？自己紹介まだ…あそつか。そっちにも俺はいるんだな…でも、隊長呼びじゃないってことはブラッドの一員って話もほんとか」

そうだったそうだった

アリナは第三世代神機使いの適合をクリアしてるんだもんな

しかも彼女の世界ではエリナまでブラッドのメンバーって話だ

…もちろんこっちのブラッドメンバーだって良い奴ばかりだけど、異世界の俺羨ましいぞちくしょう

「ブラッドってことは、血の力が使えるんだろ？」

ハルさんの質問にコクリと頷くと、アリナは自分の能力についての説明を始めた

「私の血の力は『疾風』^{はやて}って言われています。同行者がバースト状態になった時の身体能力を更に高めて、移動性能を向上させる効果があるんです」

なるほど…疾風^{はやて}って名前になさわしい力だな

「ざつと言ってしまおうと、敵の攻撃をかわしやすくなったり、適切な間合いに踏み込みやすくなったりする力…です。バースト状態にならないと何の効果もない力なんで、微妙ですけどね」

若干自虐気味に頬を掻くアリナだったが、俺は普通に便利な能力だなと感心していた

「うーん。けど、メンバーの生存率と標的の撃破速度両方の項目に貢献できるスゲー能力だと、俺は思うぜ？」

「えっ…あ、ありがと…お兄ちゃん」

ポツと頬を染めると、彼女は嬉しそうにはにかんで俯く
うわ…その表情はヤメテくれ！

何度でも言うがお前の容姿はエリナそっくりなんだよ！

思わず自分の頬も赤くなる感覚がして、慌ててエリナの方に視線を向けると予想通り頬をふくらませてジト目でコチラを睨んでいて…

「おいおい。浮気は良くないぜ？教官先生さんよ」

「い、いや！これはその…そういうのではなくて…」

タツミさんがにやけながら言う言葉を急いで否定する

「てゆうかお前…お兄ちゃんとか呼ばれてるんだ」

「っ！だあく！話を脱線させるなコウタ！それとエリナ！別に浮気じゃないから誤解しないでくれよ!？」

「分かってます…ふん…じゃーアリナ。そっちの私は血の力、使えるんだよね？それはどういう力なのか教えてくれない？」

そ、そうだな！

俺もそれは気になるよ！

ふんとか言われてそっぽ向かれたことは忘れよう！

「あ…うん。お姉ちゃんの力は『再誕』さいたんって言われててね、これも私と同じでバースト状態の同行者にしか効果はないんだけど…」

そこで言葉をきくと、アリナは尊敬の念を込めた視線でエリナを見ながら言葉を続けていく

「体の治癒能力を飛躍的に跳ね上げて、バイタルがほとんど回復していくんだ！あと、近接形態とか捕食形態の攻撃でアラガミを攻撃したときに、オラクル細胞を奪って神機使用者の生命力に還元できて…」

瞳をキラキラさせながら話している様子を見ると、彼女がエリナを慕っているのだなということがよく分かった

きつと姉妹仲はとていいに違いない

「ふーん。つまり、仲間が戦闘不能になりにくくなるってことだよね」
「エリナお姉ちゃん本人もだよ！私みたいな攻防中途半端な能力じゃ

なくて、生存能力に特化しててすごい憧れてるんだ！」

ぐいつと身を乗り出すアリナ

「そ、そうなんだ…でも私からしたら、動きやすくなりそうなのあなたの能力の方が羨ましいけど」

「あつ…ふふっ…こっちのお姉ちゃんも、同じこと言うんだね！」

「へえ。やっぱり自分同士話があうのかもね」

ふむ…

こうやって見ると、異世界の人物同士とはいえやはり仲の良い姉妹にしか見えないな

「まだしばらくはこっちにいることになりそうだし、今度一緒にミツシヨン行こうよお姉ちゃん！」

「そうね！その時は先輩も一緒にいこ！」

ギョツ！

「っ！あ…ああ。そうだな」

唐突に俺の腕に抱きついてくるエリナ

周りの『またか』という視線が気恥ずかしい

彼女本人は何も気にしてないみたいだけど、いつから周囲の目を気にしなくなっただよコイツ…

ちよつと前まで恥ずかしい恥ずかしいって二人つきりのときしか思い切っては甘えてくれなかったくせに

「おーおー。俺が第三世代神機に適合できたらお前と所属変わってやりたいぐらいだよ。その方が一緒に任務も今以上に増やしてやれるぜ？」

「う、うるせーっつーの！」

コウタが抱きつかれてない側の脇腹を肘でつついて、からかうように俺にそう言った

事あるごとにちよつかい出してきやがってまったく…

「あつー！」

彼の言葉を聞いて何か思いついたようにアリナが叫ぶ

「神機…私のあるのかな？」

「「あつ」」

そうか

彼女はこちらの世界では……こういう言い方はあまりしたくないが、元々いない人間だ

だから当然神機もない

「えと……ちよつと見てきていいですか？」

オロオロする彼女を見て、俺達は全員頷き腰を上げたのだが

「……あ……でも、私が来たことつて騒ぎにしたらまずいんですね？」

「ああ……そうだなあ。うっかり目撃した誰かが話題にして、外部に情報が漏れちまう可能性もあるし」

「異世界だのなんだのといった話がお偉いさん方の耳に入りでもしたら、どういう風にご利用されるかわかったもんじゃないしね」

ハルさんとタツミさんがつぶやく

サカキさんも、おそらく大事にするのは賢くないと判断してだからこそ、確実に信頼できる隊長格のメンバーだけに先にアリナの件を教えただろう

「じゃー、私部屋で待機してるから。まだ朝方だし先輩とアリナの二人で行けば、なんにも怪しまれないでしょ？」

エリナがポンと俺の肩を叩いて腕を離す

「ん……確かに見た目は瓜二つだし、俺がエリナと二人で行動してても不審に思う人間はもう極東にいないだろうしな」

「だな。エリナとアリナ二人が同時に目撃されるようなことがなければ大丈夫だろ……服装だって色違いみたいなものだし」

よし。そうと決まれば早速神機保管庫に向かうとするか

「よろしく！お兄ちゃん！」

「おう！任せとけ！」

エリナに代わり、彼女がキュッと手を握ってきた

「アリナ。先輩に変なことされたら私に報告していいからね」
「わかった！」

ちよ！

エリナさん!?

アリナもなんでそんな満面の笑みで納得してお返事を!?

「こ、こら！変なことなんてするか！」

「どうだかなく…ほら、早くしないと。アリナの神機がもしあったら、それ発見されちゃっても大騒ぎになっちゃうんだから」

「くっ…わかったよ。んじやー行くぞアリナ」

「うん！」

急かすように背中を押ししてくるエリナとコウタ達をリビングに残し、俺はアリナの手を引いて神機保管庫に向かうのだった

「お姉ちゃんとお兄ちゃんて、こっちでもすんごい仲いいんだね！」

エレベーターの中で、アリナが繋いだ手をプラプラさせながら俺を見つめて話しかけてきた

…その手の動かし方も、エリナにそっくりだな

ちなみにここに来るまでに、あまり顔を見ない縁の薄い神機使い一人とすれ違ったが特に注目はされなかった

俺の予想通り、普通に二人でいる分には何も怪しまれないな

でも、アリナの腕輪が黒いって言うのだけが若干不安だからあとでサカキさんに相談しよう

「まあ…そりや恋人だしな」

「やつぱり！同じ部屋で寝るぐらいなんだから、そういう関係だと思っただよ」

「う、うん…てかこっちでもって言うからにはそっちでも？」

「もちろん！この間なんか、ゴッドイーター同士の結婚は複雑な手続きがいるんだのなんなのって二人で調べてたんだよ？」

「っ!？」

うわ…

それを目撃されてるとか恥ずかしすぎんだろ異世界の俺

「ホントにさー。ふたりとも小さい頃から仲良くて、見てるこっちが恥ずかしいぐらいに…」

…ん？

「まで。小さいころだつて？」

「へ？だってお兄ちゃん私達は幼なじみ…って、あ。もしかしたらこっちの世界では違う…とか？」

「ああ。俺とエリナはまだ知り合ってから1年も経ってないぞ」

「うそ!?それであんなにイチャイチャ…?ふうくん…へえ」

「そんな目で見るな」

アリナがニヤニヤしながら見上げてきたので、軽くデコピンしてやった

もしかして彼女が俺のことをお兄ちゃん呼ばわりしてるのも、昔からの仲だからなのか？

それなら尚更存在を忘れられただの初めて会っただの言われら、冗談でも辛かっただろう

改めて罪悪感

…ん？

あれ。でも確かエリナには血が繋がった本物の兄がいたと聞いているのだが

「アリナ。お前血の繋がった兄貴とかいないのか？」

「え？いないよ。私にはお姉ちゃんだけ」

そうなのか…

やはり細かいところで色々と違いがあるみたいだな

そこんところ、もしよかったらこれから少しづつ聞いてみたいもんだ

ガチャン！

「あ、ついたみたい」

エレベーターが止まり、神機保管庫への道が開かれる

ま、雑談くらい後でいくらでもできるし今はとりあえず…

「よし、流石にこの時間は誰もいないな。あんまりうるちよろしい場所じゃないし、アリナ。お前が向こうで神機を保管していた場所までとりあえず行こうか」

「オツケー！」

人氣が無く暗い道を、アリナが先導し俺の手を引っ張りながら移動する

「ちよつとだけ肝試しみたい。でもなんだろ…なんか見守られてる感じがして怖くないよね」

「コツコツという俺達の足音だけが静かに響く中、アリナの声も若干反響して俺の耳に届く」

「そうだな。やっぱり神機が見守ってくれてるんじゃないか?」

「…そうだね。神機はただの武器じゃない。私達の体の一部みたいなものだもん」

「お。中々いいこと言うな」

「えへへ。ありがと♪」

満面の笑みを浮かべる彼女の頭に思わず手を伸ばしそうになってしまい、ぐつと我慢した

危ない危ない

ホントエリナにそっくりだからな

「頭撫でるくらいなら別にお姉ちゃんに報告しないよ」

「あ。気づかれてたか」

「そりゃーね!向こうでも事あるごとに頭撫でてたし…それに、私だってお兄ちゃんに頭撫でもらうの好きだから…」

「え?すまん。今最後なんて言った?聞こえなかったんだが」

「あつ…ご、ごめん!なんでもない!／／／」

…?

まあ、なんでもないならいいけどな

「あつ…あつた!私の神機!」

「なに!?うわ!しかもエリナの神機のとなりに」

エリナとよく一緒に任務へ行く俺ですらこの神機は見たことがない

つまり、アリナがやってきたのと同時にどこから湧いて出たのか謎だが、こちらに神機も転送されてきた可能性が高いわけ

「よかったー…これでミッションは行けるね」

「それはそうだが…整備班の人に見つかる可能性が高い…というかほ

「ほ確実に見つかったまうな」

とりあえずこの件はサカキさんに報告するべきだろう

「よし。とりあえず目的は達成した。一旦サカキさんのところ戻ろう
ゼアリナ」

「うんーじゃーまたね…ザスカー」

擬似親子

その後

サカキさんに相談したら、神機のごことはリツカさんに任せるから大丈夫だと言われた

どうやら彼女は昔から極東での秘密事に関わっており、こういうことに慣れていらっしゃるらしい

「つまり、ひとまずは安心してわけだ」

それからラウンジに戻り待機していたメンバーに情報を伝えて、俺とアリナはエリナの部屋までやってきて3人で会話をしていた

「うーん。でもほんとに不思議だね。神機までこっちにあるなんてさ」

ベッドに腰掛けたエリナが腕を組んで首を傾げる

「確かになく。俺みたいな頭脳凡人にはさっぱりわけがわからん」

そういやエリナは座学の成績はかなり良かったはずだが、彼女にとっても今回の件は謎が多いようだ

とりあえず隣に腰掛けながら、考えこんで眉を顰めている顔を堪能させてもらう

「……………」

「…っ…／／せ、先輩も私ばかり見てないで、少しは原因とか考えなよ。アリナのために」

「おっとすまん」

じつーつと見ていたら流石に気づかれて、頬を染めた彼女に肩を優しく叩かれた

「大丈夫だよお姉ちゃん！お兄ちゃん！きつとサカキさんとか研究者の人とかがなんとかしてくれるよ！」

エリナの正面から笑顔でそう言うアリナを見て、俺もその言葉に便乗する

「そうだとエリナ。考えるのは専門家に任せて、俺達はもつと別の方向でアリナの力になろうぜ」

「…それもそうだね…じゃーほら、アリナもこっち座りなよ」

エリナがポンポンと自分の隣を叩くが、彼女は何を思ったのかニンマリと笑う

…コイツ、何をたくらんでやがるんだ？

「ええ〜。私今エリナお姉ちゃんが座ってる場所に座りたいなく」

「…っ？どういうこと？」

なんだ？

人肌で温まった場所がいいってことか？そんなワガママ…までよ？

エリナが座って温まったところ…おお!? たしかにこれは場所を譲ってもらおう価値が…

って、何をバカなことを考えているんだ俺は…また変態呼ばわりされるぞ

だが、ぶんぶんと頭を振ってアホな思考を振り払った俺にとどいたアリナの言葉は、想像の斜め上をいく内容だった

「お姉ちゃんの席はお兄ちゃんの膝の上! だから、私がそこに座りまーす!」

「はっ!」

エリナの手を掴んだアリナの瞳がキラキラしはじめる

…もしかして彼女、向こうの世界でもこういう風に俺達をからかっていたんじゃないや…

「…えっと…あの…せ、先輩…いい?」

頬を薄く染めたエリナがチラチラと俺に視線を送った

って、あなたも乗り気ですか!?

「あ…も、もちろん! 異論あるはずないだろ?」

まあ、別にそれはそれで魅力的な提案ではあるのだが…

「やった♪」

「っ!」

ぴよんと飛び上がったエリナが、なんのためらいもなく俺の膝上に腰を下ろした

女の子の柔らかい体の感触から温かい体温が伝わってきて、心臓が高鳴りはじめる

「じゃー私はここに…あ。あつたかーい！ね？お兄ちゃん♪」

となりからニヤニヤと俺の顔を覗き込みながら、こちらの反応を伺うアリナは明らかに楽しんでた

「そりゃー…触れ合ってるし温かいに決まってるんだろ」

なんとか声が震えないよう返事することには成功したが、彼女の髪が鼻を擦るたびにいい匂いがしてくるし…

ぐっ…！これは想像以上の生殺し状態…！

「あはは！お兄ちゃんもお姉ちゃんも顔真っ赤！」

「…／／／」

クスクスと笑うアリナに、エリナは黙って俯き耳まで真っ赤にしているのが分かった

…きつと嬉しそうな表情も浮かべているに違いない

もちろん恥ずかしいことには変わりないのだが、俺達はずっと恥ずかしいこともしてきたわけで…

よくよく考えたら人目があるとはいえ、それは姉妹や義理兄妹みたいな関係のアリナだけだし今更照れることでもないよな

「エリナ。お前いい匂いするな」

「っ!?…なっ…！…ちよ、先輩!?やめ…／／／」

調子に乗ってエリナの髪に顔をうずめながら、先ほどまで口に出すのを躊躇っていた言葉を紡ぐと彼女はびっくりして体を動かし始めた

「おいおい。逃げるなよ」

「や、やめっ…あう…っ！」

腕を腰に回し逃げられないように抱きしめ更に体を密着させて…

ペロッ…

「ひゃううっ!」

首筋を軽く舐めてやった

そのまま耳元に口を近づけて囁くように…

「カワイイぞ…このまま捕食してやりたいぐらいだ」

「っ…／／／」

俺の言葉にビクリと体を震わせると、エリナはキュッと手を握って

きた

「い、今はダメだよ…アリナが見てるし…」

おっと…

どうやらマジに捉えられてしまったようだ

「ははっ…冗談だつて。なあアリナ…アリナ？」

先ほどからニヤケ顔でからかってきていた彼女のことだ

この状況でも笑いを堪えているに違いない

…と思っていたのだが…

〃〃〃

アリナは顔を真っ赤にして口を手で抑え、目をパチクリさせていた
…あれ？

「ご、ごごごごめんお兄ちゃん！お姉ちゃん！…そこまで考えてたなんて…わ、私邪魔だよね！…でも、この部屋から出たら騒ぎになっちゃうかもしれないし…ほ、ほんとにごめんね！」

あたふたと視線を逸したり立ち上がったたり座ったりをして慌てる彼女の様子は完全に予想外だった

てゆうか、なんでそこは本気にするんだよ!?

「あ…いやこれは…」

本当に冗談だったんだよとは言いにくい雰囲気になってしまったが、言わずに時間が流れるのはもつと気まぎらくなってしまおうわけで

「ほんとに冗談…だったんだけど…」

あははと乾いた笑い声をあげながらそう言うしかなかった

「…え」

膝の上から振り返るエリナと、横から顔を覗きこむアリナの視線が突き刺さる

「な、なんだ…冗談だったんだ…」

「…まあ、先輩のことだし、どうせそんなことだろうとは思ったけどさ」

そうだ…

エリナの態度が人前でもかなり素直になってきていたこともつい忘れてしまっていた

この調子だと、公共の場でうかつに『キスしよう』なんて言ってしまうって、本気にされそうである

「あー…えっと…」

そもそも俺達に出来る方法でアリナの力になってやろうという話をするはずだったのに、どうしてこんなことになっているんだ!?

膝上に座るエリナの腰にはまだ腕を回したままだったし、手も握られたままだ

…冷静になるとかなり意識してしまう

太ももの柔らかかさや女の子らしい華奢な体つき…さらに手のスベスベ感が伝わってきて…やば

お、抑えろ!

こんな場面と状況で俺の神機を捕食形態に変化させるわけにはいかないぞ…!

「…先輩…なんか…お尻に…」

「気のせいだ!」

鋼の意思で煩惱を振り払い、話題をなんとか引き戻す

自然を装い腕を解いたり手を離そうと試みてはいたのだが、これまたさりげなく手を握る強さや脇で腕を挟んでくる彼女の行動に阻止されていた

だからと言って、直接『離れてくれ』なんて言うことはもちろん出来ない

俺だってエリナのごときは好きなのだから

ギョツ…

試しに逆に抱き寄せてみたら、彼女は全く抵抗せずに密着してきた可愛すぎるんですけど!?

お前はそんなに俺をアラガミ化させたいのか!?

「…あ、あの…私ってこれからどこで過ごせばいいのかな?」

そんな俺達の様子を遠慮がちに見ていたアリナが、おずおずと手を挙げる

「え? エリナの部屋でいいんじゃないか?」

とりあえず彼女との無言の争いは中断して耳を傾けた

「けどさ…もし誰か来たら、私達二人そろって見つかったらやうことが
あるかも…」

あー…なるほど

万が一ということもあるもんな

「よし。なら俺の部屋で」

ギユウイ!

「いだだだ!!!エリナ!爪!爪が手に食い込んでるから!」

「先輩…?アリナを部屋に連れ込んで何する気?」

「ご、誤解だつて!何もしねえよ!」

指を絡ませながら振り向いてジト目で睨んでくるエリナ

ははっ…最近ヤキモチ焼きスキルにも更に磨きがかかってるよう

で、俺は大変嬉しいよ…

「じゃーどうするんだ?」

「…うーん。この件もサカキ支部長に相談した方がいいかも」

「あれ?意外だな。俺はてつきり『私が先輩の部屋行きます!』って言う
うかと思っただけだ」

「ば、バカッ!アリナをこの部屋で一人ぼっちにさせるわけにいな
いでしょ!」

あ

確かにそだな

エリナに用があつて来た人と対応したら、一人ぼっちだとボロがで
る可能性がある

呆れながらも今言われたことが嬉しかったのか、若干はにかみなが
らエリナが立ち上がったそのまま俺の手を引っ張った

「まあ…そういうわけだから、ちよつと私と先輩で相談行ってくるけ
ど…ここで待ってられる?私達以外の人来たらいないふりするのよ
?」

「う、うん!ありがとうとお姉ちゃん!」

「よしよし!じゃー行くよ先輩!」

アリナの頭を撫でながら、エリナが俺を見上げる

ふむ…コイツ結構世話焼きというか面倒見いいのかもな

「…お前姉というよりお母さんみたいだな」

「ちよ…やめてよ！まだそんな歳じゃないよ私！」

「あ…じゃーお兄ちゃんが私のお父さんってことになるのかな？」

ニヤリとアイコンタクトを送ってきたアリナに気付いて、俺は悪い笑みで応えた

絶好のからかいポイントというわけですね分かります

「なっ…／＼／＼」

「ははっ。確かに俺達の子供なら、アリナみたいな娘になるかもな」

「えっ…あっ…／＼／＼」

「お？どうしたお母さん？顔真っ赤だぜ？」

「う、うるさいバカっ！」

ズルズルッ！

「あははっ！いってらっしやい〜！」

「おーう。行ってきまーす」

顔を真っ赤にしたエリナに引きずられるようにして、俺は部屋を後にするのだった

最初の目的

「ねえ先輩」

「ん？」

ゴウンゴウンという機械音だけが聞こえるエレベーターの中
俺はエリナと二人つきりで会話をしていた

「さっきさ。私が先輩の部屋に行くと思ってた、とかなんとか言ってたじゃん？」

「あー、それがどうかしたか？」

「私達の部屋：相部屋とかに出来ないかなと思って…」

キュッと握られている手に力がこもるのを感じた

ほほう…アリナの件があるとはいえ、やっぱり同じ部屋で暮らしたかったのか

カワイイ奴め

「ははっ。それも後でサカキさんに相談してみるか？」

「うん！あ、あともう一個：第三代神機使いの適合試験、受けてみようかなって」

「え？」

「サカキ支部長の話聞いてたら、もしかしたら可能性あるかもって思ってたさ」

そうか！

サカキさんは確か、アリナがエリナの身内だと確証を得たのはDNAの解析によるものだと言っていた

当然こちらには向こうの世界のエリナの情報はなかったため、こちら側の彼女のデータと比較して出た結果ということになる

つまり…

「アリナ側の世界のエリナと、こつちの世界のエリナはDNA構造までほぼ同一って可能性が高いわけだ」

「そう。だから、第三代神機使いの試験クリアできるんじゃないかなって…」

「なるほどな…」

しかし、第一世代神機使いから第二世代神機使いに更新された人は、ハルさんを例に何人かいると聞いているが第二世代から第三世代へは前代未聞だし…

「…確実に安全が保証できるなら俺も賛成だけど、1%でも危険があるなら反対するぞ」

「えー！なんでよー！私もっと先輩の役に立ちたい！」

いくら機械による調査で安全性が高まっているとはいえ、ゴツドイーターの適合試験が100%安全というのはありえないことだ

つまり、今の俺の言葉は遠回りに『反対だ』と言っているようなもの

それを理解してムスツと頬をふくらませるエリナの頭を、宥めるように優しく撫でる

「バーカ。お前はもう十分俺の力になってるって、前にも言っただろ」

「でも…異世界の私は血の力まで使えるみたいだし、きつと今の私以上に先輩の役に立っているんだらうなって…」

「つたく。俺のために必死になってくれるのは嬉しいけどな。無茶すぎて大事になったら元も子もないんだぞ？」

「分かってる…けど、少しでも先輩の力になりたいんだもん」

ほんとにコイツはどこまでも健気だな

ここまで想われてるなんて俺は相当な幸せ者に違いない

「…ありがとう。けど、自分自身のことでも大事にしてくれよ？」

そつとエリナの肩を抱き寄せて耳元で語りかけると、彼女は恥ずかしそうに身動きしながら頷く

「…うん」

会話が途切れた後は、再びエレベーターの稼動音だけが静かに聞こえていた

またもやサカキさんのところに訪問してきた俺達は、何回も申し訳ないと謝罪をいれてから相談事を開始した

先ほどの件で異世界にアリナを帰す方法を調べてくれているのだ

ろう

カチカチとせわしく指を動かしモニターを見ながらも、サカキさんは俺たちの話を聞いてくれていた

「なるほど。アリナちゃんの居住スペースの提供ね。うん。それならちよūdいところがあるよ」

彼の話によると、3年前の例の事件の際に、シオを匿っていた場所が研究室に用意されていて今も残っているそうだ

「少し狭いけど、掃除して貰えれば人間一人住むことに問題はないはずだ。ただ食事や入浴、生理現象などのこともあるから、君たち二人が定期的に訪問してくれるのが望ましいけどね」

そう言って彼は背後の扉に視線を送る

あそこがその部屋というわけだな

「了解です！それなら問題ないよなエリナ？」

「うん。私達だって、アリナを誰かに任せて放っておくつもりなんてありませんからね！」

「そうかい！ならばそっちの部屋は今日から自由に使っつて構わないよ」

サカキさんの言葉に頷き、早速俺達はその部屋の扉を開いた

「…と、いうわけで、今日からここで寝泊まりしてもらうわけだが…」

その後、待機していたアリナを研究室まで呼んできて例の部屋を紹介することになった

「うわあー…す、すごい部屋だね！」

ホコリが積もってあちこちボロボロな有り様の部屋を見て、アリナが明らかな作り笑いを浮かべる

「気を使わんでもいいぞ。これからちゃんと掃除するんだからな」

「あつ…うん」

改めて狭い秘密の部屋を見渡す

壁にある無数の落書きは…なんとなく消さないほうがいい気がした

きつとシオがここにいた証拠のようなものに違いない

だが流石に崩れたベッドやボコボコになつて床などはどうにかしないとな

「…ていうか、これ掃除してどうにかなるもんなのか？」

散らかっているものが片付いたところで壊れているものはどうすれば…

「そうだね。誰か他に協力者を探して、君たちが仕事に行っている間に部屋の件は任せた方がいいかもしれない」

相変わらず画面から目を話していないサカキさんが、状況を察してくれたようだ

「ちようど今…アリナちゃんの神機の情報を送られてきてね。少しお願いしたいことができたんだ」

「お願いですか？」

アリナの神機の情報か

きつとリツカが仕事してくれたんだろう

「そうだ。僕からの個人的な依頼ということで任務を発注するから、君たちには受付へ行つていつもどおりその仕事を受注してもらいたい」

「なるほど…しかし、オペレーターの人に違和感を感じられたりしないんですか？」

「その点ももちろん心配ないさ。彼女も僕達ヒミツ共有者の仲間だからね」

ふむ…ということとはヒバリかな？

とりあえず、情報の隠蔽に関しては完璧ということか

「ただ、流石にエリナちゃんとアリナちゃん二人同時に出撃してもらうのはマズい…だからといって、今回の『お願い』にアリナちゃんの神機は欠かせないし、彼女一人で任務に向かってもらうのも危険だ」

「えっ？私なら一人でも平気ですよ！」

自信有りげに胸を叩くアリナだったが、サカキさんはコチラに振り向いてゆつくりと首を横に振った

「実力が不足しているということではなくてね。君の神機はまだコチ

ラに来てから一度も起動させていないから、実戦でまとも動く保証がないんだよ。いくら似ている世界の似ている武器だからとはいえね」

彼の言葉を聞いて脳裏によぎったのは初めてマルドゥークに遭遇した際に同行していたエミールの姿だった

あの時はたまたま大きな事故にはならなかったが：確かに神機が突然動かなくなったりした時一人だったら冗談抜きで危険極まりないことになる

「だから、少なくとも最初の何回かは彼らと同行して欲しいんだ」

「は、はい。分かりました。私もお姉ちゃん達と一緒に嬉しいで！」

ニコリと俺達に笑いかけるアリナ

俺だって彼女とは一緒にミッションへ行ってみたい：というか守ってあげたい

なのでもちろん異論はない

「でも：同時に出撃するわけにはいかないのに、一緒にミッションへ行かなければならないなんて：どうするんですか？」

エリナが腕を組んで悩みながら投げかけた質問に、これまたサカキさんはスラスラと答えていく

「大丈夫。出撃時間を少しだけずらして君たちには現地で集合してもらうのさ」

彼の説明によると、出撃メンバーリストを受付と協力して偽装すれば難しいことではないようだ

「：バレたら除隊処分は確定ですね：」

「安心したまえ。バレるようなヘマは絶対しないよ」

心なしか、サカキさんの顔がイタズラを考えている子供のような笑顔に見えてきた

きつとこの人は3年前の事件の際にもこういう事をしていたに違いない

「ここは支部長を信じるしかないみたいよ先輩」

「ははっ：そうみたいだな」

呆れ気味にため息を付くエリナに、俺も苦笑いで同意する

「それじゃー、今回君たちにお願ひしたい仕事の件なんだけどね」
きた

ここからが本題だ

気を引き締めて彼の話に集中する準備

「お兄ちゃんが仕事の時真面目になるのは、こっちでも同じなの？」

「そうよ…こういう時はカツコイイんだけど…」

「えー。いっつもカツコイイよ」

「っ…そりゃ…その…：…いっつもがダメってわけじゃなくて…」

「あっ！お姉ちゃんまた顔真っ赤！」

「う、うるさい！」

…あのー

お二人さん。背後でボソボソ俺の事を話すのはやめていただけないでしようか？

気になって集中力が削がれるんですが…

「君達にはウロヴオロスのコアや素材の採取をお願いしたいんだ」

エリナ達の会話に気付いているのかスルーしているだけなのかはわからないが、サカキさんはそのまま仕事内容を伝えてきた

それにしてもウロヴオロスか…

「いきなり大物ですね」

もちろん俺やエリナは何回か相手にしたことがあるが、決して楽に勝てる敵ではないことは経験から知っている

「君達ならそこまで苦戦は強いられないだろう。それに、アリナちゃんの神機…あれはウロヴオロスの素材を使つてチューニングしてあるよね」

「あつ、はい。向こうのお姉ちゃん達と一緒にウロヴオロスをやつつけた時に…」

…なるほどな

話が見えてきた

「こちらのアラガミとそっちのアラガミ…まずは両方の共通点を確認させたいんだ」

「了解です。じゃーこれから俺達はサカキさんが発注した任務を受注しに行けばいいんですよね？」

「うん。そうだね…君とアリナちゃんに先に行ってもらって、後からエリナちゃん一人で向かってもらえるかい？」

「そうだな」

確かに現地に向かうまでとはいえ、アリナ一人ぼっちにするのは良くない

「じゃー現地で集合だね！先輩」

「おう。部屋割りの件は仕事終わってから相談だな」

「うん！いつてらっしゃい！」

ニコリと最高の笑顔で見送ってくれたエリナの頭をもう一度だけ撫でて、俺はアリナを引き連れ受付に向かうのだった

夏祭り

前編

夏祭り

「うわあー！とつても似合ってますよエリナちゃん！」

「あ、ありがとうございますカノンさん：／／／」

私は今、浴衣というものを身にまとっている

普段の洋服とは違い、着るのに時間がかかるためカノンさんに手伝ってもらったのだが…

「ほら！鏡見てくださいー！」

私の浴衣を見て一人テンションが上がっているカノンさんが、どこから持ってきたのか

等身大の鏡をズルズルと目の前に引きずってきた

「わあ…」

ピンクの花びらを想起させるような色合いと模様

初めて目にしたときは、私にこんな派手な色が似合うのかと不安に思ったものだが…

「かわいい浴衣！」

くるくると回って、鏡に映る私の全身をしてみる

いつもかぶってる帽子も今日は外して、代わりにピンクの花を模した髪飾りをつけていた

「エリナちゃんは元がかわいいですから！似合ってますよー！」

「そ、そんなこと…！あ、ありがとうございます…」

まるで自分のことのように両手を組んで微笑むカノンさんに、私は照れながらお礼の言葉を述べる

そういう彼女も青い浴衣を羽織っており、私にはないその豊かな胸が更に強調されていた

…ちよつとうらやましい

「カノンさんも似合ってますよー！」

「えへへ…ありがとうございます♪」

私の言葉に頬を掻きながら照れる彼女は、その容姿とは裏腹に子供っぽくて可愛かった

…さて、なんで私たちが普段着ない浴衣を着ているのかというところじゃーエリナちゃん、そろそろ教官先生に晴れ姿を見せに行きましよう！」

「う、うん…／＼／」

そう

今日は聖域で大規模な夏祭りがあるのだ

真の聖域

それはアラガミが絶対寄り付けない安全が確立された場所

今日は一般人の方達用にもヘリが用意されており、フェンリルの職員やGEと混じってドンチャン騒ぎが繰り広げられていた

それにここならGEの飛び抜けた身体能力も発揮できない

出し物も一般人と平等に競うことができるというわけだ

「よし。先輩との待ち合わせ場所に行かなきゃ」

かたかたと履き慣れない下駄を鳴らしながら、私はあらかじめ彼が指定している待ち合わせ場所へと向かう

七夕の日、二人で夜景を眺めたあの場所だ

ちなみにカノンさんは私に気を使っただか、防衛班の人たちと合流すると言って途中で離れていった

「それにしても…歩きにくいなあ」

メインの祭り会場では道も舗装されており下駄でもなんら苦勞はしなかったのだが、今私を通っている場所は以前彼と来たときとあまり変わっていない

「まあ先輩には私が浴衣で来るってこと内緒にしてあるし…仕方ないよね」

この苦勞の代価はあの人の驚く顔で支払ってもらおう

俺は例の草原で寝そべり照りつける太陽の眩しさに目を細めながらエリナの到着を待っていた

「…ちよつとはやく着きすぎたか」

額の汗を拭いながら、聞こえる喧騒に耳を傾ける

いまの時刻は午後3時ぐらい

今日の催しは聖域誕生以来初ということで、なんと午前中から始まっていた

まあ流石にぶつ通しで遊び倒すのは疲れるということで、俺たちは午後から参加することにしたのだが

それになにやら準備があるとかエリナは言ってたしな

「にしても、このくつそ暑い中元気に外で遊んでる連中は本当にタフだぜ…」

オラクル細胞が活動できないこの領域では、GEも唯の人間に変わらない

この暑さは堪えるぜ…

「あつーいたーせんぱーい!!」

「!」

嬉しそうに俺を呼ぶ声が聞こえた

「エリナっ…か…あ!?!」

笑顔で手を振りこちらに走り寄る姿はまさしくエリナだった

だが、いつもと違う服を身にまとう彼女を前に、俺は開いた口がふさがらない

浴衣を着てる…めっちゃめっちゃかわいい!

「遅くなっちゃってごめん!これ着るのに時間かかっちゃって…」

照れて頬を浴衣と同じ色に染めながらはにかむ彼女が眩しくて、俺は目を細める

薄緑の髪にピンクの花飾りもよく栄えていた

「スゲーキレイだよ…エリナ」

「っ…あ、ありがと…」

思わず口をついてでた本心の言葉に彼女は更に頬を染めて俯くと、

小さな声でお礼を言う

その仕草がまた俺の庇護欲に火をつけた

うおおおおお!!抱きしめて頭なでなでしてあげたい!

「えっと…じやー行くか祭りに」

本能の叫びを頭を振って打ち消し、エリナに向かって手を差し出す

「うん…いっ」

白くて小さな指を絡めつかせ、彼女はそつと俺に寄り添った

こういうふうに密着するのは何度も経験済みのはずなのだが、見慣れない浴衣姿に緊張を隠せず俺は高鳴る胸の鼓動がエリナに聞こえてはいまいかと心配になる

「先輩もしかして緊張してる?」

「は!?な、なに言ってるんだ」

歩くごとに祭りの喧騒音が近づく中、ぴよこつと脇から顔をのぞかせたエリナが俺を上目遣いで見ながらにやりとした

「ふふ…先輩ね、緊張すると顔のこっこがピクピクするんだよ♪」

そう言って空いてる方の手で頬をツンツンとつつく

「なに!?本当か!」

思わず彼女の手ごと頬を触って確認してしまった

…それこそが狙いだとも気づかずに

「ふふーんー!うーそー!」

「はあ!」

ニヤニヤと笑うエリナを見て、俺はやつと鎌をかけられていたことに気づく

「そうやって確認するってことは、緊張してるんだね。せーんぱい♪」

こ、このやろー!

前に幾度となくこのようなかからかわれかたをして、その度に彼女がたいそう悔しそうな表情を浮かべていたのを思い出す

なるほどな、確かにこれは悔しい

「お前…なんか俺に似てきたな…」

「え…そ、そうかな…えへへ」

そこで嬉しそうな顔をされると何か複雑だ

…まあその照れた表情もかわいいんだけどな

「つと、なんだかんだ言ってる間にほら、ついたぜ」

「わあ…けっこう広い範囲でやってるみたいだね」

バサツ！

「うおっと！エリナ!？」

エリナが素早く俺の後ろに回り込んで背中に飛び乗りながら、あたりをクルクル偵察していた

「みてみて！あっちの方までお店がある！」

「わかったわかった、いったん落ち着けて」

普段は子供扱いされることを嫌がる彼女だが、今日ばかりは年相応の無邪気な笑顔を浮かべてとても楽しそうだ

けど、そこをつっこむのは野暮ってもんだろう

俺も今日は見えて見ぬ振りをするか

それに、こういう風にはしゃぐエリナも見ていて飽きない

「何言ってるのよ先輩！今日はとことん楽しまなくっちゃ！えつとね！まずは…」

背中からぴよんと飛び降りると、彼女はパタパタと浴衣をはためかせながら近くの屋台へ走り出すのだった

中編

「射的かく」

エリナが最初に目をつけた屋台は、夏祭りでは定番ともいえる射的屋だった

ただ…すつごい奥行きがあるでかい屋台だったけど

「あら？あなた達も来たのね」

「あ、ジーナさん」

先客がいたようだ

防衛班が誇る凄腕スナイパーのジーナさん

普段と違って紫の浴衣に身を包んでいた

ペコリと頭を下げると、ふふふと妖艶に微笑みながら彼女はスナイパー型の神機を模したおもちゃの銃をスチャッと構える

はは…本物じゃないと分かっていても、この人に銃口を向けられるのは怖いな

「射的…楽しいわよ」

「わあ♪先輩…やろやろー」

ジーナさんの言葉を聞く前からワクワクして瞳をキラつかせていたエリナだったが、その一言でとうとう我慢できなくなったのか

俺の腕をずるずる引きずりながら屋台の前に移動する

「おいおい。はしやぎすぎだぜエリナ」

思わず苦笑いを浮かべるが、こっちの声はどうやら届いていないようだ

やれやれ

「元気のいいお嬢さんだね！ほらー！これが銃だよ」

気前よく笑う店主のおっちゃん、ぽいっと一丁の銃をエリナに手渡す

ふむ、このおもちゃはスナイパー型のしかないみたいだな

道理で景品との距離がやけに開いていると思った

このお店の大きさと形にも納得

ちなみにお金は必要ない

今回は一般の方も平等に参加するってことになってる
だからお金を払って遊ぶのではなく、回数制限を設けて万人が等しく遊べる制度を設けているそうだ

つまり外部居住区の配給制みたいなもんだな

「しかし、これじゃスナイパーを扱ってるゴツドイーターの人が有利なんじゃ…」

「それがね…実際の神機とは大きさも反動も照準の位置も全然違うのよ。だから、やってて楽しいんだけどね」

俺の疑問にはジーナさんがそうこたえた

なるほどな…スナイパー専門の彼女が言うのだから間違いないだろう

そのへんは差が出ないように調整済みってわけか

「よし…じゃー…」

テンションの下がらないエリナは意気揚々と銃を構えながらしばらく品定めをしていたが、ギリギリ片手で持てるぐらいの大きなくまのぬいぐるみに視点を固定しグツと握り拳を作った

どうやらあれに決めたらしい

まーたドがつくほど定番のものに目をつけたなコイツは

…俺は特に欲しいものないし、ここは静かに見守らせてもらうかな

数分後

「…とれなかった」

むすつと頬を膨らませたエリナが、俺を上目遣いで見ている状況が出来上がっていた

あの後彼女は自分の回数分の弾を全部くまのぬいぐるみに使ったのだが、結局ターゲットを手に入れることはできなかった

弾自体は数発当たりはしたものの、ジリジリと商品棚から動くだけで落とす段階まではいかなかったのだ

「んで？その目は俺にお願いしたいってことだろ？」
「うん！」

やっぱりこうなるのか

「よーしよし。じゃーちゃんとお願ひしてみろ。ほれ」

「え？…えつと…先輩お願ひ！あのくまのぬいぐるみとつて！」

俺の手をギュつと握り、キラキラと視線光線を放つエリナ

こうお願ひされちゃー仕方ねー！

「任せろ！絶対とつてやるぜ！」

いつもと違う髪型の彼女の頭を撫でながら、俺はおつちゃんから銃をもらいくまのぬいぐるみに狙いを定めるのだった

「……ま、無理だよな」

「先輩かつこわる……」

「うるさい」

俺が使える銃弾は残り一発

今までの弾は全てクマの人形に命中自体はさせることができた
が…中心に当ててもビクともしないんだこれが

「おつちゃんこれホントに落ちるのかよ？」

「ああ落ちるとも、既に何人かの挑戦者が手に入れてるからね」
げっ!?マジかよ！

どんな猛者だそいつら

「一人は銃を持ったとたん豹変してね…腕輪をしていたからゴツド
イーターの人だとは思うけど、やたら怖かったなあ…くまのぬいぐる
みを狙っていたわけじゃなくてたまたま撃ち落としてみたいただけ
ね。『また誤射しちゃいましたー』とかなんとか言つてたから」

すんごい心当たりがあるんだけどその人

「まあとにかく兄ちゃんの持ち弾はあと一発だぜ。頑張りな。一般人
でもやり遂げてたやつはいるからな」

くっ…最後の部分は余計だっつーの

プレッシャーかけやがって

そもそもここじゃーゴッドイーターだろうが一般人だろうが大差ねえんだから

「…ちよつといいかしら？」

俺が銃を構えると同時にジーナさんが一步前に出た

「あれ？ジーナさんまだ弾残ってたんですか？」

「ええ…あと一発ね…」

ふふつと笑いながら、彼女はなんとくまのぬいぐるみに照準を合わせた

ま、まさか！

「お手本を見せてあげるわ。隊長さん」

すつと静かに銃口をターゲットに向けると、彼女はゆつくりと引き金を引く

ポンツ！

実際の銃声とは似ても似つかぬ効果音が、佇むジーナさんの姿に似つかわしくなく間抜けに鳴った

俺とエリナはゴクリと息を飲んでその結果を見守る

グラリグラリ…

弾はぬいぐるみの左手に該当する部分に命中して大きく傾いた

「あら、残念」

しかし、落ちるまではいかなくあと一步というところで台座の上に残まる

「大きな獲物は中心より端から攻めていくのがいいわよ…アラガミの場合もそうすればジワジワ追い詰めていけるから…うふふ」

恐ろしいことを恐ろしい笑みを浮かべながら言い残し、彼女はいままでの弾で堅実に手に入れたいくつかの小さな商品を持ってその場を去っていった

「そんな…ジーナさんにも落とせないのに…」

エリナがボソリと呟く

確かに、彼女ほどの腕があれば残り一発とはいえ落とせたんじゃない…端を攻めるのがいいと言っていたし…

そう、例えば頭なんかを狙えば落とせたのではないか？

「…っ！」

そうか！

そこまで考えて、俺はハツとした

ジーナさんは俺にチャンスをくれたのだ

頭を狙えとアドバイスを残して：

「エリナ、いけるかもしれない」

「え？」

弾自体は全部当てられたんだ

集中すればいけるはず！

緊張に汗ばむ手を一度拭ってから、銃を構えクマのぬいぐるみに向ける

照準はもちろん頭にむけて：

「…よしっ！」

ポンッ！

ふたたび鳴り響く間抜けな発砲音

トンッ！

「あっ！」

命中した弾を見て、エリナが声をあげる

よし！狙い通り頭にヒットしたぜ！

衝撃で上半身を大きく仰け反らせたぬいぐるみは、その揺れに耐えられず

ドスッ！

「おっしやあ！」

柵からその身を投げ出した

ジーナさん！

感謝します！

「お見事！…こいつは兄ちゃん達のものだ！持って行きな！」

屋台のおっちゃんが手渡してくれたぬいぐるみを、俺はすぐにエリナに差し出した

「ほら。約束通りやるよ」

「わあ…♪せんぱいありがとう！とつてもかっこよかったよ！」

満面の笑顔を浮かべて、彼女はぬいぐるみを受け取り大切そうに抱きしめる

…その嬉しそうな顔を見ただけでもぬいぐるみを手に入れた価値は十分あるが、贅沢を言うならそこ代われクマやろう

「まあまだ来たばかりだしな。次、行こうぜ」

「うん！私、ちよつとお腹すいちゃった」

「そうだな、なんか食べるか」

クマを片手に持ち替えたエリナの空いた手を取り、俺は次の目的地へと歩き始めるのだった

後編

焼きそばにたこ焼きに焼きジャイアントトウモロコシと、いかにも夏祭りといった感じの食べ物屋に片っ端から手を出すエリナ

「せんぱい…私もうお腹いっぱい」

彼女はお腹をさすりながらにこにここと満足げに微笑む

そりやあれだけ食べば当たり前だ

「そうだな、そろそろ食い物関連はいいだろ」

正直俺ももう厭しい

エリナだっっていうもはそんなガツガツ食べなくせに、その小さい体のどこにあんなたくさん入るってんだ

「うくん、でもまだ食べてないものがいろいろと…」

ちらちらと今度は綿あめやりんごあめやかき氷等、食後の甘いもの系といった食べ物に視線を迷わせるエリナを見て、俺はにやりと口角が上がるのを抑えられなかった

「くくく…」

「あーなーにイヤらしい笑い浮かべてんのよー」

それに気づいた彼女がすかさずジト目で睨んでくる

「いんや、可愛いなあと思ってさ」

「な、なにそれ…／／／」

そうやってそっぽを向いて頬を染める仕草は何度見ても眼福である

「ま、食い物全制覇するにしても、いつぺんに食べる必要はないだろ？ 他のところも見てまわろうぜ」

「あ…う、うん…そうだね！別に全制覇しようなんて全然これぽっちも考えてないけど、小腹がすいてきたらまた寄ればいいんだよね」

何強がつてんだよそんな輝く瞳で屋台の方を見て

俺嫉妬するぞ

「あつー！金魚すくいだって！私金魚って初めて見るかも！いこー！」

と、思っただらすぐこれだ

まだまだ元気が有り余ってるみたいだな…

金魚すくいの店ではまず俺から挑戦したのだが、いかんせんこれが思っていたよりだいぶ難しい

ポイの紙がすぐ破れちまって、残念ながら一匹も捕まえられなかった

まあしようがないかと、あまりこだわりのない俺は後ろで控えていたエリナを振り返ってみたのだが…

「任せて先輩！射的の時の恩！今返すから！」

そこには腕まくりまでしてやる気まんまんの彼女の姿があったのである

どうやらエリナは俺が失敗しているのを見て学習したようだ

狙いを済ましての素早い一撃で金魚たちを次々と手持ちのボールの中に放り込んでいた

鮮やかな手さばきに素直に感心し、思わず拍手してしまったほどだ

「おお…すごいな」

「ふふん！まあね！」

手渡された袋の中を所狭しと泳ぎ回る金魚達を自慢げにつき出してくる彼女の頭をよしよしと撫でてやる

「けど、こんなに取ってどうすんだよ？」

「えへへ…先輩にあげる！」

あ…うん

ありがとね？

とつても嬉しいよ？

「でもこれ、祭り終了の時までにはちゃんとここに返してやる決まりだからな？勝手に持ち帰ったりしたらダメなんだぞ」

屋台の隣に設置してあった金魚型看板の注意書きを指差して釘を刺しておく

この純粹無垢な笑顔を浮かべているのを見ると、ここ読み飛ばして

る可能性がめっちゃ高い

「え…あ、あはは！わかってるって！金魚はお祭りの間だけ！」

引きつった笑みを浮かべて声を震わせるエリナが俺はちよつと心配だ

部屋に帰ったら金魚鉢が置かれてるなんてことないように願うよホント

「そんなことより先輩！隣にヨーヨーすくいがあるから今度はそれやろ！あれなら持ち帰れるよ！」

「ちよ！まてまて！やるのはいいけどその荷物！俺が持ってやるから！」

カタカタと走り出すエリナを追いかける

両手がくまの人形と金魚の大群でふさがってるのにどうやってやるっていうんだ

そんでまあ、ヨーヨーすくいが終わる頃には空も暗くなってきていて、景品の方も予想通り彼女が大量ゲットしていたわけで

え？俺？残念ながら今回もいとこ見せられずじまいだよ

「私、もしかしたらこういうの得意かもしれない」

くまの人形を抱きしめながら、エリナは俺がもつ金魚とヨーヨーを交互にじつと見ていた

「そうみたいだな…やれやれ、器用なんだか不器用なんだか…」

「むっ！不器用じゃないもん！」

荷物は全部持ってやると提案したのだが、あの人形だけはどうしても手放したくないらしい

先輩が私のためにとってくれたからとか可愛いこと言うもんだから、そこは素直に頷いてやった

「はいはい。わかったから、ちゃんと前見て歩けつて。危ねーぞ」
ふらふらと後ろ歩きで俺の顔を見上げる彼女が心配で注意する

ただでさえ慣れない履物つけてるわけだし

「だーいじょうぶっ!?!」

ガクッ!

「あぶなっ!」

何かにつまづいたのか、バランスを崩して転倒しそうになったエリナの腰に腕を回して、なんとか支えることに成功する

「ほらみる言わんこっちゃんない」

「あ…ありがとう…」

なんとか水ヨーヨーも金魚も潰さずにすんでよかったよ

…いや、ヨーヨーなら割れて水浸しになるのもそれはそれd…おつと

今はこんなバカな考えに耽っている場合じゃないな

「立てるか?」

「う、うん。へいk…っ!」

俺の腕を支えに立ち上がりとうとしたエリナだったが、カクンと膝をついてしまった

「おいどうした?まさか怪我でもしたのか!」

「あ…あはは、ちよつと足捻っちゃったみたい」

「なに!?!」

座り込む彼女の足首を慌てて見ると、確かに若干腫れていた

「で、でも大丈夫だよこれぐらい!」

「バカ言うな。お前もここじゃー普通の人間なんだ。無理すんじやねえ」

迷わず手を取り肩を貸す

とたんにさつと赤くなる頬が視界の隅に映った

「は、恥ずかしいよ先輩…」

「不注意の罰だ。しばらく我慢しろ」

「うう…ごめんなさい…」

周囲の視線を一身に浴びながら、エリナは頬を染めたまま俯いてしまった

しかし、この状況でも人形だけは手放さないのはなんとというか嬉し

くもあるのだが…

「その人形、そんなに嬉しかったのか？」

「当たり前でしょ！」

「そう断言してくれるのは嬉しいけど、体の方も大事にしてくれよな」

「あ…う、うん。わかった…ありがと」

俺の心配が伝わったのか、エリナは素直に頷く

こんな些細なことでも、お前になにかあつて欲しくないんだよ

「…お前にもしものことがあつたら俺は」

ドンッ！

「え?!なんの音だ!?!」

その状態のまま、どこか休めそうな場所がないか探して歩いていた

俺達の耳に、上空から突如腹に響くような大きな音が聞こえた

周囲の人も何事かとザワつき始める

慌てて星明かりに照らされている夜空を見上げるが、特に変わった

様子は見受けられない

しかしなんだろう

あの音は聞き覚えがあるぞ

確かナナの新作スタングレネードを試した時に

ドンッ！

ふたたび鳴り響く音と、先程は祭りの明かりで気付かなかったわず

かな閃光

「あっ…」

エリナが声をあげる

空を見上げたままだった俺達には、その正体は容易に認識できた

「花火か!」

ドンッ!ドンッ!

最初の数発は試し打ちだったようで、次第に音や光のバリエーションを増やして次々と打ち上がる花火

祭りに来ている人達の歓声もすごかったが、それを打ち消すほどの

迫力があつた

「すごい綺麗だね!先輩!」

周囲の音にかき消されないよう耳元で喋るエリナに、俺もちゃんと聞こえるよう振り向きながら返事をする

「ああーこりやーすげーやー!」

「…ねえ、あそこいこ。七夕の時の」

肩に回された腕に力が込められるのを感じた

ほほーう…二人つきりで見たいってか?

いいぜもちろん賛成だ!

「任せろーそしたらこんなんゆつくり移動してたら花火が終わっちゃうぜ! エリナ! おんぶと肩車とお姫様だっこ好きなやつ選べ!」

一旦彼女を離して目の前に移動しニヤニヤしながらそう聞いてやる

「えーええ…じゃ、じゃー…えつと…お姫様だっこで…お願い」

「お…おおふ…」

え…マ、マジ?

一番予想外な答えきちゃったよ!?

「な! なに自分から聞いておいて照れてるのよ! 何回もやったことあるくせに!」

そっちだつて顔真つ赤だぞという反論は置いておいて…

今は時間がねえんだ

「わ、悪かったな! それより急ぐぞ! まずは救護施設でお前の足なんとかしてもらって…」

「それはあとにしよ! 花火終わっちゃうよ!」

「え? いやでも怪我…」

「いいから! 花火終わってから行くの! わかった!」

半ば強引に腕の中に飛び込んできて無理やり体を預けると、そのまま俺をじつと見上げる

あぶねえぞヨーヨーと金魚潰れつぞ

「さー急いで先輩!」

「…はあ、仕方ねえ。わかりましたよ」

まるで本物のお姫様みてえだなまつたく…

「ついたぞ…ふう」

エリナと荷物に負担がかからない程度での全速力で来たかいあつてか

まだ花火は続いていた

祭りの喧騒はだいぶ小さくなっていたが、花火の迫力ある光と音はここでもなんら変わらない

むしろ周りが静かで暗い分、先程より身近に感じる

「お疲れ様！ありがとね！」

お礼を言つてその場にぺたりと座り込むエリナ

「あーあー、浴衣ではしたくないなあ」

「いいじゃん。先輩しか見てないんだし」

「そうかい。なら、もっとちゃんと見せろ。ん？今日も白パンかこのやろー」

「何言つてんのよもう…バカ」

しようもない会話を楽しみつつ、俺も彼女の隣に腰を下ろした

ドーンッ！

しばらくの無言

鳴り響く花火の音と光だけが視覚と聴覚を満たす

「あのさ、せんぱい」

「どうした？」

しばらくその状態が続いたあと

ジリジリと座ったまま俺との距離を詰めながら、肩にちよこんと頭を乗せてエリナが話しかけてきた

「花火が最初に打ち上がったとき、『お前にもしものことがあったら』って言つて、続き言いそびれてたでしょ？」

あ

コイツちやつかり聞いてやがった

「ふふ…なーんて言おうとしたのかなあ〜？ねー？セーンパイ♪」

にやりとしながら顔を覗き込んでくるエリナに、俺もにやりとし返してやる

そんなんで追い詰めたつもりか？

甘いぜ！

「さあ〜てね」

「あーなにそれ！ちゃんと言いなさいよ！」

むすつと頬を膨らませる彼女の頭を撫でながら、俺はこのあとの反応が楽しみで更に表情を緩める

「ほほう…そんなに言うならちゃんと行ってやるよ」

「っ…」

にやけそうになる筋肉をなんとか張って真面目な顔を作ると、エリナもゴクリと息をのんだ

なんだかんだで期待してるのが丸分かりでかわいい奴だ

「お前にもしものことなんて起こさせない」

「へっ…あ…そ、そんなの…／／／」

「俺がずつとそばで守ってやる！お前に降りかかる火の粉は全部俺が打ち払ってやる！だからエリナにもしものことなんてぜってえ起きねえー！どうだ！」

「なっ…あ…あ…せ、せんぱ…そ、それ…／／／」

この暗さでもわかるぐらい頬を真っ赤に染めて口をパクパクさせる彼女の様子があまりに想像通りで、俺はクツクツと笑いをこらえていた

「だ、だいたいそれじゃーさっきの出だしと辻褃が合わないじゃん！」

「いいんだよ。さっきのはもう忘れた」

「むう〜！」

エリナは納得いかない様子で俺を睨んできたが、今言ったことは確かに即席で考えたこととは言え嘘ではない

「だからさ。来年もそのまた来年も…もちろんそのあともずっと。こうして二人で花火を見ようぜ」

「…うん。もちろん」

ドンッ！

最後の花火が打ち上がった後も、俺達はしばらくそのまま夜空を見上げていた

END

誕生日

先輩の誕生日

エントランス

「じゃーなエリナ！また明日！…いや、今夜かな」

「もうバカッ！…よ、予定空けておいてよね」

「ははっ！りょうーかい！」

今日の仕事を終えてニヤつきながら自分の部屋に戻る先輩を見送りながら、私は内心焦っていた

別に今夜が心配なわけではない

もう慣れたし、先輩は優しいから…ってちがう！

話がそれた！

実は明日は彼の誕生日なのだ

なのに、私はプレゼントを決めかねているという状況

なにもあげないっていうわけには絶対いかない

一年に一度の、それこそ私にとっては自分の誕生日かそれ以上に貴重な日なのだから

「どうしょ…」

彼自身明日が誕生日であることすら忘れていたような雰囲気だったが…

「でも、ブラッドのみんなはプレゼントあげるとか言ってたもんなあ」

一応聞き込みはしてみたのだが、ピンとくるものはなかった

「うーん…直接聞いちゃう？」

先輩が去っていったエレベーターの方を見ながら、誕生日誕生日…と、脳を働かせ

…あ、

「誕生日ケーキ…手作り」

バレンタインの時のお菓子をたいそう喜んでもらったことを思い出す

私が作ってあげるといいう手もある

…けど

「やつぱり形の残るものがないよね…」

ペアルックものは過去に私が買ったからダブリ感あるし…

ケーキの他にも何かないものだろうか

…あつ

うろろると出撃ゲートの前をうろろつく私の脳裏に一つのアイディアが思い浮かぶ

そういえば、あの日もこんなふうにごごをうろろろしていたっけ…？

先輩と一緒に外部居住区へお出かけした日

まだ、私が自分の気持ちを伝えられていなかった頃だ

なつかしい

それと同時に、むっとなる記憶も蘇る

私はあの時本気で指輪をもらえるものだと思っていたのに、あろうことか下着をプレゼントしてくるなんて

「ばかっ」

けれど、指輪というのはなかなかいいアイディアかもしれない

本物の…その…ここ、婚約指輪つてのは、流石に私の現所持金だとキツしい年齢的にも流石に早い

だから代わりの…気持ち伝わ程度指輪で！

先輩を予約…つていう言い方はあんまり良くないかもしれないし、彼が浮気するなんてことは絶対ないと信じているけれど

「でも先輩とはやくけっk…む、結ばれたいし…／／／」

誰かが聞いてるわけでもないのに、私はボソボソと小さな独り言の中でも直接的な表現が恥ずかしくて言葉選びをごまかす

まあほとんど意味は変わってないんだけど、やつぱりあの単語を出すのは想像しただけで頭がオーバーヒートしてしまいそうだから

「でもいつかは絶対…！」

そう決心して、急いで外出許可申請を取りに行くのだった

「うおおう…」

自室でデスクワークを一段落片付けた俺は、ベッドにぼんと身を投げた

やべーよ

明日俺誕生日だよ

エリナと付き合い始めてから初の誕生日だよ!?

あえて意識してないように振舞ってきたが、プレゼントもらえるかどうか不安で仕方ない

そもそもアイツ俺の誕生日知ってたっけ…?

「あ、なんか心配になってきた」

なら素直に明日誕生日なんだって言えよ!

と、思われそうであるが、今更感半端なくて恥ずかしいのかわかってくれ

トントン

「っ?!は、はい?」

思考中の突然のノックに不必要なほど驚き声が裏返ってしまった

「あ、先輩? エリナですー!」

「お、おう入っていいぞ」

そうだった

今夜もここに来るってあいつ言ってたじゃねーか

「おじゃましまーす」

部屋に入ってきたエリナがお気に入りの場所であるベッドに腰掛ける

「……………」

心なしか、いつもよりそわそわと落ち着きなく部屋を見回す彼女に、俺もチラチラと視線を送る

なにやっつてんだ俺は!

初心なカップルか!

いやまあカップルなんだけど…

今更何照れてんだ!

もつと堂々としてろ怪しいぞ

なんて脳内で一人悶々としていたら、エリナがわぎとらしくオホンと咳払いして後ろ手に持っていたものをそつと差し出してきた

「あ、あの…：せんぱいー！」

「あつ、な、なに？」

プ、プレゼントなのか!?

まだ日付超えてないけどプレゼントなのか!?

と、内心めちやくちや期待しながらも努めて冷静な顔を装ったが、声は裏返り言葉は噛み噛みで動揺してますよと行動で表現しているようなものだ

だが、どうやら彼女もそれに気がつかないぐらい緊張しているみたいで

「ケ、ケーキ…：作ってきたんですけど…！」

「へ？ケ、ケーキ？」

お誕生日ケーキってやつか？

え？もしかして…

「エリナの手作り!？」

「っ!?!…う、うん。そうだけど」

突然大声を張り上げた俺に驚いて肩を震わせながらも手に持っていた箱は臆さず差し出したままのエリナ

いや驚かせたのは悪かったけど、お前が俺のためにケーキ焼いてくれたなんて嬉しすぎて声出しちまうのは仕方ないだろ!?

「マジか！すっげー嬉しいよ！ありがとう!!！」

「そ、そんな大げさだよ…：バレンТАインの時だつてつくつてあげたじゃん」

あまりの嬉しさに頭をわしゃわしゃと撫でてやると、エリナはぽつと頬を染めながら照れ隠しのつもりなのかボソボソとそう呟く

「あの時はあの時でめっちゃ嬉しかったけど、誕生日にもう一度あのケーキが味わえるなんて…：俺は幸せだよ」

「あ…：今回はザツハトルテみたいなのチョコケーキじゃなくて、普通のショートケーキなんだけど…」

「なに!? 違う種類だど!? それはますます楽しみだ!」

わくわくとケーキが入っているのだから箱に注目していた俺を、彼女も嬉しそうな笑みを浮かべて見ていた

「まったくもう…ちよつとは落ち着いてくださいよね! 子供みたいだよ先輩」

「落ち着いてるって! さ! はやく見せてくれ! エリナが! 俺のために! 手作りしてくれたケーキを!」

「そ、そうやって強調されると照れちゃうな…／＼／」

はいつと恥ずかしそうに視線を逸らしながら、とうとう箱の蓋を開封…!!!

「お…おお!!」

真っ白に輝く白銀のような生クリームにまず目を奪われたが、直後に中央にちよこんと鎮座されている砂糖菓子に注目した俺は感動のあまり声を詰まらせる

その板状の菓子には、チョコで文字が書かれていた

『○○先輩お誕生日おめでとう!』

と…

手作りってことはもちろんこれも手書きってことだ

ケーキを作りながら繊細な手書き文字作業をしている彼女の姿を想像すると…

「エリナ…お前ってやつは…最高だぜ。ああ最高だ!」

半分無意識で体が動いて、ギュッと彼女の華奢な体を抱きしめてしまった

「せ、せんぱつ…!? / / ケ、ケーキつぶれちゃ…あ / /」

「おっと! すまん。つい…」

慌てて体を離し、ケーキの無事を確認する

「落ち着いてって言うてるでしょ! …そんなに喜んでくれるのはとっても嬉しいけど」

頬を膨らませながら、エリナはそれでも嬉しそうな表情を崩さぬまま俺をじつと見上げる

「当たり前だろ! こんな…こんな嬉しい誕生日プレゼント初めて…」

「…ふふ。違つよ♪」

「へ？」

この最高のプレゼントに対する喜びを伝えようとしたのだが、エリナの口から信じがたい言葉が聞こえた

「これはただの誕生日ケーキ！プレゼントはね、別に用意してあるの！」

……………

「なあエリナ」

ああ目の前が感涙で霞んできた

「え？な、なに？どうしたのそんな真剣な表情して…」

「俺嬉しすぎてどうにかなつちまいそうだ。キスしていいか？」

「なっ…／＼／＼え…っ…それ…は…／＼／＼」

じつと照れてる彼女の瞳に俺の姿を至近距離で映し出してやると、チラチラと視線を迷わせているのがすごくよくわかった

「するぞいいな」

「ケ、ケーキをまず食べて！」

ぐいと顔を近づけると、慌てて瞳を閉じてしまったエリナが焦った声で叫ぶ

「わかったケーキ食ったらキスする」

「っ／＼／＼…ばかっ…ちゃんと味わってよね！」

当たり前だ

エリナの手作りケーキ…！

しっかり味わって食わなきゃもったいない！

一人分だということを考慮してあるのか、バレンタインの時と同じくちょうど食べきることができそうなサイズだった

「ではーいただきますー！」

箱の中に同封されていた可愛らしいプラスチック製のフォークを手に取り、俺はソファーに腰掛けてエリナお手製のケーキを食べ始める

「うまい…」

彼女の料理レベルが相当高いことはだいぶ前から知っていたので

美味しいことは食べる前からでもわかるのだが…

しつこくなく、かつしつかりと甘味を伝えてくる味

ふんわりと口の中で溶け、自然に次の一口を食べたくなるような
サツパリ感

すげえ…すげえ俺の好みの味…!!!

「先輩はあんまり甘すぎるもの嫌か…それに夜中だししつこすぎるのもちよつと…って思ってた。私なりに気を使ってみたんだけど…どう?」

なに!?

マジかよコイツ…!!!

そこまで計算して出した味だったのか!?

「パーフェクトだ…!満点!文句のつけようがない!俺はこんな美味しいケーキ初めて食った!バレンタインの時のチョコケーキも相当な美味さだったが、これもそれと同等以上だよ!」

「ほ、ほんと!?やった!♪」

パンつと手を合わせて喜び、俺の食いつぷりを真横に座りながら嬉しそうに見つめるエリナを見てたら、満点どころかそれを余裕で飛び抜けると確信できる

「美味かった…!」馳走様!」

ペロリと跡形も残さず綺麗に平らげると、彼女は空っぽになった箱を満面の笑みで受け取る

「お粗末さまでした♪」

「決まり文句だと分かっているけど、お粗末なんて冗談でも言えるレベルじゃなかったことをもう一度はつきり言っておくぞ!」

「ありがと!…せんぱい!」

お礼を言いながら何かを期待するようにこちらを見るエリナの様子を見て、俺は先ほど自分がした発言を思い出した

…なんだ?

結局お前もして欲しかったってことか?

ホント可愛いやつ!

「キスか?」

「……、言葉に出さないでよ……はずかしいかむうつ!？」

キスって言った途端に頬を染める彼女のあまりの可愛さに、これまた自然と体が動いて唇を重ね合わせる

「あっ……あまつ……せんぱい……♪」

なんだかんだで一度火がついてしまうと積極的になるエリナは、舌を絡ませ合いながら未だ俺の口内に残るケーキの味を感じてるみたいだった

「お前の口内はいつでも甘いけどな」

「ふあっ……ば……かあ……／＼／＼」

一通り恋人らしいディーブなキスを楽しんでから、最後に軽く唇を重ねて離れる

彼女はまだ満足しきっていなかったようだが、今はこれぐらいにしておくべきだ

「……日付、キスしてる間に超えちゃったね」

ベッドの近くに置かれている時計の時刻を確認し、わざわざ報告してきたエリナにニヤニヤが止まらない

「おう。今年の誕生日を恋人とキスしながら迎えられるとは思ってもしなかったぜ」

「私も……先輩の誕生日に一番近くにいられて、とっても嬉しい」「っ……!」

慌てることなく落ち着いた声で紡がれる甘い言葉に、俺の心臓が急に彼女を意識し始めてドキドキと高鳴る

それを見透かしたようにトンつと胸元に添えられる小さくて白い手

「誕生日プレゼント……今受け取ってほしいな」

「あ、ああ……」

耳元に口を近づけて囁くように小さな声でそう言われ、胸の鼓動の音が余計大きく聞こえる

……いったい……いったいエリナは何をくれるのだろうか？

期待と緊張で胸がいつぱいになりもうこれ以上脈は早くならない!

つてところですよ。と今度は小さな箱が目の前に差し出された
ケーキのやつよりもつともつと小さな：

「…えと…あけても？」

コクリと無言で頷く真剣な表情のエリナを確認し、ゴクリと生唾を
飲み込んで小さな箱をそつと開けてみる

指輪だ

中身は指輪だった

それが何を意味するのか分からないほど俺は愚かではないつもり
だ

流石に本物ではないのだろうが、そんなことは些細な問題である

エリナがこの銀色に輝く指輪を俺にくれた

そこが重要なんだから

「…わたしが付けてあげる」

あまりの衝撃でプレゼントを凝視したまま動けないでいる俺の手
元からさつと指輪を取り、エリナは素早くつけてくれた

…左手の薬指に

「先輩のお嫁さん…予約させてください！」

そのトドメの一言を聞きながら、俺は膨大な幸福感に飲まれて意識
を手放すのだった

今まで生きてきた中で、今年が間違いなく最高の誕生日だよ
ありがとう。エリナ

END

エリナの誕生日

「……………」

誕生日にエリナからもらった銀色の指輪

起床してむくりと上半身を起こした俺は、あの日からずっと左手の薬指につけたままのそれをチラリと見る

今日は9月18日

明日がエリナの誕生日だ

「…ふう」

ベッドに座ったまま、彼女に渡すべきプレゼントについて真剣に悩む

「まあ何回考え込んでも答えは同じなんだけど」

俺だけが指輪もらってる状況もおかしいもんな

こつちだって気持ちは同じなんだ

なら…

「プレゼントは指輪だ」

私と同じじゃん！芸がない！

と、怒られてしまうだろうか？

いや…あいつだって返事が欲しいはずだ

なら、俺はそれに応えなければならぬ

「おそろいにしたほうがいいよな。うん」

この指輪もやっぱりあの雑貨屋で買ったのだろうか？

仕事の支度をしながらも、俺の頭の中は彼女の誕生日のことについてばいだった

「おはよー先輩！」

「うおっ！」

部屋の扉を開ければ、待ち構えていたかのようにニコリと笑顔を見せるエリナ

まあこういうことは何度かあるのだが、日が日だ

無駄に緊張してしまう

「なにそんな驚いてんのよ！今日は一緒の仕事でしょ！」

「あ、ああ…そうだったな」

クスツと笑う彼女の視線が俺の左手に向けられていることに気がつく

そこにある指輪を確認して満足そうに頷くと、手を繋いでズカズカ歩き始めた

「だからほら！行こー！」

「はいはいわかったわかった」

後のお楽しみのために早く終わらせたいという気持ちが言動でバレバレの可愛い彼女に引つ張られながら、俺達は今日の任務をこなすに行くのだった

バグンツ!!!

「ふんふんふふ〜ん♪」

討伐し終えて力尽き横たわるアラガミのコアを上機嫌で取り出してるエリナの傍で、俺はほとんど出番の無かった自分の神機を見ながらぼんやりとしていた

任務の内容は他愛もない

ヴァジュラー1体の討伐

今の実力なら彼女一人でも問題なくこなせるだろう

そう確信できても、やはり目の届くところにいてくれないと安心できないのが惚れ込んでる証拠なのだが

：成長してるんだなエリナも

最初に同行した時とは比べられないほど強くなっている

あの時は目の前にしても震えて怯んでしまっていたヴァジュラ相手に、今日はそんな影を微塵も感じさせずテキパキと華麗に動いていた

思わず見惚れるほどに

大人になってんだ

指輪…つけてやらないとな

「先輩？どしたの？帰ろー！」

「あ…わりい、なんでもない。帰ろうか」

「うん！」

まだ日の高い空から差し込む光を受けて鈍く輝く指輪が、彼女に手を取られたことで隠される

明日にはこの手にも…

「それじゃー俺はちよつと用事があるんでこれで…」

「用事ですか？何の用事だろー？ねー？せーんぱい♪」

無事にアナグラまで戻ってこれたので、プレゼントの調達をしに行こうと適当な理由すら思い浮かばずそれこそ適当に離脱しようとしたら、予想通り絡み始めてきやがった

こういうところ、ホントに俺に似てきてるよなこいつ

「エリナの誕生日プレゼントを買いに」

「…なんで動揺しないの？つまんない〜！」

予測できてれば焦ることなんてないのさ

はっはっは！

「ん〜。そこで上目遣いで『プレゼントは先輩がいいです♡』って言われたら動揺すると思うぞ。てゆうか興奮する」

「ば、ばかっ…もう…ずるいんだから」

ニヤリと彼女いわく、意地悪な笑みを浮かべてちよつと反撃してやればすぐさま頬を染める愛しい少女の頭をポンポンと撫でる

「そういうことだから、今日の夜も俺の部屋に来てくれよ」

「…うん。楽しみにしてるからね！」

笑顔で手を振るエリナに見送られながら、俺は外出許可申請を済まして外部居住区へと足を運ぶためにエレベーターに乗り込む

扉が閉まる直前まで律儀に視線を合わせてくれていた彼女の姿が見えなくなつてから、ふうと無意識に息が漏れた

…あれ

俺、自分で思ってた以上に緊張してるのかも

そりやまあ…これから買おうとしているものの意味を考えれば緊張

するのも仕方ないのかもしれないけど

ガタンというエレベーターの止まる音と同時にパンパンと頬を叩いて気合を入れ直す

「とりあえずあの店…行ってみるか」

エリナと何回か一緒に行くうちにすっかりお得意さんになってしまった例の雑貨屋へと目的地を決める

「同じ指輪ある可能性も高いし…そうだ、渡すときなんて言っただけで渡せばいいんだ…？」

店の場所は足が覚えてるので、脳は既にプレゼントを渡す時のセリフ決めを行うために使われていた

「エリナ…これが俺の気持ちだ。受け取ってくれ…なんか普通だな…いやいや、誕生日なんだからまずはそのお祝いの言葉を…」

「いらっしやいませー！」
「うわっ!？」

ぶつぶつと呟きながら歩いていたら、いつの間にか店内にいたようで、すっかり俺の顔を覚えている店員のお姉さんにニヤニヤしながら声をかけられた

「これはこれはエリナちゃん、彼の彼女さん！彼女の誕生日プレゼントを買いに来たんですねー!？」

しかも目的までバレてるし

「あ…はい。まあ正直に言えばそうなんですけど」

「ふふふ…あの子もあなたの誕生日プレゼントだって、このお店でゆび・わ！買って行ってくれましたからね…早速付けてもらえてるみたいで私も嬉しいですよ！」

抜け目なく左手をチェックするとふふふと不敵な笑みを浮かべながら、どうぞこちらへと言わんばかりに手招きして店の奥へと移動するお姉さんに仕方なくついていく

聞いた話だと、この人は前にエリナから恋の相談を受けたことがあるらしい

だから彼女の恋が実ったのが嬉しくてしようがないようだ

結果、いろいろと世話を焼きたがってるということなのだが

「さあどうぞーこの指輪なんてどうですか!？」

小さな店内に所狭しと置かれた商品が入り組んだ通路の奥

案内された先には…

こう言ってしまうのは失礼だが、どこから調達したのか疑うほどの輝きを放たんばかりの…明らかにホンモノの婚約指輪があちこちに置いてあった

だが流石にまだ早いし、情けないが値札を見ても気軽に買える値段じゃない

俺は自分以上にハイテンションになってるお姉さんを慌てて説得する

「あ、あの〜。気持ちは嬉しいんですけど、俺たちにはまだ早いかなくて…」

「え〜? どうして? だつてどーせ毎日毎日イチャイチャナニナニしてるんでしょ? お店にいるときだつて、見せつけてるのかってぐらひぴったりくつついちゃつて…」

「…まあそこは否定しませんが」

「しないんかい!」

パシッ! といい音が聞こえてきそうな鋭いツツコミはスルーして俺は話を続ける

「俺だつてついこの間1・8になったばかりだし、エリナに至っては明日でやつと1・5になるんですよ?」

「ん…そういうえばエリナちゃんもそんなこと言ってたような…あの子にも最初は本物勧めたんだけどね〜」

あはは…

慌てて顔を真っ赤にしながら断るも満更じゃない様子の彼女の姿が目につかぶようだ

「そういうことです。本物は…来年買いに来ますよ」

「おお!? じゃー待つてますよ〜!」

「はい。よろしくお願いします。それで実は…」

にやにやと肘で小突かれながら、俺は本来の目的であるお揃いの指輪を探しに来たことを告げる

「なるほどなるほど…お揃いねえ…ふふふ…実はそういう希望もある
と思つて」

「あっ！」

いつの間にも用意していたのか

じゃーんと突き出された手のひらの上には、ご丁寧にも開いた箱に
指輪が入っていた

まさしく俺が先日エリナにもらったのと同じものが…

「あはは…なにもかもお見通しつてわけですか」

「エリナちゃんのためだもの。当然…で？買うよね？」

「もちろんです」

そのまま会計へと進み改めて指輪を手に入れた俺は、ひとつ深呼吸
をした

「ちゃーんと渡してくださいよろ？」

「わかってますって」

店を出ようとしたところにお姉さんから釘をさされて苦笑い

そこ疑われるほど俺つてヘタレに見えるのか…？

とちよつと不安に思ったが、今はそんなこと気にしている場合では
ない

「…ケーキ。どうすつかなあ」

そう

プレゼントの次はケーキだ

店を出て、買ったばかりの指輪が入っている箱を見ながらフラフラ

とその辺を歩きつつ考える

彼女は手作りまでしてケーキを調達してくれたが…

残念ながら俺にそんな料理スキルは備わっておらず

「エリナに料理教えてもらおう約束してたし、もつと早く教わっておけ
ばよかったな」

と後悔してももう遅い

「仕方ない…どっかで買うしかないか…売ってるかな」

「それならオススメの店ありますよ」

「うわっ！」

外部居住区の店はあまり詳しくないしどうしたものかと悩んでいたら雑貨屋のお姉さんが背後から声をかけてきた

「なんでついて来てるんですか!？」

「んー?だってやっぱり心配で」

うそつけ

ただからかいたいただけだろアンタ

ニヤニヤ笑いが隠せてないんだよ

「…雑貨屋は?」

「え?だいじょーぶだいじょーぶ!」

ほんとに大丈夫なんですか

あとで怒られても俺のせいにしたりしないでくれよお願いだから

「いいからー!このお店!行ってごらんよ!」

どこまで用意がいいのか

周辺の地図を記した紙切れを胸元に無理やり押し付けてくると、彼女は使命は果たしたと言わんばかりにドヤ顔ウインクを決めて去っていつてしまった

「…信用はできるし、いい人なのはわかってるんだけどな」

まさか帰ったふりしてずっとつけてくるつもりじゃないだろうな

…冗談になってない

結局俺は地図にでかかど○印で記されている場所へと向かうまでに何度も背後をチエツクするハメになったのだが、彼女らしき人影は見えなかったし出てくる気配もなかった

時には曲がり角が気になってわざわざ覗きに行くぐらいのことをしていたのに

ちくしょうめ

すれ違った一般人に奇特な目で見られただけじゃないか

ぶつぶつと文句を垂れながらも入った目的の店は確かにあの人が勧めるだけあって、ケーキはもちろんいろんな種類のお菓子が売られているお店だった

…まさか外部居住区にこんなお店があったなんてな

それにしてもこれだけのお菓子をどうやって調達…いや、詮索はや

めておこう

誕生日に贈るケーキを買いたいとの旨を伝えたら店員の人が快く承諾して見せてくれた一人分のショートケーキを購入

が
ネームプレート用のお菓子の為に贈り相手の名前を聞かれたのだ

「あの…それだけ自分でやりたいんです」

名前を書くぐらいだったら…と思つて勝手なことを言っているのはわかつていたが、店員さんは承知しましたと言つて空白のプレートを載せてくれた

「ありがとうございます」

「いいえ〜！お買い上げ！ありがとうございます〜！」

ケーキの箱と指輪の箱

愛する女性への贈り物二つを手に、アナグラへと帰還する

「さてつと…あとはプレートに名前を書いて準備完了だな」

例のお姉さんに後を付けられることもなく無事に戻ってきた俺は、ラウンジでムツミちゃんに事情を話してチョコを借りてきた

作業は誰にも邪魔される恐れがない自室で行う

「エリナ誕生日おめでどう…あいつと同じ文面だけど…変に凝らないでもいいよな」

そもそもやってることが彼女と同じすぎて今更ながらこれで良かったのかと若干不安に駆られたのだが、間違つてはいないはずだと強く自分に言い聞かせる

大丈夫だ…絶対喜んでくれるさ

「よし…！書くぞ…！」

そわそわ…

「先輩何くれるのかなあ…楽しみ…」

自室のソファアームにぐてーと座りながらも何度言ったか分からない

い言葉をぼんやり呟く

無意識のうちに左手の薬指へと視線が動いた

「……………欲しいな〜」

時計を確認しても、まだ夕方と言える時刻

部屋を訪ねるのは早すぎるのだが…

「んんん!!もう我慢できない!」

バツ!と立ち上がった私は部屋を飛び出す

先輩だつてもう流石に準備済まして帰ってきてるよね!

いいよね!

部屋行つても!

ドキドキと期待と緊張で跳ね回る心臓に手を当てながら、私は乗り込んだエレベーターの中で少しでも落ち着こうと深呼吸する

いけないいけない

これじゃー先輩と同じじゃない

落ち着いて落ち着いて…

チンツ

「ついたっ…!」

彼の部屋があるフロアに止まったエレベーターの到着音を聞いて、ゆっくりと足を踏み出す

部屋の扉はもう目の前だ

ごくりと喉を鳴らして、震える手でノックする

コンコン

「あ、あの…せ、せんぱい…」

「お!エリナか!?!早かったな!入っていいぞー!」

「は、はい!」

待つてましたと言わんばかりの嬉しそうな先輩の声色に、自然と期待も高まった

緊張も解けていくのだから不思議だ

楽しみ…ほんとに楽しみ!!

「じゃー遠慮なく!おじゃましまーす!」

てつきり彼はいつものニヤニヤ笑いを浮かべていると思っていた

のだが…

予想に反して、落ち着いた優しい微笑を浮かべているだけだった
こういう顔をするときは、真面目な話をするときだ

いつもの軽いノリでプレゼントを渡されるんだらうなという考え
が一瞬で打ち消される

今日先輩は…何か大事な事を…

トクツ…トクツ…

そう頭が理解してしまうと、やっぱり緊張感が戻ってきてしまう

「あく…どうする？もうその…渡したほうがいいか？」

「え…あの…えつと…せ、せんぱいに任せます…！」

震える声でなんとかそれだけ言うと、彼は小さな笑い声をあげなが
らキツチンに置かれていた箱をとってきた

「じゃー…お前の時と同じだがまずはケーキを」

「ケ、ケーキ!?ま、まさか先輩が…!?!」

手作りなのかと思ってドキツと心臓が一層激しく高鳴った
が

「いやいやいや!残念だけど俺にそんな料理スキルは備わってないか
らな。店で買ってきたんだ。わりいな」

「う、ううん!とつても嬉しい!」

自分の為に、先輩がケーキを買ってくれたという事実だけでも十分
に嬉しすぎる出来事だ

「お前に料理教わったら…次こそは作れると思う。だから、手作りは
来年に期待してくれ」

「あ…はい!ふふ…じゃーはやく先輩に料理教えてあげないとな
♪」

今から来年が楽しみになってきちゃった

どんなケーキを作ってくれるんだろ…

「まあケーキ本体は無理だったが、それでも俺がひとつだけ手を加え
たところがある」

「え!?!なににな!?!」

「…見ればわかると思うぞ」

恥ずかしそうに頬を掻きながら彼が言った言葉が気になって、うずうずと収まらない期待が我慢の限界に達しようとしていた

「ううう。気になる！あけてもいいよね！先輩！」

「ああ。どうぞぞ」

改めてすつと差し出されたケーキの箱を、そつと開けてみる

「…あー」

ケーキ自体は普通のショートケーキ

私が先輩の為につくったものとサイズもほぼ同じ

だけど…

「ありがとうー！」

真ん中に鎮座されてるネームプレートに、慣れないことをしているのがバレバレのぐにやぐにやな文字で

『エリナ誕生日おめでとう』

と書いてあった

間違いない

手を加えたって言ってたのはこれだ

「わりいな…文面もやってることもお前と同じで…しかも字きつたねえし」

「そんなこと関係ないよ！とつても…とつても嬉しい！」

あははと自虐的に笑う彼の言葉をふるふると頭を振って否定して、私は素直に嬉しいことを伝える

「そ、そっか…なら、よかった」

受け入れてもらえるのか本当に不安だったのかもしれない

ほつと安心したように一息つく先輩に、私はちよつとだけ頬を膨らませた

「先輩がくれるものに、私が文句付けるはずないでしょ？あなたは逆の立場だったら…文句言うの？」

ちよつと意地悪な返しになってしまっただろうか？

と思っただけれど、彼は迷わず即答

「言うわけないな」

「でしょ？」

お互いの返答に思わず吹き出す

こういう小つ恥ずかしいことをしてるから、バカツプルとか言われちゃうのかな…

私はそれでも全然構わないんだけどね♪

「それじゃー…いただきます」

ソファに腰を下ろしてケーキを食べながら、隣に座る彼との思い出話に花を咲かせる

告白した日に行っていたミツシヨンでハガンコンゴウに遭遇しちゃった話

シエルさんのバレット研究に付き合っただけで講習会的なものが開催されちゃった話

それから手作り料理を振舞ったり風邪を看病してもらったり恋バナしたり夏祭りに行ったりその他にもいろいろ…

まだ出会ってから1年も経ってないのに、話せることは山積みだった

それほど彼とたくさん関わっているということなので、先輩の彼女になれてホントに嬉しいと改めて思う

話が盛り上がって、気がついたらとつくに日が落ちている時間になっちゃった

最後に普通に美味しかったケーキをどこで購入したのか聞いてみると、なんと外部居住区だという

「へえ。そんなお店があったんだ」

「ああ、ほら、あの雑貨屋のお姉さんがさ。教えてくれたんだよ」

「あの人ほんといろんなこと知ってるよね」

確かにとお互い頷きあってたら、今の一言で私はひとつ気になる点を見つけてしまった

「…あれ？でもこのケーキ買ったってことは、あのお姉さんに会ったってことだよ？…ということとはつまり、あの雑貨屋さんに今日行ったの？」

「流石エリナ。鋭いな」

それまで気楽に笑っていた先輩の表情が突然引き締まる

私でさえ、任務中以外は滅多に見れないその顔に、ケーキと会話ですっかり緩んでいた緊張感がまたしても復帰してきてしまった

「ケーキ渡すとき言っただろ? 『まずは』ってな」

「……………」

言葉が…でてこない

胸が痛い

私の予想が正しければ、彼は…

彼が用意してくれているものは…

「時間もいい感じだしな…今、持ってくるから」

立ち上がった先輩がベッド傍にある引き出しから何かを取り出すのが見えた

小さな箱だ…

それを大事そうに両の掌に乗せて、固まる私の目の前に差し出す

「エリナ。誕生日おめでとう」

「……………」

ありがとう

そう言いたかったけど、口を開いても出てくるのは乾いた呼吸だけ震える手でそのプレゼントを受け取って、彼の瞳をじっと見る開けてもいい?

…と伝わるように

「…ああ、開けてくれ」

その言葉を聞いて、まともに動かない頭を無理やり傾かせた

ケーキの時以上にゆっくりと…

慎重に開封していく

「……………っー」

予想はついていたし、途中からはほとんど確信に変わっていたけれど、実際目にしたらその感動はとて言葉では言い表せない

指輪…だった

しかも、私が彼に送ったものと同じ種類

鈍く銀色に輝くそれが、涙の溜まった瞳へとぼやけた光を送っている

「…せ、せんば…あり…ありがっ…!!」

やっと口に出せたお礼と同時に頬を何かが伝う感触

「お、おいおい泣くなっ…」

それを拭ってくれる彼の腕にひつくと嗚咽を漏らしながらぎゅつと抱きつく

「だって…だって…!!!嬉しいんだもん…!!」

「ははっ…そんなに喜んでくれると俺も嬉しいよ」

全然泣き止む気配のない私の左手が握られる感触

ぴくつと一瞬涙の止まったスキに、いつの間にか彼が持っていた指輪がすつと薬指に通された

「来年本物渡すから」

チュツ…

「っ…!!!」

自分の指に付けられたプレゼントに視線を合わせていたら、唇に触れる暖かい不意打ちの感触

「ありがとう…ありがとう…先輩…」

感極まった私が突進する勢いで抱きつくくと、先輩は私より一回りも二回りも大きな体でしつかりと受け止めて、無言で頭を撫でてくれる抱きしめ合う私達の左手に付けられてる指輪から放たれる銀の光が、お互いを照らしたその時

日付が変わった

9 / 19

「エリナ。改めて、誕生日おめでとう。これからもよろしくな!」

END

休暇旅行

温泉へ

「温泉旅行？」

「そうそう！ブラッド隊のみんなも明日から長期休暇でしょ？俺達第一部隊も休みだから一緒に行こうかなって」

コウタから相談があると云われラウンジに来てみれば、今度の休暇の話だった

まあ長期の休暇と言っても2、3日なんだけどな

自分で言うのも難だが現在の極東主戦力でもあるブラッドと第一部隊の全員が同時に休暇なんてことは、フェンリルにとっても不安なのだろう

それこそ、この間の夏祭りのようなイベントでもない限りほぼありえないかもしれない

「滅多にない機会だし仕事が休みのときは思いっきり羽根を伸ばせて言うしな…いいぜ！行こう！みんなに確認とつてくるよ」

とまあ、そういう事情でブラッドの隊員に声をかけて回り、特別な用事があるというメンバーはいなかったので俺たちは全員参加となったのだった

それは第一部隊の方も同じようで、向こうも欠席者がいないということはつまり…

「せんぱーい！温泉だって！私、初めてだからすごい楽しみ！」

最愛の彼女…エリナもいるということだ

「ははっ！そうだな。貴重な長期休暇だ。たっぷり休ませてもらうぜ」

「うんっ！」

ギューっと腕に絡み付き満面の笑顔を浮かべるエリナの頭をワシヤワシヤと撫で回しながら、俺は休みの予定に想いを馳せるのだった

出発当日のお昼頃、俺達はラウンジに集合していた

「コウタきーん。温泉って聞いたんだけど、そんなものどこにあるんですかー?」

ブラッドと第一部隊が全員集合している中、ナナが手を高らかに挙げながら陽気に質問する

「お前：話聞いてなかったのかよ」

「え?たいちよーは知ってるの?」

「当たり前だろ」

まったく：昨日休暇中の予定を聞いたときに言っておいたはずなんだがな

その背中に担いでるでつかい袋の中身が、まさかおでんパンだけだとか言い出さないだろうなコイツ

「聖域に露天風呂ができたんだよ。実際にはまだ見てないけど：だから今日の目的地はそこだ」

もう一度、念のためナナ以外のメンバーにも聞こえる声量で俺は今日の目的地を伝える

聖域が発現してからすでに短くはない月日が流れ、あのアラガミに荒らされる心配がない場所は人々が安心して暮らせるよう日々開発されていた

その結果、なんと温泉を掘り当てたということらしい

まあ俺もこの情報は昨日聞くまで知らなかったのだが

「露天風呂！たっのしみい〜!」

「そうですね。今のご時世、外で入浴できる機会なんてそうそうありませんからね」

目的地を理解したとたんハシヤギ始めるナナにシエルが笑顔で同意した

そりやそうだ

屋内にいたって安全とは言えないのに、アラガミどもが彷徨ってる外で風呂なんてまともな思考じゃないもんな

「そうそう！だから今日はゆっくり日頃の疲れをとろうぜ！な！たいちよーさん！」

コウタに肩に手を回されながら、俺は胸の前で小さな握りこぶしを作り落ち着きなく小刻みに動くエリナに微笑ましい視線を送っていた

「とうちやーくー！」

聖域まではへりでひとつ飛びであつという間だ

トンっ！と地に足をつけ、座りつぱなしで固まった体をほぐすべくググツと背筋を伸ばす

この時期ということもあり、若干肌寒いがここに来た目的を考えればちよーと良いぐらいだろう

「それじゃーまずは荷物とかを置いてこようか」

全員降り立ったあと、コウタが指差しながらそう言った場所を見てみると、ふた組の木造の小屋…というよりもペンションといったものに近い建物が建ててあった

「へえ…こりや立派だな…」

近づいて見てみると、予想より遥かに大きな規模だ

前にカレーパーティーをやった時に建てた小屋の2倍近くの大きさはあるだろう

内装もこの分だと余裕があるに違いない

普通に考えて男女別だとしても比率の多い俺達の方でさえ6人…ははっ、贅沢な使い方ができそうだ

「…っしょつとー！」

聖域に建築されていた、今日から少しの間だけどお世話になるペンション…と言われていた建物

その中の一室に持ってきた着替えやら何やらの荷物を置いて、私は

一息ついていた

爽やかな樹木の香りと、大きな窓から見える緑豊かな景色にアラガミの蔓延る世界だということを忘れてしまいそうになる

ふふふ…なんかこういう本格的な旅行って初めてだからすごく楽しみ

それにせんぱいも一緒だし♪

うれしいなあ

「エリナさん。早速ですが、一緒に温泉…行ってみませんか？」

「えっ!? あっ! はい!」

シエルさんに肩をトントンと叩かれ、私はコクコクと頷きを返した
一応出発前に簡単な予定表が全員に配布されていたが、ほとんど自由行動で決まってるのは食事の時間ぐらいだった

うん! だからせっかく温泉旅行という名目で来ているんだから、一度体験してみるのも悪くない

「わーい! 温泉だあー!」

「ナナ。はしやぎたい気持ちは分かるが少し落ち着いたらどうだ」

ヒヤッホーイ! と元気に跳ね回るナナさんがお風呂道具一式を小脇に挟んで早くも部屋を飛び出し、やれやれとため息を吐くりヴィさんがその後を追っていく

私とシエルさんもそんな二人を見ながらくすつと笑って部屋を後にするのだった

「…ん? よお、エリナにシエル。お前らも温泉行くのか?」

「あっ! せんぱい!」

部屋を出たところで、隣のペンションからこちらを見ていたせんぱいがヒラヒラと手を振って挨拶してくれたのに気づき、私はトタトタと彼の元に駆け寄る

「お前らも…ってことは、先輩も?」

「ああ、せっかくここまで来たんだからな。どうせ夕飯までヒマなんだし」

ポンポンつと実に自然な仕草で私の頭にもたらされる優しい手の
感触

何度やってもらってもあたたかい幸福感を体中にもたらしてくれ
るこの動作が、私は大好きだ

今更言うまでもないけどね

「つく♪」

だからつい人前だということも本来の目的も忘れてうっとり甘え
てしまっていた

「…コホン。それで、君だけですか？ジュリウス達は今どこに？」

シエルさんの咳払いでハツと我に返り、ちよつとだけ恥ずかしく
なってそつと身を離す

「ああ…ジュリウスなら、この間の畑が気になるとか言って様子を見
に行つたよ。ちようどこから近いしな。で、ギルも同じような感じ
で井戸が気になるとか言い出して…」

せつかくの休暇なのにと苦笑いしながら、先輩はヤレヤレと首を振
りながら話していた

「ロミオとエミールさん…それからコウタさんは？」

「エミールなら荷物も置かず真つ先に温泉向かって行つたぜ。ん
で、残りのふたりなら…」

彼が親指を立ててグツと後ろに向けるその先へと視線を向ければ、
窓越しに携帯ゲームに勤しむ二人の姿が

「温泉はメシ食つたあとゆつくり入れば良いって聞かなくてな。ご覧
の有様さ」

ゲームなんてアナグラでもできるのに…

コウタ隊長もロミオさんもあきれちゃうわね

「つーわけで、男性陣で今から温泉行くのは俺だけってわけさ」

持っていた入浴道具を担ぎ直すと、先輩はもう一度だけ私の頭に優
しく手を置いた

「お前らこそ、ナナとりヴィはどうしたんだ？あの二人のことだし、コ
ウタ達みたいなことにはなつてないと思うんだが」

「あの二人なら私達より少し先に温泉へと向かいましたので、今頃着

いているかもですね」

撫でられて再びふにやりと笑顔を浮かべる私に変わってシエルさんがそう答えた

「なるほどな。んじやー俺たちもそろそろ行こうぜ」

「あ、うんー」

くるりと向きを変えられて、肩に手を置かれたと思っただらズンズンと歩みだす先輩の動きに押され、私も自然と前へと歩みを進めることになる

「ふふ…本当に仲がいいですね…おふたりは」

その様子を背後からついてきていたシエルさんが静かに笑いなながら見守っていた

入浴

「へえ…こりやーすごいな」

露天風呂の場所までたどり着くと、小さな二組の脱衣所だと思われる小屋の奥から背の高い木々を隠すように湯気が立ち上っていた

この一帯だけ薄い霧がかかっているほどで、温泉の存在が真実だとハッキリ視覚に訴えてきている…別に疑っていたわけではないけど、かすかに騒ぐ声が聞こえるのは、ナナあたりの先客のせいだろう

「それではまた後で」

「ああ、また後でな」

ペコリとお辞儀してシエルが女性用の脱衣所に向かっていったが、エリナはその後についていこうとせず背伸びしながら小屋の奥をのぞき込もうとしていた

「どうした？何か気になるところもあったか？」

「あ…うん…えつと…こ、混浴なのかなって…／＼／」

俺が声をかけると、一気に頬を染めて後ろ手を組んで視線を逸らすそんな心配をしていたとはかわいいやつめ

「ははっ！流石にそれはないだろ？こっやっつて脱衣所も分かれてるんだし」

安心させるように肩をポンポンと叩くと、エリナはソワソワとしながら袖をギュつとにぎってきた

「う、うくん…混浴だとしても脱衣所とかは分かれてる可能性も…大丈夫かなあ…」

「大丈夫だって！それに例え混浴だとしてもジロジロ見たりしないからさ」

そう言っただけでも、彼女は脱衣所の前で落ち着きなくウロウロとして中にいつこうに入ろうとしない

「…うん。でも、私シエルさん達と比べたらその…貧相な体だし、先輩に改まって見られたらその…やっぱり恥ずかしいし…／＼／」

「おい。見られること前提で話を進めるんじゃない」

そりやまあ好きな女の子の裸に興味がないといえは嘘になるお年

頃ではあるけども！

てゆうか何回も見ちゃってますけども！

なんとなく気恥ずかしい空気が漂い、ゴホンと咳払いをしながら俺は気楽な口調を意識して話す

「とにかくここまで来たんだ。今更恥ずかしがってもしょうがないだろ？ほら、行くぞ」

「う、うん…」

結局頬の赤みが治まらないままのエリナを女性用の脱衣所の前まで見送ってから、俺は男性用の方へと足を運ぶのだった

なんだかんだ言いながら、初心な反応のエリナもやっぱりかわいいなど笑みを浮かべながら

「やあ！友よ！よく来たな！」

「あ、ああ…」

そうだった

すっかり忘れてたけど、エミールが一足先に来てたんだ

となると、さっきの騒がしい声はナナじゃなくてコイツだったって可能性もあるな…

「この温泉だが…実に素晴らしい！」

上がってきたばかりなのだろうか

腰にタオル一枚を巻き付けただけのエミールが、濡れ濡れの髪をかきあげ水しぶきを宙にまき散らしながら話し始めた

背後に設置してある洗面所の鏡にその後ろ姿までもがしつかり映し出されている

どうせ肌の傷がみるみるうちに癒えてとか、騎士の戦いの疲れを癒すのにちょうどいいとかそういう話だろうと高をくくり、俺は自分の入浴の準備を済ませようと脱衣を始めながら適当に彼の話を聞き流すスタンスをとった

「聞いてくれ友よ……この湯船に浸かるうちに、昨日あのにつき悪魔どもにつけられた傷がこの通り！完璧に治っているではないか！素晴らしい！素晴らしいぞここは！騎士の休息にうってつけの憩いの場だっ！」

ほら見ろやつぱり

ボディビルダーのようなポーズを次々ととって二の腕を見せつけてくるエミールがグイグイっと近づいてくる

そもそも俺は昨日エリナと二人で任務に行ってたし、エミールが傷を負ったのが本当かどうかも知らないから反応に困るんだが……

という意味を込めた困惑した視線を送ってもなんのその

一人で勝手に語って満足したのか、彼は「君も十分に堪能したまえ」と言っただけを羽織ったまままで脱衣所から出て行ってしまった

体をふけ頭を乾かせ服を着ろ

温泉は……

やはり混浴ではなかったようだ

女性用の方角へとチラリと視線を向ければ、背の高い木々に阻まれせいぜい湯気ぐらいいしか目視できなかつた

お湯も繋がっているわけではなさそうだ

……って、ダメダメ！

これじゃーホントに覗きするヤツの思考じゃねーか！

脳内に浮かび上がったエリナの白い裸体の妄想を慌てて頭を振って追い払い、パンパンと赤く染まっていた頬を叩いて自重する

「しかしまあ、よくもこんなものを掘り当てたものだな」

簡易的なものではあるが昔の資料で見たことのある屋内温泉によくあったシャワーまで設置されており、シャンプーの類やプラスチック製……だろうか？イスまで設置されていた

こりや聖域が一般開放される日がくれば生活もえらく安定しそうですね

なにより現状ではあるが、アラガミ襲撃の心配が全くないという点はこれ以上ないほどのメリットである

汚れた体をいきなり湯舟に浸からせるのも嫌なので、まずはシャワーで体を流すかと歩み始めたところで大きな声が響いてきた

「あー…シエルちゃんにエリナちゃん！遅いよもー！」

ナナの声だ

彼女の良く通る元気な声は、生い茂る木々の合間を突き抜けて俺の耳にまで届いていた

てゆうかまだ入浴してたのか

結構時間たつてると思うんだが

まああいつらはあいつらで楽しめばいいさと早速シャワーの蛇口から水を出す

チロチロと小出しにしたその液体にスツと手を翳すと、すでに仄かに温まっているのが肌越しに伝わってきた

よしよし、これならもうバーって浴びて大丈夫だろ

ジャー!!!

温かい流水でまずは髪を洗い流す

んー！きもちいいん

「ねーねーエリナちゃん！背中流してあげよっか！」

「わっ！ちよ…だ、大丈夫ですよナナさん！一人で流せますから！」

……エリナの声……

ピタツと無意識に頭を洗う手が止まってしまったのは男の性だ許してくれ

ジャージャーとシャワーを流しっぱなしにしてる音に混ざって、確かににはつきりと女性陣の話し声が聞こえてくる

てゆうかこれ姿は見えないけど音は丸聞こえて、構造的にしようがないのかもしれないけど俺ぐらいの年頃の男には毒だぞ！

しかも好きな女の子がいるとなれば尚更…

「あれ？エリナちゃんちよつとおっぱいおつきくなつたんじやない

？」

「確かに：前にシャワーと一緒に浴びた時よりも少し：」

「シ、シエルさんまで何を!?」

「ちよ！な、なんちゅー会話してんだああああ!!!」

ワーキヤー言う声に交じりバシャバシャという水音までもが完全に動きの止まってしまった俺の耳に響く

：視界は霧や湯気と木々のせいでもよくないが、もしかしたら俺が思ってる以上にあいつら近くにいるのかもしれない…

「ま、まってくださいっ！せ、先輩も今入浴してるはずなんですから、こんな会話聞こえてたら…!」

「すまん丸聞こえなんだエリナっ…!」

「え?別に聞かれて困るような話じゃないでしょ?」

「は、恥ずかしいからやめてくださいっ!」

脳裏に頬を染めて涙目を浮かべる彼女の姿が思い浮かび、俺はもう完全に体を洗うという作業を忘れて彼女らの会話に聞き耳を立ててしまっていた

：し、仕方ないだろ!?気になるんだ!俺だって男なんだ!!

「：しかし胸のサイズの変化の件に関しては否定しないんだな」

「えっ!?：そ、それは：／／／」

うおおお…

リヴィのやつクールに突っ込みやがったな

「そういうえば、女の子の胸って触ってもらったりすると大きくなるらしいよ?」

ナナ!?

その話今しちゃう!?

「そうなのですか?」

「うん。なんでも好きな男の人に触ってもらおうと効果が高いとk」「わああああああああああ!!!」

っ!?

し、しまったあ…!なんか核心を突きそうな発言するもんだから思わず叫んでしまったああああ!!!

しかしそれはエリナも同じ気持ちだったようで見事に声がハモっていた

ああ：嬉しいぜエリナ。俺たちは常に一心同体：

「あれ？今たいちよーの声聞こえなかった？」

なーんて呑気に喜んでる場合じゃない

シャワーはとづくに止めてたはずなのに、噴き出してきた冷や汗で額が濡れてきた

「まさか：私たちの会話を聞いていたんですか？」

シエルの声が心なしか冷たく聞こえるっ！

ちくしよお！

しようがないだろ!?

耳を塞いでこの素晴らしい温泉を堪能しろとでも言うつもりか!?

「し、仕方ないだろ!?!聞こえてきちまうだよこっちまで!」

やらかしてしまった以上、今更だんまりを貫き通しても無駄だ

俺は一人しかいない男性用の露天浴場でシャワーのお湯を再度流しながら、ゴシゴシと頭を乱暴に洗いつつヤケクソ気味に声を荒げた
「まあ、声ぐらい聞こえてしまうのは仕方がないだろう。すぐ隣なのだからな」

さ、流石リヴィだ：：さつきから落ち着いた状態を微塵も崩さないぜ
彼女の声を聞いて、俺も幾分か緊張が和らいできた

そうだよな

ここにいる女性はブラッドのメンバーと恋人のエリナだけなんだ

話慣れてるんだし姿もお互い見えてないんだから緊張する必要なんて皆無!

：おー、気が楽になってきたぜ

今ならどんな話題振られても平気そうだ!

「そうだね!話してるだけだもんね：あ、じゃーたいちよーに聞いた
い事あるんだけど、いいかな?」

「おー!いいぜ!遠慮せずにじゃんじゃん聞いてくれ!」

すっかり緊張が解けた俺は、直前にあんな会話が繰り広げられてい

たのにも関わらず調子に乗って大声で返事する

…そしてちよつとだけ後悔することになった

「じゃあ遠慮なく！エリナちゃんのおっぱい大きくなったのってたいちよーのおかげ？」

「ちよつ!!!ナ、ナナさん!?なんてこと聞いてるんですかつ?!?!?」

俺の動きが再び固まるよりも早く、エリナが大声で驚きを露わにしてくれた

「え?だって気になっちゃって」

だからって俺とエリナがそろつてる状況でそんな質問しちゃうナも流石といつかなんといつか…

「あー…なんて言ったらいい?エリナ?」

まあこの質問も少しは予想できてたことだから、彼女ほどは驚かずにいられたが

「わ、私に聞かないでよっ!／／／」

おーおー照れてる照れてる

真つ赤になって慌てる様子のエリナが見えるようだぜ

今はしかも入浴中だったっけか

…いけね、危ない妄想映像が…

「そんじやーたぶん俺のおかげ」

面白くなつてきちまつたし、ここは話に乗ってみるか

まさか細かく真偽の追求とかまでしてこないだろうし

「おお…たいちよーとエリナちゃんって実は…やることやってたり?」

「わーわーわー!!!もー!!!せんぱいのばかああああ!!!」

「ははっ!わりいわりい」

バシヤバシヤバシヤ!!!

恥ずかしい話題にシフトしつつあることに耐え切れなくなったエリナが温泉内で暴れる水音を聞きながら、俺もゆっくりと湯船に浸かるのだった

平和

「それじゃーあたしはもう上がるけど…みんなはまだ温泉入ってる？」

せんぱいとの問答で一通り騒いだあと、ナナさんがザブンと豪快な音を立てて立ち上がる

「私はもうちよつといようなかな」

さつき暴れまわっちゃったせいでゆっくり浸かれてないし

でも、リヴィさんもシエルさんも十分あったまったからと言って風呂場を後にしてしまった

「1人だけ…か」

個人で浸かっているにはあまりにも広い浴場の真ん中で、ポツンと座り込む

微かな水音以外何にも聞こえないし見える範囲で動きがあるものも特になし

「ねえせんぱい。まだいる？」

ちよつとだけ寂しくなっちゃって、私はこの霧と木々の向こうにあるはずの男湯の方へと声をかける

「やっぱり恥ずかしさもあって、あんまり大きな声は出せなかったけど」

「…ん？エリナ、今俺の事呼んだ？」

でも、ちゃんと彼には届いていたようで

見えてないってわかってても、思わず頬が緩んでしまった

「うん。みんな上がっちゃったから…」

「寂しいってか？」

私が最後まで言い終える前に、笑い交じりのからかい言葉がかえってくる

「…うん」

「あれ？やけに素直だな」

だって二人つきりだし甘えたいんだもん

って言葉は胸の奥にしまいこんで、代わりにちやぽちやぽと浴場の端まで静かに移動した

「ここがきつと彼に一番近づけるところだから

「せんぱいまだ上がらないでしょ?」

「そうだな、ここで上がるって言ったからお前泣きそうだし」

はっはっはどふぎけた感じを崩す様子もなく笑い続けるせんぱいの態度に、むつと頬を膨らませる

「もう!またそうやってからかうんだから!」

見えるはずもないのにぷいっとそっぽを向いてしまう

「今お前頬膨らませてそっぽ向いたろ?」

「!？」

でも、それがバレちゃったことが悔しくもあるけど嬉しくて

「エリナの行動は手に取るように分かるもんなあ」

「うく!!!…ふ、ふんっ!どうせせんぱいの事だから、どこか穴場からのぞき見でもしてるんでしょ!この変態!」

「そうだな。今お前しかいないみたいだし、それもありか…」

「え!?ちよ!ほ、本気で覗くつもりじゃないよね!」

必死に反撃した言葉もサラッと流され、ビクツと更に私を焦らせる糧とされてしまう

「ははっ。冗談に決まってるだろ」

「なっ!…くっ!ほんつとにいいわる…せんぱいのばか!」

くるりと体の向きを変え、せめてもの反抗と彼の方向へ背を向ける

「悪かったって」

その言葉と一緒に、後ろから微かに水音が聞こえた

たぶん…彼が手を合わせるかなんかして、動きのある謝罪をしているのだろうということが分かる

「…この後夕飯まで二人つきりで一緒にいて」

ボソボソとつぶやいて出てきた言葉は、やっぱり私が彼に惚れ込んでしまっただけであることを再確認するようなもので

「え?なんだって?」

「このあと二人つきりで私に付き合っただけって言ったの!」

そうしたら許してあげないこともないから

なんてかわいげのない余計な事を言ってしまったても、彼は優しくこんな返事をしてくれるのだった

「オーケーわかったよ。ホントかわいいやつ」

「なんか悔しい…」

提案を受け入れてもらえて嬉しいはずなのに素直に喜ばなくって、どうにか彼をぎゃふんと言わせたいという欲求がふつふつと湧き上がってくる

「悔しいって言われてもな…悔しがってるエリナの顔も可愛いからやめられないんだこれが」

「な、なによそれ！じゃーたまにはせんぱいが見せてよそういう顔ー」
思わずその場で立ち上がり、彼が言うところの『かわいい顔』とやらでたつぷりと睨みを効かせてやった

「最近はけっこう見せてる気がするけどなあ。エリナ、そういうところ俺に似てきたし」

「えっ…！そ、そんなこと…」

嬉しそうな声で言うもんだから、なんだかこっちままでにやけてしま
う

「特に夜なんかはかなり「ぼっ!?」そ、それ以上はダメっ!／／／」

彼が何を言おうとしているのか察して慌てて口止めをする

「はいはい。初心なんだか積極的なのか…」

「うゝ!!!!もううるさい!」

「なんだよくそっちから声かけてきたくせに」

「うぐっ…」

ホントに反撃のスキがないというか…もー!

そういうのは任務中だけでいいの!

私にはもつとスキ見せなさいよ!

「とにかく!お風呂あがったら脱衣所の前で待っててよね!」

「了解了解…っつと?」

ガラガラガラッ!

せんぱいの言葉の後に、扉を開けるような音とガヤガヤと話し声の

ようなものが聞こえてきた

たぶん、残りの男性陣の人たちが浴場まで入ってきたのだろう

この状況で先輩と言葉を交わすのは流石に恥ずかしいし、待つてという約束も取り付けたことだし先に上がってよつと

体も十分温まったことだしね

脱衣所まで戻ってきた私は、洗面所の鏡の中にいる自分自身と見つめ合いながらわしゃわしゃと髪を拭いていた

ぎゅーつと傷めない程度に力を入れて、まわりつく水分を真っ白なタオルで吸収していく

「……………」

そういえば、せんぱいって出会ったころからよく頭を撫でてくれたな

ポンツ！

試しに自分自身で撫でてみたけれど、やっぱり特に何も感じない

自然と手のひらはタオルで水気をふき取る作業に戻ってしまう

むむ…

さつさと着替えてせんぱいに思う存分撫でてもらおう

最後に触れてもらった時から対して時間はたっていないはずなのに、もう彼のぬくもりが恋しくなってきた

ドライヤーまでありがたく用意されていたけど、その機械的な温かさと求めているものとの差異に早々に使うのを切り上げる

やっぱり私を一番あつたかくしてくれるのはせんぱいだもんね

…とは言えみつともない姿は彼に見せたくないの、最低限身だしなみは整えてハイスピードで着衣をすましその場を後にした

「ん〜…気持ちいい風…」

トンっ！と脱衣所である建物の壁に背を預けると、ふんわりという表現がピッタリの優しい風が頬を撫で髪を躍らせる

平和…なんて言葉とは無縁の生活を送る覚悟をしていたのに、この状況を表す言葉がそれ以外に思いつかなかった

もちろんそんな呑気な考えができるのもこの聖域の中でだけなのだが

まだまだアラガミ根絶という目標には程遠いし、油断せずに頑張らないと…

「よっ！待ったか？」

「あつ。せんぱいっ…っつて、ちゃんと髪拭いてから来なよ」

ワシャワシャと白いタオルで自分の頭を拭きながら、よーつすと手を挙げて挨拶してきたせんぱいに思わず苦笑い

「そういうお前こそ、ちゃんと拭いてねーぞ」

あつという間に目の前まで歩み寄ってきた彼が、ポフンと優しく私の頭に手を置きながらクククツと笑った

「そんなに俺と二人っきりの時間が楽しみだったか？」

「そ、そうよ。悪い？」

いつもの意地悪な表情をムツと頬を膨らませて睨み返し、フンと置かれてた手を振り払ってやる

「ははっ！そんな怒るなよ！俺は心配しただけだって。ちゃんとして乾かさないとまた風邪引いちまうぞってな」

「べ、別に怒ってはないもん！あとせんぱいだって人の事言えないじゃん！そんなびしょ濡れ頭でさ！」

「び、びしょ濡れではないと思うけど…」

それに…

「風邪引いちやったら、せんぱいが看病してくれるんでしょ？」

こんなこと直接言うのはちよつと恥ずかしくって視線をぷいっと逸らして小声で言ったのだけれど、彼には聞こえてるだろうし自分でも頬が赤くなってるのが分かるほど熱を持ってしまっていた

「まあそりゃもちろん面倒は見るけどな。だからって風邪をわざと引くようなことはすんなよ」

「そ、そんなことわかってるわよ…でも…」

「甘えたいときはいつでもそう言えって。それとも俺。風邪を引いてる人間にしか優しくしない奴に見えるか？」

「…ばか。そんなわけないでしょ」

うりうりと頭を撫で続けながら耳元で笑い交じりの声を出すせんぱいを、軽く肘で小突く

「まあ？せんぱいは無断で女の子のおっぱいとか太もも触ってくる変態だし、不用意に風邪なんてひいてたら次こそ何されるか分かんないしね〜♪」

「な、なにを言うんだ！俺がベタベタ体触りまくるのはお前だけだぞエリナ！俺はお前のおっぱいとか太ももだから興味あるんだ！てゆうかまだ覚えてたのかよ！」

「大声でそんなこと言ってよく恥ずかしくないね…」

急にまじめな顔で抗議したと思ったらこれだもんな〜

すぐそばの温泉にほかの人まだいるっていうのに

「だいたい風邪の時誘ってきたのお前じゃねーか…」

「えー？そうだったけー？」

「こ、コイツ…」

ペロつと舌を出したずらっぽく満面の笑みを浮かべて走り出す

「ま、までこのやろー！」

「あはは！待たないもーん！」

後ろからおしおきしてやるーとか叫びながら追いかけてくるせんぱいの気配を感じながら、私はとても幸せな気分で聖域の大地を踏みしめるのだった

END

短編集 花吹雪

「うーん。これはすごいなあ」

季節は春

聖域は花を咲かせている多くの木々でまさに絶景といえる景色だった

「ほんとだねー…まさか私が生きてるうちにこんな景色が見られるなんてなあ」

様々な種類の花吹雪が舞う中、隣に立っているエリナが俺の手を握りながら周囲を見渡し微笑む

「聖域もかなり緩やかだけど徐々に拡大していつてるようだし…そうだな、遠くない未来、きっと世界中でこういう風景が見られるようになるさ」

深呼吸して綺麗な空気を胸いっぱいすいこんだ

いまだあちこちに蔓延るアラガミとの戦いの疲れを忘れさせてくれるような…

そんな心地よさが体に染み渡る

「うん…はつくちゅ！…／／／」

「ん？」

可愛らしくしゃみをして照れくさそうに頬を染めながら、握っている方の手をプラプラさせてくる彼女の仕草に無意識に表情が崩れた

…ホント、何回見てもエリナの反応には飽きないよ

「どした？花粉症か？」

「…ん…そうかも…なんか目も痒いし」

鼻を擦りながら瞳を瞬かせる彼女の頬に、一筋の涙が光る

それを見た俺にちよつとしたイタズラ心が湧いてきてしまって…

「っ!?…せ、先輩!？」

「…んー。しよっぱい」

そつとエリナの頬に口づけし、涙を舐めとってやった

「ばっ…何やって…!」

「こういうの嫌いじゃないくせに」

1年経って心なしか少し大人びた顔になった彼女も、照れた時の表情は出会った時と全く変わってなくて…

それがまた愛おしくて頭を撫でる

…なにかあったらすぐ頭に手を伸ばす俺のクセも、全然変わっていないかった

「…っく／＼／＼」

ムギユつと腕ごと抱き寄せてきて、エリナが顔を隠す

…うむ…非常にカワイイのだが、ここで彼女に改めて抱きつかれた感想をひとつ

「…エリナ、お前胸成長してないてて!」

「うっさい! き、気にしてるんだから直球でそんなこと言わないでよ!」

抱きつかれて逃げ場のない状態で、脇腹をつねられてしまった

「…次、なんか変なこと言ったらその口…塞いじゃうんだから…」

「へえ…ちよつと言いたく」

チュツ

「…はっ…」

何か温かいものが唇に触れた…と、頭が理解する頃には俺の頬はカツと赤く染まっただけ…

「私、本気だからね。いつまでも子供だと思ってたら大間違いだよ」

いたずらっぽく微笑んで人差し指を自身の唇に押し当てるエリナの姿を見て、完全にしてやられたと思った

「…はは…まいったまいった。今回は俺の完敗だよ」

まったく…

こりゃほんとに油断できんな

「…とところで先輩。来年、ホントにくれるんだよね?…こんどこそ

『あれ』

手をつないで花乱れる草原を歩きながら小さな声でそう言う彼女の『あれ』がなんなのか、俺はすぐに察した

「ん。もちろん」

「…だったらさ、こういう場所の方が…なんかいいよね」

「それはもうこの場所で渡してくれって言ってるようなもんだぜ？」

「…っ！だ、だから！そう言ってるのよ！悪い!？」

至近距離の上目遣いでこちらを見上げるエリナの鼻頭を、ツンと指で突いてやる

「いやいや全然。意外とロマンチストだなエリナも…って、思っただけさ」

「…もう…意地悪」

「さっきのお返し」

「…ぷっ…なにそれ。先輩の方がよっぽど子供じゃない」

クスツとほほ笑む彼女の顔を見ていたら、確かにこれじゃ俺のほうがガキだなと納得してしまった

「私…まってるからね♪」

「ああ、期待してくれていいいぜ」

「…うん」

再び体に顔をうずめてくる彼女の頭を優しく撫でる

そして来年この場所でエリナに言うべきプロポーズの言葉を、俺は今から真剣に考えるのだった

END

添い寝

「先輩ー！今日もこっちで寝ていいよね？」

ニコニコと凄まじい破壊力を持つ笑顔でこちらを見上げるエリナ
夜中の就寝時間になるたび、必ずと言っていいほど彼女は俺の部屋
に来るようになっていた

「毎日毎日よく来るなー」

「だって、少しでも先輩の近くにいたいから！」

ギュっと腕を絡めて密着しながらそんなことを言うエリナに、理性
がどこまで持つか心配になるよまつたく

「じゃーほら、先に横になっていいぞ」

「ダメ！先輩も一緒よ！」

「お、おい！」

腕を取られたまま引きづられるようにベッドへ誘われて、そのまま
ダイブする彼女に俺も続くハメになった

ポフンっ！

「…先輩の匂いがする…」

「やめる恥ずかしい…んじゃ、おやすみ」

枕に顔をうずめたままのエリナに背を向けて照れを隠す

「…またそっち…向いちやうの？」
っ！

寂しそうな声でポソリとつぶやく声と、背中辺りの服をチヨンと
引っ張られる感触が…！

「ねえ先輩…たまにはこっち向いてくれてもいいじゃない」

このやりとりもほぼ毎回繰り返されているわけだが、流石にお互い
向き合った状態で『はいおやすみスヤアー』なんて芸当は、まだまだ
いろんな意味で若い俺には至難の業なのであり…

「無理だ」

「…どうしても？」

「どうしても」

「…絶対ダメ？」

「…ダメ」

「……………」

「……………」

じつとりとした視線が背後から突き刺さり、背筋を寒くさせる

あ、鳥肌たってきた

とゆうか、今日はやけにしつこいぞ…

嫌な予感が…なにかよからぬことを企んでいるんじゃない…

「えいつー！」

「うわあー！」

唐突に体に腕が回されたと思ったら、勢いよく抱きしめられた

「先輩がこっち向いてくれないなら、せめて私から抱きしめることぐらい構わないよね！」

フツツと笑う彼女の吐息が首筋をくすぐり、その反動で揺れる髪の毛がサラサラとそれに続き、控えめな胸の感触が背中に温かみをもたらす…

こ、この理性削り攻撃のコンボは半端ない威力だ…！

後ろ向きでこれなのだから、向き合っていたら身が持つ気がしない

「エリナ…このままだと俺とてもじゃないが眠れない」

背後にぴったりと彼女の感触が張り付き、煩惱を打ち消すことに全精神力を注ぎ込む

脳が活性化し、休息なんてとれたもんじゃない

「…私も眠れない」

更に力を込められて、痛いぐらいにお腹が圧迫される

耳元で静かに囁かれて、頬が熱くなるのを感じた

「それじゃーダメだろ!?満足したら、離して眠るんだ！」

「満足できないよ。先輩がこっち向いてくれるまで…」

ホントにコイツは…

この甘え上手め

ふう…仕方ない！

「わかったよ、そっち向けば満足なんだな」

「えっ!?!」

ビクリと体を震わせたエリナの腕による拘束が若干緩んだ

「なんだよ。自分から言い出したんじゃないか」

「そ、それはそうだけど…ま、まさか先輩がホントにこっち向いてくれるって言うなんて…思わなくて…」

まだ背を向けたままだったが、そわそわしながら照れているエリナの表情は容易に想像できる

思わずニヤリとしながら俺は振り返った

「あっ…／＼／＼」

ほらな？

振り向いたことで、頬を真っ赤に染めた可愛い彼女の姿が瞳に映り込む

回されたままの腕も途端にまごつき始めたが、今更逃がすわけにもいかない

「さあー向き合ったぞエリナ。これで満足だよな？」

「え…えと…あの…せ、先輩も…っ！」

ギョツ！

「抱きしめて…だろ？」

「っく!!わ、わかっているのに聞かないでよイジワル！」

お返しと言わんばかりに回されていた腕にまた力を込められた

「……………」

お互いしばらく無言で抱きしめ合い視線を絡ませあう
しばらくして、コツンと鎖骨辺りになにか当たる感触

目を合わせることが恥ずかしくなってきたのであろうエリナが、顔を俺の胸に埋めてきたからだ

「はい。今日もエリナの負け」

「う、うるさい！なんで先輩はそんな平然と見つめ合えるのよ！」

「いやいや、あと1秒…いや、0.1秒ぐらいエリナが踏ん張ってたら、俺も限界だった」

「毎回同じこと言ってるー！」

「毎回お前が同じタイミングで目をそらすんだよ。俺時間計ってるからな」

「うそ!?」

「うん。うそ」

「なっ!...ううううう!!」

ポカポカと胸板を叩き始めた彼女の頭をよしよしと撫でる

あーホント可愛いなお前

からかうのがやめられねえぜ

「次こそ私が勝つんだから...覚悟しておいてよね!」

それだけ言うと、エリナはぷいっとそっぽを向いてしまった

「なんだなんだ?今ので満足したのか?」

「...してない...いくらしても満足なんてできないよ...」

っ!?

甘えた声でそんな事を言いながら瞳を潤ませて振り向き俺を見つめる彼女に、ドキドキして思わず視線を逸らしてしまう...って、あ

「やった!私の勝ち♪」

「うわああああ!卑怯だぞエリナ!」

「卑怯でもなんでも勝てばいい...先輩いつもそう言ってるじゃん!」

さっきまでの憂いを帯びた表情はどこにいったのやら、イタズラに

成功した子供のような笑顔に、返す言葉もなかった

「ぐっ...仕方ねえな...今回は俺の負けだよ」

「油断してるからいけないのよ♪」

俺の鼻をちょこんと突つつきながら嬉しそうに微笑むエリナ

...ま、そんな顔を見せてくれるなら、わざと負けてやるのも悪くな

いかもな

そしてその日から、添い寝状態で視線を先に逸らした方が負けという謎の戦いが俺たちの間で恒例化していったのだった

END

140文字制限SS まとめ1

『1件の新着メール』

「先輩！お疲れ様でした♪明日も二人で頑張ろうね！」

仕事が終わってまず確認した新着メール

トップにあったのは可愛い後輩からのメッセージだった

「おう。いつまでも、二人で頑張っていこうな！」

俺の返信したメール

彼女が新着通知を消してから真の意味に気づくまで、あとどれぐらいだろうか

『寄るな、色男』

「寄るなっ！この色男！」

唐突に、エリナがそう言った

「急になんだよ？」

差し伸べた手を払いのけられる

「…ホントに先輩の一番って私なの？」

…あー、そういうことか

「他の女の子には絶対しなくて、エリナにだけすること。なーんだ？」

戸惑う彼女に答えを示すべく、その頭を優しくなでた

『うん、知ってる』

「エリナの好きな人って誰だよ？」

答えなんてとつくの昔に聞いたくせに、今日も先輩は同じことを聞く

「…先輩」

「うん。知ってる」

ほらね？

でも、今日は私からも聞いてやる！

「じゃー先輩の好きな人って誰？」

「エリナ」

「っ！…し、知ってるし…」

迷いなく直球で言うなんて反則よ！

『花束を抱えて』

「みてみて先輩！この花束あげる！」

無邪気に微笑みながら、集めてきた花の束を差し出すエリナ

「おう。ありがとう」

ギュッと彼女ごと抱き寄せると、驚いて体を震わせた

「えっ!?せ、先輩!」

「お前含めての花束だろ？」

耳元で囁いた言葉に頬を赤くする彼女が、一番綺麗な花だと思った

『黙って泣きやがれ』

今日の任務はソロだったそうさ。難易度は高いし、失敗しても仕方ない

「ううっつ!!…先輩…」

悔しそうに顔を歪めながらこちらに上目遣いを送るエリナ

「…いいから、黙って泣きやがれ」

その言葉を皮切りに、小さく嗚咽を響かせる彼女を優しく抱きしめた

…心配して俺も泣いていたことは秘密

『優しくしないで』

「エリナー！怪我ないか？」

辛かった

必要以上に私に優しく接する先輩の姿を見ていることが勘違いしてしまいそうになるからだから私に

「優しくしないで」

「なるほど。お前だけに優しくしろってか？」

ほら

また私を期待させるようなことを言う

でも、そんな先輩を私は愛してしまったのよ

『最後の言葉』

「せ、先輩！もう一回！」

「…最後だつて言つたら？」

「お願い！ね？ね？」

念を押したのに強請ってくるエリナにため息を吐く

「…愛してる。エリナ」

「つく…も、もう一回！」

「これで何回目だよ!？」

「……ダメ？」

「愛してるよエリナ」

愛しの彼女を前に、最後の言葉なんてなかった

『二人の世界』

「やった！」

例の携帯ゲーム

仕事前にちよこつとエリナと二人でやろうと思ったただけなのに

「先輩のおかげだよ！ありがと♪」

「お、おう…」

彼女の笑顔を見ていたら、ついつい時間を忘れて…

「…も、もうちよつとだけ…やりたいな」

「よし。やるか」

二人の世界に終わりはきそうになかった

『結婚しちやおっか』

「エリナ…今なんて？」

俺は耳を疑った

「だから…結婚しちやおっか。私達」

頬を朱に染め俯きながら、小声で彼女が言う

聞き間違いなんかじゃない

「すまん。まだ指輪買ってない」

「それはあとでいいよ…約束だけして…先輩」

左手の薬指を差し出すエリナに、嬉しさと震える声は隠せなかった

『いつかの夢の続き〜1〜』

「あつ…」

夢…だつたみたい

私と先輩…そして幼いころの自分そっくりの子供と一緒に生活していた

「いい夢だったな…」

いつかこの夢が…その続きが現実になりますように…

「エリナー！仕事いくぞー！」

「あーはい！」

だからそれまで…ううん

そのあともずっと、私の面倒見てね。先輩♪

『いつかの夢の続き〜2〜』

先輩を好きになった時から見ていた夢

「エリナー。朝だぞ…起きねえと…」

「お、起きてるよ！」

彼と家族になって生活していた例の夢

「えー…それは残念」

「っ…バカッ」

あれから数年後

私の夢は、現実で幸せな続きを紡いでいた

「ママ…おはよう！」

そう…

愛しい子供の誕生とともに

『受け止めてくれるのはあなただけ』

「どうしたエリナ？」

手が触れた

視線が変わる

その度に鼓動が早まった

トクツ、トクツと心臓が高鳴る

「せ、先輩…私…貴方のことが…す…すk…っ／／／」

にやにやと笑みを浮かべて、先輩は私の言葉を待っていた
きつともう、バレてる

この気持ちを受け止めてくれるのは意地悪なあなただけ

『君の傍』

ギュツと先輩の腕に抱きついた

暖かくて、安心できて…落ち着ける場所

「っ…おいエリナ…こんな人の多いところで…」

「え？なに先輩？聞こえない♪」

ちよびつと照れたようにはにかみながら、周囲を気にする彼を見上げて、私は腕に込める力を増した

先輩の傍は、私だけの特等席なんだから！

『愛してる、って言ったら満足?』

「最近ホントに愛してもらえてるか不安だな」

先輩がため息をつく

「もう…愛してる、って言えば満足?」

「…言ってくれるのか?」

「しよがないなあー♪愛してますよ!先輩っ!」

「…フツツ…俺も愛してるぜ。エリナ」

「ふえ!」

彼の照れ顔を見るつもりだったのに、私の頬が赤くなった

『制限時間はあと一分』

「じゃー行ってくるぜ」

今日は先輩とは別行動

…仕方ない

「…いってらっしゃい」

「…エリナ。こっち向いて」

「え?」

チュッと唇に落とされた暖かい感触

「お互い無事に帰ってこような」

「…あ…／／／」

彼が出発してしまうまで、あと一分

お礼を言うには、あまりに時間が足りなかった

キスの日

「知ってますかエリナちゃん？5月23日はキスの日っていうらしいですよ」

「キスの日…ですか？」

ラウンジでカノンさんと会話していたら、突然そんなことを言われた

「はい！昔極東で初めてキスシーンが出る映画が公開された日とかなんとかで…」

やけに嬉しそうにこちらの顔色を伺う彼女の考えていること…丸わかりですよ

「どうですか？教官先生にも教えてあげませんか？」

ほらね

…でもそういうふうに言われてる日なら、甘えてキスしちゃってみてもいいかもしれないなあ

「わかりました！ありがとうございますカノンさん」

笑顔で手を振る彼女に別れを告げて、私は先輩の部屋へと向かうのだった

「と、いうわけで、キスの日らしいですよ！先輩！」

「ふーん。キスの日ね」

…むっ

せっかく私が来てあげたっていうのに先輩ってば仕事が休みだからって、ベッドでゴロゴロしながらゲームして…！

「そうだよ！キスの日！キ・ス！」

構ってくれないのが寂しくて、ボフウ！といい音を立てながら先輩の隣にダイブ！

寝そべってみた

「ねえねえ先輩」

「…キスして欲しいのか？」

「ほしいー」

流石に察したのか、ちらりと横目でこちらの顔を見てきた彼の腕に、ぴったりと抱きついて甘えてみる

「ったくしょうがねーな」

ゲームを中断し笑いながら上半身を起こした先輩が、私の体も起こして顎に手を添えてきた

…チュ

「んっ…ん？」

頬にくすぐつたい感触が

…一瞬だけ

「…それだけ？」

拍子抜けというか期待はずれというか…

もつとこう…恋人らしいキスを

「いや…なんだ…なんていうか…改めてキスするぞってなると、恥ずかしいっていうかなんというか…」

視線をずらして頬を染める彼の言葉に思わずくすくすとする

恥ずかしい？

意外とかわいいなあ先輩♪

「しよーがないなー。じゃー私からしちゃうよ！」

今日はリードを取れそうな気がして、勢いよく彼の首に腕を回して顔を近づけた

…けど

「……………／／／」

あ…ホントだこれ…

改まっちゃうと、緊張して…

「…ほらな？…恥ずかしくなるだろ？」

「うっ…／／／そ、そんなことないもん！」

強がってみせたけど、至近距離で見る先輩の眼差しや唇にドキドキと胸が高鳴って…

…っ、そ、そうよ！顔を見なければいいのよ！

あ…そういえば、カノンさんが喉にするキスは欲求のキスだって

言ってたような…

先輩が知ってるかは分からないけど、これだったらあんまり恥ずかしくない…はず

それに、私の心情にもぴったりだし！

よし！

意を決して、先輩の喉に口付けをした

チュツ！

「おい!? エリナ!?」

驚かれたかな…?

唇越しに彼がゴクリと喉を鳴らすのが分かる

…優位に立ってる気がして嬉しい

「…ん…チュ」

「おい…ちよ…!」

そのまま胸板に手を添えて、私は先輩の喉を優しく啄むようなキスを繰り返した

…今私にできる精一杯の欲求

「エリナっ! 一旦離れてっ…く、くすぐりたいからっ!」

…これ先輩が喋るたびに振動が伝わってきて、結構面白いかも

「いやです! チュ!」

あ、喉仏!

「や、やめろって!」

「いやです!」

そのあと暫く身をよじりながら、やめろと連呼する先輩に張り付いて私は喉へのキスを続けていたが、いつまでたっても収まる気配がないことを悟ったのか

「…っ…よーし…わかった! お前がその気なら反撃の時だ」

先輩が肩をぐいつと押し倒してきた

「きゃー!」

更にベッドに倒れこんだ体を押しさえつけられる

「…覚悟しろよ。エリナに喉へキスされるのがどれだけ恥ずかしいことなのか。思い知らせてやるぜ」

そう言うが早いか、先輩の唇が喉に触れる感触がして…

「ひゃあ!？」

思わず声を漏らしてしまった

唇や頬にいつもしてもらってるものとはまた違って、肩のあたりがゾクゾクする

でも別に…

「うん…先輩!もつと!」

「…あれ? エリナ恥ずかしくないの?」

うん…だつて…

「先輩にキスされるの…好きだから」

私の言葉にピクリとして動きを止める先輩

「それにね、喉へのキスっていうのは…」

「欲求…だろ?」

「えっ!？」

先輩知ってたんだ!

「エリナが知つてるとは思わなかったけどな…だから俺もお前の喉にお返しのキスしたんだよ」

え…??

それって…

「お前が欲しい」

その一言とともに、先輩がまた口付けをした

…喉が焼けるように熱い

「私も…先輩が欲しいです…」

お返しと言わんばかりに私も先輩の喉へ…

「…キスの日っていいな」

「うん!」

その日、結局私達はお互いの欲求に素直に従い、ずっと一緒の部屋で過ごしていました♪

END

140文字制限SS まとめ2

『夢だったらよかったのに』

他の女の子と話す先輩を見てると、時々思っちゃう

(彼との出会いが夢だったら良かったのに)

そしたらこんな辛い気持ちになることもなかったのにつて

「あー…エリナ」

「え？」

いつの間にか先輩が目の前にいた

「…俺の一番はお前だから」

…ずるい

でも、今の言葉は夢じゃありませんように

『絶対絶命』

「先輩！上！」

エリナの叫び声が響いた

「っ！」

絶体絶命

「こらあく！先輩を狙うなあ〜！」

だが、いつまでたっても痛みは来ない

代わりに心配そうな表情のエリナが走り寄ってくる

「大丈夫!?怪我ない?」

…守られるのも悪くない

不謹慎だがそう思ってしまうほど今の彼女は魅力的だった

『いっそ心中するっ…』

偏食因子の投与リミットの限界まで…あとわずか

「どうしよ先輩…いっそ心中するっ…」

アクションで帰投困難な状況に追い込まれ無理に笑顔を取り繕うエリナも、涙声は隠せていなかった

死なせるもんか！諦めるものか…っ！

絶対に二人で帰るんだ！

「悪いが、心中するのはもっと先の未来で頼む」

『最近の発作です』

「先輩？…なんで私の頭撫でるの？」

「ん？あー…エリナを見ると起きる発作みたいなものだ。気にしないでくれ」

そんなことを笑顔で言いながら暖かく心地よい感触を私の頭にもたらし続ける先輩をじつと見て、身体が火照ってしまうのもきつと一種の発作

「顔真っ赤だぞ」

「う、うるさいバカっ！」

『足して割って、ちょうど』

「暑いからって飲み物注文しすぎだろエリナ」

「っ／／…た、足して割って二人分にしよう先輩！」

照れながら俺のコップに飲料を注ぐ姿が可愛いのは認めよう

「こんなに飲めるわけないだろ!?!」

「…口移しでも…ダメ？」

なんだその発想は

そんなことされたら、俺が割合おかしくしちゃおうぜ？

『わかりやすいけれど、わかりにくい』

「せ、先輩！あの…っ」

モジモジと恥ずかしげに俯くエリナの要求に俺は瞬時に気づく

甘えて手でも繋ぎたくなつたに違いない
分かりやすいやつだ

「ほら」

差し出された俺の手を見て顔を輝かせると、彼女は俺の腕に抱きつ
いた

「っ!？」

「えへへ…」

やっぱり何するか分かりにくいやつだった

『寂しいなんて言えない』

「エリナ？浮かない顔だな」

「先輩が…っ…異動するって…」

仕事の都合なんだから寂しいなんてワガママ言えない

けど…ああダメ

涙がとまらないよ

「ああ、あの件は速攻で断った」

「えっ!？」

断れるの!？」

「エリナと会えないのは寂しいから嫌ですって言ったら、わりとあつ
さり」

…ばか

『届かない本当』

「す、好きなんです…先輩のこと」

「俺もエリナのこと好きだぞ」

…まただ

勇気を振り絞って言っても、先輩は笑顔で受け流す

本当の意味はきつと伝わってない

…もうこうなったら…!

「もう！屈んでください！」

「は？いきなりどしとっ!?」

この口付けの意味は…流石にわかりますよね？

『香水』

「あれ？なんの匂いだこれ？」

「…た、たぶん香水」

「香水？」

「うん…えと…買ってみたの」

先輩の好きそうなの選んでみた…なんて言えないけれど

「へえ…でも俺は」

「ひゃ!？」

コツンっ

とおでこ同士がぶつかる音

「エリナが一番好きだな」

「っ!？」

ど、どういう意味よばっ!

『痛い痛いのとんでいけ』

「いてえ！擦りむいてた」

さっきの戦いでか？

「もう！無茶するから」

「エリナに怪我して欲しくないからな」

「私だつて先輩に怪我して欲しくないよ!」

「大丈夫。お前が痛い痛いのとんでけー!つて言ってくれたら治るよ」

「なにそれ？痛い痛いのとんでけー?」

あれ胸が痛くなってきた

『届かない本当〜2〜』

「なあエリナ」

「なに？先輩！」

名を呼ぶと、すかさず笑顔で返事をする彼女が愛おしかった

「愛してる」

「へあ？…も、もう！冗談はやめてよね！」

頬を染めて睨む姿もかわいい

でも、どうしたら本気だって伝わるんだよ？

「俺は本気なんだ」

「…証拠はあるんでひう!？」

キスしてやった

『ご機嫌取りも楽しみのひとつ』（完成度がいまいちだったのでボツにしたネタ）

「先輩の事なんてもう知らない！」

腕を組んでぶいっとそっぽを向くエリナ

「悪かったって…お詫びになんでも言うこと聞いてやるから」

「…なんでも？」

っ?!しまった!

「今私、ちよつと行きたいお店があるんだよね〜…せーんぱい♪」

…まいったね

デートのお誘いか

楽しみがまた増えたぜ

『お気に召すまま』

「ねえ先輩！ギュー！…ってしていい？」

ニコニコと笑いながら、エリナが俺を見上げる

「別にかまわないぞ」

「やったー！はい！ぎゅー！」

許可を出すと同時に、遠慮なく華奢な腕で体に抱きついてきた
そして俺の胸に顔を押し付けながらもう一言

「キスしたい」

「…ははっ、お気に召すままに」

『見てないけど』（文字数オーバーでボツになったネタ）

「先輩！また見てたでしょ！」

キツと俺を睨むエリナから、慌てて視線を逸らす

「何を？」

「何って…わ、私のパンツ！」

そんな直球!?

「見てない！」

「…何色だった？」

「白」

あ、やべ

「やっぱり見てるじゃない！」

「いやー。エリナが可愛くてつい」

「ばっ…！そ、そんなこと言っても許さないんだから！」

…そういう割に、顔真っ赤だぜエリナ

『大人しく降参して』

「…あのー、エリナさん？」

流石に起きたら馬乗りされてたって状況は驚くぞ

「先輩！なんで昨日の任務私を置いていったの!？」

「あ、危ないと思って」

「ばか！だったら尚更1人で行っちゃダメでしょ！」

「は、はい！」

おでこが触れ合う距離で睨む彼女に、俺は大人しく降参するしかなかった

馴れ初め

『馴れ初め』

グツ…

神機を握る手に力を込めた

「ふう〜…がんばらないと…私だって、ゴツドイーターなんだから…！」

訓練場にて、私は模擬戦闘用のアラガミを前に気合を入れる

ついこのあいだ、ブラッドとかいう第3世代の神機使いの部隊が極東にやってきた

確かに戦力増強はありがたいことなのだろうけど…なんかくやし
い

「…今までここを守りきってきたのは私達なんだから…っ！」

とは言っても、私自身は実戦経験も数える程しかないのだが

「ふっ…！」

構えたチャージスピアを大型アラガミのヴァジュラを模した訓練用ターゲットに深々と突き刺す

神機の扱いに慣れていなかった最初に比べれば、だいぶマシンな動き
になってるはずだ

「えいっ！えいっ！」

そのまま何度も何度も標的に矛先を突き立てる

コウタ隊長には前に出すぎだとか怒られちゃってるけど、アラガミ
を根絶させたい思いが強すぎて自分でも突撃思考を抑えられなかつ
た

エリックを…お兄ちゃんを私から奪ったアイツらだけは絶対に許
さない…！

「…っ！」

ブシュツッ！

怒りを込めて訓練用ヴァジュラの顔面を貫くと、結合崩壊まで再現
されている顔が割れて崩れる

「覚悟してなさいよアラガミ…私が絶対…！」

ガチャ：

構えた神機をおろす

今日はもういいだろう

疲れたし、明日は仕事だ

部屋に帰って休もう

「あ…」

そういえば明日の仕事はブラッドとの合同任務だって言ってたっけ…？

「私の力を見せるチャンス…」

ブラッドの中にも、まだゴツドイーターになって間もない人もいると聞いた

たぶん私と入隊時期も大差ないはず

第3世代だかなんだか知らないけど、私だってできるってところを見せつけてやる…！

「…ん？」

部屋の入口へ歩き出すと、扉が開いて誰かが入ってくるのが見えた

あれは確か…

「あなたは…ブラッドの」

「ん？あー…こんちわーつと…エリナ…だったよね？」

こちらに気づくとニコニコと人当たりの良さそうな笑顔で手を振りながら近づいてきたその人は、確かブラッドの副隊長とか言われていた

「…ええ。こんにちは」

この人も入隊年月は私と変わらなかったはず

…なのにもう副隊長をつとめている

私は少し悔しくなって、むすつと頬を膨らませてしまっていた

「訓練してたの？」

「はい」

見ればわかるでしょ！

という言葉はなんとか飲み込んだ

相手はエミールじゃないのだ

いきなりそんな態度をとるのは流石に失礼すぎる

：私だつて嫉妬心で本能のまま発言するほど子供じゃないもん

「へー…チャージスピアかく。俺あんまり使ったことなくてさ」

頭を掻きハハハと笑いながら私の神機を見てくるブラッド副隊長

「と、言つても実戦経験はそれほどないんだけど」

そう言つて彼が背後から取り出したのは、大きなバスターブレードだつた

：ソーマさんと同じバスター使い…

「でも副隊長なんですよね？あなた」

「あ…うん。でも大したことなんてしてないんだ。マルドウークを追つ払つた時だつて必死で神機を振り回してたら偶然つて感じで…」
「マルドウーク…？確か最近見つかった感応種とかいうアラガミで、通常のゴッドイーターでは神機がまともに動かなくなるから相手にできないっていう…」

そういえばエミールがフライアに行つてる時遭遇したとか言つて大騒ぎしてたのがうざかつたけど、その時退けたのが彼ということだつたのか

「そうそう！詳しいねエリナ」

瞳を見開いて驚く彼に、少しだけ得意げになつて胸をはる

「こう見えて私、座学には自信あるんですよ」

「まじ!? すごいな！俺まだまだ知らないこと多くてさ」

パシパシと馴れ馴れしく肩を叩いてきたけど、不思議と嫌な感じはしなかつた

むしろ褒められてちよつと気分がいい

「じゃー今度予定空いてる時に、勉強会でもします？」

「あ…気持ちちはスゲーありがたいんだけど、座学も含めてトレーニングの予定がけつこう組まれちゃつてるんだよな…だから合わせられる時間あんまりないかも」

「あ…そうですか」

…ちよつとがっかり

私の得意分野を見せつけてやるチャンスだつたのになあ

「まあでも、確か明日は合同任務だよな？楽しみにしてるぜエリナ」
「こちらこそ、よろしくおねがいます」

「おう！動き参考にさせてもらうから、よろしくな！」

「え？…あ、はい…」

…あれ？

もしかして私、めっちゃくちゃ期待されてる？

「さーてー！じゃー俺も訓練始めるかな」

大きな神機をブンブンと振りまいて構える彼を見ながら、私は少しだけ緊張してしまっていた

流石に実戦で人のお手本になれる動きがとれると思ってるほど自惚れてはいない

どうしよ…ちよつと座学の成績がいいからって、調子にのってエリート面しすぎちゃったかも…

「うおおおおおおりゃあああああ!!!」

そんな私の心配をよそに、彼は新たに出現した訓練用ターゲットを相手にバスターブレードを叩きつけていた

ガツシュウン！というものすごい音が響いて、対象が真つ二つに…って、うそ!?

「…すごい…」

思わず声が漏れてしまった

ここの訓練用の敵は、実戦データを元に耐久力も忠実に再現されているはずだ

…でも、今この人はたったの一撃でアラガミを確実に絶命させる攻撃を放って見せた

いくら一発が重いバスターブレードだからって、こうもうまくいくものなの!?

「え…あはは！全然すごくなかないって。コイツ動かないから当てるの楽だし。実戦じゃ全然攻撃あてらんなくて、ジュリウス達の足引っ張ってばっかりさ」

謙虚に言いながら額の汗を拭う彼を見て、私はなんだかゴツドイーターとしての実力だけではなく、精神的にも負けている気がしてなら

なかった

「で？エリナはもう訓練終わり？」

「え…あ、うん…今から帰ろうと思って…」

「そか！じゃー今度一緒にメシでも食おうぜ！改めて、明日はよろしくな！」

「は、はい！お疲れ様…です」

彼を直視出来なくて、私はすごくごとその場を後にするのだった

…負けてられない…！

私だって、もつと強くなつて極東を守り抜いて見せるんだから…！

↳翌日↳

任務の前にラウンジで集合した私達第一部隊とブラッドの面々で、チーム分けが行われた

ちようど3人1組で分けられるため、私達第一部隊は必然的に全員バラバラということになる

じゃないと合同任務の意味がないしね

「よーし。じゃーチーム分けはこんな感じでどうだ？」

コウタ隊長がテーブルにヒラリと落とした一枚の紙に、私達は注目した

えーつと私のチームはつと…

「お？俺と同じチームだな！よろしくエリナ！」

「あ、昨日の…」

そっか

この人と同じチームなのか

昨日の訓練場での出来事を思い出す

…ちよつと安心

って、ダメダメ！なに他人頼りの思考してるのよ私は！

「…エリナ？どうした？」

「っ！いい、いえ！なんでも…よろしくお願いします」

「お、おう。よろしく」

ぶるぶると頭を振って、弱気な考えを捨て去る
しつかりしなさい私！

「あ！副隊長！私もそつちのチームみたい！よろしくね！」

にゅいっと彼の背後から顔を覗かせた女性が、にこっといい笑顔で
こちらに手を振りながら挨拶をしてくれた

彼女の名前はナナさん

私とほぼ同期だったはずだ

「はい。よろしくお願いします」

「あっ…そうだ！」

ぺこりと頭を下げると、ナナさんは一旦先輩の影に引つ込みどこか
ら取り出したのか、大きな袋を持って私の目の前にそれを置いた

「えっと…これは？」

「ナナ。お前ホント好きだなこれ」

「まあね〜！おいしいじゃん！」

副隊長の方はこの中身が分かっているようだが…

「じゃーエリナちゃん！はいこれ！お近づきの印に！」

彼女が取り出したものは、小型のフランスパン…になにやら挟んで
ある食べ物だった

「…えっと、なんですかこれ？」

ニコニコと笑顔で差し出してきたので、無視するのとはばかられた
私はそつと例のパンを受け取った

「お母さん直伝おでんパン！おいしいからぜひ食べてみてよ！おかわ
りもいっぱいあるよー！」

ドサツという重そうな音を立てながら置かれる袋の中身が全てお
でんパンとやらだということを理解して、私は開いた口がふさがらな
かった

「おいおい。これから任務だつてわかつてるのかナナ？」

「え？だからこそ、お腹いっぱいにしなくちゃだめでしょー？ハラが
減つてはなんとやらつていうじゃん」

「…まあお前ならそう言うと思ってたけど」

いつものことなのか、副隊長さんは呆れたように首を振り私の方へ苦笑いしたまま顔を向けた

「エリナ。嫌だったら無理せず断ったっていいんだぜ？」

「い、いえーちよつと驚いただけで…ありがとうございます」

ぱくつ…とりあえず一口食べてみる

…思ってたよりおいしい

「えへへーおいしいでしょー！」

笑顔でピースをするナナさんに私も頷いて合意を示した

「よしーじゃーそれぞれ軽い交流も済んだみたいだし、しゅっp…つてエリナ。お前なに食ってんの？」

「っ!？」

どうやら他チームも一通り挨拶などを終わらせたみたいで、コウタ隊長がまどめに入っていたみたい

そこでおでんパンを啜えている私に気づいて…

彼に名指しされたことで、周囲の視線が一齐にこちらに集まり私は恥ずかしさで頬を染めながら俯いた

「あ、いや…これは…！」

「コウタさん。これはおでんパンって言ってナナのお気に入りの食べ物で…こうやって知り合った人にまず渡しちゃうクセがあるんですよ」

すっ…と私を周囲の目から守るように移動して、ブラッドの副隊長さんがコウタ隊長に説明をしてくれた

「そうそうー…とってもおいしいからコウタさんも食べませんか!？」

そして人の視線をまったく気にしない様子のナナさんが大きな袋からおでんパンを取り出し、ずいずいとコウタ隊長の目の前につき出す様子が副隊長さん越しにちらりと見える

「え…あ、ありがとう」

「せっかくだから、みんなもどうぞー！お腹すいてたら力でないよー！」

「お、おい!?!ナナ!?!」

勢いに押されて受け取ってしまったコウタ隊長に続いて、結局その場にいた全員がおでんパンを受け取る事になってしまったのだ

…うん…おいしい♪

チームごとに別れたあと、私達はミツシヨン現場である『鎮魂の廃寺』へ向かうためのヘリに乗っていた

とりあえずさっきの件に関してお礼を言っておいたほうがいいかなど、向かいのシート席に座って端末を見ている副隊長さんに視線を合わせる

「あ、あのー…さっきは…どうも」

…でも、面と向かうとあの程度で恥ずかしくなってしまったことが情けなくて、ちゃんとお礼を言えなかった

「え？さっきって？」

「だ、だから…さっきのチーム分けのとき…」

「??？」

不思議そうな顔で首をかしげる彼を見て、私の方が焦ってしまう
…もしかして、あれぐらいのことでお礼言われると思ってる…とか？

「…と、とにかく！ありがとうございます！」

だからと言ってここで下がるわけにもいかず、お礼の言葉だけは伝えておく

…別に理由なんて分かんなくてもいいもん

「お、おう…？」

しばらく怪訝にこちらを見ていた副隊長さんだったが、しばらくするとまた端末に視線を戻してしまった

「ごめんねエリナちゃん。うちの副隊長すっごくお人よしでさー」

「え？」

私の様子を隣で座って見ていたナナさんが、ヒソヒソと耳打ちして
くる

「最初の実戦でも私をかばおうとして敵に背を向けてたし、シエル
ちゃんが赤い雨の中取り残されたときも神機兵に乗って無茶するし
…」

えっと…

つまり？

「その時もね、私あとでお礼言ったんだけど『え？なんのこと？』って
言われちゃって…理由話しても『大したことしてないから』ってさ」
チラツと彼女は副隊長に視線を向ける

「大したことしてたくないよね〜！下手したら自分が死んじゃってた
かもしれないのにさ」

「…うん」

そっか…

同じ部隊の仲間を助けるために自分の命を危険にさらしてまで行
動する…そういう人なんだこの人は

…そうだよね。それに比べたらさっきのなんてとても些細なこと

あーあ、お礼を言うのに緊張してた私がバカみたいじゃない

「ところで副隊長、さっきから何見てるの？」

「ん？ああ、今日の任務の詳細だよ」

ナナさんの問いに、視線を上げて彼が答える

「標的はラージャー1体。だけど、周囲に小型アラガミの反応も無数に
ある…ってね」

「へえー…真面目だねえ〜。出発する前にも確認してたでしょ？」

「そりや真面目にもなるさ。ナナとエリナにもしものことがあったら
いかんからな」

表情を引き締めたまま私達を見る副隊長さん

でも、私達だけじゃないでしょ？

「あなただっつて気をつけてくださいよ？ブラッドだからって不死身
じゃないんだから…」

まだちよつとしか関わったことないけど、この人が仲間を助けるために自分を犠牲にすることをためらわない人だというのは、話を聞いてなんとなく分かった

だから、こつちも念を押しておく

「ははっ！心配してくれてありがとうエリナ」

「そ、それはこつちのセリフです！ありがとうございます！」

にっこいい笑顔を向けられて、私はため息を吐きながら身を乗り出して副隊長さんに言い放つ

「え？あ、ああ…」

きよんとしながらこつちを見るブラッド副隊長

なんでだろ…ちよつとムキになっちゃった

…この人にはお兄ちゃんみたいに死んで欲しくないな…

『作戦エリア内への到着を確認。任務を開始してください』

今回オペレーターを勤めてくれるフランさんという人の声が聞こえる

「了解！…準備はいいか二人共？」

出撃地点

静かに降る雪と満天の星空が幻想的な『鎮魂の廃寺』に到着

だが、この景色に見とれているヒマはない

「はいっ…！」

グツと神機を握る手に力を込めて、私は昨日の訓練で得た感覚をしっかりと思い出していた

「だいじょうぶだよ副隊長！…ちよつと寒いけど」

「あのなく。だからあれほど厚着しろって…まあいい。それじゃー今回俺は指揮を執るってことになってるから、もう一回作戦を説明するぜ」

副隊長さんの作戦では、安全を考慮してまず集団で行動し小型のアラガミから排除する

小型アラガミぐらいひとりでも倒せます！つて私は言ったんだけど、彼はお互いの動きがまだ掴めていないからとりあえずザコを狩りながら仲間の動きを見たい。とのこと

一理あるし、私も賛成せざるを得なかった

その際に聴力に優れているヤクシヤに合流されないように敵の位置に常に気を配る

幸いこの場所は建物のおかげで地形が入り組んでおり、簡単には敵の合流を許さない場所だ

ただしその分狭いので、万が一合流された場合一度引いて体勢を立て直す

そして小型が片付いたら、全員でヤクシヤを集中攻撃

…まとめるとこんな感じ

「…つと、作戦はこれでどうだ？」

私とナナさんの顔を交互に見る副隊長さんに、頷いて合意を示す

…緊張してきた

手が震える

…な、情けないわよエリナ！

これは寒さのせい！そう！寒いから！

そう自分に言い聞かせて、恐怖をごまかした

「よーし！頑張ろうね！副隊長！エリナちゃん！」

笑顔でおー！と手をあげるナナさんが、真っ先に戦場へと降りていく

「おいおい！あんまり先走るなよ！」

「りよーかいりよーか…あつ！標的はつけーん！食べちやうぞー！」

高台から見下ろすと、ナナさんは近くにいたオウガテイルにさっそくブーストハンマーを掲げて突進していた

「やれやれ…じゃーエリナ、俺たちも行くこうか」

「あ…は、はい！」

声が震える

「…安心しろって。俺達がついてる。仲間がいれば怖くなんてないさ」

怖がってることがバレてしまったのだろうか

ポンポンと頭を撫でられた

「ばっ…！私はひとりだって、こ、怖くありません！そ、そつちこそ！足引つ張らないですよ!？」

それが悔しくて、せっかくの厚意に生意気な返事をしてしまったやばっと思っても言ってしまったことは取り消せない

気まずくて俯いていたら、またポンと頭に手を置かれた

「はは…そうだな！わりい。でも、俺たちが危なくなったら助けてくれよ？期待してるぜ」

優しい笑顔のまままでそれだけ言うと、副隊長さんは私の頭から手を離しナナさんに続いて戦場に降りていく

「…ごめんなさい」

私はあなたが思ってるほど強い人じゃないんです

彼の姿が見えなくなっただけからしか謝罪ができない自分が情けなかった

「うりやあ〜！」

ゴスツ！

ナナさんが振り上げた神機がオウガテイルの顎を打ち砕き、空中に飛ばし上げる

ドサツと頭から地面に墜落するころには、完全に生きてる気配はなかった

「おーしまいー！」

作戦通り、ヤクシヤに気づかれぬようエリア内を団体で移動し私たちは小型のアラガミを順調に倒していたのだが…

正直ブラッドの二人は、とても私と同期とは思えないほどの身のこなしだった

「やるなナナー！よしっ！俺も負けてられないぜ！」

前方でフラフラと浮遊していたザイゴートを発見

今度は副隊長が大きなバスターブレードを担いで一歩前にでる

…のが見えた次の瞬間には彼は空中で神機を振り上げていた

悲鳴を上げるスキすらなく真つ二つになる標的

「速い…！」

私では、目で追うこともできないほどに

力の差をひしひしと感じる

…私だって…私だって…っ！

『油断しないで！まだ近くにアラガミの反応があります！』

「っ!?…エリナ！後ろ！」

「え?…」

笑顔で振り返っていた副隊長さんが、フランさんの通信を聞いて私の背後に視線を向けると同時に焦りの表情へと一変し、ぞわつと背筋に寒気が走る

「くっ…！」

「エリナちゃん！」

慌てて振り返ると、目の前にキラリと光るオウガテイルの牙が…

こんな至近距離じゃかわせない…！

「うそ…でしよ…！」

絶望

頭によぎるのはその二文字

やだ…死にたくない…死にたくない…

死ぬのは…

「いやあああああああ!!！」

静かな夜空に私の悲鳴が響いた

…こんなところで…私は終わるの…？

「ブンツ！」という空気を切り裂く音が耳を通り過ぎた

意味はないと分かっている、瞳を閉じてグツと身構える

……

……

…？

…しかし、いつまでたつても痛みは襲ってこない

「副隊長…？」

「っ！」

ナナさんの震え声に嫌な予感がして、私は恐る恐る目を開けた
まさか私を庇って…

「あ、あぶねえ…！大丈夫かエリナ!？」

…あれ？すごい元気そう…

慌てた様子ではあるが両手で私の肩を掴んで揺さぶる彼に、怪我の類は見当たらない

「神機を迷わず投げつけるなんて流石副隊長！」

ナナさんがパチパチと拍手しながら笑っている

「こら…笑い事じゃないだろ！」

神機を投げつけた…？

周囲を見渡してみると…あつた

すぐそばの建物に、副隊長さんの神機が近接形態のまま突き刺さつ
てる

…オウガテイルを縫い止めながら

もしかしてさっきの空気音は神機を投げた時の？

「どうやら、ホントに怪我はないみたいだな…よかったよかった！」

『エリナさんに怪我がなかったのは確かに安心しましたが、副隊長
…くれぐれも無茶な行動はなさらないでください』

「わかってるって」

仕留められたアラガミをポカンと見つめる私に怪我がないことを
確認すると、彼は神機を引き抜きに行く

とつくに絶命してるオウガテイルがドサリと地面に崩れ落ちる音
で、やっと私は現状を把握した

「あ、あの…」

ブラッドの実力に嫉妬して、集中力をとぎらせた自分に非があるこ

とは明らか

「ああ、気にすんな。仲間なんだから、助け合うのは当然だろう？」

神機を担ぎながら、彼は私の頭を帽子越しにワシヤワシヤと撫でる

…助け合う？

…違う、私はこの人に助けられてばかりだ

助けになんてなっていない

むしろ…

「…ごめんなさい」

「だーかーらー…まあいいか。この話はこれでおしまいだ。いいな？」

「…うん」

ポンポンと最後に手の感触を残して、私にくるりと背を向ける

…お兄ちゃんになでももらった時とはまた違う…

「…暖かい」

「え？」

「っ！な、なんでもない！」

思っていたことを口に出してしまったことに気づき、私は慌ててブルブルと頭を振った

…次の瞬間

ドスンっ！

大きな音が鳴り響く

なに!?

何の音!?

「あ！二人共！ラー ज्याがきたよ！」

私達の成り行きを見守っていたナナさんが指さした方向を見る

「っ！かわせ！」

こちらに向かつて砲塔を構えるラー ज्याを見るやいなや、副隊長さんの掛け声

反射的に私も左側へと転がった

右半身に、勢いよく風が吹く感覚が通り過ぎる

振り返ると、雪が積もっていたはずの道が抉られていて茶色の地面

が露出していた

：こんなの直でくらつたら、いくら頑丈なゴツドイーターでもひとたまりもないだろう

「っ！」

よそ見しちやダメよエリナ！

敵から目を離すな：

ラー ज्याの方に視線を向ける

：今はこちらに背を向けて、副隊長さんと交戦中だった

彼は次々と繰り出される砲撃をかわしつつ、反撃の機会を伺っているみたいだ

トンッ

肩に手を置かれ振り返ると、ナナさんがにやつと親指を立ててからラー ज्याの背を指差す

：不意打ちしようってことかな

無言で頷いて合図を返し、私は神機を握る手に力を込めた
いくよ：オスカー…！

近接形態のチャージスピアを構え、一気に踏む込む…！

標的の背中がグングン近づき、攻撃圏内に入る！
もらった！

「くらえっー！」

昨日の訓練の感覚を思い出し、アラガミの体に神機を突き刺した肉を抉る感触が手に伝わり、血が飛び散る音が耳にこびりつく

「グオアアアオオオアア!!」

ラー ज्याが声にならない叫び声をあげるが容赦はしない！

こいつらがこの程度で倒れないのは百も承知だ

「はあああああ!!」

グサッ！グサッ！

私が集中して狙っていたのは標的の右足

動きを止めることが目的だった

ガクッ！

度重なるチャージスピアの一点集中攻撃に耐えられなくなった

ラージヤは中途半端に振り返りこそしたが、ガクリと片膝をついてスキだらけになる

「ナイス！エリナちゃん！」

そこですかさず背後から駆け寄ってきたナナさんが跳躍して私を飛び越え：

「ドッカーンっ！」

振りかぶったチャージハンマーに体重を乗せた彼女の一撃が標的の頭に炸裂する

グツシヤアア!!

高所からの重力も加わっているその攻撃の威力は言うまでもない

『対象のオラクル反応消失！お見事です』

断末魔の叫び声をあげることすら叶わず、ラージヤの頭は粉々に砕け散り残った体も静かに崩れ落ちた

「おおー！スゲーな二人共！」

私達が戦っている間その様子を油断せず見ていた副隊長さんも、決着がついたとわかると笑顔で拍手してくれた

いつの間にか銃形態に持ち替えているところを見ると、端からサポートに専念するつもりだったみたい

「でしよー！はいエリナちゃん！タッチ！」

「ふふん！当然の結果よ！」

ナナさんとパンつとハイタッチ！

やった！少しはいいところ見せられたかな？

彼の方へ振り返ると、グーサインを送って褒めてくれた

：ちよつと嬉しい

けどまだまだ！調子にのっちゃダメなんだから…！

「そんじやー、コアを摘出してこの任務もしゅーりよ…」

『き、緊急事態です！』

彼がラージヤの遺体を捕食した直後だった

フランさんからの連絡が入る

『想定外の大型種が作戦エリア内に侵入！位置情報、送信します！』
うそ?!

新手!?

「了解だ。迎撃する」

通信内容を確認したとたん、副隊長さんの顔はまた油断なく引き締まる

私も慌てて神機を構え直した

極東じゃ新手の乱入なんて珍しくないじゃない

落ち着け落ち着け…

「副隊長！近いよ！すぐそこに…いた！」

送られてきた位置情報を見ていたナナさんが指差した方向へと目を向ける

のっそのっそとゆっくりだが、確実に距離を詰めてくるアラガミがいた

「ヴァジュラ…！」

電撃を扱う大型のアラガミ！

昨日の訓練用ターゲットのモデルだが、実物の迫力はこの遠目でも全然違う

震える体に力を入れて、グツとこらえる

ビビってる場合じゃないんだから…！

「こりやまた大物だな…」

副隊長さんがバスターブレードを正面に構えた

向こうもこちらの存在に気づいたのか

威嚇するように姿勢を屈めている

「…エリナ、こいつとの交戦経験は？」

「…ありません」

…そう

実はコイツと実戦で遭遇すること事態が初なのだ

まだまだ私の実力では、ヴァジュラとは戦わせてもらえなかったから…

「…よし。じゃー無理はしないで、まずは動きを見るんだ」

「わ、わかりました…」

視線で一步後ろへ下がるように合図を送られる

…正直悔しかつたけど、私が前にでたら足を引つ張ってしまうことは明らかだ

ここは素直に言うことを聞いておく

「ナナも、さつきみたいにスキをつけるタイミングを見計らってくれ」
「了解！」

そう言つてナナさんも下がらせると、一人ジリジリとアラガミと距離を詰める副隊長

ピリピリとした緊張感が空気を震わせ伝わってくる

対峙していない私まで冷や汗が浮かぶほどの…

「…っ！」

一瞬の静寂の後

先に動いたのは副隊長さんだった

さつきも見せてくれた目にも止まらぬ速さの踏み込み

「うおりゃあー！」

ブンっ！という空を裂く音と共に、ヴァジュラの顎をめがけてバスターブレードの強烈な一撃が振り上がっていた

…が、相手はそれを紙一重で交わし、両手の爪で彼に襲いかかる
ガンツ！

「っ！」

それを弾いてそのまま背後を取ろうとする副隊長

…視線の合図がきた

おそらく先ほどのラージャ戦のように片方に気を取られているうちに挟み撃ちしようという魂胆なのだろう

任せてください！

そのぐらいなら、私にだって…！

彼にコクリと頷いて合意を示す

…だが、当のヴァジュラはいつまでたつても後ろに回り込んだ副隊長の方へは意識を向けず、そのまま私をじっと見ていた
もしかして…

「狙いは私…っ!?!」

その考えにまで至って、再び背中がぞわつとする感覚

神機を握る手が震える

どうしようどうしよう…！

どうすればいいの!?

頭が完全にパニックになり、思わず半歩下がってしまった

次の瞬間

「エリナちゃん！こっち来てる！」

ナナさんの声を聞くまでもなかった

ヴァジュラは私めがけて走ってきていたのだから

「っ！くそっ！エリナ！装甲を構えろ！」

副隊長さんの声がやけに遠くに聞こえる

自分の心臓の音がうるさい

ドンっ！ドンっ！

彼がヴァジュラの背後から射撃による援護をしてくれているのが見えるが、敵は右へ左へと複雑なステップでそれらを躲し私との距離をドンドン詰めてきていた

ドスンッ！

「あ…あっ…！」

そして…目の前に…

「はああ！」

ナナさんが横からハンマーで殴りかかるのが見えたが、ヴァジュラはその行動を読んでいたのか爪でいとも簡単になぎ払ってしまう

「うわあっ！」

「ナナさん！」

彼女が吹き飛ばされてもそれを追撃する素振りは見せず、コイツは私に狙いを定めていた

「…っ」

こわい…！

体が…動かない…！

ヴァジュラが口を開ける動作がやけにゆっくり見えた

…そして噛み付く瞬間も

ブシヤア！

「…………え？」

痛みは…

無かった

けれど私の目の前は血飛沫で赤く染まっている

「ぐあぁっ…くっ…そ…エリ…ナ…大丈夫…か…っ！」

副隊長さんがいた

彼の左腕が…私とアラガミの間に…

ヴァジュラの…口のなか…に…っ!!!

極東支部の病室前

私は自分の無力さを呪っていた

あの後、なんとか起き上がってきたナナさんがスタングレネードを使つてヴァジュラから副隊長さんを引き離し救出

撤退要請を出したことにより、救護班も来て最悪の事態は免れた

…そしてそこでも私は役にたつていなかった

ぐつと拳を握り締める

…何が

『極東を守ってみせる！』

だ…

同行者の足をひっぱりあげくに怪我まで負わせてしまつて…

そのうえ自分自身は無傷ときたもんだ

本来の目的は達成していたため任務の失敗という扱いにはならなかったものの、情けなくてブラッド隊の人にも第一部隊のメンバーにも合わせる顔がない

想定外の乱入だったし仕方ない

任務に危険は付き物

別チームで任務を終えていたメンバーは、私が頭を下げた謝つても

そう声をかけてくれたけど…

それが余計に辛かった

「…エリナさん」

「っ！は、はい！」

病室の扉が開き、ヤエさんが顔出す

「彼の容態ですが、少し落ち着いてきたので…面談しますか？」

「…はい」

副隊長さんにもちやんと謝らなくちゃ…

室内に入ると気をきかせてくれたのか、ヤエさんはお辞儀をして部屋の外にでる

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ」

扉を閉めてくれる前にお礼を言って、私は部屋の中を見渡した

病室はひっそりと静まり返っており、奥のベッドに腰掛けているブラッドの副隊長以外の姿は見えない

「…あの」

「ん…あー、エリナか」

にこっと笑顔を浮かべて、彼は右手をひらひらと振りながら私を見ている

…正直、声をかけたら嫌な顔をされるんじゃないかと思っていた

その左腕の怪我は私のせいなんだし…

包帯でぐるぐる巻きにされている患部を目の当たりにして、ズキンと罪悪感で胸が痛む

…これ以上は…近づけない

私は部屋の入口に立ったまま、ベッドに座る副隊長さんを見ていた
「おいおい。なに泣きそうな顔してんだ？」

「っ！べ、別にそんな顔…」

言われて初めて気が付く

いつの間にか潤んできてしまっていた視界

慌ててゴシゴシと腕で目をこすった

「そんなに気にするなって！エリナのせいじゃねーよ。それにこの程

度の怪我、ゴッドイーターだったら傷跡も残らず完治できるって！」
はははと笑い声まで上げるブラッド副隊長

「…どうしてよ」

なんで私を責めないの？

なんであなたは笑って接してくれるのよ…！

「え？」

「あなたがいなかったら、そもそも私はヤクシヤと戦う前に死んでた
！」

オウガテイルに喰い殺されて…

「ヴァジュラの攻撃までかばってくれて…それで気にするなつてのが
無理な話よ…！」

なのに…なのに…っ！

「どうしてよ…なんで笑ってるのよっ！出発前日に大口叩いてこのザ
マだったんだよ!?!…怒られても…しょうがないのにつ…！」

…分かってる

…私は甘えてるのだ

誰にも怒られ責められないのが逆に怖くて耐えられなくて…ホン
トに自分で自分が嫌になる

「…エリナ」

ほら…またそんな優しい声で私を呼ぶ

「…もうちよいこっち来てくれないか？そんなところからじゃ話しに
くいだろ？」

ちよいちよいと手招きされて、仕方なく私は顔を俯かせたまま近づ
いていく

「よし、あのな」

「…なに？」

「俺はもつと強くなりたい」

「え？」

予想外の言葉に、私は面食らって顔を上げてしまった

ふつと柔らかい笑みを浮かべたままの副隊長さんが、そのまま優し
く頭に右手を乗せてくれる

「俺のそばにいる人を誰も傷つけないぐらい…強く」

「何言ってるんですか！私の方こそ…強くなりたい…ううん。強くな
らなくちゃいけないっ！」

あなたはもう十分強いじゃないですか

実際ナナさんは軽傷、私に至っては無傷なのだから…

そう思っただけ彼の顔を見ると、なにやらにやりと意味深な笑顔を浮か
べていて…

「そうか、エリナもか…ほうほう。俺たちどうやら目標が一緒みたい
だな！」

「え？…え？」

頭の撫で方が若干乱暴になり、ワシヤワシヤしながら彼は一つ提案
してきた

「昨日はああ言っただけさ…時間合うとき、一緒に訓練でもするか？
任務でもいいけど」

「あ…」

私を覗き込むその瞳は優しさに満ち溢れていて、こっちの思惑なん
か全部見透かされてる気がして…

「…ありがとう…それから」

そつと彼の左手を痛めないように優しくとる

「ごめんなさい」

「…ああ」

今度は謝罪の言葉を否定せず、ただ短く返事をして頷くだけだった
私の気持ちを汲んでくれてるってことがよく分かって、ほんとに嬉
しくて…

「えつと…これからよろしくお願いします。副隊長さん」

自然と笑顔が浮かぶ

「ははっ、こちらこそ」

最後にポンつとあの温かい感触を私に残して、彼の手が離れた

正直名残惜しかったが、いつまでもここに居座るわけにはいかない

「またお見舞いきますね」

「おう。ありがとな。まあすぐに退院してやるけど」

「無理はダメだからね！」

「分かってるって！心配すんな！」

「…うん」

副隊長さんは包帯ぐるぐる巻きの左手を強がって振りながら、退室を送ってくれた

…今思い返せば、私はこの時からすでに彼に惹かれていたのかもしれない

その後、部屋の外で待機してしてくれたヤエさんにお礼を言って、さっそく訓練室まで向かう

まだもうちよつと余裕がある

この時間を使って少しでもあの人に近づぐために…

頑張るんだから！

END

七夕十

七夕

7月7日

今日は極東で七夕と呼ばれている日

ラウンジにはどこから調達したのか、笹の葉が窓際にもつきり用意されていた

テーブルには短冊が山積みされており、訪れた人達が各々願い事を書いては笹につるしている

心なしか、いつもより人が多い気もした

「先輩は見あたらないなあ…まだ帰ってきてないのかな…」

既に窓からは明かりが射し込まない時間になっている

私と彼も例に漏れず、仕事を終えてからラウンジに集合して一緒に短冊を書こうと約束をしていた

流星に先輩と毎日同じミツシヨンに行けるわけではない

私と所属部隊も実力も違うから、仕方ないんだけど…

「あ、そうだ」

それを願う事にすればいいじゃない！

『○○先輩といつも同じミツシヨンに行きたいです エリナ』

……

書いてみたはいいいけど、先輩の名前出しちゃったしこれつるすの恥ずかしいかも…

でも極東じゃ私達の関係なんてバレバレだし、別に変には思われな
いよね

「よっ！エーリナ♪」

「ひゃあ!？」

決心がつかずに笹の葉の前で短冊片手にうろうろしていたら、突然背後からガバツと抱きつかれた

「ちよーせ、せんぱいー!」

肩に乗る彼の頭の重みと、耳に吹き掛けられる息でカツ！と頬が熱

くなる

でも：悪くない

背中から優しい温かみが私の体に染み渡り、とても心地よかった
周りの視線なんて気にならない程に

「もう：遅いから心配したよ。短冊も書きちゃったからね！」

胸に回されていた彼の腕にそっと手を添えると、少しだけ抱きしめてくれる力が強まった

「わりいわりに、外出許可をとってたんだよ」

「外出許可？」

トクンッ

私の心臓が何かを期待して高鳴る

「ああ、このあとエリナ時間空いてるだろ？」

「も、もちろん！」

先輩と外出！

どこに連れていってくれるのだろうか…？

楽しみ！

「よし！じゃー短冊書き終わったら早速…って、エリナもう書き
ちゃったんだっけ？」

「え…あーう、うん！」

書いた内容を思い出し、慌てて抱擁から逃れ握っていた短冊を後ろ
手で隠した

「おいおい、なーに隠してんだ？ん？」

私の意図を察した先輩が、ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべなが
ら両手を広げてジリジリとせまる

「ちよーだ、ダメー！先輩も書いてくれるまで見せてあげないもん！」

むすつと頬を膨らませて反抗的に見上げても、彼は笑ったまま頷く
だけで

「よし分かった！なら、ぱぱつと書いて、一緒にかぎろうぜ」

先輩に迷いはなかった

どうやら最初から願い事を決めていたみたいだ

宣言通り、パパツと書いて私の目の前に自信満々でつきつける

『エリナと結婚できますように』

「っ!？」

ストレートすぎるっ!

思わず目を疑ってごしごしこすってしまったが、書いてあることは変わらない

「先輩直球すぎ…」

私は照れ隠しに小さな声でそれだけというのが精一杯だった

それでも嬉しさと震える体と赤くなる頬は、ごまかせてない自覚がある

「ははっ…だってこれが俺の今一番の願いだから」

大真面目な顔で私の頭を撫でながら、彼はその短冊をなんとジャンプして器用に笹の葉の上層部に貼り付けた

「ちよ! そんな目立つところだに!」

慌ててその周囲を見渡したが、流石に誰もあんな高さまでは貼り付けていなかった

見るだけで顔から火が吹き出そうな先輩の筆跡で書かれたあの文字が、ものすごく目立つ位置に…

「ばかっ…」

「いいだらべつにく、それより約束だ。エリナのも見せてくれよ」

…まあ、先輩のに比べたら私のなんて恥ずかしくもないよね

「はい…」

「…なるほどな…これは俺の願いでもある!」

あれ?

ちよつと嫌な予感が…

「ふっ!」

「あっ!」

やっぱり!

再びジャンプした先輩が私の短冊をつるした場所は…さっきのとなりだった

「ふたり揃ってめちやめちや目立つちやうじやない!」

「目立っていいだろ。俺達のだけすぐわかる！」

「それはすぐわかるけど…うう」

流石に周囲の反応が気になって改めて周りを見渡すと、知り合いの人もこちらからは面識のない人もみんなニヤニヤしながら私達を見ていた

ああ〜！もう！恥ずかしいなあ…

「んじゃーエリナ、外行くぞ」

「あつ…どこ行くの？」

「聖域だよ」

「ほら、足元気をつけろよ」

「う、うん」

私は先輩に手を取られ、聖域の山の中を歩いていた

…一体どこに向かっているのだろうか

「もうちよいだよ…ほら、あそこ」

「あそこ？」

彼が指さした場所は、ぼつかりと開けた何も無い草っぱらだった

…ますます意図がわからない

「こんなところに何があるの？」

「いいから、寝転んで空見上げてみ」

「??？」

またあのニヤニヤ笑いを浮かべる彼を若干訝しみながらも、私は言われたとおり寝転んで空を見してみる

「!!」

飛び込んできた景色は満天の星空だった

「…きれい」

思わず口をついて出てきた言葉に、先輩がくくつと笑うのが聞こえ

た

「いやー、この景色を七夕の日にエリナと見たくてなく、ベストポジションを探すのに苦労したぜ」

「もしかして最近夜中いなかったのって…」

「あー…うんまあ…そうだな、これ探してたんだよ」

ぽりぽりと頭を搔いて照れをぐまかす彼がすごく愛おしく感じる

「ありがと先輩…とっても嬉しい！」

「お、おう…どういたしまして」

先輩が寝転ぶ私の隣に腰を下ろした

そのまましばらく時間だけが過ぎていく

弱い風が肌を撫で、揺れる草木の音だけが聴覚を支配した

視界にはいつまでも見飽きない綺麗な星空

…そして隣には

「……あ」

目があった

くすつとどちらからともなく笑うと、お互いの声が風に乗って交じり合う

「先輩も横になりなよ」

「ああ、そうだな」

私の提案にのって体を横たえる彼

その手をすかさず捕まえる

「捕まえた♪」

「残念…これはトラップだ！」

それに反応してすかさず手の指を絡めてくる先輩

「ふふっ…流石先輩ですね」

「いやいや、エリナにはかなわないぜ」

こんなバカみたいな会話ですら、私はとても満たされるものを感じていた

「ねえ先輩…」

空に浮かぶ天の川

それを見ながら、私は一つ先輩に聞いてみる

「どうした？」

「もし…彦星と織姫みたいに、天の川みたいな障害で私達が会うことが難しくなったら…どうする？」

自然と握る手に力がこもった

「安心しろ。川なんて走ってわたってやるぜ。そんでエリナをそのまま連れ出すついでにその川を叩き割ってやる。こうやってな」

先輩がもう片方の手を手刀のように振り、私に笑顔を向ける

「…ありがと、先輩。頼もしいね！」

「当たり前前だろ。エリナを傷つける奴は許さねえ。お前は俺が守ってやる」

上半身を起こした先輩が星空をバックに頭を撫でてくれるのを、私はずっと眺めていた

今日は7月7日

最高の七夕でした♪

END

くオマケく

『ビキニの日』

「…あの…先輩…流石にこれはっ／＼／＼」

「え？エリナに似合うと思うけど？」

もう夏だっってことで、今度彼と支部内にある室内プールに遊びに行くことになった

水着なんて最近買ってなかったんで、お店に来てみたはいいもの…

「…
「こんな…ビキニなんて…うう」

先輩が決めてくれるのは確かに嬉しいけどさ…

恥ずかしいよ！

こんなの下着姿とほとんど変わらないじゃない！

「今更なに水着ごときで照れてるんだよ」

「う、うるさい！」

そういう問題じゃないの！

「そんなに嫌なら、ああいうのにするか？」

赤面する私をニヤニヤ見ながら、先輩が奥を指差す

「…殴りますよ？」

彼が指差している方向には全身覆うタイプの…いわば幼児向けの水着つてやつが陳列されていた

「いやいや似合うだろ！ほら！かわいいくまさんの帽子mぐおおああああ!!！」

あろうことか、冗談だと思つてたのに先輩はホントにその水着の一つを手を取つてこっちに持つてきた

しかも私にぐいぐい押し付けながらそんなことを言うもんだから、流石にカチンときてボディブローを叩き込んでやる

「…ナ、ナイスパンチ…」

お腹をかかえてうずくまる先輩を無視して、私は最初に手渡されたビキニをレジに持つていった

「これください！」

「え…あ、は、はい！」

すごい剣幕でカウンターにビキニを置くと、一部始終を見ていた店員さんが慌てて受け取る

「エリナ…それ」

のっそりと起き上がった先輩が、目を丸くしてこちらを見ていた

「私だつてこの程度の水着華麗に着こなせるつてところ、先輩に見せてあげるんだから…！」

見とれちやつても知らないからね！

「それは嬉しいし、いいんだけど…さつき渡したやつじゃサイズでかすぎなかったかああああぐああああああ!!！」

ベッドの日

「あれ!?どうしたの!?先輩の方から私の部屋を訪ねてくるなんて!」
私はその日の夜もいつも通り彼の部屋に向かおうとしていたのだが、ちょうど出発しようとした矢先に会いたかった人の方から訪問してきてくれた

驚きよりも嬉しさが顔と声に出てしまっていたのか、もうすっかり見慣れたニヤニヤ笑いを浮かべながら先輩がわたしの頭をポンポンと撫でる

「へへっ、たまにはいいだろ?エリナに会いたい気持ちを抑えられなかったんだよ」

またこの人はこうやって恥ずかしいことを惜しげもなく…

まあ、こういうのももう慣れたものだけだね

「ふーん…そんなに私に会いたかったんだ。せーんぱい♪」

だから、こう言って彼の腕を絡め取るぐらいの反撃ならできるようなっていた

「お?言うようになったなコイツ」

自由な方の手でわしやわしやと私の頭を少し乱暴に撫でる先輩

…ふふ♪

こういう撫で方するときは照れ隠しているのも既にお見通しなんだから!

「恥ずかしがることないですよー!私だっていつも先輩とは一緒にいたいんだから!もつと積極的にごつちの部屋来てもいいんだよ!」
上機嫌で額を彼の胸板に押し当てて思いつきり甘える

ここ…あつたかくて、すごく安心するんだよね

「ははっ…俺が恥ずかしがってることなんてお見通してか?」
「もちろん!先輩のことならなんでもわかっちゃうんだから!」

ニコリと満面の笑みで先輩の顔を見上げる

もちろん理由は先ほど述べたとおりキッチンとあるのだが、これを言ってしまうと器用な彼のことだ

照れ隠しのクセを直してしまうかもしれない

それじゃあ私が面白くないもんね〜！
ふふ、ごめんね先輩！

これは私だけの秘密にしちゃうから！
「まいったなそれは〜。でも、流星のお前もなんでいきなり俺がここに来たのかはわからんだろう？」

まいったという割には全然そんな風に見えずに笑みを絶やささない先輩が、張り付く私の後頭部に優しく手を当てて抱きしめながら耳元でそう囁く

…ちよつとくすぐりたい

「んっ…私に会いに来てくれたんじゃないの？」

頬をくすぐる彼の髪感触が心地よかった

「もちろんそれもあるけどな…エリナは今日が何の日か知ってるか？」

今日…？

えつと…なにか特別な日だっけ？

「ベッドの日だ」

「…え？」

ベッドの…え？

「ベッドの日だ。だから俺は今日エリナの部屋に来た」

「はい!？」

まってまって!？」

まずベッドの日ってなに!？」

驚いてポカンと口を開ける私から一旦距離をとる先輩

「いや、よく知らんけど今日はベッドの日というらしい」「知らないの!？」

「しかしそう聞いて、いつもお前は俺のベッドへ寝に来るけどその逆は全然ないなという考えにたどり着き今に至るといわけだ」「なにそれ!？」

じゃー先輩は今日私のベッドが目的で部屋に来たの？

「え…じゃーえつと…今日は私のベッドで一緒に寝るってこと…?」「そういえば確かに彼の部屋で一緒に寝たことは何回かあったけど、

私の部屋でっていうのは初めてかも…

あれ？

なんか意識し始めたら急に恥ずかしく…／／

「まあ、そういうことになる」

「あ…う、うん。そっか…じゃー…えつと…その…い、一緒に寝る？」

…／／

な、なに緊張してんのよ私！

べつに今更照れるようなことでもないでしょ！

「おっ？ではお言葉に甘えて…」

そう言うが早いか、いえーい！と夜中だというのにテンション高く叫んだ先輩がボフン！といい音を立てて私のベッドに飛び込み…

その瞬間、頭の中が真っ白になりドクドクと心臓が高鳴りだした

「いやあああああ!!! やっぱり恥ずかしい!!!」

いつも寝ているあのベッドに先輩が体を埋めている…！

ダメ、ダメ！

そう考えるとカッと頬が熱くなった

彼の腕を掴み強引にズルズルとベッドから引きずり下ろす

「いてててて!!! なにすんだよ!」

「や、やっぱり恥ずかしいから! せんぱいの部屋行こ! そしてそのベッドで一緒に寝よ!」

「なんで!」

うう…

なんか分かんないけどすっごい恥ずかしいんだもん!

「大丈夫だって安心しろ。俺はちゃんと毎日風呂に入ってるぞ汚くないでない」

「いやーそういうことを心配してるんじゃないやなくて!」

ふたたびベッドへと歩き出した先輩の腕を掴んで慌てて引き止める

「俺のベッドなら大丈夫でなんでお前のベッドじゃダメなんだよ…ハッ!」

私が必死に言い訳を考えて頭の中がいろんな熱でごちゃごちゃし

てる間に、彼は何やら思いついたのか

「ホンと咳払いをしてボソボソと呟きだした

「あ…すまん…エリナぐらいの歳なら…うん、まあ…そういうものあっても…ね？ベッドの近くに隠してもべつに構わないよ？自然なことだしね？でも俺がいるんだから言ってくればまあ…いつでも…ね？」

た、大変な勘違いをしているこの男!!!

「ち、ちがうよばかり！先輩のえっち！」

「え？違うの？じゃーホントなんでだよ？」

「っ…！それは…っ！」

どうやって伝えたらいいんだろこの恥ずかしぎ！

わからないよ！

「まあ何をそんなに照れてるのか分からないけど、物は試しだ。一回寝てみようぜ。すぐ慣れるってきつと」

「そうかな…」

いまだに収まらない胸の鼓動に手を当てる

「そうそう。だいたい俺のベッドだけ一緒に使ってるのも不公平だろ？」

う…まあ…それは一理あるけど…

「ぶつちやけいつもエリナが使ってるベッドで寝てみたい」

「欲望丸出しかこの変態！」

ペシッ！

「あたっ！なんだよ？お前だつて俺のベッドには躊躇なく飛び込んでくるくせに…」

「う、うるさい！」

思わず突っ込んでしまったが、バカな発言を聞いたおかげで緊張は少しほぐれてきた

「…ま、まあ？今日は先輩がせっかく来てくれたんだから、一緒に寝てあげてもいいよ？…仕方なくなんだからね！」

「おお…久々にツン成分きた」

「ツン成分つてなに!？」

わけのわからないことを言いながらも、ウツヒヨイ！と今度は腹の立つ叫び声を上げながら彼は私のベッドにダイブした

「っ……！」

だ、だめだめ！

意識しちゃうからまずいのよ！

私は努めて冷静を装い、まるで自分のベッドのように大の字になって天井を見ている先輩の隣に潜り込んだ

…てゆうかせま！

私の場所せま!?

なんで二人で寝るって言ってるのに中心でそんな格好で寝てんのよ!?

私だってそんな凶々しいことしたことないよ!?

「先輩場所とりすぎー！」

ガバツ！つと上半身を起こして、今にもベッドから落っこちそうな場所から抗議の声をあげる

「だいじょーぶだいじょーぶ。ほら、俺の腕を枕にすればいいだろ？」

「えっ！…あ…う、うん／＼／＼」

パンパンと自分の腕を叩いてそういう先輩の表情がすごく優しくて、私は思わず視線を逸らしてしまった

そんな顔、ずるいよ…

「じゃー…お邪魔します」

「おいおい。ここは元々お前のベッドだぞ」

「い、意識しないようにしてるんだから言わないで！」

「はいはい」

ギョッと枕がわりになってる彼の腕を握りながら、私は固く目を閉じ早く寝てしまおうと目論んでいた

…のだが

寝れない…緊張しちゃうって全然眠くない！

先輩のベッドでこの状況なら彼の温もりを感じながら安心して夢の世界へと旅立つことができるのだが

今は全く眠くない！

意識が覚醒しきって睡魔をまったく寄せ付けなかった

顔に集まる熱が腕越しに先輩へ伝わってしまうのではないかと思うと気が気でないし…

えっと…どうしようどうしよ…

ここは何か無難な話をして緊張をほぐすしか…

「なあエリナ」

「ひゃーひゃい!」

突如かけられた声に反射的に返事をした私の口から変な声が出る

「…どした?」

「な、なんでもない!」

「そうか?…なら、続き言うけどな」

なによもうこのタイミングで!

ちらりと彼の顔を伺えば何やら鼻をヒクヒクさせていて…

…って

な、なにしてるの先輩!?

え?え?

うそ!?

「でもベッドシートはちゃんと洗ってるし、私だってお風呂入ったし!変な匂いなんてしないでしょ!」

「は?」

「あ」

思わず口に出てしまっていた言葉に気づいて慌てて塞ぐがもう遅い

てゆうかさつき先輩がしていたのと同じ心配しちゃってるじゃない私のバカ!

「いや…べつに変な匂いとかは…全然」

「言わないで恥ずかしいから!」

ガバツ!と枕に抱きついて照れを隠そうとしたものの今はそれの代わりに彼の腕を使わせてもらっていたことに気づき、思いつきり顔を押し当ててしまつて全然効果がなかった

もー!

この腕噛み付いてやろうかな！

「むしろエリナのいい匂いがそこらじゅうからするし、その匂いに囲まれて本人も隣にいるもんだからまるでお前に体中抱きしめられながら横になつてゐたいですごく快適だぞ」

「…はえ？」

今…先輩なんて？

なんかとんでもない発言をスラスラとしていたような…

え？

私の匂いがそこら…じゅち…から？

体中だきし…め…えうつ?!?!?

「いやあああああああおあばかあああああああ!!!」

バツシン!!!

「ぶふおおおおああ?!?!」

ハンニバル神速種もびっくりの超スピード張り手が先輩の頬に炸裂し、すごい音を立てながら彼をベッドからはじき出す

「やっぱりだめ！先輩のベッドに行く!!!」

床に転がって意識が既に飛んでる先輩に向かって、私はそう声高らかに宣言したのだった…

END

相合傘

「…あっちゃ〜…降ってきちゃったか」

灰色の雲が一面に浮かぶ空からポツポツと降り始めた数多の水滴
それに気づいた先輩が慌ててお店の外へ飛び出し、軒先に隠れな
ら天を見上げる

「だから早く帰ろうって言ったのに…」

その彼の隣に並んで私は唇を尖らせた

雲行きが怪しくなっていたのは分かっていたんだから

任務中だったら仕方なく雨に打たれながら仕事を続けるしかない
が、今は休暇中でもしかかもデートの最中なのだ

濡れ鼠になりながらの帰還なんてやだもんね

「いやあ…だってお前と一緒にだと楽しくてさあ。あつという間に時
間が…」

「はいはい。嬉しいけど、言い訳はいいから」

「ちえ〜」

とりあえずここでぼーっと空を見ているのも仕方ないので、店内に戻
る

申し訳ないけど、しばらく時間を潰させてもらおう

「あの〜…傘でしたら、ありますよ。ビニールですが…」

雨を見てすぐ退却してきた私たちの様子を見ていたのか、店
員さんがわざわざ声をかけてきてくれた

「あーマジっすか！じゃーそれくださいー！」

その言葉に食いついた先輩がぐいっと詰め寄る

「え、あ、はい。でも、一本だけですしけっこう小さいやつなんですけ
ど…大丈夫ですか？」

「何も問題ないですノープロBLEM！な！エリナ！」

私が連れだということを考慮したうえで聞いてくれたのだろう

だが先輩の言うとおり、ちよつとせまいけど一本あるのとないのと
じゃ段違い！雨の勢いもそこまで強くないし

ってことでコクリと頷きを返すと、

「そうですか…では、どうぞこちらを」

「おしつ！ありがとーございまーす！」

傘とお金を交換し、手早く外に出て雨を凌ぐ準備を済ませた先輩がくいくいっと手招きをする

走り寄って彼の左腕に抱きつくくと、傘をこちらに傾けてくれるのがわかった

「そーいやこーいう…相合傘ってのはしたことなかったな」

「そーだね」

雨粒が傘を叩く音に包まれながら、悪天候のせいで昼間なのに薄暗い外の景色を眺める

歩幅と歩くペースを合わせてくれているおかげで、きよろきよるとあちこち見ながら進んでも私が直接雨に晒されることはなかった

「…てゆうか、ちよつとこつち傾けすぎじゃない？傘」

気を使ってくれるのはすごく嬉しいけど、先輩が濡れちや意味ないからね！

「んー？そんなことねえって…エリナ濡れてないか？」

「それはこつちのセリフだよ」

ひよいっと彼の背後から視線を覗かせてみれば、予想通り右半身が雨に打たれていた

「あー！だから言ったじゃない！先輩のバカ！思いつきり雨浴びてるじゃん！」

「いや…でもこーうでもしないとお前が…」

意思を曲げるつもりはないのか、傘を持つ彼の手を引っ張ってみても全く傾きを直してくれる気配はなくびくともしない

「もう！貴方だけ濡れるなんて私が許さないんだから！」

こーうなったら最後の手段だ

絡めていた腕をぐいっと引き寄せて更に体を密着させる

「…ほ、ほら…これなら傘まつすぐさしても二人共濡れないでしょ…

／／／

あたたかい

何度も何度も私を助けてくれた先輩のぬくもりは、周囲の雨に影響

されることなどなくいつもどおりの安心感を与えてくれる
ただ…

「あの〜エリナさん…流石にこれじゃちよつとばかし歩きにくくない
ですかね？」

そうなんだよね

提案者の私が言うのも難だけど、お互いの足や胴が擦れて思った通
りに歩けない

あつたかくて心地良いことには変わらないんだけどね

「だって先輩こうでもしないと自分だけ被害を被るつもりなんだも
ん」

だから私は現状でも十分満足している

ずぶ濡れになることさえ避けることが出来るのならば、こうやって
彼とゆつくり雨の街を歩くというのも悪くない

「わかったわかった…普通にするよ」

降参した先輩は傘の傾き加減を戻してくれたけど、私は密着した体
を離さなかった

そのまましばらく歩きにくい状態のまま進んでいたが、とうとう彼
の方からお声がかかる

「…エリナ？」

その表情を見れば何を言いたいのかはすぐわかった

どうして離れないのか？

その理由を聞きたいに違いない

けれど、私は少しだけ意地悪してみた

「ん？なーに？せんぱいー」

「いや…あの体を…」

「えー？いいじゃーん！それに私は離れるなんて一言も言ってない
もーん♪」

そう言って益々体を押し付ける私に先輩は戸惑うだろうと思って
内心クスクスと笑いをこらえていたのだが…

甘かった

甘々だった

「そういえばそうだよな。じゃーせつかくだしこのまま帰るか」
「へ？」

動揺どころか、彼はニヤリといつも笑い浮かべると傘を右手に持ち替えてなんと肩に腕を回しギュツと私を抱き寄せる

「!!」

「いやいやー。エリナがそれでもいいなら、俺も遠慮なく密着できるってね！」

「やられた！」

いつも裏をかかれてるっていうのに、完全に油断していた！不覚！

この人は最初から私がこういう行動にでることなんてお見通しだったんだ

「ほーら。転ばねーよーにゆっくり歩けよ〜」

「っ……！」

まるで慣れない二人三脚してるかのように、私が一步踏み出すと先輩も一步踏み出す

さつきまでの歩きにくさとは違い、明らかに意図的に進むのを邪魔されている……！

「…ばかっ／＼／＼」

だが、最初にこうして接近したのが私なので今更恥ずかしいだの歩きにくいだのと文句を言うのも悔しい

大した距離を進んでないのに歩き疲れてしまい、仕方なく彼の体に寄りかかるようにして立ち止まる

「ちよつと休憩！」

「ははっ、りよーかい」

「むう〜！」

静かに降る雨の中、じつとその場に佇む私達

ふくつと頬を膨らませて先輩の方を見上げれば、笑みを崩さず回したままの手で器用に頭を撫でてくれた

「ごめんごめん。からかいすぎたよ」

そして文句を言おうとした矢先に謝ってくる

「…ずるい」

そんなこと優しく言われて頭撫でられちゃったら、私が何も言えなくなることも分かってるくせに

「悪かったって。…あーほら、お詫びにお前の言うこと何か聞いてやるから。な?」

「じゃーアナグラに着くまでずっと頭撫でてて」

「え?」

先輩の案に迷いなく速攻でお願いを述べる私に驚いた顔を見せてくれたのも一瞬だけで、すぐさま笑い声をあげる

「オーケーオーケー!それぐらいお安い御用だぜ」

ぽふんと一度手を置き直してからゆっくりと帽子越しに訪れるいつもの感触

いくらしてもらっても決して飽きることはないあたたかさ

「んじゃー、そろそろ行くこうか」

「…うん」

歩き始めた私たちは結局ピタリと身を寄せ合って、二人っきりの時間を楽しみながらゆっくりと帰還するのだった

END

ハロウイン

「たいちよー！お菓子をくれないと強奪しちゃうぞー！」

「なんだそりやあ？結局お菓子を手に入れるんじゃないか？」

起床早々、髪の毛もボサボサのまま寝ぼけ眼をこする俺を緊急の用事だとエントランスに呼び出した張本人であるナナが、ブラッド代表だとか言っただ仁王立ちしながら唐突にそう言った

「え？だって今日ハロウインだよ？」

「それは知ってるわ！お菓子をくれないやイタズラしちゃうぞが正解だろー！」

くっ…思わずツッコミいれちまったぜ

そんでお前はほんとにわけわからなさそうな顔するな

しかも全然緊急性ないだろうがそれ

「まあまあーどうせヒマを持って余してるたいちよーのことだし、私たち全員分のお菓子ぐらい持つてるんだよね？」

「ナナ、お前は俺を怒らせたいのか？」

と言いつつ、こんなこともあろうかと実は用意していたお菓子をこそごそとポケットから取り出す

ここでないなんて言ったら、どうなることかわからねーしな

「ほらよ。全員分あるだろ」

小さなキャンディーが10個ちよい

ブラッドひとりにひとつあげても余裕で余る計算だ

「…えー？これっぽっち？」

「お前はなにが不満なんだよ!？」

「まあいいやー。これで全部なんだよね？」

なんだこの上から目線腹立つうううう!!!

「全部だよーおめーらにやるもんはそれで全部だ！つたく…早朝から呼び出しておいて…それ食ったら仕事の準備しておけよ」

「ふぁーい。モグモグ」

つてもう食ってるし！

あげたアメの半数以上をいっぺんに口の中でコロコロ転がし頬を

膨らませていたナナが、満足そうにラウンジに消えていった

ちやんとみんなの分とっておいてるんだろうな

「はあ…仕事行くまで部屋で休んでるか」

流石にもうひと眠り…とまではいかなくとも、横になっていたいだが踵を返しエレベーターへ向かおうとした矢先、背後からなにか話し合う声が微かに聞こえ俺の足はピタリと止まる

（ほらーエリナちゃんーたいちよーはもうお菓子持っていないし、寝起きで頭もよく回ってないはず！今がチャンスだよ！いっけー！）

（わわっ！ナ、ナナさん…ほ、ほんとにやらないとダメですか…？流石にちよつと恥ずかしいんですけど…）

エリナ…？

彼女の声じやないかという疑問を抱いた瞬間、ラウンジへと歩みだす自分の体

我ながら素直な作りになってるもんだぜ

（なーに今更恥ずかしがってるのー！シエルちゃん達とこの日のために作戦練って衣装も用意したんだから、あとはアタックあるのみだよ！）

（う…うう…わ、わかりました…）

ほほう…そういうことか

扉越しにはつきりと聞こえてきた会話から、大体の予想はついたお菓子がいない状態の俺にハロウィンお決まりのあのセリフを言うするとなすすべなくイタズラされるしかない

ナナが、持つてるお菓子はこれで全部かと念を押してきたのはこれが理由だったのか

…実にシンプルで分かりやすい、今日という日だからこそ許される作戦である

まあ、エリナからのイタズラなら喜んで受けるんだけど

そして俺はアイツ関連ならばどんな状況からでも脳みそを活性化させることができる

寝起きだから頭が回らないだど？

バカめ。それはエリナが関わってない時だけだ

…それにしてもこの壁は意外と防音性能低いんだな
話し声が筒抜けじゃないか

ピアノとかの音色、こつちのソファアに座ってても聞こえるんじゃないの？

と、いうわけで、俺はそのソファアに堂々と腰を下ろしてエリナが出てくるのを待ち構えていた

もちろんしつかりと彼女らの作戦対応策を練りながら

ガチャ…

「よっ！エリ…ナ…？」

「っ！せ、せんぱい!？」

予想通り、ラウンジから恐る恐るでてきたエリナにまずはニヤニヤと笑いながらびっくりさせようと企んでいたのだが、彼女の服装を見て俺は固まってしまった

目元がギリギリ見えるくらいに深々とかぶっている紫の大きいトングリ帽子、小柄な体を隠すようにキュツと握られている同色のマント

そして隠しきれない下半身から覗く真っ白な脚が…

「その格好…」

服装について突っ込もうとすると、カツ！と頬を染めて纏っていたマントを更にキツく抱き寄せ身を隠した

言わずもがな

魔女の仮装である

「あ、あんまりジロジロ見られると…あの…は、恥ずかしいよ…」

モジモジしながら消え入りそうな声でそう言っつて、こちらを上目遣いで見るエリナ

コイツはその行動がどれだけの破壊力を持つてるのかわかってないに違いない

可愛すぎて俺はもうどうにかなっちまいそうだけ

にしてもそれだけ執拗に体を隠すつてことは…まさかとは思うけど

「エリナ…もしかしてそのマントの下、何も着てないの？」

「ぼっーそ、そんなわけないでしょ！ちや、ちやんと着てるよ…恥ずかしい…けど…／＼／＼」

勢いよく反論してきたと思っただらしくおらしく俯く彼女が可愛くて愛おしくて…

って、俺の心情語ってたら埒があかねえな

「なんだよー？だったらこの時間だし周りに誰もいないんだから見せてくれよ」

ニタア〜と笑いながら立ち上がってわざとらしくジワジワと近づくと、真っ赤に頬を染めたままエリナは震える瞳と唇を閉じてそつとマントを開き始めた

生脚が丸見えだったことから、ある程度の露出は予想していたが…これは予想以上だ

控えめだがしつかりと女性らしさを訴える胸のふくらみは半分近くその素肌をさらし、申し訳程度に隠す布地で目を引きつけるように寄せられていた

お腹に至っては丸出しだし…

そしてスカートは彼女の普段着でさえ俺は少し短すぎるんじゃないかと思ってるのに、更に短くて…見えそうで見えないの域を極めていた

正直なんかもう…直視するのは色々と…その…危ない

「…えと…び、ビキニみたいでかわいい…な…」

目のやり場に困りチラチラと視線を泳がせながら謎の褒め方をする俺に、エリナはまったく収まる気配のない赤面状態のまま胸元を隠しスカートの裾を握って少しでも肌色を隠そうとしていた

…ぶっちゃけ結構長く付き合っている俺たちはやることやってたりするし、お互いの肌を見ることには慣れてるのだが…

こういうのはまた違った恥ずかしさがあるのだろう

それは俺も今現在身を持って体験してるから分かる

「うう…かわいいって言うてくれるのは嬉しいけど…こ、こんな格好やっぱり恥ずかしいよ…せんぱいしか今いないからいいけど…ね、ねえ。せんぱいの部屋…いこ？要件はそこで話すからっ…！ね？」

モジモジと落ち着きない彼女の様子は前述した服装と相まってあまりに目の毒だ…

だから、ささっと要件を済ませて健全な普段着に戻ってもらおう
そう！それが今の自分の使命！

「要件はもう察しがついてる。それに、そんな格好で部屋こられたら
何しちゃうかわかんねーぞ？」

「な…っ／＼／」

じつとその場に立って動く気配がない俺を、しばらく上目遣いで眺めてジリジリと理性を削ってきていたエリナもとうとう観念したのか

例の言葉を震える唇から可愛らしく紡いだ

「T…Trick or Treat…／＼／」

うおおう、すげー流暢な発音

俺がお菓子を持ってないと確信したうえで言ってきてるんだよな
これ

だとしたら、いったいそんな格好でどんなイタズラをしてくれるっ
ていうのか…

興味がないと言えば嘘になる…が

「ふふふ…残念だったなあエリナ〜」

「え？」

意地の悪い笑みを浮かべる俺に、彼女は口をポカンと開き啞然とする

俺は『お菓子が』全部なくなったなんて一言も言っていない

『おめーらにやるもんはそれで全部だ！』ってナナに言ったただけだ

「エリナに特別なもの用意してないわけないだろ？」

「っ！」

そしていつどこで会ってもちゃーんと渡せるように今も持ち歩いてるんだぜ？

ひよいっとポツケから取り出してチラリと見せびらかすそれを、エリナは目を細めて確認した

「な、なにそれ？リップ？」

「くくく…リップに見えるのも無理はないな。なぜなら…」

彼女の例え

あながち間違っではないんだ

俺が棒状のソレをくるりと一回転させると、にゅいつと突き出てくる半透明の物体

これだけ見れば、まさしくリップなのだが

「これはな。こういう飴なんだ。つまりお菓子」

「あ、飴!？」

「そうだ。面白いだろ?」

信じられないといったふうにはマジマジと見つめるエリナの唇に、前振りなくぐいつとそれを押し付けた

「きやうん…あ…ホントだ。甘い」

ピクリと驚いて反射的に唇を舐めたエリナが可愛い驚きの声を漏らす

「これでお前からの要求には応えたぞ」

「っ…そ、そう…だね」

あははと笑いながらも、素直な気持ちを隠すことが苦手なエリナに悲しそうな表情がちらついたので俺は見逃さない

「あの…い、いきなりこんなことしてごめんねせんぱい。じゃ…ま、またね!」

それだけ言ってくるりと背を向ける彼女の肩をガシツと掴む

「おいおい待って。まさか自分だけ言って帰るなんて冷たいことしないよな?」

「へ…?」

イヤな予感がしているのだろう

ゆつくりと振り返るエリナの前で、俺は自分でもわかるぐらいにニヤニヤと悪人面をかましていた

コツンっ

「トリックオアトリート」

完全にこちらに向き直った彼女と額を重ねて、至近距離から放たれるハロウインの決めセリフ

まあ、コイツみたいに綺麗な発音じゃないのはご容赦願おう

「なっ…くっ…い！」

焦って瞳を泳がせながら口をパクパクするかわいいエリナの顔を間近でたっぷりと堪能する

「はっはっはー別に俺から言っただっておかしくはないよなあー？」

そうなのだ

バレンタインやホワイトデー

お互いの誕生日などとは違い、今日は双方向から仕掛けても何も問題ない日なのである

…年齢差？年上が年下に？知るかそんなもん

たったの3つ差なんだからないようなもんだぜ

「…うう…ないもん！せんぱいあげるお菓子なんか用意してないもん…！」

一周回って開き直ってしまったエリナが俺から後ずさって可愛らしく頬を膨らませて、腰に手を当て堂々と胸を張りながらそう言った「そうなのか？…おかしいなく俺には最高に美味しそうなお菓子が見えるんだが…」

「…え？」

後退していく彼女をジリジリと壁際に追い詰め、俺はさきほど塗りつけた餡が完全には舐め取られていないおかげで艶やかな光沢を放つ小さな唇を見つめる

その視線に気づいたエリナがキュツと口を結んだ

「ま、まさかせんぱい…」

「そのお菓子くれよ。じゃねーと…イタズラしちゃうぜ？」

「ず、ずるふあっ!!…ちゅう…んうっ！」

何か文句を言おうとしていたのを素早く軽いキスで声を塞ぎ、甘くてふつくらと柔らかい彼女の唇をペロリと優しく舐め上げる

「おーあつまーい。こんなお菓子を用意してくれるなんて流石エリナだなー」

「…うっ…うう…ばかあ…！」

涙を浮かべてぺたりと床に座り込んでしまったエリナがキツと俺

を睨みつけた

…パンツ丸見えなのは黙っておくか

「なんだく？まだお菓子が足りないか？」

「先ほどのリップ型飴をちらつかせると、ゆっくりと立ち上がった彼女がパツとそれを俺の手から奪い取る

「これ全部くれるんですね！」

「ん？もちろん。お前のために用意したんだから、遠慮なくもらってくれていいぞ」

「…わかりました…じゃあ覚悟っ！」

じーつと飴と俺を交互に見ながらなにやら考えていたらしいエリナが突然飛びかかってきた

「うわっ！おい…っ！」

口に向けて突き出された甘いもの…それがなんなのか、考えるまでもない

俺があげた飴を早速利用しやがった…！

関節キスじゃんなんてことは一瞬考えただけで、すぐさま続けて重なってくる唇の感触が思考の全てを支配する

あまりに唐突だったもので瞳を閉じるヒマすらなかった俺は、視界いっぱい広がる赤面のエリナを思う存分見ることができた

もちろん彼女の方は仕掛け人なので瞳はキュッと閉じられていたが

「んっ………ちゅ………♪」

「おーいエリナ…ん…いつまで…ぶはっ…キスしてる…つもりだ？」

とつくに飴の成分はすべて舐めとったであろうに、いつまでもペロペロと接吻を続ける彼女に声をかけてやれば、はっとしてすかさず後ずさる

うん、やつぱりこういう初々しい感じの反応も最高にかわいい

「…お、おかえし…」

「お菓子だけじゃなくてイタズラまでしてくれるとは、太っ腹すぎて恐れ入るぜ」

ポンポンと頭を撫でてやると、からかわれてることを理解してるエ

リナがぶくつと頬を膨らませた

「先輩はお菓子しかくれてないよね？」

「え？」

「…イ、イタズラ…してくれない…の？」

首の角度は変えずに視線だけ動かす…所謂必殺の上目遣いってやつで俺を見ながらそんなことを言う彼女

そんな風に分かれたらそりやもう希望におこたえしてやるしかないよなあ！

「くつくつく…そうだな…どつちかだけなんてケチなこと言っていないで、両方あげればいいんだよな！」

俺の発言に黙ったまま頬を染め続ける彼女の反応をOKと判断し、ぐいっとニヤニヤ顔を近づけこう言った

「トリックアンドトリート…ってか」

END

ポツ〇ーの日

ポツ〇ーゲームというものを知っているだろうか？

棒状のお菓子の端と端を二人で啜えて食べていき、どれだけ接近できるかという遊びである

勝敗をつけるのなら、先に口を離れた方が負け、目線を逸らしたほうが負け、ポツ〇ーを折ってしまった方が負けだの色々とルールの付けようはあるが…

どのルールでも共通してるのは両者が最後まで到達してしまえば相手側の唇にチューするハメになるという点だ

さて…なんでいきなりこんな説明をしているのかというところ…

「せんぱーい！やろーよー！今日ポツ〇ーの日なんだからー！」

と、上述したゲームをやるべく瞳をキラキラ輝かせたエリナが起床したばかりの俺に馬乗りになり、目の前でポツ〇ーの箱をブンブン振りましているという構図ができていたからである

なぜ彼女が朝から俺の部屋に？

…なーんてことは、もう言わなくても分かるだろうから割愛させていただきます

それにしても、コイツはこんなレアなお菓子いつの間に調達してたんだか

「まあ…仕事前にちよこつとやるぐらいだったらいけど」

「やったー！じゃーはい！あーんしてー！」

ニコニコと笑顔を絶やさないエリナがなんだかんだ言いながらもとても可愛らしくて、俺は自分の頬もだらしなく緩んでいることを自覚しながら素直に口を開いてやった

「あーん」

それを確認すると満足そうに頷いて、彼女は早速一本のポツキーを啜える

お菓子を啜えているだけなのに、僅かに潤んだ瞳といたずらっぽく微笑む表情が俺の胸を高鳴らせた

…うん。今日もエリナは最高にかわいいぜ

「んー！」

そして突き出されたそれを、パクリと遠慮なく口に含ませてもらう

「…ふふ」

「…ぷっ…ははっ」

じーっと互いの瞳から視線をそらすことなく、俺たちは幸せそうな笑みを相手に見せつけていた

「モグモグっ」

しばらくそのまま動きはなかったが、やがてゆっくりとエリナが咀嚼を始めながらジリジリと近寄ってくる

小動物のように口を小刻みに動かす彼女が可愛くて、俺はその姿に魅入って全然動けずにいた

やがてエリナだけで半分ほど消費したお菓子により、視界いっぱい相手の顔で埋め尽くされたところでピタリと止まる

先輩も動いてよ！

そう目線で訴えられているのを感じた

ふっ…いいだろう

だがなエリナ

「っふ!?」

俺はお前みたいに遠慮ができるタイプじゃねーんだ

残されてたお菓子のほぼすべてを一度に咥えこみ、唇が触れるか触れないかぐらいのところでサクツ！という音をたてる

それでも僅かに残ったポツ〇ーを離さず頬を真っ赤にしたままプルプルと震えるエリナの瞳に、俺の意地悪な顔が映し出された

さーてどうする？

もうあとほんの数ミリでチューできちやうぜー？

「お願い…」

「ふふ」

小さな声と吐息に混じりポツ〇ーがピクリと震えるのを感じて視線を交わせる

「せんぱいから…して」

しばらくその大きな瞳を緊張から震わせていたエリナだったが、や

がて恥ずかしさが限界に達したのだろう

そつと瞼を閉じるとキュツと僅かに口に力を入れたのがポツ〇―
越しに伝わってきた

しかしまあこの状況でそんなお願いされちゃーな…

「ずりいぜエリナ」

自身の頬も染まっているのを感じながら、俺はそつと彼女の肩を抱き寄せて優しく唇を重ねて残りのポツ〇―を口に含みそつと離れようとした

「んっ!？」

…ああ、俺は離れようとしたんだ

「エリっ…!」

だがエリナがそれを許してくれなかった

離れようとしたところへすかさず唇を再度押し当て、まだ口内にあったお菓子を奪うかのごとく舌を絡ませてくる

まさかこんな反撃をもらうとは思っていなかったから、なすすべなく彼女の動きを受け入れるしかなかった

「ゴクンツ…!」

行為が終わったあともしばらくポカンとしてしまっていた俺は、目的のものを取り出したエリナがそれを飲み込んでしてやったりという笑みを浮かべているのを見てやつと我に返る

「い、いきなりどうしたんだエリナ?びっくりしたじゃないか」

積極的なキスにドキドキが収まらないまま、荒い息をつきながらそつとエリナの肩を離した

「…私の勝ち」

「へ?」

「最後のひとかけら…食べた方が勝ちなんですよ?」

なんだそのルール!?

「カノンさんが…ハルオミ隊長から聞いたって…」

あ、あの人はまたとんでもないルールを考えて…!

「ふふ…やった…せんぱいに勝った♪」

「…よしわかった、そういうルールでオツケーなんだな?…じゃーさ、

もう一回やってくれないか？」

キスの疲れからかトロンと瞳を蕩けさせたエリナがぐつと握り拳をつくる様が可愛くて、俺はついつい再戦を申し込んでしまった

「いいですよー！絶対負けないもん！」

「はっ！ルールさえ分かればこっちのもんだったの！」

彼女の持つ箱からポツ〇ーを取り出し、今度は俺から啜えると挑発するように上下に動かした

「かかってこいエリナ！」

それからしばらく俺たちは時間も忘れてポツ〇ーゲームに夢中になり、仕事があることをすっかり忘れてて大目玉をくらうまでふたりっきりの時間を楽しんでいたのだった

：うん。来年からは計画的に楽しもうな。エリナ

あと特別なルールは事前に教えておいてくれ！

END

プレゼント

「雪だ……」

12/24

今日はクリスマスイブと言われている日だ

自室の窓のスクリーンを切り替え外の景色を表示させると、静かに舞う白い結晶が朝日を反射しキラキラと光っていた

眼下に広がる外部居住区の家々も、その影響で屋根が真っ白にコーティングされている

…ここに降ってくるのは珍しいな

任務でよく行く廃寺で雪自体は見慣れているものの、それを支部周辺で見るということは滅多にない

「けど、別に雪かきしないといけないような豪雪でもないしな」

ふと、雪遊びに無邪気に励む恋人の姿が脳裏をよぎり俺は無意識に笑みを浮かべていた

寝起きで若干冷える体をさすりながらエントランスまで来てみれば、クリスマススのデコレーションが施されておりイルミネーションでピカピカと輝いていた

チカチカキラキラとても命懸けの職場の風景とは思えないぜ
まあ、こういう気遣いで心が楽になってるのも確かなんだが

「あつーせんぱーいーこつちこつちー」

エントランスでこれなんだからラウンジはどうなっているのだろうかとチラッと覗いてみれば、靴を脱ぎ机に乗って懸命につま先立ちしているエリナが窓に飾り付けするのを手伝っていた

俺が入ってきたことに気づいた彼女が笑顔で振り返りながら手を振ってくれたが、転げ落ちないか心配でヒヤヒヤする

「おうエリナ。その笑顔は可愛いけど、そんな高いところは無理せず他の人に変わってもらえ」

「はーいーじゃーせんぱーいーお願いするね♪」

ぴよいーんと飛び降りて、俺の胸に持っていた飾りごとダイブして

きたエリナを傷つけないようそつと抱きとめた

やれやれ

任務行く前からご苦労なこつたな

よく見れば、彼女以外にも見知った顔がちらほらと…

「みんなそんなに楽しみにしてたのか。クリスマス」

「ふふ♪すくなくとも、私は楽しみだったよ」

はいこれと持っていたものを押し付けると、彼女はさつきと次の飾りを受け取りに部屋の隅に置いてあった箱へと近づいていくのだつた

…そんなあつけなく去っていくと俺はちよつと悲しいぞエリナ

人ごみに紛れて彼女が見えなくなってしまうまで視線で追つていた俺は、仕方なく飾り付けに取り掛かるのだつた

そういえばどうして星の飾りは【?】こういう形なんだろうな…
なんてくだらない疑問を抱きながら

任務場所の旧市街地

ここでもうつすらと雪が降っていたが、俺はそんな些細なことなど疑問に思つてなかつた

それよりも…

「こんな簡単な任務…俺たちが請け負つていいのかよ?」

「だつて今日発注されてるので一番難しいのがこれだつたんだもん」

仕事の時間になり、とりあえず飾り付けを違うメンバーに任せてきたのだが…

「小型アラガミの一掃…受注できる最高難度の任務がこれとはな」

数が多いとは言え、俺とエリナの二人がかりでは相手の力量不足にも程があるぜ

目の前に横たわるコアを取り出されたアラガミ達の残骸を見渡して、神機を肩に担ぎなおす

アラガミもクリスマスだからって空気読んでるのか?…なんてな

「いいじゃんー。強いアラガミが全然ないっていうのはいいことだしよ?それに、早く終わったおかげで先輩とたくさんお話できるし

！」

神機を持ったままだから流石に抱きついてくるようなことはしなかったが、ぴよこぴよここと近くに歩み寄りキラキラと輝く瞳で嬉しそうに俺を見上げるエリナはもう半端なく可愛かった

「そうだな。お前とふたりつきりになれるならなんでもいいや」

「えへへ…」

わしゃわしゃと空いた手を使って頭を撫で回してやれば、スリスリと自らそこを押し付けるように動かす彼女の甘えた様子に満たされるものを感じる

コイツの笑顔がこの先もずっと隣に見えますように…

「しあわせ」

「俺も」

なんの前触れもなく唐突にそう呟いたエリナの言葉に、俺は手の動きを止めず視線も逸らさないまま無意識で相槌をうつのだった

そういうわけで、今日の任務はなんの問題もなく達成して帰ってきたわけだが、あまりにも早い帰還だったうえに任務場所もそう遠くなかったため出かける前にやっていた窓周辺の装飾すらまだ終わっておらず、先ほどと寸分変わらずクリスマスの準備に張り切るエリナに引つ張られ俺は結局日が暮れてクタクタになるまで働かされた

…ま、エリナが年相応にあんな可愛らしくはしゃいでる姿なんて滅多に見れないしな

それがたつぷり拝めただけでも頑張ったかいがあるってもんさ

「せーんぱいっ！お疲れさまーはいこれ」

「おう、サンキュー」

キラキラとイルミネーションがそこかしこで点灯し、すっかりクリスマス風に飾り付けられたラウンジ

陽の光が入らぬ時間帯になったおかげでチカチカ目立つその風貌を椅子に座りながらぐるりと見渡していると、エリナが缶ジュースを持ってきてくれた

札を述べてそれを受け取ると、彼女は俺のとなりに座って自分の

ジュースに口をつける

その横顔が心底嬉しそうに笑って見えて、釣られてにやけてしまっ
そうだ

「ふふ…クリスマスは先輩とふたりつきりで過ごすって決めてるん
だ」

バタバタと落ち着き無く足を動かして、エリナは笑顔を崩さぬまま
コツンと肩に頭をあずけてきた

「別にクリスマスじゃなくても、ヒマな時は大体俺らふたりつきりで
いるだろ？」

チビチビとジュースを飲みながらあんまり興味なさそうに言うと、
彼女はむつと頬を膨らませる

「まさかみよーにやる気ないのって、そういう理由？」

「まあ…うん。正直いつもと大差ない過ごし方かなって」

エリナと付き合い始めてから今まで、イベントや行事の時は必ず隣
にいたしな

…ふたりつきりという状況に限定するならば、それも少しはしぼら
れるが

「ふーん…せっかく先輩のためにクリスマスプレゼント用意したのに
なあ〜」

俺の返答に拗ねてしまったのか、彼女はむすつとしたまま唇を尖ら
せる

「誤解を招いてるようだから言っておくが、別に楽しみじゃないわけ
じゃないぞ？お前とふたりつきりで過ごせるのにつまらねえーわけ
ないからな」

「へ？」

あつ、やっぱりそう思われてたか

キョトンとしながら目をパチクリとさせる彼女の肩にポンツと手
を置きながら、安心させるように微笑んでみせる

「俺はエリナが隣にいる時はいつも幸せってことさ」

「っ／＼／…すぐそういうこと言うんだから…もう」

キョツと俺の袖を握りながら赤面するエリナがニコリと表情を崩

してくれた

うん。やっぱりお前には笑顔が似合うぜ

「で…プレゼントってなに？」

「…先輩？まさかそのワードに反応して適当言ったわけじゃないよね？」

一瞬でジト目に変貌する彼女に慌てて首を横に振る

「ちがうちがう！あれは本心さ。でも、用意されてるプレゼントって聞いたらそら興味沸くからな」

なんだろうな？

よくある

『プレゼントは私だよ♥』

的な…？

まさかな

ぶんぶんと頭に出てきた妄想を振り払う

「それは後でのお楽しみっ♪」

ツンと俺の頬を指先でつつくと、彼女は立ち上がって背を向けた

「さーて。ちよつと休憩したら今度はムツミちゃんのお手伝い！料理つくらなきゃ」

「やる気に満ち溢れてるなエリナ…あんまり働きすぎて倒れるなよ？」

ぐつとガッツポーズを決めながら振り返る彼女に再度心配の声をかけるも、だいじょーぶと笑い返される

「それよりせんぱい！せつかくだしこの機会に料理教えてあげよつか？だいぶ前から私に教わりたいうって言ってたし！」

「あ…いや、今日はちよつと…」

はははとごまかしながらソロソロと後ずさると、案の定エリナは頬を膨らませた

「…ホントにいつか手料理ご馳走してくれるの？」

「も、もちろん！今日は俺も疲れたし、お前にするプレゼントでいろいろと…」

「え!?先輩もプレゼント用意してくれてたんだ！やった！」

クリスマスのプレゼントの話を持ち出せば、途端に笑顔に変わる俺のと言えないぐらい単純じゃねーか可愛いなコイツめ
なんてのんきなことを考えてる場合じゃない

…あー…やべ…まだプレゼント用意できてない…っていうか目処もたつてないというか…

なんでその癖にエリナのプレゼントって言葉に平気で反応したんだ俺は

「クリスマスを特別視してないなら、プレゼントももしかしたら用意してないんじゃないかって心配だったんだよ…よかった」

うんうんと一人頷きながら喜んでるエリナの様子を見ながら、内心ヒヤヒヤが止まらなかった

「私、とつても楽しみにしてるから！じゃーまた後でね！」

「あ、ああ…また…」

軽いスキップまでしてご機嫌そうなエリナがムツミちゃんの隣に立ってニコニコ会話してる様子を見ながら、俺は窓際の席に座り固まっていた

どうするどうする!?

てゆうか、ぶっっちゃけ思いつかない!

目を閉じて思考を集中させることで頭の中に浮かんでくるプレゼント候補達は…まあ、あるっちゃある

だが、いずれも既に渡したことがあるものばかりだ

服…ぬいぐるみ…ゲーム…アクセサリ…指輪…景色

下着なんかもプレゼントしちゃったことあるし…

これってやっぱ手料理が最高の案だったのでは…

と、今更思ってももう遅いわけで…って、この後悔何回してんだ俺はあつとため息をつきながら目の前にあつた窓から外の様子を見ると、朝方と変わらぬゆつたりとしたペースで雪が降り続けていた

…ん？あ、そうだ

そういえばちよつと前にサカキさんが、中のものを凍ったまま持ち運びできる携帯保冷管なるものを発明したと嬉しそうに報告してたような…

それを使えば、雪とか氷とかなんか冬限定っぽいものでプレゼントを作ったりできないだろうか

おお……!

ちよつとだけアイディアが出てきたぞ!

「せんぱーい! そんなところで座ってブーツとしてるなら手伝ってくれても良かったのに……」

「ハッ! あ、ああ……すまん……」

エリナに送るクリスマスプレゼントをひたすら考えていたら、けっこうな時間が過ぎてしまっていたようだ

いつの間にかラウンジはワイワイと賑やかな喧騒に包まれてるし、料理のいい匂いが嗅覚を刺激していることにも気がついた

「ほらっ! せっかくのクリスマスのご馳走だよ? 私も作ったんだから、いっぱい食べてよね!」

肩をポンと叩かれ、目の前にド定番の七面鳥の丸焼きがドンっ! と置かれた

どうやら前にもやった自分の食べたいものを自由に取ってきて食事するバイキング形式のようだ

彼女が持つてきた七面鳥は、表面だけ見てもこんがり狐色に焼きあがっており光る肉汁が光沢を増していていかにも美味しそうだが……

「流石に俺一人じゃ食いきれないぞ」

「だいじょーぶ! 一緒に食べるんだから! それにねー! これ、中にもいろいろ仕込んであって……」

そう言つてぴよこんと隣の席を陣取ると、エリナは持つていたナイフを使って丁寧にも肉を切つていきながら嬉しそうに料理の解説を始めるのだった

クリスマスだからと、アナグラにいる俺達でさえ滅多にお目にかかれないような高級食材をふんだんに使った豪勢なディナーは最高に美味しかった

しかもエリナ製ときは俺が喜んでがつつかないわけがない

あまりの勢いにエリナ本人から落ち着いて食べてと注意されたぐらいだからな

そしてその彼女といえは、終始嬉しそうな顔で俺の隣を陣取りニコニコと笑みを絶やさずにいた

あの姿はそりゃー眼福ものだったね

更にそんなエリナを見ていたらひとつ、最っ高のプレゼントアイディアが浮かんできたのである

(よし……これを現実させることができればぜったい喜んでくれるはずだ……!!)

「えへへ……先輩が楽しそうにしてくれてよかった」

俺がグツと握りこぶしを作ってニヤリと笑みを浮かべていると、その様子を脇から覗いていたエリナもニコリと微笑みを返してくれた

「ああーさっきは今日もいつもどおりなんてこと言っつて、クリスマス楽しみにしてたお前を不安がらせて悪かったな」

ポンポンと頭を撫でてやりながら先ほどの発言を詫びると、彼女はフルフルと小さく頭を横に振る

「そんなこと気にしないでよーその後先輩、そのいつもがしあわせなんだ！つて言ってくれたじゃない。私それ……す、すごく嬉しかったんだから……／／／」

「お、おう……」

どんだん小さくなっていく言葉を最後まで言い切つて頬を染めながら腕にピタツと抱きついてくるエリナに、俺の胸も高鳴りを隠せなかった

しばらくそのまま密着状態が続いていたのだが、次第に周りから感じる視線が多くなるのを感じて小さな咳払いをしそれとなくエリナを諭す

「あつ……じゃ、じゃーあの……私食器の後片付けとか手伝ってプレゼントの最終準備をしなくちゃいけないから……またあとで……先輩の部屋に行くね！」

「ああ。また後でな」

そう言つて名残惜しそうに立ち上がるも、キュッと手だけは握ったままこちらを見上げる彼女を見て俺は思わず笑い声をもらしてしまった

「ははっ…今どこでか？」

この仕草がキスして欲しい時とか思いつきり甘えたい時のエリナ流サインだということを知ってるうえで、俺は尋ねる

「…ダメ？」

「ダメなもんか」

チュツ！

とはいえ流石に周囲の視線もあるので頬に軽く唇を落とす程度にしておくが

「っ！あ、ありがと…じゃー…後でね」

「おう。続きもな♪」

「う、うんっ…／＼／＼」

意味深な発言に頬を真っ赤にして、彼女は食事の後片付けに向かっていった

…俺も少しぐらいは片付け手伝ってからプレゼントの準備をしに行きますか

「よし…作るぞ…」

サカキさんの研究室を訪れると既に彼はここに帰ってきていたので、例の携帯保冷管をひとつ譲り受けたいとの旨を話すと快く承諾してくれた

どうやら3年ほど前に開発した初恋ジュースという地獄のドリンク（俺はコウタにそう聞いただけで実際に口にしたことはない）の時ほどではないにしろ、みんなからの評判は良くなかったらしいので興味を持ってくれたこと自体が嬉しかったようだ

まあ…普通に生活してたら凍ったものを持ち運ぶなんて機会はあまりないかも知れないからな…俺たちは

実際に見せてもらったその保冷管は、サイズは…1ℓのペットボトルってあるだろ？あの太いやつ

あんな感じで、中身も透明な外観を通して確認できるようになる

わかりやすく言えばまさに太くした試験管ってところだ

「流石にさっむいけど…我慢だ我慢…！」

そしてその中に入れようと思ってるプレゼントを『作る』ためには、入れる前も氷が溶けずにいる環境でなければならぬ

だから、サカキさんが使っているという特別性の冷凍室で作業をすることにした

「こういう時はゴツドイーターでよかったと思うぜ」

常人ならば長時間滞在したままだと命の危険があるぐらいの気温だが、俺達ゴツドイーターはある程度の異常気温ならば耐えられる体になってる

「ま、だからってあんまり長居したいとは思えないけどな」

寒いもんは寒いし

と、いうことで、俺はサカキさんがこんなこともあろうかと（どんなことだよというツツコミは返事が長くなりそうなので言わないでおいた）特別用意していた両手でやっと持てるぐらいの巨大な氷のかたまりを前に、それを削るために用意したアイスピックやらナイフやらを持って作業にとりかかるのだった

………

………

…

「できたっ！」

手先の器用さには少し自信があったが、ぶっちゃけここまでキレイに形になるとは思ってたなかつたぜ…

「で…今何時だ？」

携帯保冷管にプレゼントをいれ、蓋をしっかりと閉めて持ち出す

詳しいことはよくわからんが、この蓋に保冷効果が詰まってるらしいのできつちり閉めておかないとな

極寒の部屋から出て時刻を確認すると…

「やば…日付超えてる…!!!」

もうエリナは部屋にきてるかもしれない…

俺は外で待っていてくれたサカキさんに礼を言ってから、急いで自

室へと向かった

「はあはあ…ついた…」

全速力で来たが果たして…

ガチャツ…

部屋は暗かった

…エリナはまだ来てないのか…?

一応合鍵は渡してあるからいつでも入れるはずだが…

とりあえず部屋の明かりをつけたその瞬間

「えいっ！」

「うわあ!？」

突如ひざ下にかかる重みにバランスを取られ、持っていたプレゼントを落とさないようにしたら尻餅をついてしまった

「おかえり先輩！」

「エリナ!？びっくりさせ…る…な…っ!？」

ギューと足に抱きついてる人物の正体が愛しの彼女だとわかって、ほっと一息つき安心しながらお互い立ち上がりその姿を見て…

俺は絶句した

「どう？似合うかな…？」

ハロウインの時といい、コイツはコスプレの趣味にでも目覚めたのだろうか？

スーパーキュートなサンタ服を着たエリナが俺の目の前にいた

そのミニスカから覗く白い健康そうな太ももが眩しいですっ…!

「ベリーグッド…最高に可愛いぞ！ニーソを変えてないあたり分かってるなエリナ」

ノースリーブは見ていて寒そうではあるが、華奢な二の腕が抱きしめたくなるほど魅力的なので問題ない

「あ、ありがと…よかった…今日のために作っておいたんだ！」

まさかの自作!？」

赤いサンタ帽を深々と被って照れをごまかすエリナの健気さがとても可愛かった

「あ、それより先輩！さっきなんか持ってたよね？それなーに？」

はつとして帽子をくいっと上げると、目ざとく例の保冷管を発見していたらしいエリナがぐいぐいと詰め寄ってきた

キラキラとした瞳で上目使いを繰り返す彼女の頭を撫でながら、ここにきて隠す必要もないので素直に告げる

「ああ、これな…お前へのプレゼントだよ」

「っー」

それを聞いた途端ピンと背筋を伸ばし姿勢を正すエリナ

そ、そんなに畏まられるとこっちまで緊張しちゃうんだが…

「楽にしてくれって…そんなたいそうなもんじゃねーし」

「先輩がくれるならなんでも宝物だもん…前も言ったでしょ？」

唇をキュツと結んで俺を見上げる彼女の態度は軟化しそうになかった

やれやれ

この空気は俺から渡す感じだし、さっそく受け取ってもらおうか

…あ、でもその前に

「こっちの方が雰囲気であるだろ」

「あっ…」

自室の窓を今朝と同じく外の景色を映し出すよう設定すると、この時間になっても降り止んでない雪がヒラヒラと舞っていた

「部屋の明かりも弱くして…ほらっ。どうだ？」

薄暗くなった室内を、雪が作る幻想的な影が動く

「うわあ…綺麗…」

おまえの魅力には及ばないよ

なんてクサイセリフは心の中にしまい込み、俺はエリナの肩を優しく掴んで降り向かせるとプレゼントを差し出した

「っ!?オスカー…?」

そう

俺が作った氷細工…それは、彼女の神機であるオスカーを模したものだ

「え…すごいっ!?どうなってんのこれ!?!」

マジマジと保冷管を見ながら、驚きで口をポカンと開けるエリナに俺は少し解説をする

「流石にこの形をひらべつたいところに立たせるのは無理だからな。底一面にはうっすい氷を張って、そこに直結させる形でグリッブ部分をつなげてんだ」

あとはまあ…見たとおりだな。流石にチャージ状態のやつ再現するのは難しかったから、通常近接形態の形にしたんだけど」

「す、すごすぎ先輩…今帰ってきたってことは、これ今作ってきたってことでしょ？ どんだけ手先器用なのよ!？」

「ははっ…まあ、頑張ったよ。あ、この入れ物に入れてる間は絶対溶けないから安心していいぜ…あと、これをプレゼントにした理由なんだから…」

「う、うん…」

ゴクリと喉を鳴らす彼女の姿を見て、ちよつとばかり口にするには恥ずかしいそれを述べていく

「エリナにその神機を持ってこれから先も俺の隣に並んでずっと戦って欲しい…って意味を込めてだな…それでおまえがいつも使ってる神機をモチーフにしたんだが…」

あー…やつぱり、これすっげえ恥ずかしいこと言ってるんな俺

「…ありがとう先輩…私、頑張るから！先輩と距離を離されないよう追いつけるようにいっぱい頑張って、絶対絶対いつまでも隣に立って戦えるようにするから…!」

ギョツと保冷管ごとプレゼントを抱きしめると、彼女は嬉しそうにえへへと笑ってくれた

「ああ…俺も、お前に追い抜かれないよう頑張らないとな」

「そうだよー？ 油断してたらあつという間においてっちゃうからね!」

「あ、言ったなこんにやろー」

いたずらっぽく舌を出すエリナとしばらく小突きあったあと、彼女は保冷管を机の上に置いてポツリと呟く

「先輩がこんな素敵なもの用意してくれたのに、私…全然考えなしで

「この日を迎えちゃったなー」

俺もこのアイディア浮かんだのは今日なんだけどな

ってことは言わないでおく

「なんだよー？ エリナのプレゼントももったいぶらずに教えてくれよー」

「…うん…じゃー…あの、がっかりしないでね？」

パツと見た感じ見当たらないし、何か小さなものなのだろうか？

ま、大ききなんて関係ないけどな

「俺だつてお前からもらえるものはなんだつて嬉しいんだ。自信持つてくれ」

「…ありがと先輩。じゃー…プレゼントの内容…言うね」

サンタコスに負けないぐらい頬を真っ赤に染めたエリナが、胸の前で両手を組み小さきな震え声で確かにこう言つた

「…私です…っ／＼／＼」

「……………え？」

これは…まさかあれか？

俺がさつき冗談で予想した…

「わ、私が…プレゼント…」

やっぱりだあ!!!

足をモジモジとこすり合わせて視線を合わせようとしなないエリナの二度目の発言を聞き、さきほどのが空耳でないことを確信した

小さなものだなんてとんでもない誤解だった

これはとてつもなくビッグなプレゼントだぜ…いろんな意味で

「あ…あー…えつと…じゃー…ありがたく…もらいます」

まさか本当にこんな展開になるとは思っていなかったが、嬉しくないわけがないのでありがたく受け取ることにする

「…うん」

俺の返事に安心したのか、タタタツと素早く駆け寄ると、エリナはポフンツと胸板に顔をうずめてきた

背中に腕を回されるのを感じながら、その小さな頭を優しく撫でてやりつつちよつとだけ意地悪な問いかけを試みる

「で、どのくらいエリナをプレゼントしてくれるんだ？」

ピクリつと肩を震わせながらも、回した手からは力を抜かず彼女は
はつきりこう言った

「全部」

雪の影がチラチラ舞う薄暗い室内

俺がエリナと口付けを交わす様子を、氷の神機だけがしっかりと映
し出していた

END

バレンタイン

「バレンタインか…」

エリナという彼女が出来て、ここのところ浮かれ気味だった俺がさらに調子に乗ってしまうようなイベント当日の朝

「うおおー！エリナって料理得意そうだしなあ。手作りとかくれんのかなあ…」

ベッドにうつ伏せのまま、足をバタバタと動かしまるで子供のようにはしゃいでしまうほど嬉しい

「ああ…エリナ…」

最近彼女の事しか考えてなくてニヤニヤしながら無意識に名前を呟いてしまうほど、俺は愛という感情に深く溺れてしまっていたのだ

「…つと、仕事仕事…今日は休みじゃねーもんな」

横たわっていた体を起こし、スクリーンを切り替え快晴の外を見回しながら大きく背筋を伸ばす

ここのところ何もかも順調で最高の気分だ

そのままターミナルをポンポンと操作し簡単な準備だけ済ませ、俺はエントランスへと向かうのだった

「あつー！せんぱいー！」

目的地まで来たところで、ソファに腰かけていたエリナが待ってましたと言わんばかりの笑顔でぴよこぴよこ歩み寄ってきた

「お、おう…おはよう、エリナ」

途端に今日という日を意識してしまい、彼女の顔を見て自分の頬に熱が集うのを感じる

「？…具合でも悪いの？」

そんな俺の様子に敏感に気づいたエリナが心配そうにひよいつと下からのぞき込んできた

「い、いやいや別に！」

「そっか。ならいいんだけど」

にこりとまぶしい笑顔を見せこちらの腕をとると、あたりをきよろきよろと見回し誰もいないことを確認していたのか、そのままソファアへと導かれる

：腕をとる前に周囲の確認をしなければあまり意味がないと思っただことはかわいいから教えないでござい

「まだ仕事までちよつと時間あるでしょ？お話ししよ♪」

再びソファアに腰かけポンポンと隣の席を叩いて座るよう促してくるエリナの提案に素直に従い座った

「えっとね…まずは言っておかないといけないことがあって…今日は私用事があつて仕事一緒にいけないの」

今日の用事というワードに心臓がドキリと高鳴り体もピクリと反応する

我ながらなんと単純な体

期待しているのがバレバレじゃねーか

と思つて恐る恐るエリナの方を向いてみたが、幸い(?)彼女はこちらの様子を見ておらず、それどころか頬を真っ赤に染めて正面に組んだ震える手をじつと見つめていた

コイツも緊張しているのか…?

め、めちやくちやかわいいんだけど!!!

「…あの…聞いてる？」

思わずポカンと間抜けに口を開きっぱなしにしてエリナの横顔に見惚れてた俺は、こちらに振り返りつつ彼女が言った言葉でハツと我に返り慌てて頷いて見せる

「あ、ああ！聞いてる聞いてる！」

「…なんか今日先輩変じゃない？」

「ちよ…！」

ジトーつとした目線で唇をキュツと真一文字に結んだエリナがグイツと顔を近づけてきて、俺は反射的に彼女の肩を掴み距離を取ってしまった

「大丈夫だつて！エリナは用事があつて今日は一緒に仕事行けないつて話だろ？ほら！ちゃんと聞いてたよ」

「そう？…ちよつと心配だけど…仕事、気を付けてよね。不注意で怪我なんかしちやヤダよ？」

「ん…ああ」

まるで新婚夫婦の出勤前の挨拶みたいだなと浮かれた妄想が脳内に浮かび上がってきたのを軽く頭を振って追い払う

「じゃーまた後でね！私も急がないとだからこれで！」

「あ…」

立ち上がった彼女と別れるのがすこし名残惜しくて声をかけてしまった

…聞いてしまおうか？

「ん？どうしたのせんばい？やっぱ具合悪いの？そしたら無理せず今日は休みをとつて…」

「いや…お前の用事って何なのかちよつと聞きたくて…さ」

まるでどちらが先輩かわからないような心配をさせてしまった上に、なんとも意地悪な質問をしてしまった

でも…分かつていてもやっぱり気になるんだ！

許してくれエリナ！

少しの間沈黙が訪れゴクリと生唾をのみながらエリナの顔色を窺うべく視線を向ければ、予想通りと言うべきか

真っ赤になった彼女がかわいらしい小さな唇をパクパクさせている姿が

「そ、そんなの…！き、決まつてるでしょ！いちいち聞かないでよいじワルっ！」

それだけ言つてぷいっと顔をそむけたまま、彼女はダッシュユでエレベーターの前まで逃げてしまった

「あの反応はやっぱり…そうだよな…チョコ…だよな…」

と再確認した瞬間喜びで変に体が震えてくる

うお…やる気が…やる気が満ち溢れてくるぜえ!!!

「今ならやれる！どんなアラガミでも片手でひねりつぶせる気分だあ

!!!うおおおおお!!!エリナあああ!!!愛してるぞおおお!!!」
「そこから死角になってるので気付かないのも無理ないですが、受付に先ほどから私がいたことを一応伝えておきますね。隊長さん」

先輩だったらなんであんなことわざわざ聞くのよ…ばか

「貴方におけるチョコの準備にきまつてるじゃない…私の大切な恋人なんだから…」

1人つきりで静かなエレベーター内

私は彼への文句をぶつぶつとつぶやいていた

2/14と言えばバレンタインデー…流星にそのぐらい知ってる
愛する男性へと女性がチョコを送るっていう日

まあちよつと前からは女性同士の友チョコだとか、お世話になってる相手へ送る義理チョコなんでものも流行ってるらしいけど

私が最優先であげたい相手はもちろん恋人である

本来ならば今日も仕事があるはずで色恋沙汰の事情で休みをもらってもいいものかと悩んだのだけれど、主に女性陣のみんなからこういうのは大事だからって言われて決心がついた

それに有給とか全然使ってなかったしね

「よし…チョコ作りがんばろ」

自室の前まで戻ってきた私は、大きな深呼吸を一度してその扉を開けた

この日のためにお菓子の作り方をカノンさんやムツミちゃんに教えてもらってたくさん勉強して先輩の好みの味もそれとなく聞き出してある

うん、完璧！

絶対に喜んでもらうんだからっ！

作られるところは誰にも見られなくなかったので、自室で調理を行う

作る予定のお菓子は、ザツハトルテというチョコケーキ

先輩は甘すぎるものは苦手らしいから、そこは控えめにして…

などと脳内で味付けの過程をしながら冷蔵庫を開ける

ヒヤリとした冷気の放出と共に、調達しておいたお菓子の材料が姿を見せた

さて…調理開始ね！

………

………

…

うん、生地の砂糖も少なめにしたし、ケーキの間にアクセントとして入れたジャムの味も悪くない…と思う

味見をしたとき私にとつてはちよつと甘さが足りないかなって思ったけど、先輩はこれでちょうどいいはずだ

私は1人分を想定して出来上がった小さなホールケーキを箱に詰め、ドサツと腰を下ろし両肘をついてニヤニヤしながら机の上に置いたそれを眺めていた

「ふふ…せんぱい…喜んでくれるかなあ…」

仕事から帰ってきて疲れた先輩が、笑顔でケーキをほおぼっているところを想像する

また頭撫でてくれるかなあ…おいしいよエリナって言ってくれて

…

詳細な内容を思い浮かべるほど頬が嬉しさと熱くなり、ちよつと恥ずかしい妄想に足が自然とバタバタ動く

そして自分がいかに彼に惚れ込んでるのかを改めて思い知るのだった

「…つとーいけないいけない！ケーキしまわないと」

欲を言えば出来立てを食べてもらいたかったが、仕事もあるしそこまでワガママは流石に言えない

ケーキの形が崩れてしまわないように、そつと冷蔵庫の中にしまっておく

「あとは先輩に渡すだけ…わた…す…！」

あっ！

どうやって渡そう？

全然考えてなかった

…ま、まあ別に悩むほどのこのじゃないわよね？

帰投してきた先輩を部屋まで呼んで、二人つきりになってからケーキ渡して食べてもらいながらゆっくりお話でも…

「あれ…な、なんか緊張してきたかも…」

お菓子とはいえ、二人つきりで手料理を食べてもらいながらお話しするだなんて…

想像しただけで頬の熱がぶり返してきてしまう

「…だ、大丈夫…絶対食べてもらうだもん…だから…」

高鳴る胸に手を当てて、深呼吸をして落ち着く

「待つてるからね。先輩」

うん

任務も無事終了だ

あの恥ずかしい雄たけびをネタに、フランに無線でからかわれ続けたことを除けば何も問題ない！

へりでの帰還中、日が落ちかけている夕焼けの空を見ながら、俺は帰りを待っているであろうエリナ笑顔の思い浮かべていた

きつとチョコ用意して待ってくれてんだらうなあ…

俺はただもらうだけって立場なのに変に緊張してきやがった
てゆうかそれ抜きにしてもアイツと会いたい

こここのところ毎回任務の時はエリナと一緒にいたし、なんか足りないし寂しいと思った理由もそれが原因に違いない

「俺、すっかりエリナなしだと生きていけなくなっちゃったなあ…」

迎えに来てくれた操縦士ですらヘリの駆動音にかき消されて聞こえないぐらいの音量で、俺はボソツとそうつぶやいた

「あつ！せんぱい！おかえりっ！」

アナグラのエントランスまで帰ってくると、今朝と同じくソファで待ち構えていたエリナが声をかけてきた

「エリナ？まさかずっとここで待っていてくれたのか？」

「うん。まあ今来たばっかりなんだけどね」

えへへと笑みを浮かべながら嬉しそうに歩み寄ってくる彼女の姿を見ただけでも仕事の疲れなんざ全部吹き飛ばしてしまうぐらい癒されるぜまったく

「それでね…えっと…早速で悪いんだけど、私の部屋まで来てほしいなって…」

「お、おう…」

両手を後ろで組んでの上目遣い攻撃がキタア!!!

わずかに頬が朱に染まっているのも高得点だ

「…いっ？」

「う、うん」

というバカな脳内発言をしてる俺の顔もきつと真っ赤になっているに違いないんだけどな

「じゃーちょっと待っててね」

「分かった」

エリナの部屋まで案内された俺は、あまりジロジロ見回すのも良く

ないと思いい無難に部屋内に設置されているソファへと腰を下ろして待機することにした

彼女の部屋に来たことはほとんどなかったが、やっぱりどの部屋も基本的な間取りは変わらないようだ

：けど、なんだかほんのりと甘い香りが漂うのはやっぱり女の子の部屋だからなのだろうか：って、なに考えてんだ！

てゆうかさつきから緊張しすぎて気の利いた返事できてないし大丈夫なのか俺

どうにも落ち着かなくて、冷蔵庫の前でかがみこんでいるエリナの後ろ姿をじっと見つめる

…やっぱりチョコだよな

「はい先輩。今日バレンタインだから…これ作ったの」

「っ！あ、ありがとうエリナ…え、えつと…め、めっちゃうれしゅいっ！」

いてっ！噛んだ！最悪だっ！何やってんだ俺のバカっ！

「…ぷっ」

ほらみる笑われてんじやねーか！！

「あーいやな!?今のはな!？」

うつむいて顔を反らしつつもケーキが入ってあるであろう箱を差し出したままのエリナに必死に言い訳を述べようとするも、いい案が出てこずあたふたする俺の様子が面白かったのか、

「先輩がそこまで緊張してるなんて思わなかったな。でもそれだけ楽しみにしてくれたんだよね？」

ニコリと天使のような笑みを見せてくれながら、エリナがはいと俺の胸元にそっと箱を押し付けた

「おかげで私の緊張が和らいじやったよ♪ありがと先輩」

俺が受け取ったのを確認すると、隣に腰を下ろしてどうぞと言わんばかりに箱を指さす

…な、情けねえ

「その…なんかごめんエリナ…」

「先輩って案外かわいいところあるんだね」

ポンポンと頭を撫でられさらに恥ずかしさが増す

いつもは撫でてあげる側なのにホント恥ずかしいなちきしょう！

「じゃー…ありがたくいただくよ」

「うんー」

彼女が隣で見守る中、そつと開いた箱の中身は…

「っ!?!チョコケーキ!?!」

てつきり普通のチョコをハート型にしたものとかそういうレベルを想定してた俺は、想像以上のものの登場に驚きを隠せなかった

「そうだよー手作りしたんだからー」

よほどの自信作なのか

エリナは腕を組んで得意げに胸を反らす

いやしかしこれはホント…

「スゲーなお前…これ手作りしちまうとか…」

素直に尊敬するぜ

「それは食べてから言っつてよー」

俺の驚きがよほどうれしかったのか、肩に手を置いて早く食べてとせかしてくるエリナが可愛くて、俺は迷わず同封されていたナイフとフォークで切り分け早速一口食べてみる

「美味い…」

思わず無意識で言葉が漏れた

「ホント!?!」

「ああーめちやくちや美味いよこれ！好みの味！」

「よかった…喜んでもらえて」

夢中でケーキを次々と口に運んでいく俺の様子をじつと隣で嬉しそうに見てくる彼女に見守られながら、あつという間に完食してしまった

「うまかったあ…こんな美味しいケーキは初めて食ったぜ」

「すごい食べっぷりだったもんね先輩…見てて気持ちいいぐらい」

綺麗にからっぽになった箱の中を覗き込みながら、エリナが嬉しそうな声で言う

「だってめっちゃ美味かったし！ああ…エリナの分も少し残しておけ

ばよかったな」

「いいよ。だって先輩のために作ったんだから。それに味見もしてるし」

しかしそうとは言え、このうまさは共有したかったな

…あ、そうだ

あることを思いつき、にやりと笑みを浮かべ早速実践に移すべく彼女に声をかける

「エリナ。お礼がしたい」

「お礼？それなら来月にホワイトデーっていうのが…」

「俺は今お礼がしたいんだ、もちろんホワイトデーにもちゃーんと別のお礼するから安心してくれ」

「え？…う、うん…」

ちよつぴり疑うような視線で俺を見るも、素直にこちらを向いたままじっと待機するエリナの顎を不意につかむ

「？」

突然のことに驚きで瞳をパチクリさせる彼女の唇に、自身のそれを軽く重ね合わせた

時間にすれば1秒に満たないかどうか

けれども感触はしっかりと伝わったようで

「え…っ！…！…な、なに…して…／／／／」

頭の処理が追いついてないのか

エリナは口をパクパクさせながらただ俺の顔を見つめていた

「ん？お礼のキス」

普段だったら恥ずかしくてまともに出来そうにないけども、今は俺のためにこんなにおいしいケーキを手作りしてくれた彼女に対する感謝で気持ちが高ぶっていた

有体に言えばテンションが高くなっていたのである

「嫌だったか？」

「そ、そんなわけないでしょーでも…そのいきなりだったから…あの…」

今ならどんなかわいいセリフでも耐えられるなと思った矢先、彼女

の口から理性を崩壊させるような一言が飛び出した
「もう一回、分かるようにゆっくりして！」

END

料理教室

「えー…こほん！それじゃー今から先輩のために料理教室を開いちゃいたいと思いまーす！」

ここはオレの自室

目の前にはいつかプレゼントしたエプロンを身にまとい帽子を取って髪を一つに束ねてまとめた珍しい格好のエリナが、嬉しそうに鼻歌まで歌いながらパンパンと手を叩いてニコツと極上の笑みを浮かべている

「おー…よろしくなっ！エリナ」

そう

今日は前々から幾度となく言っていた料理を教わる約束をしていた日だった

「習うより慣れろ。ゴツドイーターの仕事する時にせんぱいが教えてくれた言葉だけど、これは料理の時も同じことが言えるの。経験は大事なんだよ」

よほど楽しみにしていたのか、それとも教えるのが嬉しいのか

腰に手を当てふふんと胸を逸らすエリナはとても上機嫌である

最近はまだ仕事の関係で忙しさがぶり返ってきておりなかなか2人同時に暇になるということが無かったため、こうして一緒にいられるだけでオレも嬉しかったが

「ほほう。つまり今日はとりあえず何かしら作ってみようって事か。それで料理のコツというか基本的な技術というかそういう類のものを身につけると…あとはそれを応用して経験を積んでいけば自然と料理の腕前も上がっていく…こんなところか？」

ふむふむと彼女の考えを察し頷きを返すと、ちよつと頬を膨らまされてしまった

「流石ですね…その通りです…ですけど…むう。わたしの言いたかったこと全部言っちゃうんだもん…」

じとーつとこちらを睨まれても言ってしまったことは取り消せない

いわけで…

「あー…すまん。つい」

「謝ることはないですよ！教えるの楽ですし」

とは言ってくれたものの、オレは今日は余計な口出しはせず方針はエリナに全て任せようと決心するのだった

「さてつと…せつかくだから実践したものを晩ごはんにしたいんだけど…先輩何か食べたいものある？」

「そうだな…初めて食べた手作り料理が肉じゃがだし、それで！」

「肉じゃが…材料はあるだろうけど、初心者には難易度高いかもよ？大丈夫かな？」

オレだけにしか見せないにまゝつと小馬鹿にしたような笑みを浮かべながら、エリナが脇腹を小突く

「エリナ先生が手取り足取り教えてくれるんだろ？楽勝だぜ」

その腕を絡めとり華奢な彼女の体をぽふっと抱き寄せると、きやつと小さな悲鳴をあげて胸板をコツンと叩いてくる可愛いお姫様

ふはは。ニヤニヤが止まらないぜ

「まったくもう！いくら教えたって実際に作るのは先輩なんですからね！」

ぺちぺちと腕を叩きながら離しなさいという彼女の言葉に従い、ここは素直に引き下がった

「よし…じゃまず、じゃがいもの下ごしらえからやってもらおうかな」

肉じゃがに必要な食材をズラリと台所に揃え、いよいよ調理が始まるという所で彼女の視線がキリツと真剣なものに切り替わった

「まず私がお手本を見せるから、ちゃんとして見てるんだよ？」

「お、おう…」

人差し指をピンと立て口元に笑みを浮かべた彼女が、目の前に置かれていた小さな銀のボウルから、ひよいと小ぶりなじゃがいもを取り出しそれを掴んだ

「まずは水で軽く洗います」

その顔はGEとして任務に励む時と同じくらい真剣で、目の前の

じやがいもが今にもアラガミに変化し襲ってくるのではという錯覚すらオレにもたらす

「…そ、そのあとは…えっとこれで皮を剥いて…」

心なしか、頬に赤みも差している

もしかしてオレが沈黙したままなもんだから緊張してきちまったのか？

可愛い奴め

「…う…あ、あの…せんぱい？」

「ん？どうした？」

視線を右往左往させながら遂にエリナはオレの方に体ごと向いてしまった

「そういう風に真剣に見てくれるのは嬉しいんですけど…」

うんうん

真っ赤になった顔と焦りでふるふる小刻みに震える唇が可愛いなあホント

「見てほしいのは私の顔じゃなくて…手先んですけど…」

…え？

「あ…」

彼女の言葉を聞いた瞬間慌てて2、3歩後ろに下がる

そうだよ何してんだオレ!?

じやがいもが視界に入ったのなんてエリナが手に取った瞬間だけで、あとは完全に顔ばかり見てた！

料理に集中する彼女の表情しか見てないじゃねえか！

「いやあの…す、すまん」

「べ、別に謝らなくてもいいですけど…ちゃんと料理してるところ見ててよ？ね？」

もじもじと両手でじやがいもを転がしてなんて羨ましいイモやろう…ではなくて！

「わ、分かった。これは料理の勉強会だからな！次はしっかりと見ておくぞー！」

パンパンと自分の頬を叩き活を入れる

せつかくの貴重な時間なんだ

いくらエリナが可愛いとはいえここはしっかりと学ばなければ…!

「う、うん…もう、先輩は世話が焼けるなあ…」

オレが決意を込めた握りこぶしを作って見せた瞬間、嬉しそうにじやがいもの皮むきを継続させるエリナの横顔に視線が吸い寄せられるのを感じた

あ、これダメかもしれない

「えっと…ここで煮込んだ具材に調味料を入れれば…完成だっ!」

あれから何度もエリナに注意されては手を止め教わりという事を繰り返して、やっとこさ完成までたどり着くことができた

「ふっ…アラガミとの戦いに負けず劣らず厳しく長い戦いだっただな…」

鼻を鳴らし額に浮かぶ汗を腕で豪快に拭いながら決めセリフでカツコつけるオレに、つかつかと歩み寄ったエリナが冷静に言い放つ「ダメだよせんぱい台所でそんなふうには汗拭いたりしちゃ!撥ねたら汚いでしょ!」

背伸びしてまで手ぬぐいをグイっとおでこに押し付けられる…つてちよつと待て力込めすぎ…!

「いだだだ!首折れるっ!」

おでこを勢いよく押されたもんだから、天井を見上げてる状態で負担がかかるのだが!?

「折れないっ!ちゃんと拭かない先輩がいけないんだから!」

なんだかんだ言いながら、結局そのままゴシゴシと一見乱暴だが汗が飛んだりしないようにしっかりと拭き取ってくれる彼女の姿を見ながらオレは…

「…なんかこう…責められるプレイもやっぱりいいよな」

「っ…フンッ!」

「あいだっ!!」

実にバカな発言をして思いっきりつま先を踏まれてしまった

「ほら！せっかく完成したんだしもういい時間だから食べようよ！先輩！」

オレの汗を拭き取った手ぬぐいを近くに置いてあった洗濯物用の籠に入れながら、エリナが台所に置いたままの二つの肉じゃがを指さした

完成してるのはもちろん片方がエリナ作でもう一つがオレ作のものだ

「うむむ…」

…しかしこの距離から見ても盛り付けの乱雑さでどちらがオレの料理か分かってしまうのがなんとも…

「せっかくだから私、先輩が作ったやつ食べるからね！」

そんな苦悩を知ってか知らずか

エリナはオレ作の肉じゃがを器ごと持ち、とつとソファの方へ向かって行ってしまった

「お、おい！ホントにいいのか？」

「うん。だって、もともと私が先輩の手料理が食べたくて考えた計画だもん」

トンツと優しく机上に器を置いて、ふつと柔らかい笑みを見せ彼女は隣の席を叩いた

早く来て一緒に食べようという意思表示だろう

「そりやそうだけどな…オレとしてはもつと料理の腕を磨いてからお前をアツと言わせるものを…」

「もう！そういうのは後で聞くから先輩も早くこつち来てよ！」

いつまでも台所周辺をうろつくオレに痺れを切らしたエリナがむつと頬を膨らませ、足をジタバタさせ始めた

…こういう所はなんとにか子供らしいな

って本人に言うとな怒られるからもちろん口には出さないが

「わかったわかったよ」

エリナ作の肉じゃが

1度食べたことがあるとはいえ、見た目も華やか匂いも実に食欲を

刺激し見事ととしか言いようが無かった

「ほら、来てやったぞ」

ぽふんと座りながらついでに頭を軽くなでてやる

もうほとんどクセになっている行動ではあったが、彼女はニコニコとよりいつそう笑顔になりながらお箸を手に持ってくれた

「うん♪じゃーいただきまーす!」

そして使ってる具材は同じはずなのに見た目がグチャグチャで美しくないオレの肉じゃがをエリナは口に含み…

……お、おお…なんだこれ

教わりながらとはいえ自分の作った料理を目の前で食べられると
いうのはこう…

すごく緊張するな…

「…ど、どうだ?」

口に含んだものを長らく咀嚼し無言を貫いていた彼女にとうとう
気になって聞いてしまった

「ふふっ…」

「っ!」

わ、笑い声だ?!

美味しかったのか!?

「やっぱり今日の料理食べさせてもらって正解だったな〜♪」

「え?ど、どういう事だよ!」

ゴクリと口内にあったものを飲み込んでから、エリナはニヤリと意味深な発言をしてオレの頭を逆に撫でてきた

「先輩って器用だから、きつと料理もすぐに上達しちゃうと思うんだよね。だから、貴方が作ったこういう肉じゃが食べられるのって私だけかな〜なんて思ったり」

「そ、それはつまり」

彼女は嬉しそうにパクパクとテンポよく口に運んでるけど…

「美味しくないって事だよな!」

なんでだあ!?!くっそお!?

エリナに教わったとおりに作ったはずなんだが…!

…あ、調味料の量が…？

そう言えば味見もしてねえじゃねーか！ああー！くそっ！

「美味しくないなんてこと、無いよ」

「え？」

今の話の流れでなぜそういう結論が出るのか分からず、オレは相変わらずのペースで肉じやがを食べ続けるエリナの横顔をポカンと見つめる

「先輩が作ってくれた料理が美味しくないわけないじゃん」

「エリナ…」

「だけど、次はもっとおいしいもの私に食べさせてよね！せんぱいっ！」

「お前…めちやめちや恥ずかしいこと言ってるぞ」

「なっ…／＼／＼ば、ばかっ！そういう事いちいち指摘しないでよっ！」

オレの冷静なツツコミにかあつと一瞬で頬を染め上げたエリナが、照れ隠しのように器を持ち上げて肉じやがをかきこむ

「はっはっは。その食べ方はしたくないな」

「うるさいっ！」

やれやれちよつとからかい過ぎたか

すっかりそっぽ向いてへそ曲げちまった

「でもありがとな、そう言ってくれて。次に料理振る舞う時はもっと上手く作ってみせるぜ」

ピクリとエリナの動きが止まる

「だけでもうしばらくは指導してくれるよな？先生？」

コクリと無言で頷く彼女の姿を確認し、静かに笑った

さして、オレも冷めないうちに食べさせてもらおうとするかな

〈END〉

お前を愛しすぎて言葉だけじゃ伝えきれない

「なあ〜エリナ〜寒くないか〜」

ふかふかぴかぴかのベッドに横たわりゴロゴロと怠惰をむさぼっていたオレは、隣に同じようにして寝転がる最愛の彼女に話しかけた外は既に黒い絵の具を空にぶちまけたような時間帯になっているし、あと数時間もすれば今日という日も終わりを迎えるであろう

「そうかな〜？私はあるかいよ〜」

オレとその存在を共有してるかけ布団にくるまりながら、時折寝っ転がり体当たりをかましてくるエリナが眠そうに告げる

明日にはまた命を賭けた戦いが始まるというのに、この部屋の中にそのような緊張感は一切無かった

「そうか…じゃーオレの事もあったかくしてくれよ」

ポフツと可愛く柔らかい感触をオレの身体に預けた瞬間を逃がさずガツチリと両腕でホールド！

はっはっは。捕まえたぞお姫様

「むう…せんぱいの身体も十分あったかいじゃん」

そつと俺の腰に回された両腕に優しく引き寄せられた

離れてしまう温もりを逃さないよう…何処か手の届かないところへ行ってしまうわないように

自惚れだっさいいさ

オレはそういう意思を感じたんだ

「エリナが密着してきたから興奮しちまったんだよ」

「もう…またそんな事言っ…」

くしゃくしゃと、腕の中で小さく声を出すエリナの髪を撫でる

無意識に抱き寄せてしまってることに気が付いたのは、彼女が耳元で囁いてきてからだった

「明日もまたこうしていい？」

断る理由など、無い

「もちろんだ」

静かな夜だった

本当に

今尚人類に仇なす存在が外の暗闇の中で闊歩しているのか疑いたくなるような

実はこの部屋だけがオレ達の住む世界なのではないかと、随分思いつ上がった考えまでもが脳にまで這い上がってきやがる

「私にとっては…せんぱいが…全部だもん」

エリナの長いまつげが鎖骨を擦った

おっと…どうやら口に出してしまっていたようだ

ほんのりとそこに湿り気を感じ、オレの視界も連動するようにぼやけ始める

おかしいな

まだ出てくるのか

エリナの前だともうも気が緩んじまっていけないぜ

「とりあえず…おやすみかな」

胸元に顔を埋めたままの彼女の震える肩に、そつと手を乗せた
少しだけ力を込めて押し返すように…

「…まだ眠くないもん。せんぱいだってそうでしょ？」

オレの小さな抵抗は、むっと頬を膨らませたエリナの上目遣い&スーパーパーワーハグによって中断される

「そうは言ってもな、明日に響くぞ」

優しく諭すように、彼女の頬に残る乾いた跡を撫でながら、その感触を役得とばかりに指先で味わっておくのは忘れない

「……………」

おっ？分かってくれたか？

無言のまま焦点だけをこちらに合わせるエリナ

彼女の大きな瞳の中で、自分でもビツクリするぐらい優しい微笑みを浮かべたオレが見返してきていた

お前にそんな顔が出来るとは驚き大発見だね

「おやすみ、せんぱい…愛してる」

唇がとても熱かった

「ああ、おやすみエリナ…オレも愛してる」

}
F
i
n
{